『 Iron Road 和鉄の道 』2007 [7]

- 日本の源流・たたら遺跡探訪 -

2008.1.15. by Mutsuo Nakanishi



砂鉄採取の残丘が残る砥峰高原

奥出雲 松江道路建設工事でたたら遺跡続々と



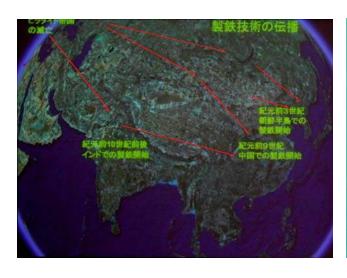
2007 年 和鉄の道 Iron road [7] たたら遺跡探訪 総覧

	「和鉄の道 Iron Road【VII】 」 口絵	7ron00. pdf
	口絵-1. たたら製鉄の原点を探して	
	口絵-2. たたら炉の製作過程 古代のたたら炉の製作過程	
	口絵-3. 古代製鉄炉の変遷 たたら炉の大きさと構造の変遷	
	□絵-4. 8世紀モデル化された量産古代製鉄炉を完成。地方拠点に大製鉄コンビナート	が出現
	□絵-5. 和鉄の道 古代 大和への道 北: 淀川・木津川 西: 大和川 南: 紀ノノ	II
1.	古代 神戸の「鉄」を訪ねて	7iron01.pdf
	神戸にも製鉄遺跡があった 神戸市内の「二宮製鉄遺跡」と「求女塚古墳」	
	神戸市内出土の三角縁神獣鏡・前方後方墳の足跡が語る「古墳時代の鉄の道」	
2.	8- 12 世紀 越・柏崎に眠る大製鉄コンピナート 軽井川南製鉄遺跡群 (資料)	7iron02.pdf
3.	瀬田丘陵 の源内峠製鉄遺跡・野路小野山遺跡を訪ねて	7iron03.pdf
	大型量産製鉄炉を確立し、古代官営大製鉄コンビナートに発展させた近江の製鉄技術	
4.	縄文の接合 「あおもり 縄文 まほろば展」を見る	7iron04.pdf
	アスファルトで接合された合掌土偶や縄文人が描かれた石冠ほか青森の縄文の名品	
5.	古代大和の鉄の道を訪ねて【1】	7iron05.pdf
	淀川・木津川から大和へ 大和の外港 木津「泉津」を訪ねて	
6.	関西の縄文−1 京都 長岡京の北西端に出土した縄文集落 上里遺跡を訪ねて	7iron06.pdf
7.	高槻 三島古墳群 今城塚古墳・闘鶏山古墳を訪ねて	7iron07.pdf
8.	物部氏のルーツ伝承 備前一宮 「石上布都魂神社」を訪ねて Country Walk	7iron08.pdf
	鉄道もパスもなし 中国山地の山又山の中 とってもミステリアスな Country Walk	
9.	古代大和の鉄の道を訪ねて【2】	7iron09.pdf
	大和川 「亀の瀬・龍田越」 Country Walk	
10.	日本三彦山の一つ 越後 弥彦山 Walk	7iron10.pdf
	古代鉄の国「越」 弥彦山に鍛治神の痕跡を探して	
11.	古代「越」の大製鉄コンビナート 越後柏崎 軽井川南製鉄遺跡群を訪ねて	7iron11.pdf
12.	古代 九州の大製鉄コンビナート 福岡 元岡製鉄遺跡群を訪ねて	7iron12.pdf
13.	縄文の心を映すストーンサークル 縄文の遺跡を訪ねて 風来坊 縄文の円環遺構 レビュー	7iron13.pdf
	1. 縄文の時代区分と縄文文化 2. サークル遺構のある縄文遺跡リスト	
	3. 円環遺跡を有する縄文遺跡【1】 4. 円環遺跡を有する縄文遺跡【2】	
	5. まとめ 縄文のストンサークルとは???	
	参考 1. 木柱列と配列遺構の両方が一緒にみつかった糸魚川市寺地遺跡	
	参考 2. 縄文の社会と文化概説 文文化の超自然観 死と再生のシンボリズム	
14.	古代大和への道【3】	7iron14.pdf
	紀ノ川水系【1】 紀ノ川のランドマーク 紀州富士「龍門山」に磁石石を訪ねて Walk	
15.	古代大和への道【4】	7iron15.pdf
	紀ノ川水系【2】 古代「紀路」紀ノ川の流れに沿って大和へ Country Walk	
16.	縄文のサヌカイト原産地 四国 坂出「金山」に「サヌカイト・讃岐石」を訪ねる	7iron16.pdf
17.	鉄のモニュメント 長良川にかかる現存最古の近代吊橋「美濃橋」(重要文化財) 岐阜県美濃市	7iron17.pdf
18.	たら製鉄 砂鉄採取の地形が残る 西播磨 砥峰高原	7iron18.pdf

口絵-1. たたら製鉄の原点を探して

(愛媛大学で「中国西南地域の鉄から古代東アジアの歴史を探る」シンポに参加して)

- a. 中国 蜀(現在の成都) は古代中国の大製鉄地帯 「たたら」塊錬鉄製鉄法のルーツが長江文明・ 西南シルクロードと関係する可能性。
- b. 長江上流域 成都平原は古代中国 鉄の大供給地 巨大な古代の製鉄炉(後漢時代)が出土した





口絵 2. たたら炉の製作過程 古代のたたら炉の製作過程

古代のたたら製鉄炉(箱型炉)の製作 (左 砂鉄原料用 右 鉄鉱石原料用の2基)

石見今佐屋山製鉄炉(5世紀後半から6世紀前半)の製鉄炉をベース



交野市埋蔵文化財調査報告 2001-Ⅲ 平成 9 年・11 年度実施イベント「古代の鉄作り・たたら」より





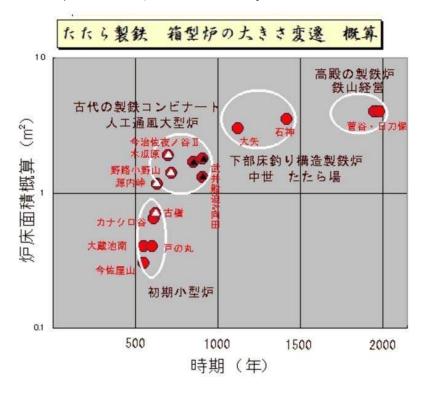


明治時代 菅谷たたら 床釣構造を持つ大型箱型炉 の製作方法も基本的に同じ である。

「たたら 日本古来の製鉄」 より

口絵 3. 古代製鉄炉の変遷 たたら炉の大きさと構造の変遷

a. 6世紀中国山地ではじまった「たたら」製鉄 畿内瀬田丘陵などで量産化と操業安定化が図られた 大型のモデル製鉄炉を完成。鞴の装着も始まる8世紀地方拠点で大製鉄コンピナートが営まれる。 中世 炉の炉床構造・製鉄に必要な諸設備が効率的に配置されるたたら場など江戸期隆盛を極める 鉄山・高殿が完成され、「たたら製鉄」が完成されてゆく。



中国山地で始まった たたら製鉄 が 7世紀 畿内で量産炉へと展開

古代たたら製鉄 量産炉への変遷を示す 近江 瀬田丘陵 最古の箱型製鉄炉 源内峠製鉄遺跡 2007.1.30.





8世紀モデル化された量産古代製鉄炉を完成 □絵-4 地方拠点に大製鉄コンビナートが出現



■ 高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡の位置づけ

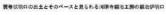
7世紀後年 中央集後を確立した大和工事は改善経済のため 朝鮮半鳥からの仮奏材を輸入しつつ 積極的な設計の増度を進める。 の収集材を輸入しつつ 積極的な設計の増度を進める。 の収録集団を取り込み、観鉄のの収良大型に、接待をを進め、多数の脱鉄炉 を並べ、大理金でるコンピナートを作り上げ、九州・東北でど数を番砂原 とする地方機会にそれるの技術総称をすすめ、大製鉄コンピナートを作りあ

げた。 今回四国今治 高橋佐夜ノ谷II製鉄道跡で出土した製鉄炉も製内で大型改 良された現極型の両側に参洋増を持つアレイ製箱型炉で、定部には石をきっ ちりひきつめた防湿機構があるのも 東北のコンビナートで見られる残型で

ある。 また、この佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遠跡がある日高丘陵の佐夜の谷の直ぐ近傍別名寺 また、この様などでも主要返出部のためは最上度が必要がなのか強く立動があっ 者からは特代的ははかしてもようたあるが、動きが大きりを与しました古代 の数を工業時かつからなど、他かにし間の温度が見つかっており、この丘 地池に古式代の製造コンピナートがあったのではないかとのイメージが照ら んでゆく。 後皮と基準にもの雑型が大られ、この今形と中央との前に強い交流があった。 ととは悪いたの様は大きない。この今形と中央との前に強い交流があった。 ことがうかがわせ、一層 四国今治の地に7世紀後半 ないし8世紀知義日は国家的制度の製造コンピナートが使っているのではないかと事が広がっている。









多数の鍛冶炉が出土した隣接する別名谷

古代越後の大製鉄コンピナート 柏崎 軽井川南製鉄遺跡



口絵-5 和鉄の道 古代 大和への道 北: 淀川·木津川 西: 大和川 南: 紀ノ川





吉野から南へ

紀ノ川

木津川の湊 泉津と大和川 亀の瀬

金剛・葛城山の東麓 南郷は朝鮮半島より韓鍛治を連れてきた葛城氏の本拠地



2007 年 和鉄の道 Iron road 【7】 たたり遺跡探訪 もくじ

「和鉄の道 Iron Road 【7】」 口絵

口絵-1. たたら製鉄の原点を探して

口絵-2. たたら炉の製作過程 古代のたたら炉の製作過程

口絵-3. 古代製鉄炉の変遷 たたら炉の大きさと構造の変遷

口絵-4. 8世紀モデル化された量産古代製鉄炉を完成。地方拠点に大製鉄コンピナートが出現

口絵-5. 和鉄の道 古代 大和への道 北: 淀川・木津川 西: 大和川 南: 紀ノ川

1. 古代 神戸の「鉄」を訪ねて

神戸にも製鉄遺跡があった 神戸市内の「二宮製鉄遺跡」と「求女塚古墳」 神戸市内出土の三角緑神獣鏡・前方後方墳の足跡が語る「古墳時代の鉄の道」

- 2. 8-12世紀 越・柏崎に眠る大製鉄コンピナート 軽井川南製鉄遺跡群 (資料)
- 3. 瀬田丘陵 の源内峠製鉄遺跡・野路小野山遺跡を訪ねて 大型量産製鉄炉を確立し、古代官営大製鉄コンビナートに発展させた近江の製鉄技術
- 4. 縄文の接合 「あおもり 縄文 まほろば展」を見る アスファルトで接合された合掌土偶や縄文人が描かれた石冠ほか青森の縄文の名品
- 5. 古代大和の鉄の道を訪ねて【1】

淀川・木津川から大和へ 大和の外港 木津「泉津」を訪ねて

- 6. 関西の縄文-1 京都 長岡京の北西端に出土した縄文集落 上里遺跡を訪ねて
- 7. 高槻 三島古墳群 今城塚古墳・闘鶏山古墳を訪ねて
- 8. 物部氏のルーツ伝承 備前一宮 「石上布都魂神社」を訪ねて Country Walk 鉄道もバスもなし 中国山地の山又山の中 とってもミステリアスな Country Walk
- 9. 古代大和の鉄の道を訪ねて【2】

大和川 「亀の瀬・龍田越」 Country Walk

10. 日本三彦山の一つ 越後 弥彦山 Walk

古代鉄の国「越」 弥彦山に鍛治神の痕跡を探して

- 11. 古代「越」の大製鉄コンビナート 越後柏崎 軽井川南製鉄遺跡群を訪ねて
- 12. 古代 九州の大製鉄コンビナート 福岡 元岡製鉄遺跡群を訪ねて
- 13. 縄文の心を映すストーンサークル 縄文の遺跡を訪ねて 風来坊 縄文の円環遺構 レビュー
 - 1. 縄文の時代区分と縄文文化 2. サークル遺構のある縄文遺跡リスト
 - 3. 円環遺跡を有する縄文遺跡【1】 4. 円環遺跡を有する縄文遺跡【2】
 - 5. まとめ 縄文のストンサークルとは???

参考 1. 木柱列と配列遺構の両方が一緒にみつかった糸魚川市寺地遺跡

参考 2. 縄文の社会と文化概説 文文化の超自然観 死と再生のシンボリズム

14. 古代大和への道【3】

紀ノ川水系【1】 紀ノ川のランドマーク 紀州富士「龍門山」に磁石石を訪ねて Walk

15. 古代大和への道【4】

紀ノ川水系【2】 古代「紀路」紀ノ川の流れに沿って大和へ Country Walk

- 16. 縄文のサヌカイト原産地 四国 坂出「金山」に「サヌカイト・讃岐石」を訪ねる
- 17. 鉄のモニュメント 長良川にかかる現存最古の近代吊橋「美濃橋」(重要文化財) 岐阜県美濃市
- 18. たら製鉄 砂鉄採取の地形が残る 西播磨 砥峰高原

1.

古代の神戸の鉄を訪ねて

神戸市内の二宮製鉄遺跡と求女塚古墳

神戸市内出土の三角縁神獣鏡の足跡が語る古墳時代の鉄の道



神戸市街の真ん中に出土した6世紀末から7世紀の鍛冶工房集落 二宮遺跡 旧二宮小学校跡



古墳時代の鉄の道を示す神戸東部の海岸沿いに立ち並ぶ古墳時代初期の古墳群

淡河から三木にかけての古代製鉄の可能性について聞きに神戸市の埋蔵文化財センターを訪れた時にかねてから持っていた疑問「神戸市内に製鉄遺跡はないだろうか・・・・」と質問。

「たたら跡は見つかっていないが、三宮の市街地に古代の鍛冶工房迹が出土している。」と教えてもらった。 また、別の機会に「酒蔵の立ち並ぶ灘の浜にならぶ3つの大きな古墳とそこから出土した三角縁神獣鏡。 ここから、見えてくるのは 古代 大和への鉄の道ではないか・・・・」と。

「古代の製鉄関連遺跡が神戸市内の真っ只中にある」とうれしくなって、これらを訪ねて歩きました。

また、暴論ではあるのですが、調べている間に「この神戸の鉄の道を守る主は物部氏 大和王権成立に深くかかわった・・・」と思い至りました。

神戸の地は古代 畿内の西端 西から瀬戸内海をたどれば、最初に落ち着く港である。六甲の山が海に落ちる須磨の海岸 今は難なく越えられるが、荒々しい山肌を剥き出す難所であり、後世の西国街道も須磨の手前で山中に折れて山中を西に道をとる。 義経の鵯越逆落としの地でもある。

一方、海路に道をとれば潮の流れの速い明石海峡 汐待をして進まなければ、とても素人では超えられぬ。

特に まだ 船の小さい古代 朝鮮半島の鉄を求めて 北九州・朝鮮半島に依存せねばならぬ大和にとって、流

通路の確保は重要なポイントである。 大和と結び、神戸の地 を支配する豪族がにらみをきかしていたろう。

少々 こじつけ気味であるが、兵庫県で出土した三角縁神獣鏡の出土地を点でつなぐと、畿内攝津の尼崎から大阪湾神戸を播磨へ抜けてゆく重要路 瀬戸内海の道筋と丹波・但馬を抜け、日本海をたどる道筋が見えてくる。

特に 丹波・但馬・因幡とつなぐ道は、数多くの渡来人・製鉄 鍛冶の歴史を刻む鉄の道。この鉄の道の存在が大和王権を作っ た吉備・出雲・大和を結び付けたに違いないと考えている。

こんなことを考えると神戸に古墳・古代にかけて、鉄の集積があっても当然のように思えてくる。その後世の痕跡が、神戸の中心三宮と新神戸の間の市街地に出土した古墳時代末から飛鳥・奈良時代にかけての鍛冶工房 二宮遺跡か。

当時 畿内では大県の鍛冶専業集落が一手に鉄を加工していた と言われるが、屋根つきの鍛冶炉が出土したのはこの神戸と大



県のみでありこの神戸にも専業集落があったと考えられる。

また、灘の海岸東西約 2km の海岸に沿って、 西から 西求女塚古墳(全長 110m)・求女塚古墳(全長 70m)・東求女塚古墳(全長 80m)の 3 つの古墳がほぼ等間隔にならぶ3世紀後半から4世紀初め古墳時代前期頃の古墳。東求女塚古墳が前方後円墳であるが、西求女塚・求女塚古墳からは卑弥呼の鏡といわれる三角縁神獣鏡が出土している。出土した土器は山陰系といわれ、墳墓の前方後方墳も出雲と深い関係にあると見られ、これらの古墳の被葬者は日本海側・出雲との関係が深いとも見られる。



(古墳時代の前夜 明石川流域などに古墳が築かれるのに対し、この六甲南麓には古墳がなく、

突如 前期の前方後方(円)墳が現れてくる。この3つの古墳もそんな古墳である。

北九州がその集積のほとんどであった「鉄」がちょうどこの古墳時代前夜 出雲・因幡にも大量に集積されるようになり、出雲・山陰の日本海側では 朝鮮半島と独自の供給ルートを持っていたと思われ、先進地であった九州北部と大和の地位が逆転したのみこの鉄の存在とも考えられる。

これらのことから、神戸には、古代 大和王権が確立されてゆく古墳時代から、鉄と関係深く、大和王権と深くかかわった山陰系の豪族がいて、西からの鉄の通商路を確保する役割を果たしていたと考えられる。

それは誰か・・・・・ 中国山地の吉備から出た物部氏ではないか・・・・・

そして、神戸には この時代から鉄の集積があり、鍛冶工房が営まれていたと考えられ、その痕跡が生田川の東 岸に営まれた二宮鍛冶工房遺跡につながって行ったのかもしれない。

1.1. 飛鳥・奈良時代の鍛冶工房集落 「二宮遺跡」を神戸の市街地に訪ねて 2006.9.6.



神戸 三宮周辺市街地と二宮遺跡の位置

「二宮遺跡は JR 三宮駅の北東に約 1km 三ノ宮駅のすぐ東 二宮筋をまっすぐ上がって 東西に走る山手幹線

を渡って、数百 m 入ったところ。 旧二宮小学校の跡地で、今は高層マンションになっている」と教えてもらう。 三宮の繁華街を避けて 原チャリでいつも抜ける道である。この周辺は六甲山が平地部に出た山すそで緩やかな 傾斜地が海岸へと延びている。六甲の山際 新神戸駅のところで平地に出た生田川がまっすぐ南の海岸へ流れ下 る。古代 この生田川はこの新神戸駅のところから斜めに南西側にまがって、三ノ宮駅の方へ 現在の神戸のメ インロード フラワーロードを流れ下っていた。 その川の東岸に二宮遺跡があり、反対側西岸には生田神社の ある生田の森が広がっていたという。 ちょうど 六甲から流れ出た水が扇状地を伏流水となって海岸に流れ下 る一体である。

三宮から北へ 10 分ほど二宮筋の狭い通りを上って、東西に走る山手幹線にぶつかる。この角に道を挟んで神戸ク アハウスの「神戸ウォータ 布引の水」水汲み場と「天然温泉」のビルが建っている。

「布引の水」は、「神戸港で積んだ布引の水は赤道を越えてもくさらず、美味しさもかわらない。コウベ・ウォー ターは世界一の名水」と語り継がれた名水であり、ここから、東側西宮にかけての海岸沿いには酒蔵が立ち並ぶ 「灘五郷」宮水の郷である。また、この周辺は 1995 年阪神淡路大震災でひどくやられたところで、被災した二宮 筋をただ無言で通った記憶がある。今はもうそんな痕跡も見当たらないが、二宮小学校も震災後 周辺の小学校 と統合され、廃校となった。

【二宮遺跡の現状と周辺】







南側三宮方面 旧生田川 北側布引方面 旧生田川



西側 山手幹線



生田川から 布引・新神戸駅方面

遺跡の東側を南北に流れる現生田川

遺跡の南西 加納町3丁目の交差点で









三ノ宮から北へ歩いて 東西に走る山手幹線にぶちあたり、さらにクアハウスのところを北に入ると二宮遺跡





二宮遺跡跡 現在は高層マンションになっていて、マンションの広場の隅に交番と旧二宮小学校跡の石碑が建っている

「こんなビルの立ち並ぶ場所 二宮遺跡はわかるだろうか・・・」と震災後にたどった道を思い起こしながら、 クアハウスの横を入ってゆくとクアハウスのすぐ北隣にL字型に立てられた大きな高層住宅があり、この北側隣 のビルとの間 幅 20m ほどで高層住宅に沿って奥へ伸びる広場があり、この北隅に二宮交番の小さな建物があり、 その前に「二宮小学校跡地」の石碑がありました。交番の中に入って聞いても「旧二宮小学校」のことはわかる のですが、ここに古代の鍛治工房集落があったことはほとんどわからない。

震災後、周辺の小学校とともに統合し、この二宮小学校の跡地に大規模な共同住宅を急いで建てるのに先立つ 調査で、校庭から数多くの竪穴住居跡と共に 3 基の鍛治炉が出土。この場所はちょうど旧生田川東岸の自然堤防 の上にあり、幾多の洪水に見舞われながら、飛鳥時代から奈良時代にかけての集落である。特に 600 年頃 飛鳥時代の遺構からは 2 基の鍛治炉が出土し、周辺には湿度よけに溝が掘られ、柱を建てて屋根を葺いた構造であり、鍛治炉の周辺には竪穴住居 5 棟 掘立柱建物 1 O 棟があり、武器である鉄鏃 鎌・鋤先・刀子・釘・やりかんななどの農耕具などが出土し、この時代には 専業鍛治工房集落であったと考えられている。

(神戸市埋蔵文化財センタ 二宮遺跡資料より)

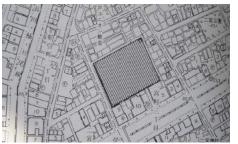
■ 二宮遺跡 神戸の市街地に古代の製鉄遺跡 二宮鍛冶工房跡遺跡

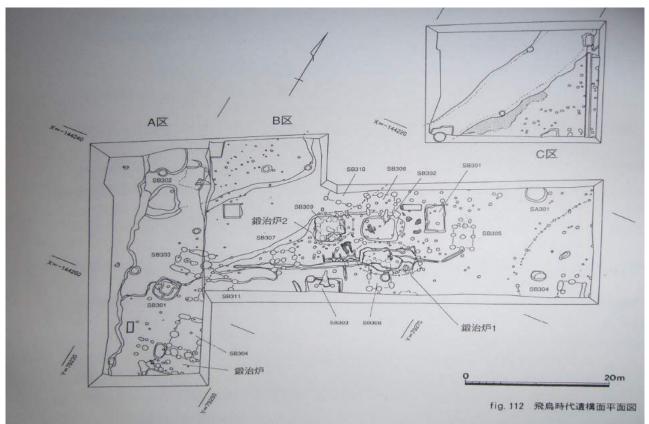
(神戸市埋蔵文化財センタ 二宮遺跡資料より)

二宮遺跡 飛鳥時代(7世紀)の鍛冶工房跡 3基の鍛冶炉が出土し、そのうち2基に屋根があった。 屋根つきは畿内の大専業鍛冶工房 大阪府柏原市・大県遺跡に続き2例目である。 1999.3月





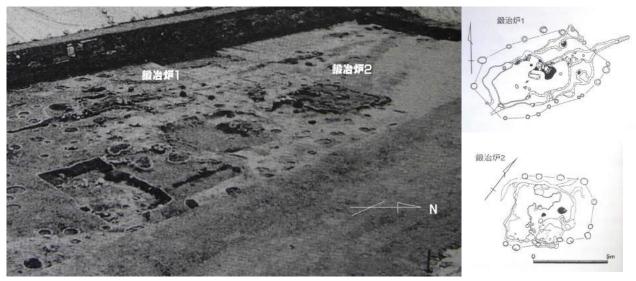






二宫鍛冶工房跡遺跡 出土した鍛冶炉

神戸市埋蔵文化財センター 「二宮遺跡」調査まとめ報告より





何度も公園にはいったり、周りの町内の道をまわっても、ここに鍛治工房があったとの実感はなく、遠い昔の話である。でも、何度となく、「神戸市内に製鉄遺跡がないか・・・」と探していて、やっとめぐり合えて満足である。

神戸の西北端 押部谷に大和葛城山麓の渡来の鍛治集団「忍海」の痕跡 そしてまた、伊川谷に製鉄集団と縁の深い「物部氏」の痕跡が見られるが、私にとっては 神戸市内で実際の鍛治遺跡の場所が確認できたのは初めてである。残念ながら、あまり評価されなかったのか、地震の後の集合住宅建設に集中されたのか、詳細な資料もその後の研究もされていない。

7世紀初頭 ちょうど大陸・朝鮮半島の鉄にかわって、鉄の自給生産が本格化して行くと共に 鉄の需要が急速 に高まる時代である。大和か日本統一を成し遂げ、その支配力を一層強めてゆく時代である。

鉄の覇権をめぐって 日本各地で多くのドラマがあったろうと思われるが、神戸はそんな中にまったく登場しなかったのですが、この鍛治工房がどんな役割を演じていたのか 興味津々。

震災から復興した町並みにそんなことを重ねながら、三宮までまた、戻ってきました。

2006.9.6. Mutsu Nakanishi

せめて、「発掘時の様子・出土品を示す写真がないか」とインターネットを探すと、阪神淡路大震災時 神戸各町 の震災の様子を記録した写真ライブラリーの中にこの二宮遺跡発掘調査の写真がありました。

震災で大きなダメージを受けた二宮小学校周辺 そして、復興のため 急いでそこに高層共同住宅を建てる用地 として、急いで発掘調査されたことを物語る資料です。

■ 災記録写真(大木本美通さん撮影) 二宮小学校 二宮町3丁目 より整理

中央区二宮町にあった市立二宮小学校が統廃合になるため、校舎の撤去工事中に、

校庭から飛鳥時代の鍛冶工房が見つかった(震災とは直接関係なし)

撮影者: 大木本美通 撮影日付: 1999.3.4 撮影場所: 中央区二宮町3丁目

撮影対象地点:中央区二宮町3丁目;















1号鍛治炉周辺

2号鍛治炉周辺



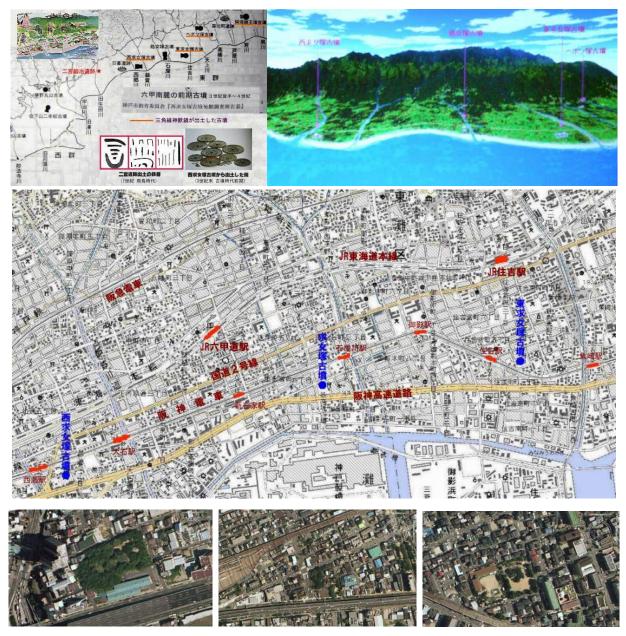
二宮遺跡 出土品

1999.3.4. 大木本美通さん撮影ライブラリーから再整理しました

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/eqb/photo/oogimoto/each/004497.html

1.2. 古墳時代 神戸の海岸に建ち显ぶ古墳群が示す古代 和鉄の道

西求女塚・求女塚・東求女塚古墳を訪ねて 灘酒蔵の街を walk 2006.9.6.



西求女塚古墳 東求女塚古墳

神戸市東部 灘の海岸線に沿って西から西求女塚・求女塚・東求女塚古墳の3つの古墳が東西に約2キロの間に並んでいる。

これらの古墳が作られた 3世紀後半は大和纏向に出雲・吉備・そして九州からやってきた天皇家などが集まってきて、畿内の大王勢力を形成し、大和王権が成立する時期であり、この神戸の地に畿内の大王勢力と密接に結びつく、豪族がいて瀬戸内の通商路をにらんでいたとかんがえられる。しかし、これらの古墳が築かれる以前 この地には古墳などこの地を支配した首長と思われる大きな墳墓もなく、また、これらの墳墓を作った大集落がどこにあったのかもよくわかっていない。

西求女塚・求女塚は前方後方墳 東求女塚古墳は前方後円墳であり、東西求女塚古墳からはそれぞれ複数枚の三角縁神獣鏡が埋納されていた。また山陰系の祭祀土器や数多くの鉄製品が出土している。

これらのことを考えると、大和にとって、この神戸の地が瀬戸内の通商路の要衝であり、山陰と関係の深い大和 と結ぶ豪族がこの地に進出してきたとも考えられ、それらをつなぐキーが「鉄」でなかったか

大和にとって、まだ「鉄」が自給できぬ時代である。鉄の供給地 大陸・朝鮮半島と大和を結ぶ瀬戸内海・日本海の通商路の確保は最重要ポイントであり、通商路の確保に最大限の力を尽くしたと考えられ、それがその通商

路沿いに卑弥呼の鏡と言われる三角縁神獣鏡の供与となって現れている。

畿内の大王勢力・大和王権成立の最大メンバーが当時 大陸・朝鮮半島と鉄の交流を持ち、北部九州とともに鉄の王国でもあった瀬戸内海を制する吉備 日本海側に王国を築いた出雲・丹後であり、「鉄」が纏向でこれらの王国を結び付けたとも考えられる。

ちなみに 三角神獣鏡とともに大和の象徴となった前方後円[方]墳や、 記紀神話には出雲への配慮がにじみ出ている。

また、祭祀に用いられる特殊器台は吉備にその起源があり、大陸の鉄を持ち、文化の先進地北九州と対抗するにはこの出雲・吉備なくしてはなしとげられなかったろう。

神戸は大和大王勢力にとってそんなに重要な要衝だったのか???? 六甲の山並みが崖となって 神戸の西で 明石海峡の荒海と明石海峡に落ちて陸路を阻む壁となっている。

いまは狭い須磨の海岸沿いを国道がすり抜けて行くが、須磨の西 塩屋から垂水にかけての海辺を赤石の櫛淵と呼び、鉢伏山が海に迫 母外呼の賞 「三角緑神獣第」 その道は大陸と大利をつなく鉄の道 ■ は三角緑神獣鏡が出土した兵庫県の遺跡

って、櫛のように出入りした荒磯が続く険しい所で、平安時代まで山陽道は須磨までくると鉢伏山南麓の荒磯をさけて山間を迂回し西進していた。また、海路にしても 明石海峡の荒波を越えるための汐待が必要だった。 古代 西から海路・陸路とも難所を越えて畿内に入る最初の要衝が神戸であったと考えられる。



須磨海岸



鉄拐山山上より須磨浦



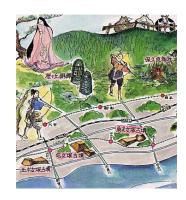
須磨浦に落ちる須磨アルプス

また、ほぼ等間隔に並ぶ3つの古墳には次のような能・謡曲になった悲恋の物語が伝えられている。

この地に美しい乙女 (菟原処女 (うないおとめ)) が住んでおり、 多く の求婚者がいました。

特に熱心だった 2 人(和泉の"血沼壮士(ちぬおとこ)"と地元の"菟原壮士") が武器を持っての争いとなり、 乙女は立派な若者を自分のために争わせたことを嘆いて死んでしまいます。

2人の若者もそれぞれ後を追って死んでしまい、それを哀れに思った人たちが、後々に語り伝えるために3人の塚を築きました。



この伝説は奈良時代の万葉集に登場する歌人たちが歌に詠んでいることから、かなり古い伝説だったようで、 平安時代 の「大和物語」では 2 人の若者が水鳥を弓矢で射て乙女を争うストーリーになり、 後の時代にも能・謡曲「求塚」や森 鴎外の戯曲「生田川」などとして取り上げられている。

■ 遺跡をたずねて 灘の街中をWalk

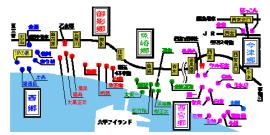
予備知識を頭に9月上旬 阪神電車の普通に乗って、西灘駅で降りる。

阪神間で背後の六甲の山並みと海岸とが迫ったところで、その六甲から幾筋もの川が流れ下る傾斜地がひろがり、

海岸に近い一帯には灘郷の西郷・御影郷の酒蔵が立ち並ぶ町である。そんな酒蔵の町の一角にほぼ等間隔で古墳 が立ち並ぶ。酒蔵を訪ねたり、話は聞いたことがあるのですが、意図的に古墳そのものをたずねたことはなし。

また、この一体は12年前の阪神淡路大震災で大きな被害が出た地 帯でもある。

東西に伸びるそんな狭い傾斜地を貫いて、一番南側を阪神電車が 走る。阪神電車は電車が駅を出発したらすぐ、もう隣の駅が見える といわれる程駅の間隔が狭いが、特に古い町並みが続くこの一体で はバス停並みに駅が続く。



「西から東に3つの古墳を訪ね、どこかの酒蔵に立ち寄って試飲でもして帰ろう」と西灘の駅に降り立つ。あと は足任せである。

まず、西求女塚古墳を訪ねる。駅を南側に出て西側を南へ 流れる川岸にそって、南へ行く。南側に国道43号線と2号線 の合流点で阪神高速道路の高架が伸びる国道43号線が走って いるのが見え、地図では西求女塚古墳はこの国道43号線に沿 った公園の中にある。 国道43号線に出て、東へ曲がるとす ぐ木々の茂った森が見え、求女塚西公園の名が入り口に刻まれ ている。



【西求女塚古墳】



西求女塚古墳 入り口周辺 2006, 9, 6,



3世紀末頃の前方後方墳 西求女塚古墳

海岸沿いのあんな平坦な場所に本当に盛上げた古墳があるのか・・・と半信 半疑でしたが、石垣で囲まれた公園の中は盛土による平坦な山が築かれ、 木々に囲まれて 東西に伸びる古墳がありました。 でも どうも前方後円 **墳風に整備されているようですが、実際は4世紀始めに築かれた前方後方墳** であるという。

思った以上に大きく、三角縁神獣鏡を含む 12 面の鏡・鉄製品・山陰系土器 等多数の遺物が出土し、畿内の大王勢力との関わりを持つ豪族の墓として古 墳時代(4世紀前半)に築造されたと考えられている。もっとも この古墳を 北側にも公園の入り口がありました



作った人たちが住んでいた集落はまだよくわかっていないという。 公園をでて、東に少し歩くと都築川が流れる大石駅の前に出る。



次は求女塚古墳へさらに駅前から東へ家並みを抜けて 行くとまた、国道43号線に出る。このあたりも一番 震災の被害を受けたところであるが、もう その面影 はない。大きなマンション郡や新しい家並みがわずか にその痕跡を示しているのみである。

新在家駅を通り過ぎて さらに東へ少し行くと十字 路に乙女塚の標識が見える交差点。

南東角の高い石垣の上が求女塚古墳。

西求女塚古墳よりも随分高い。

【求女塚古墳】





求女塚古墳(1) (左:古墳東南角

右:南側より全景)





求女塚古墳(2) (左:古墳南入り口

右:古墳前方部より後方部)

古墳時代前期築造の全長70mの前方後方墳で、南側の史跡求女塚石碑のある入り口から階段を上ると前方後方墳の前方部 遺跡は南北に北に一段高い後方部がある。後方部へもあがっていましたが、よく整備された平地があるのみ。 この古墳からは石棺、土器、埴輪の破片、勾玉などが出土している。

前方後方墳として公園によく整備されているからか もしれないが、前方後円墳の形がよくわかる。





求女塚古墳

求女塚古墳の東側石屋川

求女塚古墳から阪神電車沿いに御影駅・住吉駅に出て、線路の北側にまわって、住宅地をすこし東へ進むと遊喜幼稚園のところに出る。この幼稚園に隣接して広い広場の公園があり、その中央に柵に囲まれた大きな石と石碑が東求女塚の案内板とともに整備されている。まったく古墳の痕跡がみえない公園で、案内板がなければまったく気づかないだろう。でも 残された石やここから土を採取して、阪神電車の線路建設に使ったことなどの記録を考えると随分大きな古墳だったのだろう。

西求女塚古墳と処女塚古墳が遺跡公園として整備されているのに対して、東求女塚古墳は阪神電車住吉駅東の住 宅街の真中にあって、明治時代に阪神電車敷設の土取りで取り壊され、現在は碑が残っているのみ。

【東求女塚古墳】









前方後円墳の後円部がポツンと残る東求女塚古墳 2006.9.6.

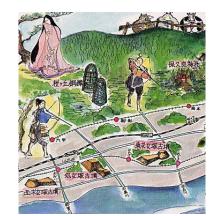
明治 36・37 年の阪神電車敷設の際に封土を削り取られ後円部の一部だけが公園の中にポツンと取り残され、昭和 57 年、隣接する遊喜幼稚園の園舎改装工事に伴って行われた発掘調査で、前方部の墳丘の裾部と周濠が発見され、また、公園整備に伴う調査で後円部の裾部も残っていることがわかり、前方部を北西に向けた全長約 80m の前方後円墳で、墳丘の斜面には石が葺かれていたことがわかったという。

東求女塚古墳から出土した遺物は、銅鏡・車輪石・剣・玉などで、明治時代の壁 土取りの際発見されました。

これらの遺物は、現在、東京国立博物館に保管されているが、出土した遺物から 4世紀後半と考えられている。

しばらく 公園の端にすわり、六甲を眺めながら、歩いてきた3つの古墳の主に 思いをはせる。伝説にある悲恋の物語は後で作られたものであろうが、それにし ても3つの古墳が真ん中の乙女を真ん中に左右対称に寄り添うように建ってい るのは、いかにも伝説が生まれそうである。

それにしても、突如として、3世紀末から4世紀この地に現れ、畿内王家・初期



大和王権と密接につながった豪族とは誰だったのだろうか・・・・「鉄」につながる豪族だったのだろうか この時代 積極的に鉄とかかわった出雲・吉備また新羅天日槍の伝説の残る但馬・丹後の王か・・・・ でも ほとんど 古代初期 鉄の痕跡のない神戸が 山陽道「鉄の道」の要衝であったと考えると痛快である。 また、この六甲の裏、丹波・但馬から日本海へ続く道にも三角縁神獣鏡を埋納する古墳がある。

但馬には新羅天日槍の伝説が残る鉄の国であり、但馬出石の古墳からは埋納された「砂鉄」がみつかり、すぐ 隣の丹後には次の時代日本最古の精錬鍛冶の痕跡が残る鉄鍛冶の大コンビナート遠所製鉄遺跡がある鉄の国。 この道筋もまた、大和王権にとっては重要な鉄の道だったろう。文化的には出雲に染まらなかったこれらの国の 意味付けはどうだったのだろう。

大和王権が成立する前夜3世紀後半 大和纏向に集まり、同盟していった大和王家・出雲・吉備そして西日本各地の王国。ひょっとして 邪馬台国・卑弥呼の謎 記紀神話に隠された大和王権成立の謎をこの 2 つの古墳時代の和鉄の道が解き明かしてくれるかもしれない。

なんとなくうれしい気分で古墳を後にする。

今日は 酒蔵を少し回って、試飲をさせてもらって、灘の酒かってかえろう・・と南へ酒蔵の街へと足が向く。











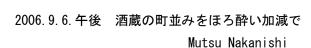
酒蔵の町並み 御影郷

菊正宗記念館・白鶴など 2006.9.6.

鉄の通った道として三角縁神獣鏡を今まで見たことがありませんでしたが、教えてもらうとそんな道筋が、強く浮かび上がってくる。

神戸がそんな解き明かしの鍵になると考えるとうれしくなる。ついでながら、わが故郷 尼崎の水堂の里にも三角縁神獣鏡が出土している。 難波ノ津から山陽道と北の但馬へ向かう道との分岐が尼崎である。

そんなことも考えながら ほろ酔い加減で酒蔵の道を後にしました。





東求女塚古墳出土の鏡



1.3. 古墳時代 和鉄の道 異見・私見

- 1. 吉備・出雲そして但馬と大和王権成立への役割
- 2. 物部氏 吉備ルーツ説と 前方後方墳は物部氏の重要拠点進出の証か・・・

ほんとうかどうかわかりませんが、私の今一番惹かれている考え方を想像をふくめ、書いて見ました

1. 吉備・出雲そして但馬の大和王権成立への役割

これらの主要王国と大和王権を結びつけたのは「鉄」でなかったか・・・

大和王権が成立する前夜3世紀後半 卑弥呼の時代 大和盆地の端三輪山の麓烏田(からすだ)川と纒向川に挟まれた扇状地につくられた、古墳時代前期の大集落遺跡である。しかし、纒向遺跡は大集落遺跡といいながら、ムラを構成する住居址や倉庫址は発見されておらず、遺跡を囲む環濠もない。しかも、弥生時代の集落は存在せず、古墳時代前期(3世紀初頭~4世紀)になって急激に発展し、周辺の古墳群の築造が終わる頃には衰退する。

箸墓古墳以外の纒向古墳群は、前方後円の形をしているものの、前方部が短く未発達なため特に「纒向型前方後円墳」と呼ばれる。定型化した前方後円墳が造られる前の墳丘形式とされ、築造時期はいずれも3世紀に遡るものと考えられている。このため、纒向古墳群は我が国最古の古墳群とされ、3世紀になって新しく開発された場所に築造され、その中心が邪馬台国であるとする邪馬台国近畿説の主張となっている。



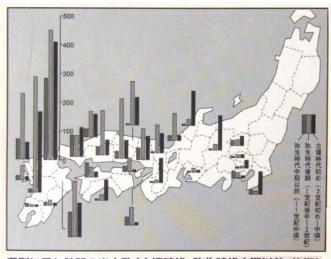
纒向遺跡から出土した土器844個のうち123個(15%)が東海・山陰・北陸・瀬戸内・河内・近江・南関東などから搬入されたものである。またそれまで大和になかった特異な煮炊具も十数個出土しており、他地域との交流が推定される。これら外来の土器は南九州から南関東にいたる日本列島各地のものであり、中でも東海地方の土器が最も多く、朝鮮半島の韓式土器も出土している。

これらから、纒向遺跡は南関東から瀬戸内海西部までの広範な地方から人民を動員して古墳を築造するために、天皇王家を核にした諸王国の共同事業であったと考えられる。 そして、大和に突如として出現した巨大前方後円墳が、北九州に起源をもつ剣・鏡・玉の副葬、吉備に始まる特殊器台や特殊壷、また吉備や東瀬戸内に出現した竪穴式石室、出雲の四隅突出墳に見られる葺石、畿内の周溝墓などを総合するかたちで成立していることもあわせ、ここに大和王家を中心とした連合国家が成立し、その象徴として 前方後円墳が連合支配地域にひろがっていった。これらの発掘事実が神話として語られてきた「記紀神話」「出雲神話」に照らして、脚色はあるにしろ、

史実と考えるべき事と考える人が多くなってきている。 また、「然」の想点から来るるよ。これだけのまます。

また、「鉄」の視点から考えると これだけの土木工 事であり、必要とする「鉄」も生半可でない。これら 纏向連合が朝鮮半島から供給される鉄素材の覇権を一 手に握った結果だと考えられている。

この3世紀頃日本では 各地に地方王国が起こり、倭国大乱の時代である。鉄の自給ができず、大陸・朝鮮半島に鉄素材を頼っていた。そして、地理的に近い北九州が先進地とて半島の鉄を支配していた時代 大和は鉄に窮していた。 当時 半島においても内乱の時代 渡来人が数多く日本に渡ってきて、製鉄技術の探求が進められてきたと考えられるが、鉄素材を加工して製品にする鍛冶技術は急速に進展したものの製鉄の技術は門外不出として秘密のベールに覆われ、日本に



県別に見た鉄器の出土数(古墳時代・弥生時代中期以前・後期) 関裕二著「物部氏の正体」より

弥生時代鉄の集積のない大和に古墳時代初め急激に増大 弥生時代後期以降山陰に鉄があふれ出す は伝わらなかった。しかし、出雲や吉備には北九州との交流や半島との直接交流により、大量の鉄が蓄積されるが、大和へは供給しなかったと考えられる。

但馬の「鉄」の存在が纏向に集まった倭王権連合を一つにしたのか???

大和は必死に鉄の確保に走ったと思われるが、北九州の勢力が根元で日本各地への供給を止めてしまうとどうにもならなかった。ところが、新羅との交流伝説がある鉄の王国但馬出石の王の墓 入佐山3号墳(4世紀の方墳)には砂鉄が数々の鉄器とともに埋納されているのが見つかった。隣国丹後は早くから大和と交流を持ち、次の時代日本で一番早く製鉄・精錬がはじまる古代の大製鉄地帯である。

日本独自の製鉄原料「砂鉄」が埋納されていることから、「この但馬・丹後では北九州地帯とは関係せず、いち 早く日本で製鉄が始まり、かつ 朝鮮半島の鉄も直接独自ルートで鉄を手に入れられるようになったのでないか・・・・」と想像したくなる。(吉備もこれに加担していたかも知れぬ)

このルートで「鉄」を手に入れられるようになった大和は「出雲」を脅し、大和王家を中心とした連合を勝ち取り、西日本一体から北陸・東海にいたる大王国を築き上げていったと考えられないか・・・・・



出石 入佐山3号墳出土の砂鉄ほか 出土品



但馬出石入佐山の砂鉄を見たときに そこに立ちすくんで そんなことを考えていたのですが、多くの本を読むと可能性として 同じようなことを考えている歴史学者らがいることを知りました。そして 歴史作家 関裕 二氏は数々の作品の中でこの視点をとらえ、実に明快に記紀神話・出雲神話の謎解き そして吉備=物部氏であるとの説をとなえ、絶えずその中心に物部・吉備がいたと主張している。

私も右へ行ったり、左に傾いたりですが、「鉄」から見てきた種々の検討をつなぎ合わせると現在ではこの関氏の 説に一番共感しています。

参考資料

関裕二著「物部氏の正体」

環日本海歴史文化シンポジウム「渡来の神 天日槍 」

神戸市埋蔵文化財センタ 公開講座「考古学を学ぶ」資料

Mutsu Nakanishi 和鉄の道・Iron Road

和鉄の道 Ⅰ 丹後の国 もう一つの邪馬台国 大陸と日本を結ぶ鉄の大加工基地 遠所製鉄遺跡

風来坊 Ⅳ 但馬 天日槍の国の歴史とコウノトリを訪ねて

和鉄の道 V 弥生の博物館 鳥取県 青谷上寺地遺跡を訪ねて 弥生時代後期 北九州と並ぶ鉄の先進地「山陰」

和鉄の道Ⅵ コウノトリが大陸と日本を結ぶ 古代 和鉄の道 「古代 和鉄の郷 但馬 出石」

2. 物部氏 吉備ルーツ説と 前方後円墳は物部氏の重要拠点進出の証か・・・

「粉部氏はどこから大和にやってきたのか・・・」はよくわかっていない。

記紀神話では物部氏の祖は「ニヒハヤギ」。

ったが、その出自については謎である。

天皇家が大和に来る前にすでに天磐船に乗って大和に舞い降り、生駒山山麓の河内を根拠地としている。

神武天皇東征のときに、やってきた天皇王家に大和をゆずり、大和が建国されたといい、通常の豪族とは違う別格の豪族の位置にいたとされる。また、物部氏は金属精錬に従事する集団であり、「金属冶金」と深いかかわりを持っていたと考えられており、この先進技術をもって大和へ移ってきたとも考えられる。

一般的には 物部氏は「九州からやってきた」とされ、「出雲からやってきた」とする説もあるが、関裕二氏は「物部氏の正体」の中で、「物部氏=吉備」とすると非常に多くのことが見えてくるという。 物部氏は大和建国以来 大和王権の中で、勢力を拡大し、九州・瀬戸内から山陰・東海・北陸・越にまでもその勢力を伸ばしてい

当時 2 世紀後半から3世紀にかけて 魏志倭人伝の時代 朝鮮半島では楽浪郡・帯方郡を経営して南朝鮮諸国を統制してきた漢王朝が倒れて大混乱が起こる。南朝鮮諸国に鉄を依存していた日本もこの混乱に巻き込まれ、倭国大乱が誘発される。そして、4世紀はじめ、高句麗と百済により楽浪郡・帯方郡が併合消滅し、戦乱の半島三国時代が続いてゆく。

大和王権を含め、日本各地の諸国も鉄の覇権をめぐって、この戦乱に巻き込まれてゆくことになる。特に物部 氏は瀬戸内海の通商路を完全に握っていたことが、その 勢力の根源にあるともいわれる。瀬戸内海を握った吉

備・物部と日本海側を握っていた出雲が 大和について、北部九州勢力との力のバ ランスが逆転したとも考えられる。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての西日本諸国の鉄の蓄積の劇的な変化がこれを物語る。

物部が吉備だと考えると、二ギハヤギが 天磐船で舞い降りたとする生駒山北端 の肩野物部の関連地が岡山県誕生川流 (実料の) 「作者を選集」 他(他の声の)方面、同年(電光文章中本・天平品等)十月十五日に関す。 無知性歴 近上、政内国が国際を参析に直も。 (文料は) 「中心自体性違法 別報 むかし起るとに称を形式器を見たなったいるとか人為のける。 報本文字を向えたにた上さみ からむさったが形式器を見たなったいるとか人為のける。 報本文字を向えたにた上さみ からむさったが多ながあるをこれとなったいである。こと所にしつまをおはしますおいっ とも、特殊のいで、たとかったでは上手をはいって他の。 解のことにかっかははしますおいっ とも、特殊のいで、たとかったでは上手をはいってもの。 解からことにかっかははしますを与す 加みのけるものではから、大変にかってもの。 第七とこととと、母本かのな人をで、たまかしまった。 第七とこととと、母本かのな人をで、たまかしまった。 第七とことと、母本かのな人をで、これかして、 第一日、日本の本の本のは、 「世別) 「古年を教育」「大変内容をは、 を取り、「日本の本のない」にある。 第二日、日本の本のないとなった。 「使用3」 「古年を教育」「大変内容をし、報告 スピージを記念する。 「使用3」 「古年を教育」「大変内容をし、報告 スピージを記念する。 「使用3」 「古年を教育」「大変内容をし、報告 スピージを記念する。



吉備・物部氏の故郷か??

● 吉井竜天 (オートキャンプ

・ドイツの蚕

域にある。いずれも日本でいち早く鍛治加工の技術が展開されたところである。

「日本書紀」に、素戔嗚尊が八俣大蛇を斬った剣を、「十握の剣」とか「蛇の麁正(おろちのあらまさ)」とか「韓鋤(からさび)の剣」、「天蠅研(あめのははぎり)剣」と呼び、これは今、「石上にある」とか、「吉備の神部(かむとものお)の所にある」と伝えている。

「石上」というのは、通常、和珥氏系春日氏と物部氏の奉斎する奈良県天理市の石上神宮(石上坐布都御魂神社)のこととされているが、延喜式神名帳が吉備国赤坂郡の条に記載する、現在の赤磐郡吉井町石上の「石上布都之魂神社」のことだとする説がある。

吉備が古代より刀工の地であり、和珥氏・物部氏と何らかの関係があったことが分かる。 また、天理の石上神宮に 1000 本の剣を収めた五十瓊敷入彦命は息長氏系の皇子であり、それ を補佐したのは、息長氏と同族の和邇氏の春日市河で、この人は物部首(おびと)の祖であるか

ら、両氏族との関係もあるといわれる。

また、吉備の石上神社の社家も現在まで物部姓で、和邇氏の春日市河の子孫だと思われる。

大和の象徴となった前方後円墳のルーツは吉備楯築遺跡にあり、古墳時代初期には前方後方墳も数多く作られている。

「 この初期 前方後方墳の築造主は物 部氏でなかったか・・・・

特に、大和互権の拡大とともに重要拠点を押さえるために

進駐した物部氏の墳墓であれば、楽しくなってくる。

妄想かもしれないが、もし、そうであれば 神戸東求女塚古墳・求女塚古墳の位置づけもはっきりしてくる。 そんなことで、前方後方墳について 調べると同じようなことを示唆する文献にぶち当たりました。

■ ニギハヤギが天磐船で舞い降りたとする生駒山北端の河内磐船にこの地にいた製鉄鍛冶集団が築いた3世紀末から4世紀にかけて作られた森古墳群がある。

その多くは前方後円墳なのですが、一番古い3世紀末頃の鍋塚古墳 は前方後方墳である。

Mutsu Nakanishi 和鉄の道・Iron Road

和鉄の道 V 北河内 の古代の郷 肩野物部氏の本拠地 交野界隈 walk 大和王権 を支えた鍛冶工房 森製鉄遺跡を訪ねて



河内の森製鉄遺跡のある河内磐船の古墳群

● 白石太一郎氏は濃尾平野以東の東日本各地に古墳時代前期前半に営まれた古墳は、前方後方墳が多く、弥生時代終末期には、前方後方墳の祖形である大型の前方後方形墳丘墓が濃尾平野で営まれていたと述べ、大和王権に後から加わった地方豪族たちを区別して前方後方墳を作らせたのではないかと私見を述べている。

この流れ地方制圧の主力は物部氏。地方豪族のみならず、自らの一族をも地方拠点に進駐させていたのではないだろうか???? そんな痕跡が初期の前方後方墳では????

 ▶ 上記白石氏の考え方が一般的なのかもしれませんが、 一方 この東海地方の前方後方墳の遺跡分布 から次のように物部氏の系譜であるとする説もある。 東海地方の前方後方墳を見ると近江から美濃へ抜けるルートに早い段階から作られ始め、三重では 雲出川下流域 愛知県では矢作川・豊川沿いに多い。 このように前方後方墳は大和王権が東国へ勢力を伸ばしてゆくときの重要な場所に分布しており、

大和王権の軍事を担った物部氏に関係する人の墳墓であろう

国土交通省 中部地方整備局 東海幹線道路調査事務所情報提供サイト 環伊勢湾の交流と文化 2.1. 環伊勢湾の海の道・川の道・陸の道

前方後方墳の副葬品を眺めてみると、次のものがある。
 (玉類)ガラス小玉、管玉、勾玉、丸玉、小玉など
 (供献土器)壺型土器(底部に穿孔のある物を含む)、器台、小形丸底壺、高坏、二重口 縁壺など(祭祀用器具)車輪石、石釧、鍬形石など



前方後方墳の分布と本項関係地名 (赤塚次郎『東海の前方後方墳』『古代』86 の図に追記)

(武器類)鉄剣、鉄刀、鉄斧、鉄鏃、釶など。

- (鏡) 小形倣製鏡、倣製四獣鏡、珠文鏡、重圏文鏡、内行花文鏡、画文帯神獣鏡、 き鳳鏡などのほか三角縁神獣鏡がある。
 - (注)日本古代遺跡辞典(吉川弘文館)ほかより拾い出した40基の主要前方後方墳の副葬品をまとめたもの。

【鏡を副葬した前方後方墳】

勅使塚古墳(茨城県)、丸山古墳(茨城県)、愛宕塚古墳(栃木県)、大日塚古墳(栃木県)、駒形大塚古墳、(栃木県)、那須八幡塚古墳(栃木県)、下侍塚古墳(栃木県)、元島名将軍塚古墳(群馬県)、国分尼塚古墳(石川県)、小平沢古墳(山梨県)、弘法山古墳(長野県)、東之宮古墳、(愛知県)、筒之古墳(三重県)、向山古墳(三重県)、芝ケ原古墳(京都府)、長法寺南原古墳(京都府)、西求女塚古墳(兵庫県)、西山古墳(奈良県)、新山古墳(奈良県)、金崎古墳(島根県)、岡田山古墳(島根県)、御崎山古墳(島根県)、備前車塚古墳(岡山県)、楢原寺山古墳(岡山県)、三成古墳(岡山県)

● 「日本書紀」も、素戔嗚尊が八俣大蛇を斬った剣を、「十握の剣」とか「蛇の麁正(おろちのあらまさ)」とか「韓鋤(からさび)の剣」、「天蠅研(あめのははぎり)剣」と呼び、これは今、「石上にある」とか、「吉備の神部(かむとものお)の所にある」と伝えている。

「石上」というのは、通常、和珥氏系春日氏と物部氏の奉斎する奈良県天理市の石上神宮(石上坐布都御魂神社)のこととされているが、延喜式神名帳が吉備国赤坂郡の条に記載する、現在の赤磐郡吉井町石上の「石上布都之魂神社」のことだとする説もある。

吉備が古代より刀工の地であり、和珥氏・物部氏と何らかの関係があったことが分かる。

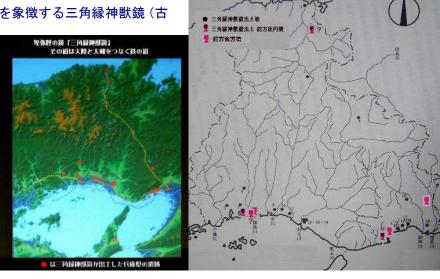
また、天理の石上神宮に1000本の剣を収めた五十瓊敷入彦命は息長氏系の皇子であり、それを補佐したのは、 息長氏と同族の和邇氏の春日市河で、この人は物部首(おびと)の祖であるから、両氏族との関係もあるだろう。 吉備の石上神社の社家も現在まで物部姓であり、和邇氏の春日市河の子孫だと思われる。

このように確かな証拠はないが、製鉄技術集団を伴う物部氏が大和王権の重要拠点に進駐してゆく過程で築かれ

たと考えると西求女塚古墳の位置づけもはっきりする。

そして 播磨に入ると、御津町には大和を象徴する三角縁神獣鏡(古

形式)を副葬し、かつ吉備で発生した 特殊器台型埴輪をもつ権現山51号 墳(播磨)が前方後方墳である。また、 播磨の綾部山39号墳も方形或いは 前方後方墳とみられ、かつ三角縁神獣 鏡より古いとされる画文帯神獣鏡を もつ。このように神戸から播磨にかけて 瀬戸内海の通商路 主要な港周 辺に三角縁神獣鏡出土地や前方後方 墳がある。



参考資料

関裕二著 「物部氏の正体」

国土交通省 中部地方整備局 東海幹線道路調査事務所情報提供サイト

環伊勢湾の交流と文化 2.1.環伊勢湾の海の道・川の道・陸の道より

Mutsu Nakanishi 和鉄の道・Iron Road

和鉄の道V 北河内の古代の郷 肩野物部氏の本拠地 交野界隈 walk

大和王権を支えた鍛冶工房 森製鉄遺跡を訪ねて

和鉄の道V 弥生の博物館 鳥取県 青谷上寺地遺跡を訪ねて

弥生時代後期 北九州と並ぶ鉄の先進地「山陰」

2.

8-12世紀 越・柏崎に眠る大製鉄コンピナート

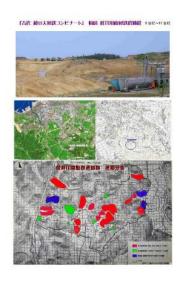
軽井川南製鉄遺跡群 (資料)

柏崎市遺跡考古館・柏崎市教育委員会「柏崎に眠る古代の製鉄遺跡」より 資料整理 0702krui00.htm 2007.2.1. by Mutsu Nakanishi

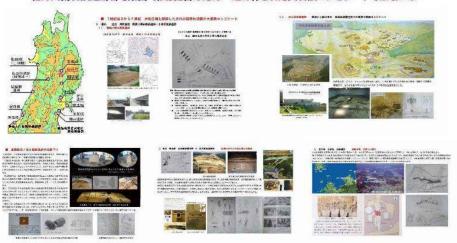




8 世紀頃大和律令政権が地方経営の先端地で経営したと推測される古代の大製鉄コンビナート遺跡が各地で次々 と発掘調査されています



7世紀後半から8世紀 地方拠点に 大和王権の大製鉄コンビナートが出現した 軽井川南製鉄道跡群も東国・東北経営のため 越に作られた大製鉄コンビナートではないか



四国で初めて 製鉄遺跡が出土したと聞いて 今治にゆき、この高橋小夜の谷 II 遺跡の製鉄炉が畿内で改良モデル化された鉄アレイ型の製鉄炉であり、大和律令政権が地方経営の拠点地に築いた製鉄コンビナートだと聞きました。 多くの製鉄炉が立ち並ぶ北九州 元岡製鉄遺跡群 福島原町金沢製鉄遺跡群は知っていましたが、まだ越の製鉄コンビナートについて知りませんでした。

柏崎軽井川南製鉄遺跡を知って 資料を送ってもらって びっくり。

柏崎にも8世紀から12世紀にかけて35もの製鉄遺跡があり、8世紀から11世紀にかけて 20を超える製鉄炉が

出土しています。

そして 鉄アレイ型の製鉄炉から足踏み鞴のある片アレイ型への進化した箱型炉や竪型炉の両方があり 継続的 に大量の鉄が生産。日本海側の大和王権最大の製鉄コンビナートである。

古代越後は大和王権勢力の日本海側の北端で初期には淳足柵が置かれ、東北蝦夷をにらむ重要拠点。

そして、また、甲斐・信州や毛野など東国への日本海側からの入り口でもあり、東北・東国経営の要であったろう。東北・東国経営の要の役割を担った柏崎の古代の大コンビナート。

また、この軽井川南製鉄遺跡群では 5世紀の後半吉備から石見にかけての中国山地山地や丹後などで始まったといわれる日本古代のたたら製鉄が、畿内近江の瀬田丘陵での官営の鉄コンビナート(野路小野山遺跡など)で安定・大量生産の技術が洗練・モデル化され、そっくりそのまま各地の官営製鉄コンビナートに移されたという。そんなモデル化された製鉄炉がさらに竪型炉・大型鞴の登場で磨かれ、製古代のたたら製鉄が完成する。

長く継続されたこの軽井川南製鉄遺跡ではそんな製鉄炉の変遷も明らかになってきたという。

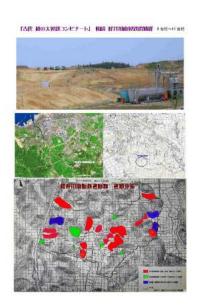
いまだによく判らない自然送風から鞴による人工送風への変遷。

今から 訪れるのにワクワクしている。

ただし、 この軽井川南製鉄遺跡も柏崎フロンティアパーク造成用地にあり、ごく一部を残して発掘調査記録を 収集後、取り壊される運命にある。 そして、この1月 計画された発掘調査全体がすべて完了したといわれ、調 査結果の報告書作りが進められているという。

暖かくなったら是非 訪れようとイメージを膨らせていますが、柏崎市遺跡考古館・柏崎市教育委員会「柏崎に 眠る古代の製鉄遺跡」などの資料を送っていただき、それをベースに遺跡の概要整理しました。

なお、昨年この日本海側とは反対側の太平洋側福島県原町の古代大製鉄コンビナート「行方」金沢製鉄遺跡群に 隣接する割田地区からも製鉄遺跡群が発掘され、太平洋側と日本海側で東北蝦夷をにらんだ大コンビナートがあ り、その両方のコンビナートが上記したほぼ同じ製鉄炉変遷をした大製鉄遺跡であったことがわかってきていま す。 この福島県「行方」製鉄遺跡群についても 多くの資料を福島県埋蔵文化財センターから送っていただき、 参考にしています。





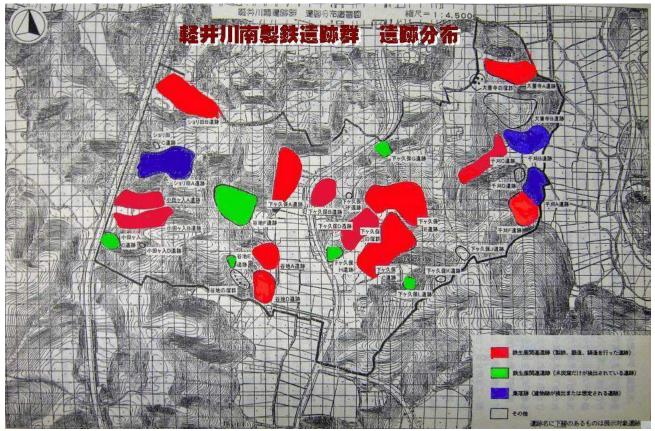
参考

- 1. 柏崎市遺跡考古館・柏崎市教育委員会 「柏崎に眠る古代の製鉄遺跡 軽井川南遺跡群報告会」資料
- 2. 柏崎市教育委員会 「柏崎に眠る古代の製鉄遺跡 軽井川南遺跡群」下ケ久保 A, C, E・大善寺 A・千刈 B, C, E,
- F 現地説明会資料
- 3. 福島県教育委員会 行方の鉄 7 割田 E・G 遺跡現地説明会資料
- 4. 福島県教育委員会 「真金吹く 陸奥の行方」ほか

『古代 越の大製鉄コンビナート』 柏崎 軽井川南製鉄遺跡群 8世紀~11世紀





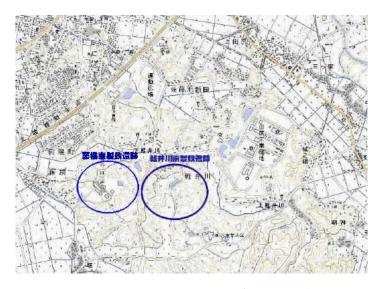


軽井川南製鉄遺跡の概要

柏崎平野の南に広がる低丘陵地の中 軽井川地区 の南部に位置し、すぐ西側隣に同じ古代の製鉄遺跡 群である藤橋東製鉄遺跡群があり、一連の製鉄遺 跡群であると考えられている。

本遺跡は柏崎フロンティアパーク造成工事に伴って 発見され、約28haの事業用地には大小さまざまな鉄 生産遺跡が散らばっており、発掘調査は平成15年 から開始され、平成19年3月までに現地調査が終了 される。

現在までに32遺跡が発見され、そのうち19遺跡が 鉄生産に関係する遺跡である。隣接する藤橋東遺跡 群や「柏崎・夢の森公園」の用地から発見された遺跡



をあわせると 27 もの鉄生産関連遺跡がこの地域に分布しており、まさに巨大な「古代の製鉄コンビナート」が築かれていたと考えられる。



柏崎市教育委員会 2005 年 2 月 20 日 「眠りからさめた古代の製鉄」軽井川南遺跡群報告会 報告資料 柏崎市遺跡考古館・柏崎市教育委員会編 「眠りからさめた古代の製鉄」

(2005年10月・2006年7月・2006年10月 軽井川南遺跡群 現地説明資料)

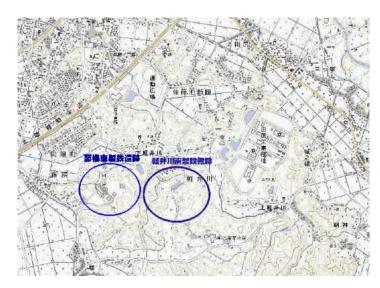
軽井川南製鉄遺跡群の特徴

- 1. 軽井川南製鉄遺跡では 20 基以上の製鉄炉 100 基以上の木炭炉が発見され、継続的に大規模な鉄生産が行われていた。 その中心的な製鉄遺跡下ケ久保 C 遺跡だけでも 100 トン以上の鉄滓が排滓場に埋蔵されており、遺跡群全体ではかなりの量であり、鉄生産量が非常に大きかったことを示している。
- 2. 概ね8世紀後半頃~12世紀頃まで 長期にわたって 鉄生産が継続して行われた。
- 3. 軽井川南遺跡群では砂鉄による製錬ばかりでなく、鍛造鍛や鋳造による鉄製品までの加工が行われていた。 古代の大製鉄コンビナートであった。

4. 製鉄炉は長方形箱型炉 半地下式竪型炉の両 方が確認され、また 小田ケ入 B 遺跡からは竪 型炉に伴って鞴座が出土。 古代の製鉄炉変遷 を考える上でも重要。

また、木炭炉の列が整然と幾列も並び 計画的 な配置がなされている。

5. すぐ西側隣に同じ古代の製鉄遺跡群である藤橋 東遺跡群があり、一連の製鉄遺跡群であると考 えられるが、 この遺跡群からは古代の鉄生産 に関係する 7 遺跡(製錬遺跡・鍛冶工房・集落) が確認されているが、本格的な発掘調査が行わ れていないので、詳細は不明である。



福島県「行方の鉄」 武井・金沢地区製鉄遺跡群 古代の製鉄炉の変遷

鉄アレイ型箱型→片側排滓・羽口→竪型・踏み鞴の登場・送風管→踏み鞴付箱型炉



「眠りからさめた古代製鉄」 寺島文隆 「古代製鉄遺跡について 福島県武井・金沢地区製鉄遺跡群を中心に」より転載整理





古代東日本の製鉄遺跡のあり方からみると、鉄生産は、国家の「殖産興業」政策のもと、国や郡を単位とする官営の生産 地が各地に整備されて開始されたと考えられている。

発掘調査された本遺跡群の規模は、新潟県を含めた北陸地方では最大級であり、福島県相馬地方や福岡県九州大学キ ャンパス内の遺跡群に次ぐ規模である。鋳造作業まで確認できる事例も少なく重要である。

したがって、本遺跡群は古代の東日本における鉄生産の実態を具体的に示す貴重な事例である。

これに加えて近隣の新潟工科大学キャンパス内でも同時期の製鉄遺跡が調査されていることを考慮すると、この周辺は 古代の越後国における中心的な鉄生産基地、いわば「製鉄コンビナート」であったことがうかがえる。

製鉄遺跡は広範囲の発掘調査により初めて内容が把握されることが多く、まとまった範囲が現状保存された事例はない ことからも、本遺跡群の歴史的価値はきわめて高いと考えられる。

柏崎市教育委員会 2005 年 2 月 20 日 「眠りからさめた古代の製鉄」軽井川南遺跡群報告会 報告資料 柏崎市遺跡遺跡考古館・柏崎市教育委員会編「眠りからさめた古代の製鉄」

(2005年10月・2006年7月・2006年10月 軽井川南遺跡群 現地説明資料)

なお この製鉄遺跡群は 2007 年 3 月までに発掘調査を完了して、記録とともに「下ケ久保遺跡」の一部を現状保存し、遺跡群のある約 28ha の事業用地は柏崎フロンティアパークに造成される予定である。

■ 柏崎日報 Online 2007.1.6.

2007.1.6. 製鉄遺跡の発掘調査が完了

市教育委員会は、柏崎フロンティアパーク事業(産業団地造成)に伴って市内軽井川地内で行っていた軽井川南遺跡群の発掘調査を昨年内で完了した。調査の途中、遺跡保存範囲の拡大見直しなどが提案され、調査が一時ストップするなど当初予定を2年間延長した。4年間に及ぶ調査では鋳造にかかわる遺構、遺物が出土し、日本海側の古代鉄づくりの歴史を明らかにするうえで大きな成果を収めた。

南遺跡群は、大小合わせて35の遺跡の総称。このうち、22遺跡が奈良・平安時代から鎌倉時代の鉄生産に関する遺跡。製錬、鋳造まで鉄と鉄生産にかかわるすべての工程が確認でき、"古代製鉄コンビナート"とされる。発掘調査は、事業主の中小企業基盤整備機構の委託を受け、開発予定地の約28ヘクタールで2003年秋から着手。緑地にかかり工事に入らない3遺跡を除き、32遺跡をすべて終了した。

7 世紀後半以降 日本各地の重要拠点に作られた大和王権の大製鉄コンビナート 越 柏崎の軽井川南遺跡もそのひとつであろう



■ 新潟県柏崎市軽井川南遺跡群 発掘時写真

柏崎の情報「陽だまり」http://lib.city.kashiwazaki.niigata.jp/hidamari/kashiwazaki/index.html などより 製鉄遺跡現地説明会 下ケ久保C・D・E遺跡 ショリ田遺跡 下ケ久保A遺跡、B遺跡



本遺跡群は奈良・平安時代、西暦 8 世紀から 11 世紀頃を中心とした鉄生産関係の遺跡群である。今回、発掘調査の対象となった約30 ヘクタールの低丘陵内には、砂鉄を原料とした鉄生産に関する遺構が、集中して良好な残存状況で多数見つかっており、古代の鉄生産を考える上できわめて重要な遺跡と考えられる。

日本列島における鉄生産は、古墳時代後期(一説では弥生時代) に西日本において始まり、奈良・平安時代時には、関東・東北地方 など、東日本に広く普及す る。鉄は土地の開墾や農業でも用いる 土木・農耕具等を製作するためには不可欠の物資であり、鉄生産は 国家や地域の生産や人々の暮らしを支える基幹産業で あった。

原料の砂鉄から鉄製品を作るには、炉内で原料を溶かして不純物を取り除く「精錬」の工程を経て、そこで得られた鉄素材を鍛錬して



製品を作る「鍛冶」の工程が必要である。多くはこれで製品となるが、鍋や梵鐘などの鋳物は鋳型に溶かした鉄を流し込む「鋳造」の工程が必要である。一方、原料や鉄素材を溶かし、鉄を還元するためには大量の木炭を必要とする。本遺跡群では、これらの工程と木炭生産に関係する遺構として、製錬炉約20基、鋳造に伴う溶解炉約3基、鍛冶炉数基、木炭窯約100基が発見されている。製錬炉には箱型と竪型の2種類がある。生産地ではおもに製錬炉と木炭窯が見つかるが、鋳造や鍛冶の遺構が確認できることは注目される。製錬のほかに鍛冶・鋳造という二様の製品化作業が長期間にわたって行われていることは、この鉄生産が集約的で当時も重要な位置を占めていたことを示している。

古代東日本の製鉄遺跡のあり方からみると、鉄生産は、国家の「殖産興業」政策のもと、国や郡を単位とする官営の生産地が各地に整備されて開始されたと考えられている。

発掘調査された本遺跡群の規模は、新潟県を含めた北陸地方では最大級であり、福島県相馬地方や福岡県九州大学キャンパス内の遺跡群に次ぐ規模である。鋳造作業まで確認できる事例も少なく重要である。

したがって、本遺跡群は古代の東日本における鉄生産の実態を具体的に示す貴重な事例である。

これに加えて近隣の新潟工科大学キャンパス内でも同時期の製鉄遺跡が調査されていることを考慮すると、この周辺は古代の越後国三島郡における中心的な鉄生産基地、いわば「製鉄コンビナート」であったことがうかがえる。

製鉄遺跡は広範囲の発掘調査により初めて内容が把握されることが多く、まとまった範囲が現状保存された事例はない ことからも、本遺跡群の歴史的価値はきわめて高いと考えられる。



下ヶ久保遺跡全景



下ヶ久保 C 遺跡 箱型炉、竪型炉、廃サイ場、木炭窯、鍛冶炉その他 こげ茶の部分が廃サイ場



下ヶ久保 E 遺跡箱型炉、竪型炉、廃サイ場、木炭窯

下ヶ久保 B 遺跡製鉄炉、廃サイ場、木炭窯



下ヶ久保 A 遺跡鋳造溶解炉、鋳造関連廃サイ場、木炭窯



谷地F遺跡木炭窯



谷地 D 遺跡箱形炉、廃サイ場、木炭窯、竪穴住居、焼土坑



谷地 D 遺跡木炭窯

福島県「行庁の鉄」 武井・金沢地区製鉄遺跡群 古代の製鉄炉の変遷

鉄アレイ型箱型→片側排滓・羽口→竪型・踏み鞴の登場・送風管→踏み鞴付箱型炉

铁水柱配包上



私田精進路 (塩勝城で)

9 2

@ E

(V) 5

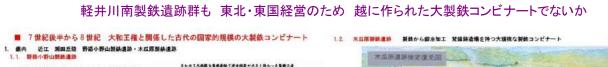
時期別の製鉄炉数と廃滓量



箱形师

堅形师

7世紀後半から8世紀 地方拠点に大利王権の大製鉄コンビナートが出現した







城輪柵 遺跡

磐舟柵

多年,川南東東南峽町



■ ACT M COLUMN DO M CAME MODE AND ACT MODE ACT MET ACT MODE ACT MET ACT MET















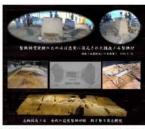


■ 高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡の位置づけ

の情報ななが、プロ・家女は最初では、第一7 フ型接手での意識を指定した方型を回答を開かった。 翻手手点から の原来が最初したつなりを開かった。 在型に中心は、特に力量では、フレビ素の音を表わらたが、選束 の内側面目をおいるが、情報から成大だか、推断ときばり、事命の起数が 多かが、大連等であったサードを行いて、メル・家女とのを一般心里 とぞる地方指向にそれらの技術器をすすが、大製賞コンピナートを行りあ される

けた。 今回四周今治 - 市場改者ノ半日製取道師で出土した製食炉も燃内で大型改 及と4た関係型の高級には非難を持つアレイ製業型デで、度都には古ぎきっ ちぢひさつめた効果機構があるのも 東北のコンピナートで更られる開型で

5つらで3のた治療機能がある日産互換の発生サートで変したもの様式を表し、 表し、 を表し、立ち生化・自己製品機能がある日産互換の発生の日の基では情熱を与 をからは時代的になりしてもようであるが、動物をデコロ基とした方代 の間治工業等がかつるもなど、採むにも認治器が対プロックでおり、この丘 機能には近代の製造コンピナートがあったのではないかとのイメージが振ら 人でやく、

















東北電力原町発電所内金沢遺跡 個島県浜通り地方北部の相馬地方には 200 を越える製鉄関連遺跡がある。特に武井地区の製鉄遺跡群 金沢製鉄遺跡群から 7 世

武井製鉄遺跡群









桃生城 少多黄城 郡山遺跡 福島県金沢地区 製鉄調除計

大型量産製鉄炉を確立し、古代官営大製鉄コンピナートに発展させた近江の製鉄技術 瀬田丘陵の源内峠製鉄遺跡・野路小野山遺跡を訪ねて

2007.1.30. by Mutsu Nakanishi







6世紀 石見や吉備の中国山地ではじまった量産製鉄は7世紀 近江など畿内で研かれ、大型の製鉄炉が立ち並ぶ 量産技術「古代の大製鉄コンビナート」に発展し、それらがモデルとなって、その後 8世紀には東北・北九州・ 越後・四国伊予??など律令中央集権を目指す大和王権の地方拠点での大製鉄コンビナートが展開され、鉄が広く 全国に行き渡ってゆく。

7世紀はじめ琵琶湖湖北古橋製鉄遺跡で始まった近江のたたら製鉄はその後 湖南の瀬田丘陵 南郷製鉄遺 跡・源内峠製鉄遺跡・木瓜原製鉄遺跡・野路小野山製鉄遺跡と変遷してゆく中で、大量生産可能な量産型大型モ それらの炉が整然と立ち並ぶ、古代の大製鉄コンビナートを完成させてゆく。

- 古代日本の鉄の量産のさきがけとなった自然送風の大型炉 本当はどんな姿だったのだろうか・・・・
- また、以前訪れた野路小野山製鉄遺跡では あまりイメージが湧かなかった古代の大製鉄コンビナート いくつもの製鉄炉が立ち並ぶ大製鉄コンビナート 今度はみられそう

そんな 日本のたたら製鉄技術史の重要な製鉄遺跡 源内峠製鉄遺跡・野路小野山製鉄遺跡を訪ねました。

中国山地で始まった たたら製鉄 が 7世紀 畿内で量産炉へと展開

古代たたら製鉄 量産炉への変遷を示す 近江 瀬田丘陵 最古の箱型製鉄炉 源内峠製鉄遺跡 2007. 1. 30.



















量産モデル炉による官営製鉄コンビナートへ

近江 野路小野山製鉄遺跡 8世紀 約1.2m * 約2m 人口送風 踏鞴

陸奥 金沢製鉄遺跡 8世紀 60cm * 2m 人口送風 足踏鞴



石見 今狭山 製鉄遺跡



吉備 大蔵池南製鉄遺跡







古橋製鉄遺跡の箱型炉

近江 野路小野山製鉄遺跡

1. 古代 近江瀬田丘陵の製鉄遺跡の位置づけ

「自然通風の大型たたら炉」って どんなだったのだろうか

約5年前 2002年に近江の製鉄遺跡を調べて 野路小野山製鉄遺跡・木瓜原製鉄遺跡を訪れ、源内峠製鉄遺跡 の資料も貰っていたのですが、古代近江京を支えた製鉄遺跡程度の意識しかありませんでした。

昨年の発掘調査で野路小野山製鉄遺跡から、さらに4基の製鉄炉が整然と並んで発見トータル15基の製鉄炉が立ち並ぶ製鉄コンビナートの様相であることが、ますます明確になり、また、源内峠製鉄遺跡は以前は丘陵地開発の真っ只中、現地を見ることが、できませんでしたが、今は大きな整備された丘陵公園になっていて、源内峠製鉄遺跡のたたら炉の現地復元のプロジェクトが進んでいるという。源内峠製鉄遺跡は近江で大型量産炉が確立してゆく過渡期の7世紀後半の大型箱型炉の先駆けである。

これらの近江の製鉄炉が日本のたたら製鉄技術史上に与えた影響は大きく、重要な製鉄遺跡である。

この近江丘陵で磨かれ、各地に伝播していった鉄アレイ型の大型箱型製鉄炉については 昨年今治高橋佐夜の谷 II 製鉄遺跡を勉強しましたが、 「大きな鞴がつくその前の自然通風の大型炉とはどんなものなのか」がよくわからない。 自然通風のみでは 大型炉では風が炉の中央まで よく回らず、炉の中央部までは風が行き渡らない。 すでに5世紀には鍛冶炉では皮吹子が使われ、数多くの羽口が出土しているが、出土した古代初期のたたら製鉄炉遺構からは羽口は出土していない。羽口・送風管が大量に見つかるのは 人工通風の大型炉以降である。

大型鞴がつかわれる人口通風のたたら炉が完成される以前のたたら炉では どんなふうだったのだろう。 瀬田丘陵のたたら製鉄 特に源内峠製鉄炉がわかれば、それが判るに違いないと・・・・・・



大槌町小鎚の小林家に伝わる「小林家製鉄絵巻」

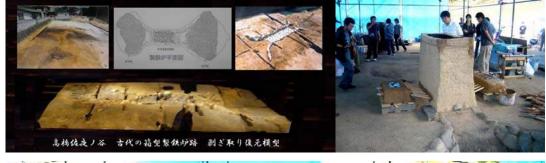


今佐屋山たたら想像図

岩手県大槌町 807年ともいわれるたたら図

源内峠たたら想像図







高橋佐夜ノ谷製鉄遺跡の復元された鉄アレイ型箱型製鉄炉 古代 8世紀・9世紀 日本各地に伝播した鉄アレイ型大型箱型炉〔人工通風〕

たたら製鉄炉では操業後 鉄塊を取り出すため、炉の上部構造は破壊されて破棄されるので、廃棄物・遺物や炉 床などの痕跡を集めて推定するしか仕方がない。特にたたら製鉄の技術が外に漏れるのを恐れ、炉を徹底的に壊 したと思われ、その痕跡ははっきりしない場合が多い。

自然通風の大型炉はどんな構造で風を送り込んでいたのか・・・

三陸大槌町小林家絵図では人が並んで皮吹子を膨らましている図があるが、時代はずっと下る。

石見今佐屋山の小型炉の説明陶板には皮吹子で風を送り込んでいるのが見える。

以前もらった源内製鉄炉発掘現地説明資料には炉の両側に 10 名ほどの人たちが並んで、炉に皮吹子で風を送り込んでいる。

中国山地で始まったたたら製鉄は 風が通り抜ける丘陵地の上に製鉄炉に風を送り込む皮吹子は使われたと思われるが、自然通風をベースとした炉体床面積1m以下の小さな炉であった。

増大する鉄需要を満たすためには大量生産を可能とする大型炉が必要で、中心まで風の送り込みを可能にするため、通風孔を増やしながら、どんどん製鉄炉が横に延ばされ、大型長方形状の箱型炉が開発されてゆく。そして、この炉の大型化にともなう鉄滓の増加を処理するため、製鉄炉短辺両側の外に大型円形の排滓場が設けられ、長辺約2mの鉄アレイ型のモデル炉ができてくる。

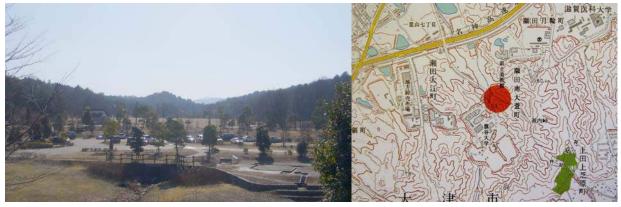
さらに安定な送風が可能となる人工送風・大型鞴が取り付けられ、8世紀には大型の箱型量産炉が完成され、それら同じ型の製鉄炉が整然と立ち並び、大鍛冶・武器・農具などの鍛冶加工・鋳物加工の工房が併設される大製鉄コンビナートが完成する。

古代日本の鉄の量産を可能とした製鉄炉のさきがけとなった自然送風の大型炉本当はどんなだったのだろうか・・・・

また、以前訪れた野路小野山製鉄遺跡では あまりイメージが湧かなかった古代の大製鉄コンビナート いくつもの製鉄炉が立ち並ぶ大製鉄コンビナート 今度はみられそう

近江琵琶湖の南 東西に伸びる瀬田丘陵にはそんな古代たたら製鉄の量産化技術を育んだ7世紀・8世紀のたたら 製鉄技術の変遷を見ることができる。

2. 源内峠製鉄遺跡を訪ねて 2007.1.30.



源内峠遺跡のある 文化ゾーン公園 奥が源内峠

1月30日 ぽかぽか陽気の朝 車で名神を走って滋賀へ。

琵琶湖の南を東西に伸びるこの瀬田丘陵は丘陵を貫いて名神高速道路が走り、今から約10年ほど前 京滋バイパスの工事が進行し、交通の便がよくなったこの丘陵地全体が開発の嵐の中にあり、宅地開発・道路整備そして 龍谷大学の瀬田キャンパス 立命館大学草津キャンパスなど 続々と大型開発がなされ、それらの開発地から製鉄遺跡が続々と出土し発掘調査がおこなわれた時代があった。

約 5 年ほど前 近江の製鉄遺跡を調べていて、いくつか送っていただいた資料を頼りに 立命館大学キャンパス のグランドの地下に整備して保存された木瓜原遺跡・草津野路小野山の京滋バイパス高架橋の真下になってしまった野路小野山遺跡を見学。そして 龍谷大学のキャンパス周辺で今始まっている源内峠製鉄遺跡現地説明の資

料も頂きましたが、まだ いたるところで 大型機材で丘陵地のあちこちが掘り返され、道もままならぬ頃 源 内峠製鉄遺跡にはよう行きませんでした。 最近 インターネットで調べると源内峠製鉄遺跡周辺は大津市の文 化ゾーンとして 大きな丘陵公園に整備され、この一角に滋賀県埋蔵文化財センターがあり、また、公園の中に ある源内峠製鉄遺跡ではたたら炉の現地復元のプロジェクトも進んでいるという。

逢坂山トンネルを抜け、ぱっと琵琶湖が左手に開け、瀬田川を渡ると瀬田西 IC である。目的の遺跡は京滋バイパスと交差する次の瀬田東 IC のすぐ脇なのですが、西からは出られない。いったん南へ京滋バイパスまで下がって、バイパス沿いの幹線道路を東へ。 瀬田東 IC を越えると右手に龍谷大学キャンパスの入り口とともに丘陵地に広がる大きな公園 文化ゾーンの大きな標識が見えてくる。 この公園の右手奥が源内峠である。

滋賀県文化ゾーンには丘陵地を利用して、広大な公園として整備されており、 美術館・図書館・埋蔵文化センタなどが 自然樹木の間に配されている。

「こんな山の中に広大な公園作って どないするの・・・」と家内は言うので すが、この瀬田丘陵の直ぐ左手下は琵琶 湖までぎっしり詰まった大津市街地で あり、古代には近江国庁が置かれた国府 跡がある

公園の駐車場に車を置いて まず 源内峠製鉄遺跡の位置を教えてもらい に 木々に包まれ、よく整備された公 園の中を埋蔵文化財センターへ行く。



滋賀県文化ゾーン 美術館・図書館・埋蔵文化センターなどがある地区

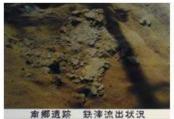
センターの中には 滋賀県で出土した製鉄遺跡ならびに鉄製遺物展示の小コーナーがありました。

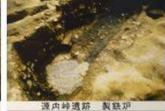




滋賀県埋蔵文化財センター

埋蔵文化財センタ-内に展示された滋賀の製鉄遺跡コーナ

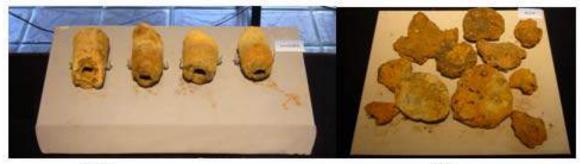






木瓜原製鉄道路 鉄鉱石と鉄塊状道物

源内峠製鉄道跡 炉内滓と木炭



羽口 鉄滓







滋賀県各地から出土した鉄製道物

滋賀県出土の製鉄遺跡と滋賀県各地より出土した鉄製遺物 滋賀県埋蔵文化センター展示より

源内峠製鉄遺跡の概要も展示されていましたが、よくわからず。

センターの人に製鉄遺跡の位置を地図に書き込んでもらう。

遺跡の位置はこの文化ゾーンの一番南西の端 龍谷大学のキャンパスに接したところである。

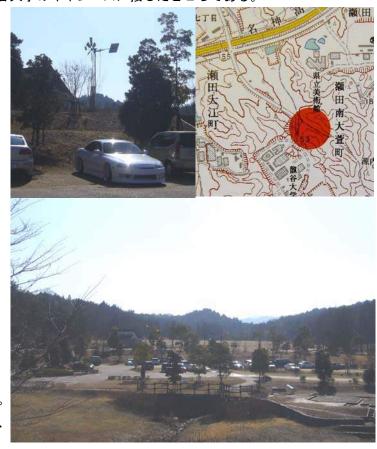
「もう 完全に埋め戻されているので、何もない ですよ。 ただ 製鉄遺跡が出土した直ぐ横に 復元製鉄炉を建てる予定で そこが囲われて看板 が立っているので判るでしょう。」とおしえてもら う。

製鉄炉の詳しいことは 学芸員の人が今いない ので 詳細はわからず。

源内製鉄遺跡の調査報告書を見せてもらって、 一部コピーしてもらう。

埋蔵文化センターを出て 林を抜けて バイパ ス沿いを西へ少し戻ると広い芝生の斜面の丘陵地 が南へ伸びている。東と西の丘陵地にはさまれた 緩やかな谷状の窪地地形が南に徐々に狭まって、 その奥でひとつの丘陵になっている。この谷状地 形の中に小さな丘がいくつも見える。

ぐるつと見渡すと ちょうど北の琵琶湖から南 の源内峠に風が吹き抜ける風の道の地形に見える。 上へ上ってゆく入り口のところに風車の塔があり、 ここを風が吹き抜ける風の道であることを示して いるのかもしれない。



びわこ文化ゾーン 奥に源内峠製鉄遺跡がある丘陵地





ゆるい上り坂の道を奥へ登って行くとだんだん尾根筋が狭まって、小さな丘の頂上部に出て、その頂上部に四角く青いシートがかぶせられ、「源内峠古代製鉄炉復元中」の看板が立っている。



ここが源内峠製鉄遺跡で、南北に平地があり、 その両側は傾斜して浅い谷を挟んで隣の丘につ ながっている。

ここで 4 基の製鉄炉が出土しているが、埋蔵 文化財センターの人の話によるとこの復元地の 真下ではなく、直ぐ横の平地部だという。









滋賀県大津市文化ゾーンにある源内峠製鉄遺跡 風の通り抜ける窪地の岡の上で4基の製鉄炉が 発見されている。



鉄と国家今治に刻まれた鉄の歴史 大道和人「滋賀県における 7~8 世紀の製鉄炉の動向」より 2006.9.16.

源内峠遺跡の製鉄炉復元プロジェクトを示す看板には復元製鉄炉の模型写真がはりつけられ、原料の鉄鉱石・木炭を挿入する人と炉の送風孔に皮吹子を装着して送風している様子が示されていた。

小型炉と変わらぬ簡単な送風で箱型炉が 操業できたのだろうか・・・・

イメージが違う。以前得た資料には炉を10 人近い人が取り囲んで、風を送り込んでいる。 おそらくは 後者に近いのだろう。

平成 13 年 3 月 滋賀県教育委員会 「源内 峠遺跡報告書 まとめ」による製鉄炉の概況 を書きに示すが、炉の概要とともに送風につ いてもきっちり記録されていました。





源内峠製鉄炉復元模型写真

製鉄炉はいずれも長軸が尾根の等高線に平行になるように置かれた横置き箱型製鉄炉で、発見され 4 基の製鉄炉は 炉底 長さ 2.35m~2.5m 幅 0.3m~0.4mの大型の箱型炉で、操業は7世紀後半と推定されている。

炉床下の下部構造はもっとも古い 4 号炉では 明確には存在しないが、礫が密に含まれる地層の上に炉が築かれ、製鉄炉が重なる 2・3 号炉ではめいかくではないが、3 号炉の上にある 2 号炉では円礫を敷き詰めた上に粉炭を敷き詰めている。また、1 号 炉では土坑を掘りこみ、木炭や木炭久尻の土を充填している。

そしていずれの炉も炉底に年度を貼り付けているという。

源内峠2号製鉄炉イメージ図

また、送風構造であるが、いずれも羽口は使われていないようで、自然送風の炉であったと考えられている。そして 源内峠遺跡報告書によると情報は少ないが、出土した炉壁の一部から 炉壁に穿孔された複数の送風孔痕跡が確認され、送風孔の取り付け方が知れる。

送風孔は炉底から 10cm 上あたりに、先端部で直径 2~4cm の円形、炉壁内 2 等辺三角形を呈している。そして 芯芯感覚は狭いものでは 17cm 程のものもあるが、一般には 20~25cm 程度と広い。古代の製鉄炉の送風孔間隔は一般には 10cm 前後であり、この間隔の広いのもこの瀬田丘陵の製鉄炉の特徴であるという。

送風孔底面の穿孔上下角度は水平なものが多い。また 送風孔上端の穿孔上下角度は20~30度のものが多く、棒状工具跡のある炉底塊は棒状工具の炉内挿入角度が17度と推定され、送風孔上端の穿孔上下角度とほぼ一致し送風孔を通して、炉内を突いたことが見て取れる。

これらの製鉄炉の操業年代は7世紀後半 これら4製鉄炉から約25~50年継続的に操業されたと考えられている。

この近江における鉄鉱石原料箱型製鉄炉の系譜をたどると 4-5 世紀 朝鮮半島の石帳里製鉄遺跡に行き当たる。しかし、6 世紀以降 朝鮮半島では大型羽口による竪型炉が主流となっており、7 世紀後半操業の近江の製鉄と直接の影響をみることができないが、4-5 世紀石帳里は百済の支配地域であり近江と百済渡来人の結びつきはこの時代非常に強く、渡来人とともに百済の製鉄技術がこの近江で結びついていったとも考えられる。

平成13年3月 滋賀県教育委員会 源内峠遺跡報告書まとめより

この報告書からすると 長径約 2.5 メートルの源内峠の大型製鉄炉には両側に8個程度の送風孔があり、人工通風が実施されていないとすると 常時でなかったにしろ、皮吹子を持って炉の両側にそれぞれ8名程度のたたら衆が並び、炉内に風を吹き込んでいたと考えられ、源内峠遺跡の現地調査説明資料に書かれたイメージ図が浮かびあがってくる。 岩手県大槌町の小林家絵図に描かれたたたら操業にも符合する。足ふみ鞴などによる人工送風以前の大型炉の操業はすごい人数での操業だったと推察される。

また 埋蔵文化財センターの人によるとこの谷筋は製鉄炉が置かれ 7,8 世紀頃にはもっと急な谷で、風が吹き抜けていたと考えられ、たたら製鉄によって、周囲の山々の木々が切られたために、大きく地形が変形していると考えた方がいいと教えてもらった。

この次の時代 8世紀には直ぐ鞴が導入され、人工送風が始まりますが、それ以前、7世紀後半 急速な製 鉄炉の大型化に対して、ちょっとうそっぽいとも思っていましたが、やっぱり強烈に熱い製鉄炉の周辺に多 数の人たちが取り囲んで、操業が行われていたのでしょうか・・・・・・

この近江琵琶湖東岸には 比良おろし・比良八荒の言葉があり、琵琶湖を吹き渡る風がある。

そんな自然通風 強い風を狙って 製鉄が行われたのでしょうか・・・・・

ずっと頭の中でもやもやしていた大型炉での自然通風のイメージが この源内峠遺跡の大型炉と炉につけられた 通風孔の詳細を知って、やっと具体的に判ってきた様な気がします。

今はもう何もない雑木林の丘陵地の丘の上ですが、数多くのたたら衆が渡来の技術集団といっしょになって 大型炉の操業を進めていたに違いない。

そして この源内峠の大型炉の技術が8世紀同 じ瀬田丘陵の木瓜原製鉄遺跡・野路小野山製鉄 遺跡にひきつがれ、さらに人工送風のための鞴 が装着され、整然と製鉄炉が並び、さらに得ら れた鉄を加工する工房が立ち並ぶ古代の大製鉄 コンビナートへと展開されてゆく。

もと来た道を北に帰ってゆくとまっすぐ北



源内峠製鉄遺跡周辺より北側 琵琶湖遠望

の眼下遠くに 琵琶湖そして比良の山々が見え、今は公園化されて平坦になったこの谷筋を比良おろし 比良八

荒の風が吹き抜けて行ったに違いないとますます思えてくる。

6 世紀中国山地で 小型炉で始まったたたら製鉄を大型たたら炉に発展させ古代の大製鉄技術に展開していった のが、7世紀の源内峠製鉄遺跡である。

参考

びわこ文化公園整備事業に伴う発掘調査報告「源内峠製鉄遺跡」2001 年 3 月 滋賀県教育委員会 滋賀県文化財学習シート 2019 「源内峠遺跡」

大道和人「滋賀県における7~8世紀の製鉄炉の動向」〔鉄と国家今治に刻まれた鉄の歴史〕より 2006.9.16.

源内峠遺跡現地説明資料 1998年5月 滋賀県教育委員会

滋賀県埋蔵文化財センター 滋賀県の製鉄遺跡 常設展示

滋賀埋文ニュース 221 号ほか

1、古代 中国山地で始まったたたら製鉄を 大型・量産技術に発展させた近江瀬田丘陵のたたら遺跡群



2. 古代 たたら製鉄炉の変遷



大槌町小鎚の小林家に伝わる「小林家製鉄絵巻」



石見 今佐屋山たたら想像図

岩手県大槌町 807年の図ともいわれるたたら

源内峠たたら想像図

野路小野山たたら想像図 (8世紀鞴装着大型箱型炉)

(6世紀 小型箱型炉)

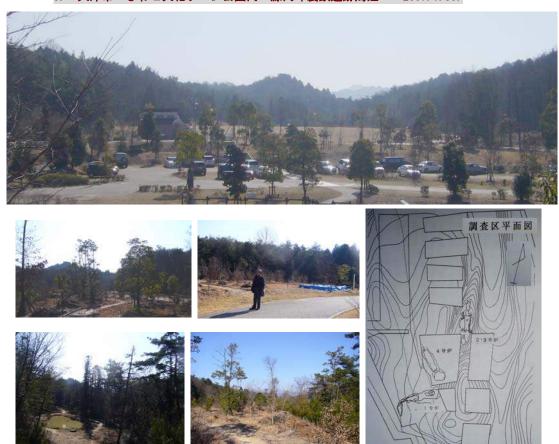
(7世紀後半 大型箱型炉)

高橋佐夜ノ谷 | 遺跡 復元製鉄炉 8世紀鉄アレイ型 人工送風大型箱型炉



源内峠製鉄遺跡復元性鉄路模型図 7世紀 鉄アレイ型 自然送風大型箱型炉

3. 大津市 びわこ文化ゾーン公園内 源内峠製鉄遺跡周辺 2007.1.30.



大津市 びわこ文化ゾーン公園内 源内峠製鉄遺跡周辺 2007.1.30.

4. 滋賀県出土の製鉄遺跡と滋賀県各地より出土した鉄製遺物 滋賀県埋蔵文化センター展示ほかより



滋賀県各地の遺跡から出土した製鉄・鍛冶関係遺物

野路小野山製鉄遺跡を訪ねて



6世紀に中国山地で始まった日本古代の製鉄は畿内で大型量産炉へと大きく発展して、それがモデル化され 地方重要拠点で官営製鉄コンビナート が展開される。その経過がみられるのが、古代近江の製鉄遺跡で、野路小野山製鉄遺跡はその完成された製鉄コンビナート。 6世紀・7世紀初頭 琵琶湖北・西岸の鉄鉱石を原料に琵琶湖北古橋製鉄遺跡・湖南南郷製鉄遺跡で始まった近江のたたら製鉄は瀬田丘陵で短期間 の間に磨かれ、増大する鉄の需要をカバーするため、大型の量産炉が立ち並ぶ製鉄コンビナートへと変遷する。 大型炉の出現が7世紀後半の源内峠製鉄遺跡。そして 人口送風装置を持つ量産大型炉が立ち並ぶ製鉄コンビナートの形が木瓜原製鉄遺跡・野路小 野山製鉄遺跡で完成され、地方拠点の官営大製鉄コンビナートとして 東北・九州北岸・越後・(四国伊予??) などに展開されてゆく。







2006 年新たに出土した C 群製鉄炉跡 国道1号京滋バイパス 野路小野山高架橋の











国道1号京滋バイバス 野路小野山高架橋の直下に眠る B群 製鉄炉

人口送風 踏鞴 両側アレイ型排滓 確認された製鉄炉総数は 15 基となり、A 群の小 規模炉をスタートに溝で区画された中に整然 と北西から南東側へ横置で並んでいる。(B·C また、C 群も西側隅に土坑・柱坑が多数 はっけんされ、西側に工房があったと考えられ る。また 3・4 号炉の周辺小土坑から原料と考 えられる多量の鉄鉱石が出土している。

炉の大きさ 約1.2m * 約2m の箱型炉

源内峠製鉄遺跡のところから北へ すぐ横を通る名神高速道路・東海道新幹線を潜り抜けると国道 1 号線京滋バ このバイパスを東へ市街地と田園地帯が交差する中を数分走って 草津市にはいると草津市野路小野 山の高架橋が見えてくる。この高架の下周辺が野路小野山製鉄遺跡である。高架にあがらず野路小野山の交差点 に降りると見覚えのある建物が見える。

この交差点の東側一体が野路小野山製鉄遺跡で、昨年新た な発掘調査で 4 基の製鉄炉が並んで出土した場所があるは ずと目を凝らすがよくわからない。場所的には国道高架橋 側道沿い北側の隣接地で以前訪れた時に発掘調査したらい ろんなものが出るだろうと高架下となった製鉄遺跡を恨め しく眺めていたところ。今も雑草地としてそのままになっ ている。インターネットで見た発掘調査時の写真と見比べ るが、ちょっと違う。



隣の畑に人がいるので 畑に入って聞く。やっぱり合っていました。今度草津市が市有地に取得したので、発掘調査が実現。この自分の畑も掘れば遺跡の続きだろうが・・・・と。遺跡に隣接する北側にはもう新しい家が建っていて すこし景色が変わっていました。

前回来たときは 高架橋を車がビュンビュン走っていて、何も見えない暗い高架橋の下部分を覗き込んで、資料と照らし合わせて、「大規模な製鉄遺跡で製鉄炉が並んでこの高架橋の下に据わっていた」と言われてもピンと来ませんでした。 今回はもう埋め戻されて、雑草が生い茂っていますが、発掘地がそのままみられました。

高架橋から北と東の両方向に緩やかに傾斜した土地で 東側高架橋を直角に横切って小さな谷になっていて、川が北側の蓮池に流れ込んでいる。おそらく、この傾斜地全体が製鉄遺跡と思われる



東側から小さな谷越しに野路小野山製鉄遺跡 2007.1.30.



西 野地小野山交差点側から 野地小野山製鉄遺跡 左の芦原が昨年4基の製鉄炉が並んで出土



東側から 野地小野山製鉄遺跡



4 基の製鉄炉が新たに出土したところ



すでに西側に家が建っている

製鉄炉はすでに発見された高架下につながる 10 基の製鉄炉に隣接する場所で谷川からの傾斜地に南西-北東方向に軸をとり、長方形の炉床部とその両短辺部に円形の排滓場を持ついわゆる鉄アレイ型の製鉄炉が 4 基平行して立ち並んでいる。製鉄炉の西側を中心に土坑・柱穴が検出され、すでに出土した製鉄炉と同じように 隣接して工房群が建っていたと推定されている。

しかし、鋳造や須恵器窯など製鉄以外の工房は見つからないので 製鉄専用の大規模官営工房と考えられる。(滋賀埋文ニュース 305号より)

製鉄炉の炉床部は約長さ約2m幅 約1.2m そして炉床部側辺部に2条の変色帯がありその内側に住みが散在していたことなどから、送風装置の痕跡の庚製が考えられている。(製鉄炉sx-01)

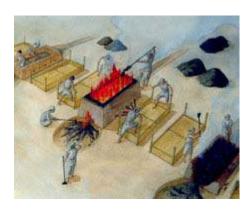
今回出土した製鉄炉の大きさには多少大小はあるがほぼ同じタイプで、さらに北側に製鉄炉群が伸びていると考えられている。

これらすでに出土した製鉄炉とあわせ 15 基の製鉄炉が確認され、いずれ も時期は8世紀の製鉄炉である。

これらの製鉄炉のうち A 群 (7~10 号炉) は散発・小規模であるのに B 群 (1~6 号炉) C 群 (SX1~4 号炉) では 規則的に整然とならび、B 群では周囲を取り囲む溝も発見され 組織的な量産がなされていたと考えられる。 古代近江の製鉄炉は傾斜地の等高線に並行して設置する横置きタイプが主であるが、この野路小野山遺跡では等高線に直角に置く縦置きタイプである。(滋賀埋文ニュース 305 号より)



野地小野山製鉄遺跡 炉の並び推定復元図



野路小野山遺跡 操業イメージ図





京滋バイパスの高架下になってしまった野地小野山遺跡 B 群製鉄炉群

この野路小野山遺跡のすぐ上に立命館大学の草津キャンパスがあり、そその運動場の地下には木瓜原製鉄遺跡が保存されている。この遺跡は源内峠製鉄遺跡と野地小野山製鉄遺跡の間に位置する7世紀末から8世紀前半の大型箱型炉・鍛治工房・木炭窯・梵鐘鋳造遺構・須恵器窯など多様な工房を持つ官営製鉄工房。

特にこの木瓜原遺跡の製鉄炉は炉内面で長さ2.8m幅0.6mの巨大箱型炉で、

小さな製鉄炉を複数基並べていること

両側に踏み鞴が設置されていた。後の野地小野山製鉄遺跡ではこれよりも小さな製鉄炉を複数基並べていること から、巨大炉の操業が難しく 限界に達していたことがわかるとともに、近江が畿内山と王権の製鉄一大センタ

一として先端技術展開を推進していた証拠でもあろう。



立命館大 草津キャンパスの地下に保存されている木瓜原製鉄遺跡 巨大箱型製鉄炉跡

6世紀に中国山地で始まった日本古代の製鉄は畿内で大型量産炉へと大きく発展して、それがモデル化され 地方 重要拠点で官営製鉄コンビナートが展開される。その経過がみられるのが、古代近江の製鉄遺跡で、野路小野山 製鉄遺跡はその完成された製鉄コンビナート。

6世紀・7世紀初頭 琵琶湖北・西岸の鉄鉱石を原料に琵琶湖北古橋製鉄遺跡・湖南南郷製鉄遺跡で始まった近江 のたたら製鉄は瀬田丘陵で短期間の間に磨かれ、増大する鉄の需要をカバーするため、大型の量産炉が立ち並ぶ 製鉄コンビナートへと変遷する。

大型炉の出現が 7 世紀後半の源内峠製鉄遺跡。そして 人口送風装置を持つ量産大型炉が立ち並ぶ製鉄コンビナートの形が木瓜原製鉄遺跡・野路小野山製鉄遺跡で完成され、地方拠点の官営大製鉄コンビナートとして 東北・九州北岸・越後・(四国伊予??) などに展開されてゆく。

近江はまた、北の琵琶湖を渡り、また西からも数多くの渡来人がやってきた土地である。百済・新羅など朝鮮半島の先端技術が渡来人とともにもたらされたに違いない。

1000 年を超える長きにわたって どうしても実用化できなかった製鉄技術。 6世紀中国山地でスタートした製鉄がこの近江で短期・急速に量産技術に発展してゆく。そこには数々の渡来人の功績があったに違いない。今はもう市街地の中に埋没してしまっているが、瀬田丘陵の製鉄遺跡は古代 大和王権が中央集権化を強め、国家として展開する過程を支えた重要な遺跡である。

「鉄は国家なり」の言葉は何か支配的でいやであるが、「鉄が日本各地に行き渡るようになり、日本文化が日本各地で花開いてゆく」そんな礎を築いた製鉄遺跡である。

琵琶湖を眺めながらのポカポカ陽気の一日 瀬田丘陵を訪れ、中国山地で始まった製鉄技術が、すごいスピードで拡大して行く姿をやっと自分のイメージの中に焼き付けられたきがしています。

参考

滋賀埋文ニュース 305 号ほか 野路小野山遺跡

野路小野山遺跡発掘調査概報 1984年3月

大道和人「滋賀県における 7~8 世紀の製鉄炉の動向」〔鉄と国家今治に刻まれた鉄の歴史〕より 2006.9.16. 古代の製鉄コンビナート 木瓜原遺跡の発掘 1994.3.26. 立命館大学文学部

関連和鉄の道

和鉄の道Ⅷ 2. 8-12世紀 越・柏崎に眠る大製鉄コンビナート 軽井川南製鉄遺跡群(資料)

和鉄の道Ⅵ 15. 「和鉄の道」 四国で初の古代製鉄炉 高橋佐夜ノ谷Ⅱ製鉄遺跡 発掘報告会

和鉄の道 II 13. 大和政権を支えた近江国の鉄 瀬田丘陵の製鉄地帯

和鉄の道 I 4. 黄金吹く行方製鉄遺跡群 福島県原町 蝦夷征伐の兵器庫 金沢製鉄遺跡

7.8世紀 近江製鉄年表

西暦	宮都	主な出来事	文献史料	製鉄炉が発見された製鉄遺跡
700		607 小野妹子を隋に派遣		古橋 (湖北)
	飛			
	.55	630 犬上御田鍬を唐に派遣		
		645 大化の改新		南郷 (湖南)
	大津	663 白村江の戦い 667 都を近江大津宮に遷す	con for the total war	源内幹(湖南)
	_	672 壬申の乱	670『日本書紀』巻27	
	藤原	694 藤原京遷都		南郷芋谷南 (湖南)
	200	701 大宝律令制定 708 和同開珎を造る 710 平城京に遷都 712 藤原武智麻呂近江国司	703『続日本紀』巻3	
	平城	718 養老律令成る		木瓜原 (湖南)
	Canal Co	723 三世一身法制定 729 長屋王の変 740 恭仁京遷都 741 国分寺建立の詔	742『続日本紀』巻14	
	恭難紫	740 恭仁京遷都 741 国分寺建立の詔 742 紫香楽宮遷都 743 大仏建立の詔	742 「机口平和」 苍14	野路小野山 (湖南)
	紫	745 藤原仲麻呂近江国司 746 紫香楽宮廃止		200000000000000000000000000000000000000
	平	752 東大寺大仏開眼 759 保良宮造営開始 761 保良宮を都とする 石山寺増改築	762 『続日本紀』 巻24	北牧野 A (湖西)
	娍	764 藤原仲麻呂の乱		後山畦倉 (湖西)
	長岡	781 藤原種継近江国司 784 長岡京造営開始		平津池ノ下(湖南)
	and and	787 長岡京遷都 788 最澄延暦寺を創建		
800	平	794 平安京に遷都		

大道和人「滋賀県における 7~8 世紀の製鉄炉の動向」〔鉄と国家今治に刻まれた鉄の歴史〕より



6世紀中国山地で始まった製鉄 箱型製鉄炉の変遷 大型量産箱型炉の展開













石見今佐屋山たたら 岩手県大槌町 807 年のたたら図??

源内峠たたら

野路小野山たたら 製鉄コンビナート

(6世紀小型箱型炉)

(7世紀後半大型箱型炉)

新鉄から最近加工 受銀鉄造場を持つ大規模な製鉄コンピナート

(8世紀鞴装着大型箱型炉)

7世紀後半から8世紀 地方拠点に 大和王権の大製鉄コンビナートが出現した











開展、元素連絡 <mark>別様年金・大陸への意义</mark> 人は大学等やトレス環族がある様式である。 中はの実践がその影響とできるからが、このもには数が他のがくされていた。日本の意識でも大変重雑ない。多くの製版連絡や 年本の製版がその影響とできるからが、このもには数が他のがくされていた。日本の意識でも大変重雑ない。多くの製版連絡が 年本年が年代の表演とのとサードでも、意思と変サービの音楽を必要が出ることから、自然の意味が認めています。 日本の意味との意味をある表演とので、第二条数を変わってかったものできる。













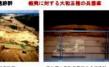




養養状羽口の出土とそのベースと見られる川原寺敷治工房の敷治炉羽口



東北 福泉県 武井野鉄道跡界 & 会沢野鉄道跡群 福育に対する大和王権の兵器権









実有製造機等 実立電力展別を指向的には200 支配とも設定します。 実立電力展別を展示内の収益を 保護機能を 10 世紀 大利工業の程度への呼吸不具体のの影響と対した実践リンピートがあった。 お写真と表現を11にから会交別を連絡がある。10 世紀初期はより得当されたり225com (中の会談でも持っない) 大力工業の程度、大力工業の程度、大工業、第20例、型プロ税等、単位計算的はより得当されたカラングートがよった。 大力工業の展開したから、多合の機能が、大工業、第20例、型プロ税等、単位計算的はより第20分のマングートがよっか解加に 形成されており、影響を特性の対象が開からあるととなった。 解析的では、第20分のでも影響がありまる。







4.

縄文の接合「あおもり縄文まほろば展」を見る

- 1. アスファルトで接合された合掌土偶や縄文人が描かれた石冠ほか 青森の縄文の名品を見る
- 2. 縄文が教科書から消えつつある

1. アスファルトで接合された合掌土偶や縄文人が描かれた石冠ほか 青森の縄文の名品を見る

2月16日大阪で開催されていた「あおもり縄文まほ ろば展」の開催にあわせて、久しぶりに三内丸山縄 文の会「大阪縄文塾」。三内丸山遺跡の岡田康博さん の案内で見学と夜の懇親会。

もう数年 青森三内丸山遺跡を訪れていませんが、 その間にもどんどんと新しい縄文の世界が広がり、 いろんな新しい人たちにあえるのが、この会の楽し み。

今回は関西で縄文のイメージを斬新な建築設計に 展開されている建築家の渡辺豊和先生(京都造形芸術大教授)のびっくりする斬新な縄文発想の建築群の話と岡田康博さんの「あおもり縄文まほろば展」縄文遺跡出土品の解説。世界遺産登録を目指す「青森の縄文」 青森の縄文遺跡から出土した名品ばかり。知っているようで知らなかった出土品の新しい見方の解説に吸い寄せられて 本当に岡田さん解説の図録がほしかった。また、 縄文時代の記述が今 社会科の教科書からどんどん消えていると聞きました。もうびっくりです。縄文の名品を見た後だけになおさらびっくりしました。

左に示しましたのは岡田さんの解説を聞きながらとった写真とパンプから作った出展されていた縄文の名品です。

これらの名品をゆっくり見ていると 何か違った世界が見えてくると思いませんか・・・

今回は登録されませんでしたが、世界遺産登録を目指した「青森の縄文」。 その名品を広く関西にも知ってもらおうとした展覧会。最近はレプリカ展示が多い中 1,2 品を除いて 手に取るような近さで見られました。 縄文のすばらしい土偶の数々・青森縄文土器の変遷・是川遺跡の漆・亀ヶ岡土器など ごく最近の出土品も含め

て青森県で出土した縄文時代総覧の名品ぞろいにびっくり。 関西では縄文の遺物を見る機会が少なく、関西にも常設の縄文展示場がほしいなあ・・・・と。

現代のアートに通じる縄文の複雑な文様も「縄文の模様ばかりにちゃくもくせず、模様をつけた後 消し去っている部分にも目を向けると模様の作り方が理解できる」と。「そう 見るのか」と また ひとつ縄文の見方が増えました。

今回 私の一番は 縄文人が描かれている石冠とアスファルト接着された土偶食い入るように見てきました。 また、三内丸山遺跡の墓の道がさらに伸びたこと また ストーンサークル小牧野遺跡の遺物をはじめて見れた こともラッキーでした。



石冠とは、かつて埋葬された人の頭部近くから出土したことから呼ばれたもので祭祀に使われた石器ともいわれるが用途不明

青森産ない丸山遺跡のすぐ近く近野遺跡で、3人の人物像が刻まれた縄文時代後期の石器「石冠」が出土。複数の 人物を描いた石冠が見つかったのは、国内初という。...

出土した石冠は縄文時代中期の土坑墓(大人の墓)から出土したもので、北海道式石冠と呼ばれているが、用途 は不明である。縄文人の精神世界はまだまだ未解明の部分が多い

北海道余市の海岸にあるオコッペの洞窟続縄文時代後期(約1,600~1,300年前)の古代人が彫った岩壁彫刻でみた線刻画に似ており、同じ文化圏 北方系の異物かもしれない。



風張1遺跡 合掌土偶 縄文後期

風張遺跡は八戸市是川地区にある遺跡で、中央の広場を中心に墓や建物が同心円状に配置された環状集落です。この合掌土偶は体の前で両手を組み膝を折り曲げて座った土偶です。胸の前で手を組んだ、合掌している土偶はこれ以外に例がなく、祈りや出産の様子をあらわしているとも言われています。 また、顔に赤色顔料の痕跡があり、縄文時代の風習である唇の刺青や髪型、衣服の様子などが表現されていることから、当時の女性の様子や生活習慣を窺い知ることができ、また 縄文の精神世界をも垣間見ることができるすばらしい土偶です。

腕や肘のところが折れていてアスファルトで接着されています。

以前から興味のあった縄文のアスファルト接着・接合。鏃などの武器だけでなく、 こんなところにも使われているのを始めて知り、同時に別の遺跡で出土した縄文の アスファルト塊にもひきつけられました。

この接合もしっかり接合されており、意図的に折って、丁寧にアスファルトで接合

している風にも取れ、縄文の精神世界につながる接合かもしれない。また アスファルトのこんな塊が 東北の 縄文の村々に運ばれていた。



、接合技術がすでに縄文の重要技術として しっかり縄文社会に根づいていたことを知って、接合屋の私にとってはうれしい限り。合掌土偶に出会えたことラッキーでした。









三内丸山縄文のポシェット

最近出土した土偶

遮光器土偶

是川遺跡 漆塗りの櫛







左:狩猟 中央:落とし穴 右:木の場面が描かれた縄文土器

















三内丸山遺跡の墓の道

縄文のストーンサークル 小牧野遺跡

2 縄文が教科書から消えつつある









大阪で開かれた青森三内丸山縄文の会「大阪縄文塾」で、小学校の社会科の教科書から 縄文時代を教える記述 がどんどん減って いまやほとんど記述がなくなっていると聞きました。 もうびっくりです。

学習指導要領での歴史学習に関する規定では、最初の部分が「農耕の始まり、古墳について調べ、大和朝廷による国土統一の様子が分かること」となっていて、農耕以前の時代の旧石器時代や縄文時代を扱輪なくてもよいと解釈されつつあるらしいのです。

日本人のルーツは弥生人 縄文人は異邦人と思っている人は特に関西では多いし、何か最大公約以外の少数は切り捨て・切捨て簡略にしてゆく最近の効率化重視の世相そのものに感じられます。

グローバリゼーション 市場万能のディジタル・効率主義が医療を荒廃させ、深刻な労働・社会問題をもたらし つつあると聞いたばかり。 教育の局面にもすでにそんな方向が深く入り込んでいることにびっくりです。

「結果は歴史が語ってくれる」とよくいいますが、歴史とは幾世代もが蓄積してきた経験の賜物 その判断が極めて先を予告すること 先を判断する指針を与えてくれることを知りながら、今 縄文を消し去ることの重さを考えないのか・・・・と憂鬱になってきます。

「世界文明にも匹敵する日本が世界に誇る木の文化 縄文」

「ストーンサークルや環状集落 そして 縄文の文化 日本人の心を映す縄文」

「穢れ・戦を知らなかった縄文」

「自然と強制してきた森の文化 縄文」等々

日本人のルーツと強く結びついている縄文時代を今の時代の都合でそっくり抜くことに不安を感じます。

今 三内丸山遺跡をはじめ数々の縄文遺跡が縄文のすばらしさと日本人がはぐくんできた文化・社会などとの関係を解き明かしつつある今。そして また、地球環境・自然との共存が本当に必要になってきた今 縄文の知恵 に学ばねばならぬ時代に本当に無謀としか言いようがない。

三内丸山縄文遺跡や青森の縄文の名品の数々を見た後だけに余計にさびしくなりました。

グローバリズムを口にする人たちの市場万能主義は本当に人を幸福にするとは思えない。

調和と共生の人間主義がないと・・・・。

そして、それを可能とする「人間主義」「理念・倫理感」の醸成が今一番日本にかけているところと感じます。 せつな的な対応に危機感をますます強くします。

縄文の名品を見た後だけになおさらびっくりしました。

これらの名品をゆっくり見ていると 何か違った世界が見えてくると思いませんか・・・

2007.2.16. 夜 大阪縄文塾のあと 大阪の街を歩きながら

By Mutsu Nakanishi



古代大和は 自然要塞 四方を山に囲まれた肥沃の地 その大和への交通路を訪ねて【1】 古代大和の鉄の道【1】

5. 定川・木津川から大和へ 大和の外港 木津「泉津」を訪ねて

古墳時代 瀬戸内海と大和を結ぶ鉄の道があった 卑弥呼が歩んだ鉄の道かも・・・





古代大和へ至る鉄の道 【 淀川・木津川 大和川 紀ノ川・吉野川 】

1. 古代大和への鉄の道

国のまほろば「大和」 大和は四方を山に囲まれ、外的を寄せ付けない自然要塞 その中に広大な肥沃の平野が広がっている。その中に 3世紀後半 邪馬台国・纏向そして大和初期王権が成立する。

その key となったのは朝鮮半島から大和への鉄の流入。 「鉄の流入」が強力な農耕具・武器を生み、肥沃な土地 を豊饒の地にかえ、文化を育み、大和を中心とした国家 連合を形成する。

古墳時代前期 摂津・河内には暴れ川 淀川・大和川 が瀬戸内海に流れくだり、河内湖が広がる。まだ 馬が

いなかった古墳時代前期 主要交通路は かわず時であったに 違いない。

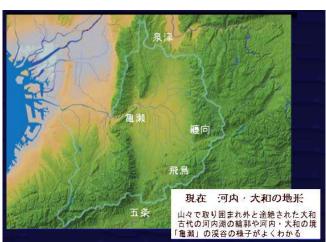
瀬戸内から大和への「鉄の道」はどこか・・・ 卑弥呼が通った鉄の道はどこか・・・

瀬戸内海・西日本の玄関口難波から大和への入り口は3つである

- 1. 西の淀川・木津川を遡って 山城から奈良山へ超えるルート 大和の外港 山城の泉津
- 2. 河内・大和をまっすぐに貫く最短コース 大和川ルート 大和の外港 河内の亀の瀬
- 3. 南の紀ノ川・吉野川を遡るコース 大和の外港 吉野の五条

いずれも数々の歴史・伝説を刻み、また、数多くの渡来人が足跡を残した古道である。

しかし 一番近い大和川ルートは河内と大和の境に二上山と竜田山に挟まれた渓谷・急流「亀の瀬」があり、ここで舟を降りて、急峻な山越(竜田越・大阪越)を必要とする難路である。一方、紀ノ川ルートは大きく大阪湾を南へ回らねばならない。その点、淀川・木津川ルートでは山城の泉津(現在の木津)からなだらかな奈良坂・平城山を越えれば大和。また淀川・琵琶湖を通じて 近江・日本海へ通じており、木津川をそのまま遡れば 伊賀・尾張・東日本へとつながる。5世紀日本に馬が入り、陸運が可能となり、また、数多くの渡来人が住み、河内が開発されるまでは 淀川・木津川ルートが大和への主要交通路の可能性が強い。河内開発・陸運整備に伴い 河内王権が成立する頃には、その中心は大和川ルートに移ったのだろうが・・・・



いずれにせよ これら 3 つの大和へのルートは朝鮮半島・大陸から瀬戸内と大和を結ぶ古代「大和の鉄の道」である。

いずれも何度も通ったことがあるルートであるが、「鉄の道」として意識したことなく、これら3つのルートを「古代 大和の鉄の道」として、Country Walk を計画。

そのスタートとして 山城「泉津」の Country walk。平城山が本当になだらかなのか、昔のイメージを再度たどり、そして、卑弥呼の墓 箸墓など 前方後円墳発祥の纏向 そして その東 三輪山北麓の谷筋の古代鉄関連地「穴師」を訪ねました。



四方を山々に囲まれた自然要塞の地 北側を 呈直、鈴鹿 画側を 河内との壁 生動・金剛 東側を 青垣・宝生・吉野 南側を 紀伊・大峰 で 大和へ至る道は 北・中央・南の3方を流れる3本の大河のみである 北端の外を淀川・本律川 霊地の中中を大和川 南端の外側を紀ノ川・吉野川 弥生・古墳時代 河内湖 提往は暴れ川淀川が流れ下る畿内 大和はすばらしい配法の地であったろう ここに度古、鍵の弥生の大東落的生まれ 総向古墳群の畿内部馬台園・大和三輪王権 が誕生し、日本誕生のドラマが展開する



大和への西の入り口 木津川・泉津 泉津から西へなだらかな平城山を越えれば大和



難波と大和を結ぶ最短コース 大和川の難所 亀の瀬 ここで 舟を乗り換えれば大和へ入れない 竜田越・二上山の大坂越の陸路でこの亀瀬を越える・







卑弥呼の邪馬台国そして大和王権が成立する3世紀後半 大和が外に出る重要遜燕路はどのルートか……

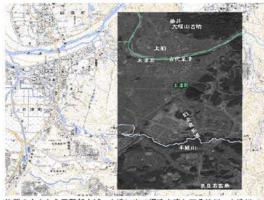
当時の最重要品「朝鮮半島の鉄」

馬がいない時代 瀬戸内海につながる難波から大和への道は木路 淀川・ 木津川と大和川。

でも 大和川には河内と大和の境の渓谷 亀瀬の急流が立ちはだかり、亀瀬 の手前で陸路で南洋の急峻な二上山または北洋の難路竜田川越えをせねば ならぬ。一方 淀川・木津川は摂津を山背の泉津まで週れ、ここからはな だらかな平城山を越えれば大和。

5・6世紀 馬が入り、河内王権が成立するまでは、この淀川・木津川が初期大和王権の主要交通路か・・・

大陸と大和を結ぶシルクロード以前の古代鉄の道・Iron Road 卑弥呼の道でもある。



笠置の山中から平野部山城・木津に出て摂津を流れ下る淀川・木津川 この木津から東になだらかな平城山を越えると大和である



瀬戸内から大和への最短コースは大和川の遡行 でも 河内と大和の境亀の瀬の急流が立ちはだかり、河内から陸路急峻な二上山を越えねばならず、通商路としては厳しい

淀川・木津川から大和へ 山城・木津「泉津」周辺

大和川から大和へ 大和川の難所 亀の瀬周辺

2. 淀川・木津川水系の大和の外港 木津「泉津」を訪ねて 2007.3.23.

古代 大和への道 山城 木津より東の平城山を望む 木津川・泉津周辺 2007.3.23.



大阪湾から北東へ 36km 男山と天王山に挟まれた八幡で淀川が木津川・宇治川・宇治川から合流する。

一番西側の木津川はここから東へ南山城を遡り、合流点から約 25km 木津で北に大きく方向を変えて 笠置・伊賀の山間の上流部に入っ てゆく。

山間部から平野部に流れ出た木津川が大きく東に方向を変える周辺 西岸が古代からの大和の外港「泉津」・木津の街が広がり、対岸の東 岸側が高麗の町である。

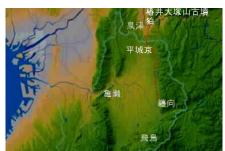
東から西に遡ってくる木津川に並行する南側に京阪奈丘陵がつらなり、関西学園都市ができて、今急速に市街化が進んでいるが、まだ 木津川に沿う周辺はのどかな田園地帯である。

この木津から西になだらかな奈良山の丘陵地帯が連なり、この奈良 坂を上り約7キロほどで奈良市の中心街東大寺大仏殿の横に出る。

興味は古代「泉津」の港はどんなところだったのだろうか また 卑 弥呼の鉄の道が本当に存在したのか??

対岸の「狛・高麗」は名前が示すとおり、朝鮮半島渡来人の郷 そして その山裾椿井の集落には40面に近い卑弥呼の鏡 三角縁神獣鏡が出土した卑弥呼の古墳時代前期の前方後円墳。この木津川が大和の重要拠点として反映したのは間違いない。そんな 痕跡もあるのだろうか・・・





また 記憶では奈良坂の言葉があるように緩やかな平城山を越え、ちょうど峠が般若寺。

本当に古墳時代 安心して越えられたのか?? そして 木津川から大和を目指した人たちが行き着く先 当時の都「纏向」まで足を伸ばして 三輪山北麓の鉄の郷 古代鉄関連地名「穴師」穴師坐兵主神社を最終ポ

イントにしようと。

全部歩いたわけではありませんが、バスに乗ったり 桜井線にのり継いだりで 古墳時代 東から大和を西に 抜ける鉄の道「卑弥呼の鉄の道」Country Walk













木津・泉津の対岸 狛・高麗から 上流 加度・笠置方面 2007.3.23 か茂・笠置の山中を出て、南下してきた木津川が木津で大きく北へ反転して 山城の甲野を建で深川に合流する

高麗寺跡 2007.3.23. 木津・泉津の西岸 古代渡来人の郷 山城 狛の里

高麗の郷の北側の山場が棒井の集落 40面近くの三角縁神獣鏡を出土した古墳時代前期 卓弥呼の時代の前方後円墳 棒井大塚山古墳がある













2.1. 山城と大和の境 木津 古代大和の外港「泉津」 2007.3.23. 遡ってきた木津川が この木津で大きく方向を変え 笠置の山間へ向かう

3月23日朝 JR 木津駅 に降り立つ。駅前からまっすぐ西へ木津川の土 手へ。 10分ほどで 長・京都を結ぶ国道 24 号線の木津川にかかる 橋に出る。「泉大橋」の 名前があり、橋の横の土 手に 3つの川の合流点 御幸橋まで 25km の標識





があり、土手に沿って南側にサイクリングロードが合流点に向かって続いている。

泉大橋と平行して、北の上流側に JR 奈良線の鉄橋で橋の手前が木津橋を渡ると狛である。

ちょうどこの泉大橋がU字に曲がる木津川の底のところになっていて、川幅が広く 川原に砂州が広がっている。 「泉大橋」の名前からしてこの地が古代の「泉津」だろう。

橋を渡らず、少し下流側に下って河原に下りる。





木津川が大きく U 字に曲がる泉津大橋周辺 この周辺が古代大和の外港「泉津」 2007.3.23.

広い河原が広がり北から流れてきた川が U 字に京都の方へ曲がっている。すぐ土手の下が木津の市街地で、後で木津の街で聞いたのであるが、U 字に曲がるあたりに もともと旧の橋が架かっていて、木津の街の中心を通りぬけ、奈良へ向かっていた木津の街で聞きました。昭和 20 数年に台風の大水で流され、現在の泉大橋がかけられ、道が北側に付け替えられたという。沢山の川舟があり、土手の下に大きな灯篭があり、町の入り口だった言う。

「泉津」の港の位置の話になるとみんなばらばらで もっと南という人 今の橋の上流側という人 みんなバラ バラで この広い河原一体が泉津だったのだろう。

もっともこの「木津」の地名の話になると「奈良の大仏の銅や大仏殿の木材をこの木津で陸揚げし、奈良坂を越

えて奈良に運んだ場所だから「木津」という」と皆異口同音の自慢するのである。また、この街の入り口近くのお寺には和泉式部の墓もあった。みんな奈良はすぐ隣だといい、土手から西を見ると奈良の新しい家並みが見える。平城山は木津の市街地の屋根に見え隠れしてやっぱり低い。やっぱり なだらかな丘陵地で木津からは奈良へ容易に越えられそうである。 土手をおりて、市街地を通って JR 木津駅の前の国道 24 号線の交差点に立って奈良側を見ると一筋の街道が緩やかに奈良坂へ向かっているのが見える。



木津川の土手から木津の街越しに平城山を見る



木津川の土手の下街の入り口の灯篭



木津の街にある泉式部の墓



JR 木津駅前の国道 24 号線 奈良-京都街道から奈良方面 平城山へ緩やかな坂が続いている

木津川を遡ってきた物資がこの木津で陸揚げされ、平城山を越えて大和に運ばれた。 大和が日本の中心として登場する古墳時代初期 もっとも重要な産品は「朝鮮半島の鉄」。渡来人も含め、数多くの人たちがこの地から大和へ登って行ったに違いない。古墳時代の「鉄の道」卑弥呼の鉄の道が見えてくる。

もう一つ「泉津」の位置や痕跡がないか、教えてもらうため、木津の教育委員会を訪ねる。

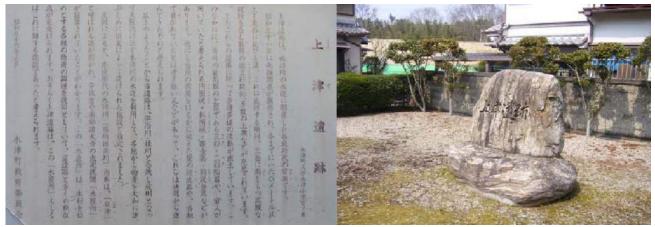
やっぱり「泉津」のあとは泉大橋一帯というほかないが、泉大橋の上流側の JR 鉄橋の北側の土手の下に奈良時代 木津の水運と関係した掘立柱建物群が出土した官衙跡「上郷遺跡」があると聞き、簡単な木津の歴史地図をもらって「泉大橋」の上流側の「上津遺跡」に行きました。

教育委員会の人から、「御霊神社の森の裏の住宅地のほんの一区画に碑があるだけで、まったく港のイメージは沸

かないよ」と聞いていたのですが、壁のように高い土手の下 新興住宅地の中の1画に「上津遺跡」の碑がありました。大きく築かれた木津川の土手の上に上がると上津遺跡がある新興住宅土手は、おまけに土手下の河原にはブッシュが広がっていてまったく川が見えませんでした。

遠く東の加茂・笠置の方へまっすぐ伸びる大きな土手を見ているとこの土手に沿って大きな港湾都市が広がっていたと思えてくる。(卑弥呼の時代にはまだ さほど大きくはなかったかも知れませんが・・)





奈良時代 木津川の水運の官衙の掘立柱建物群が立ち並んでいた上津遺跡 2007.3.23.

昭和和51年からの発掘調査で、160メートル以上も東西に延びる溝、これに並列する柵列、三面に廂(ひさし)をもつ高級な建物を含む数棟の掘立柱建物、多数の土壙などの遺構を発見。また、当時の最高級土器である三彩、二彩陶器や、官人が用いていたと考えられる円面硯、転用硯、帯金具、鞘尻金具などが出土。また、当地の需要をはるかに越えた量の須恵器や、当地で葺かれていたとは考えがたい瓦などがあって、これらは他の処から運んできたものと考えられます。以上のようなことから、当遺跡は、宇治川、桂川と合流し、淀川となって大阪湾に注ぐ木津川の水運を利用して、各地から、物資を大和に運ぶために国家によって設けられた施設と推定されました。

文献によると、奈良時代の木津川(当時は泉川)南岸は「泉津」(いずみつ)と呼ばれる港が開かれ、平城宮や南都諸大寺の出先機関「木屋所」(こやしょ)が設置されていたことがわかる。 この「木屋所」は、木材をはじめとする各種の物資の調達を役目としていて、当遺跡と多くの類似点が見受けられる。

上津遺跡に掲げられた案内板より

2.2. 泉大橋を北に渡って 渡来人の郷 高麗・椿井大塚山古墳へ 2007.3.23.

対岸の「狛・高麗」側から再度 広がりを見ようと土手を降りて、泉大橋をわたる。

「狛・高麗」の名前が示すとおり、朝鮮半島の渡来人が数多く住んだところであり、また この泉津の守りの役割を担ったのだろう 卑弥呼の鏡 三角縁神獣鏡が40面近くも出土した椿井大塚山古墳も対岸すぐである。



古代 大和への道 山城の大和の外港 木津川・泉津周辺 現泉大橋の上・下流 2007.3.23.





木津・泉津の対岸 狛・高麗から 上流 加茂・笠置方面 2007.3.23. 加茂・笠置の山中を出て、南下してきた木津川が木津で大きく北へ反転して 山城の平野を淀で淀川に合流する

泉大橋そして対岸に渡って北へちょうど上津遺跡の対岸のあたりから見る木津川周辺は下流側よりもさらに川幅が広く、まっすぐに北へ加茂・笠置から伊賀の方へのびていて、この土手から見る対岸の「上津遺跡」周辺はまさしく数多くの舟がつける港湾都市「泉津」にふさわしい。

また 土手にはまっすぐ木津川に沿って 加茂から笠置・伊賀と山間を通り抜け伊勢・尾張へ抜けてゆく幹線

道路国道 163 号 古道 伊賀街道が延びる。

また、土手の西側には広々とした「上狛」の素晴らしい田園地帯が広がり、その田園のど真ん中に太い木々が見える盛土高麗寺跡が見える。

木津・泉津の西岸 古代渡来人の郷 山城 狛の里 高麗寺跡 2007.3.23.



田園のなかにたたずむ高麗寺跡は、7世紀初頭(飛鳥時代)に創建された国内最古の寺院跡のひとつで、高句麗からの渡来氏族狛(高麗)氏の氏寺として創建されたと考えられています。高麗寺は、文献資料から天平年中(奈良時代)に存在したことが「日本霊異記(にほんりょういき)」に記され、その他「今昔物語集」にも説話が収録されています。伽藍(がらん)は、木津川を見下ろす台地上に南面して立地し、西に金堂、東に塔を持つ法起寺式の配置となります。塔、金堂、講堂は整美な瓦積基壇を外装としており、講堂の両翼から伸びた回廊は塔、金堂を囲んで中門に接続し、寺域は一辺が約200メートルの規模であったと考えられます。現地案内板より

高麗寺跡から田園地帯を抜け、山裾に沿って上狛を西へ向かって歩くと JR 奈良線も山裾に左手からよってくる。 木津川も平行して流れ下るがこの上狛周辺は木津川からは一段高い丘陵地で川はずっと南側である。

上狛から起伏の多い丘陵地の山裾を 30 分ほど歩くと上狛集落を抜け、椿井の集落に入り、山裾 JR の線路沿いに椿井大塚山古墳の標識。



上狛椿井の集落 2007.3.23.

地図で見る椿井大塚山古墳はJRの線路の北側なのに??とちょっと混乱。

大塚山古墳に登って判ったのですが、JR 奈良線が前方後円墳の前方部と後円部の境を貫いていて、また前方部の上に住宅が立っている。







家が建つ古墳前方部

古墳後円部

前方部と後円部の間を JR が貫く



椿井大塚山古墳の頂上から 南を東西に流れ下る木津川を眺める 2007.3.23.





大塚山古墳の頂上からは素晴らしい南山城の狭い平野部を流れ下る木津川が眺められた。

卑弥呼の時代 大和への入り口と大動脈 木津川 を守る重要ポイントとして、大和と連合する豪族がこの地を 守っていたのだろう。木津と椿井大塚山古墳がこんなに近い位置関係にあるなど知りませんでした。

古墳時代 突如 大和纏向に巨大な前方後円墳が誕生し、大和王権の勢力を中心に日本が誕生する。

それまで、大陸・朝鮮半島と関係の深い九州勢力に変わり、大和の勢力(大和へ入った連合勢力も含め)が朝鮮半島の鉄を支配して、その鉄をもとに 勢力を伸ばし諸国を支配下に置いてゆく。

そんな諸国と大和を結ぶ大和の大動脈が木津川・淀川の水路であり、古代日本誕生に大きな役割を演じた「鉄の道。 そして 大和の外港 山城泉津地域が大和へ入る入り口として 大和の最重要地域であったとますます 日本誕生の鉄の道 卑弥呼の鉄の道のイメージが広がる泉津 Country Walk でした。

次はそんな この鉄の道の重要ポイント 平城山越 そして 終着点纏向・三輪山へ

3. 木津・泉津と大和の境 平城山越

この日は纏向まで出かけたかったので、平城 山越は JR 奈良線に乗って、電車の車窓から平城 山越えを眺める。

木津から 10 分ほどで平城山駅を経て奈良駅である。木津の町並みを抜けると丘陵地の間を電車が進む。空が常に開いているので 丘の間すすむ感じである。

線路に沿って 24 号線の新道の坂道がまっすぐ 奈良へ登ってゆくのが見える。















木津から奈良へ JR 電車で平城山を越える 2007.3.23.

地図で標高をしらべると木津の市街地が標高 30m ほどで奈良坂の峠となる般若寺・奈良阪で標高 110m 前後なので、高度差もたいしたこともなく、古代においても平城山越はさほど苦労しなかっただろう。 でも 電車で越えたのでどうも迫力がない。

4月9日再度奈良へ行く機会があったので、平城山の峠部で奈良-京街道の基点といわれてきた般若寺・奈良阪

を訪ねた。奈良の東大寺大仏殿の横からまっすぐ東に街中を 旧奈良 - 京街道が奈良坂をのぼって、般若寺の三門前を通り、 奈良阪から下り坂を木津へと下って行く。

数十年前 まだ畑が広がる般若寺周辺から奈良坂を下らず北 へ滝坂・柳生への道を数度歩いたことがあるのですが、今は すっかり市街地になっていて、バイパス道路からはずれる般 若寺山門前周辺が古い街道筋の面影を残している。

桜満開の般若寺でしたが、5時前で般若寺には入れませんで したが、古い家並みが続く山門前の京街道を西の木津へ向か って歩く。







平城山の峠部の般若寺・奈良阪周辺 般若寺の山門と山門前を東西に伸びる旧奈良-京街道 2007.4.9.

旧京街道をゆっくり歩いて奈良阪のバス停のところでバイパスのバス道と合流する。ここから西木津側は家並みが 途絶え、丘陵地のなだらかな坂を木津へくだってゆく。

バス停で時刻表を見るとラッキーなことに木津から高麗へ下って行くバスがあり、バスで木津まで平城山を下る。





奈良阪バス停前から木津方面

奈良阪バス停前から木津方面

ラッキーにも乗客少なく、一番前でゆっくり下っていく奈良坂をごきげんで観察。

ゆったりした傾斜の坂道をくだって、15分ほどで木津の駅前に戻りました。

古代とはルートを含め、ずいぶん違うでしょうが、ゆったりとしたこの坂道が大和と大和の外港「泉津」を結ぶ 大動脈 大和の鉄の道。諸国の人々·渡来人 そして 鉄や諸国の物品がこの道を行き来した。

古代この坂道をこの坂道を卑弥呼も行き来したのだろうか・・・

うれしくなってしまったバスでした。

2007.4.9. 夕闇の奈良坂をバスで木津へくだりながら Mutsu Nakanishi



木津・高麗行のバスに乗って 奈良坂を木津へ下る 2007.4.9.

瀬戸内海から大和へ 古代和鉄の道 大和の外港 木津川「泉津」から平城山を越えて大和 纏向へ







三輪山山麓 古代大和の中心地 纏向・古代鉄の里穴師を訪ねる 2007. 3. 23.

2007年3月23日午後おそく桜井線纏向の駅 に降り立つ。

3世紀後半 前方後円墳が生まれた土地で、 卑弥呼の墓といわれる箸墓がどっしりとし た姿をみせ、その周辺にぽつぽつ前方後円墳 の森が田園の中に点在している。

そして、その後ろに大和三山 東にはどっ しりと三輪山がそびえている。大和の外港 「泉津」から大和を南北に伸びる古墳時代か ら古代に至る大動脈 大和の鉄の道の終着 点である。そして この纏向からまっすぐ東 に三輪山の北麓に伸びる田園道をたどると 古代鉄の集落「穴師」。穴師の地名が示すと おり、古くから金属精錬・鍛治集団のいた集 落で、纏向・初期三輪王権王権を支えた集団 であるかもしれない。集落の一番奥にスサノ オ やオオナムチの製鉄神を祭る古い兵主 神社がある。是非 行きたい場所だったとこ ろでした。



纏向遺跡を望む 三輪山北西山麓 穴師の里より 国のまほろば





大和 纏向遺跡の夕景 着基の後ろにほんやりと大和三山がかすんでいる 纏向 株板山古墳群の上より 2007.3.23.

古代大和の鉄の道 の終着点 三輪山山麓 穴師の集落からは夕闇迫る纏向の前方後円墳 そしてその後ろに大和三山がシルエットなって浮かんで素晴らしい景色。

暮れ行く纏向の景色を眺めながら 古代 朝鮮半島から大和への「鉄」の旅路を思いめぐらしていました。

2007. 4. 9. 和鉄の郷 三輪山北麓穴師で 夕闇せまる 国のまほろば 大和を眺めながら Mutsu Nakanishi

関西の縄文-1

京都 長岡京の北西端に出土した縄文集落 上里遺跡を訪ねて 2007.3.8.



ポンポン山(左)・小塩山(右)北摂連山の山裾の田園地帯の中 上里遺跡がありました 2007.3.8.



南西角より東の方向 集落跡全体を見る 2007. 3. 8.

縄文の会で京都長岡京の近くで縄文の集落跡遺跡が出土したと教えてもらって、行ってきました。 縄文遺跡というと東北・北海道そして八ヶ岳山麓など東日本のイメージ強く、西日本の縄文遺跡はほとんど日の 目を見ない。「関西にも縄文遺跡があるぞ」とちょっとづつ訪ねたいと思っています。

Mainichi http://www.mainichi-msn.co.jp/chihou/kyoto/archive/news/2007/02/23/20070223ddlk26040469000c.html



竪穴住居跡が見つかっ た上里遺跡=西京区 で、小川信撮影

長岡京跡・上里遺跡:縄文晩期の竪穴住居跡、6棟確認 柱跡、墓なども /京都

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は22日、同市西京区上里の長岡京跡・上里遺跡から、縄文時代晩期 中ごろ(約3000年前)の竪穴住居跡6棟や柱跡、墓などが見つかった、と発表した。埋文研などに よると、同時期の住居跡発掘は関西では馬場川遺跡(東大阪市)以来2例目だが、発見棟数が少なく、 当時の集落の様子を知る貴重な資料になりそうだ。

一度に発見された棟数としては関西最大級。住居跡のうち1棟はほぼ完全な形で残った。02年度か ら始まった市道新設工事に伴って調査した。

保存状態の良い住居跡は円形で直径約4メートル、深さ約60センチ。中央部に直径約30センチ、 深さ約10センチの炉が設けられ、周囲に8本の柱跡があった。室内で煮炊きし暖を取ったらしい。他 の住居跡はだ円形や長方形、方形だが、全6棟が同時期の建造かは現時点で不明。出土土器などから今

後調査する。

住居跡近くからは土器の墓跡なども見つかった。同時期の遺跡では、墓跡と住居跡が離れた場合が多く、遺跡の東側に別の住居跡が残っている可能性もあるという。現地説明会は24日午前10~11時。

問い合わせは現場事務所(075・332・1516)。【小川信】毎日新聞 2007年2月23日



この長岡京の北西端に出土した上里縄文遺跡の記事もちらっと載っただけで、出かけてみないとよくわからない。 埋蔵文化財センタの発掘現地事務所に電話して 場所など教えてもらったのですが、製鉄遺跡とおなじで、発掘 調査が済むと記録残して すぐ道路になってしまうという。

「道路になるところを掘っただけで、6棟も竪穴住居が出た」と聞いて ひょっとして 縄文の環状集落のイメージが膨らませるかもしれない。地図を調べると良く通ったポンポン山・吉峰寺の山裾の田園地帯。まもなく調査が終わると聞いて 飛んでいってきました。

■ 善峰寺・ボンボン山の麓 善峰川が小畑川に合流する菜の花畑が続く上里遺跡への道 2007.3.8.









阪急東向日町駅で降りて、まっすぐ西へ丘陵地の上にある向町の市街地を抜けてゆく。このあたり南側一体に向日町の市街地がひろがっているのですが、ここにすっぽり長岡京の遺跡が収まっている。簡単な新聞記事と Google earth の空からの写真で見つけた道路工事の写真が頼り。南北に並ぶポンポン山・小塩山を目印に老いの坂から南西へ流れ下る小畑川に西から東へまっすぐ流れ下ってきた吉峰川が合流点するあたりが上里の集落。

小畑川を渡って 吉峰川の南岸に沿って 上里の集落を西へ抜けた田園地帯のところが、長岡京遺跡の条理の西 北端 上里遺跡。見渡せば わかるだろう・・・と。

小畑川を渡って 上里の集落の中を吉峰川沿いに南に抜けた集落のはずれに発掘事務所があり、その向こうに は広々とした田園地帯が広がっている。

現地事務所で現地説明会の資料をもらって、遺跡の場所を聞くと 「発掘現場はずっと南東側 すぐ正面の向こうに東西に伸びる丘陵の林の前が計画道路でその一番東の端のところが発掘現場。 もう2・3日で発掘調査が終わるので、少し掘り進んでいたり、現場が変化している」と教えてもらう。







善峰寺の下からまっすぐに西へ伸びる計画道路 左端が上里遺跡

やっぱり google earth で見つけた場所である。菜の花畑の広がる畑の中をトラバースして 計画道路の上に出る。ポンポン山の真下のところから東へまっすぐな道が作られつつある。ポンボン山の中腹に吉峰寺が見える。また、丘陵地で見えないが、山のすぐ下の所が粟生の光明寺 ポンポン山の西が小塩山でその下の辺りが、今京都で市街化がもっとも進む洛西ニュータウン 京都大学の洛西キャンパスもここにできつつある。おそらく このあたりも 数年後にはぎっしり 家が立ち並ぶ市街地になるのだろう。



暖冬で花が咲いてあわてる食用菜の花栽培



計画道路より西 ポンポン山を眺める この下にも弥生・古墳・奈良時代の遺跡が眠る



東側計画道路 中央奥が上里縄文集落遺跡



上里縄文集落遺跡

反対側の西側 発掘調査中の道路工事現場が見え、その向うに向日町の市街地 そして 男山・生駒の連山が遠く遠望できる。 この道の下からも長岡京遺跡の痕跡や弥生時代の遺跡が出土し発掘調査されたが、すでに埋め戻されて舗装道路になっている。

結果的には 上里遺跡は上里集落のもう少し南東側で 西にポンポン山・小塩山の連山を背になだらかな丘陵地 が西側へ下って行く見渡すかぎり菜の花畑が広がる田園の中にあり、すぐ西側の市街地の中を北から流れ下って きた小畑川がある。

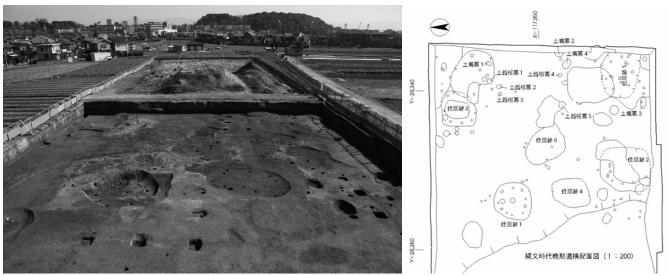
「やっぱり、縄文人は見晴らしのいい素晴しい場所に集落をつくった。

このままこの田園地帯とともに遺跡をのこしてほしいなあ・・・・」と思う。

上里遺跡 : 縄文晩期の竪穴住居跡が6棟 柱跡、墓なども出土した縄文集落跡



南西角より東の方向 集落跡全体を見る



現地発掘中の上里縄文遺跡全体 上里遺跡 現地説明会資料より

発掘調査の最終段階 多くの人が忙しく計測などを進める真っ最中でした。

現地説明会の資料に書かれた調査図面と発掘現場を見比べながら住居跡を確かめる。

なんせ 6棟も一緒に発見された縄文集落は関西では初めて。集落の中心はどこだろう。もっと南側が集落の中 心だろうか・・・かってな想像をめぐらす。調査中の学芸員の人の話によるとまだ、この6棟の住居が同じ時代に並 立していたのかどうか 時代の切りあいも含めて調査はこれから。先の道路予定地今後発掘調査するが、集落が どのようにひろがっていたのか・・・はまだまだこれからと聞く。

道路部分だけでなく 周辺の私有地も含め調査してほしいものであるが、 よっぽど すごいものが出ないと

だめなのだろう。 この素晴しい田園地帯風景と縄文遺跡 是非とも残してもらいたいものであるが、無理のようだ。せめて 集落の規模 住居の広がり分布ぐらい調べてほしいものです。







北側より 東側 集落跡 2007.3.8.



北側より 集落跡遺跡 東側半分

2007. 3. 8.



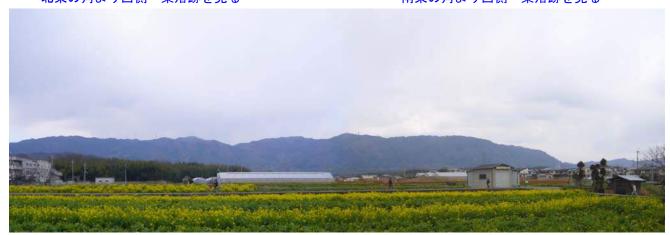
南側より 西側半分 集落跡を見る

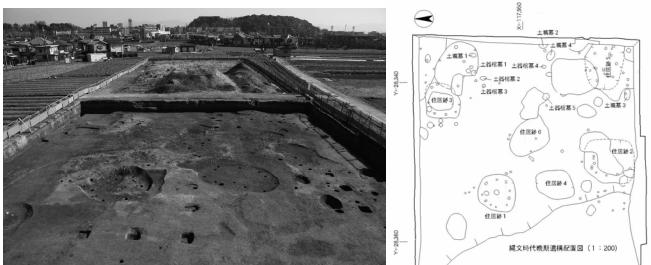




北東の角より西側 集落跡を見る

南東の角より西側 集落跡を見る





上里遺跡 : 縄文晩期の竪穴住居跡が6棟 柱跡、墓なども出土した縄文集落跡







上里縄文遺跡周辺 2007.3.8.

関西にもすばらしい縄文の集落があった 美しい姿を見せる山裾の丘陵地の田園の中に 広場を囲んで住居が立ち並ぶ縄文の集落が関西にもある でも この上里の郷には 縄文時代 そんな縄文の村が広がり、豊かな生活を送っていた。

菜の花咲く田園の中をぶらぶら歩くだけでもたのしい ゆったりとした時間が流れる上里縄文遺跡探訪のCountry Walkでした。

2007.3.8. ポンポン山山裾の田園の中を歩きながら Mutsu Nakanishi

■ 参考 上里縄文遺跡の東に広がる向日町の市街地に 旧長岡京がすっぽり 収まっています





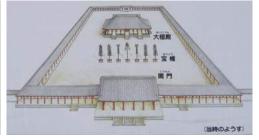






長岡京は、今から約1200年前の日本の首都です。延贈3(784)年から延贈13(794)年までの10年間ではありますが日本の中心がこの間にありました。この地周辺は、当時の都の中でも最も重要な場所で宮城といい、現在の国会議事堂に相当します。
大極殿は天皇が政治を行うところ、宝穂は元旦の儀式の時に立てる旗、順門は大極殿の正面入口にあたります。

な場所で客域といい、現在の国会議事業に相当します。 大極酸は天臓が政治を行うところ、宝幢は 元旦の儀式の時に立てる旗、順門は大極峻の 正師入口に志たります。 向日市では、これらの地域を国から「長崎 客跡」として史跡指定を受けて買上げ、史跡 公職として整備を行っています。 わがまちの文化財を大切に守っていきましょう。



上里遺跡発掘調査現地説明会資料



2007年2月24日(土曜日)

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 在 地 : 京都市西京区上里南ノ町、長岡京市井ノ内北裏

調査期間: 2006年6月12日~継続中

調査面積: 940m

はじめに

この調査は、2002年度から継続して行っている道路(伏見向日町線)新設工事にともなうものです。

調査では、まず長岡京期の道路・強物などを発見しました。その下の層から、弥生時代の 塞などを発見し、さらに、その下から縄文時代の集落や墓を発見しました。

調査の概要

縄文時代の遺構は調査区の東半分で発見しました。検出した遺構は、竪穴住居跡・柱跡・ 塞・土壌などです。遺構の年代は、出土した土器から縄文時代晩期中頃(今から約3,000年前) とみられます。

整穴住居跡は、6 棟発見しました。住居跡1は、円形で直径約4m前後(株面積12.5 ㎡)、深さ約0.6m。床の中央には、炉が設けられています。壁際には、柱がめぐります。また、この住居跡内からは、石皿や磨(すり)石が出土しました。住居跡2は、方形と考えられますが、東側は検出できませんでした。住居跡3は、不定形で柱跡が認められます。住居跡5は、楕円形で南北が5mあり、床面積は約14㎡あります。住居跡5はほとんど削平されていましたが、柱跡を円弧状に検出したことから住居跡と考えました。住居跡6は、現在調査中です。

調査区の東端北側で3基、南側で2基の土器棺墓を発見しました。墓は、径0.5m前後の穴の中に深鉢(甕)を斜めに据え、深鉢(甕)の破片や鉢で蓋をしていました。これらの土器棺墓は、子供を埋葬したものとみられます。土壙墓は4基発見しましたが、規模や方向はばらつきがあります。土壙墓1・3・4からは土器が出土しています。

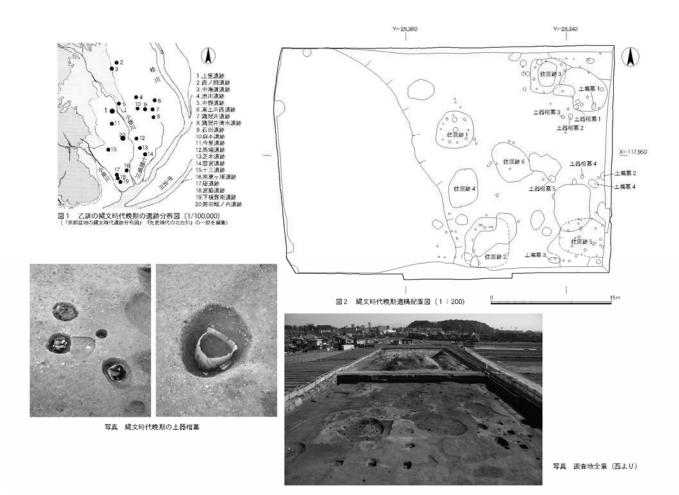
出土遺物

出土した縄文土器は、粗製の深鉢(甕)がほとんどですが、表面を磨いた精製のものも少量ですが出土しています。さらに、朱を塗った土器も数片出土しています。また、石製品には石斧、石鏃、石線、石剣あるいは石刀、砥石、磨石、石皿、敷き石あるいは凹石などがあります。また、石器を作るさいに必要な石片を取るための石核や石屑が多数出土することか。、集落の中で石器を作っていたことがわかりました。

主とな

この集落は、小畑川の河岸設丘に営まれていました。これまで、乙訓地域では縄文時代の 住居勝が教見されていましたが、今回の調査では、まとまって発見することができました。 しかも、住居勝1は極めて残存状況が良く、発見例が少ない縄文時代晩期の住居のようすを 明らかにすることができたことは大きな成果です。さらに、朱を強った土器の発見は、他地 城との交流を示しています。

なお、住居や墓が同時期にあったかどうかは、出土した土器などを今後さらに詳しく調べ る必要があります。



金曜日

高槻 今城塚古墳・闘鶏山古墳を訪ねて 三島古墳群 2007年3月9日



と同市教委。古墳の後円

ら「基盤の上に横穴式石

こうした構造、規模か

室があったことは確実」

高槻·今城塚古墳『

出土した。基盤の一部 11・2だのコの字形に方 見地震の際、崩れたらし で、1596年の慶長伏 地滑りなどで落ち込んだ 形の石が3段積まれてい 状態で、後円部北側から 東西17・7が、南北 みられる。

11

見つかっており、縁者ら 量が大きい。今城塚古墳 に比べ、横穴式石室は巨 ど5世紀以前の大王墓に では石棺の破片が3種類 大な天井石を持つなど重 般的だった竪穴式石室

築造当時は3段だったと さらに上に石室があり、 部頂上(高さ約11%) 0

仁徳天皇陵(堺市) 石室に三つ以上

推定される。 重量は100%になると の石棺が収められると総 日本書紀には、継体天

王としての強大な権力と 天皇は生前から新しい大 術も採用している。継体 横穴式石室という最新技 統的な形を継承しつつ、 皇は先代に後継ぎがな 担当参事は「3段の前方 えられたとある。高槻市 後円墳という大王墓の伝 教委の森田克行・文化財 現在の福井県から迎

を超す規模で石室の基盤 授(考古学)の話 10% 立命館大の和田晴吾教 大王は先進的 横穴式を採用 ている。 たかったのでは」と話し 高い技術力をアピールし

ら臨時バスを運行する。 10時~午後3時。兩天決 JR京都線摂津富田駅か 行。現地に駐車場はなく、 現地説明会は4日午前

たことは間違いない。先 れたと考えられる。 に利用するため、解体さ 残念だが、早い時期に他 う。石室がなかったのは いた。横穴式石室があっ 石室を採用したのだろ 進的な大王だから横穴式

正の葬送の儀式 今城塚古墳 01年から の調査では、

巫女(みこ)や武人な級の家形埴輪(はにわ)、 や武人な 00点以上が出土した。 内庁は、今城塚古墳の 内庁は、今城塚古墳の 阪府茨木市の太田茶臼 近方墳を指定している どをかたどった埴輪1

度の継体天皇陵だと推 る。発掘調査を続けてい 究者らは今城塚古墳こそ 。一方、10世紀の「延



7.

大阪府高槻市で、永曽康仁撮影



今城塚古墳 全景 (北側より 右側が前方部 左側 後円部) 2007.3.8.



今城塚古墳 全景

今城塚古墳 後円部



今城塚古墳 (南東端より 左側が前方部 右側 後円部) 2007.3.8.





大王の石室支えた基盤発見 大阪・高槻の今城塚古墳

Asahi, COM 2007年03月01日21時16分

「真の継体(けいたい)天皇陵」とされる大阪府高槻市の前方後円墳・今城塚古墳(6世紀前半、全長約190メートル)で、横穴式石室の基盤とみられる大規模な石組み遺構が見つかったと、同市教委が1日、発表した。石室は失われていたが、古墳は完成時に3段、高さは18メートル前後だったと推定される。これだけの規模は大王(天皇)墓以外に考えられず、同古墳が継体天皇墓であることがより確実になったとしている。天皇陵級の古墳で石室の基礎など、墳丘の内部構造が確認されたのは初めて。



石室の基盤とみられる石組み= 1日午後、大阪府高槻市で

今城塚古墳の地図

見つかった石組みは、地滑りなどで落ち込んだ状態で、後円部北側から 出土した。基盤の一部で、1596年の慶長伏見地震の際、崩れたらし い。東西17.7メートル、南北11.2メートルのコの字形に方形の 石が3段積まれていた。

こうした構造、規模から「基盤の上に横穴式石室があったことは確実」 と同市教委。古墳の後円部頂上(高さ約11メートル)のさらに上に石 室があり、築造当時は3段だったとみられる。

仁徳天皇陵(堺市)など5世紀以前の大王墓に一般的だった竪穴式石室に比べ、横穴式石室は巨大な天井石を持つなど重量が大きい。今城塚古墳では石棺の破片が3種類見つかっており、縁者らも含め、石室に三つ以上の石棺が収められると総重量は100トンになると推定される。

日本書紀には、継体天皇は先代に後継ぎがなく、現在の福井県から迎えられたと ある。高槻市教委の森田克行・文化財担当参事は「3段の前方後円墳という大 王墓の伝統的な形を継承しつつ、横穴式石室という最新技術も採用している。

継体天皇は生前から新しい大王としての強大な権力と高い技術力をアピールしたかったのでは」と話している。

現地説明会は4日午前10時~午後3時。雨天決行。現地に駐車場はなく、JR京都線摂津富田駅から臨時バスを運行する。

〈今城塚古墳〉 01年からの調査では、大王の葬送の儀式を再現した高さ約170センチの国内最大級の家形埴輪(はにわ)、巫女(みこ)や武人などをかたどった埴輪100点以上が出土した。継体天皇陵について宮内庁は、今城塚古墳の南西1.5キロにある大阪府茨木市の太田茶臼山古墳を指定しているが、研究者らの立ち入りを許可していない。一方、10世紀の「延喜式」の記述などから研究者らは今城塚古墳こそ真の継体天皇陵だと推定。発掘調査を続けている。

史跡 闘鶏山古墳 4世紀前半の前方後円墳

平成18年3月 カメラによる未盗掘の主体部内部の撮影 被葬者の骨とともに鏡など副葬品確認





高槻市立しろあと歴史館 http://www.city.takatsuki.osaka.jp/rekishi/tugeyama_h18.html

■ 史跡 闘鶏山古墳石槨内画像調査について <平成18年 8月30日 発表>

◆経 過



史跡闘鶏山古墳は、未盗掘の主体部(竪穴式石槨)2基をそなえた古墳時代前期前半(4世紀前半)の前方後円墳で、平成14年に国史跡の指定を受け、恒久的保存が図られています。

今回の画像調査は、発見後4年を経て、石槨の構造や遺存状況をできるだけ詳しく確認しようと、奈良文化財研究所に依頼し平成18年3月2日にデジタルカメラによる内部の撮影を行ったものです。この結果、石槨の形状や副葬品等の鮮明な画像が得られました。

◆撮影機材

撮影は、2関節をマイクロモーターで駆動し、自在に回転するアームの先端に、リモートスイッチでシャッターが切れるよう改造した800万画素のデジタルカメラと発光ダイオードを組み合わせた補助光源を搭載して行なわれました。

手元で画面を確認しながらシャッターが切れるというスグレモノです。

撮影機

◆画像調査

<第1主体>

●石槨は四国・徳島産の結晶片岩類の板状石材を使用。各石材はおおむね幅20~30cm、長さ40~70cm、厚さ4~6cm の大きさです。

側壁は小口積みで急傾

斜に持ち送って天井部に至る特異な合掌形を呈し、近 畿地方ではほとんど例がないものです。両方の小口部 は長手積みと小口積みを併用し、ほぼ垂直に積み上げ ています。

- ●当初に確認していた頭骨、方格規矩鏡1点、碧玉製腕 飾1点、三角縁神獣鏡2点に加え、紡錘車形石製品、木 製柄の短剣、琴柱形石製品、南海産の巻貝片(ゴホウ ラ?)を各1点、銅鏃3点以上、鉄刀2点をあらたに確 認。三角縁神獣鏡1点は京都府山城町椿井大塚山古 墳のものと同型鏡であることが確認され、石材落下に 伴う損傷も判明しました。
- ●石槨の北端部では、冑の一部とおもわれる小札状鉄片 多数を確認しました。



第1主体の内部 木棺の大半は腐朽し ていましたが、被葬者 の頭骨をはじめさま ざまな副葬品が残っ ています。



北側から見た第1主体の内部 徳島産の板状結晶片岩を積みあ げた合掌形。床面は、割竹形木棺 を据えるために U 字形で、表面全 体に赤色顔料が塗布され、遺骸の 付近には朱がまかれています。

<第2主体>

- ●石槨の側壁がほぼ垂直に立ち上がる一般的な形態で、長手積みと小口積みを混用。 天井石は大振りの平石を8枚ないし9枚使用しています。
- ●木棺については、仕切り板とみられる朱彩のある板材が確認されたほか、蓋材および棺身の一部も確認。南側小口板の表面は濡れています。
- ●中央部の棺床東上端部と、その北寄りの棺床凹部上面に刀とみられる鉄製品を、さらに南 小口板の東側下部に鉄製薄板状物体(鉄刀?)を確認しました。



石槨。床面に割竹形木棺の蓋 や底板などが残り、天井から 樹木の根が下がっています。

◆保存環境

- ●第1、第2主体とも石槨内は当初より湿度が上昇して全体に水滴を生じ、内側全体を濡らしています。
- ●第1主体の棺床上には、側壁などから脱落した石材が多数みられます。
- ●第2主体では、南小口板周辺の土壌が発見当初に比べて粒状感が乏しく、泥が洗われて小石等がはっきりとしています。
- ●両主体とも、石材の間から樹根が侵入、垂下しています。壁面には白色の菌糸束などが認められました。

◆今後の方向

市教育委員会では、今回の結果などをもとに文化庁や府教育委員会、史跡闘鶏山古墳調査検討委員会の指導を得ながら、古墳のより良い保存や公開の方策などをさらに検討していきます。



岡鶏山古墳 左 前方部 右後円部 闘鶏野神社の裏側より 2007.3.10.

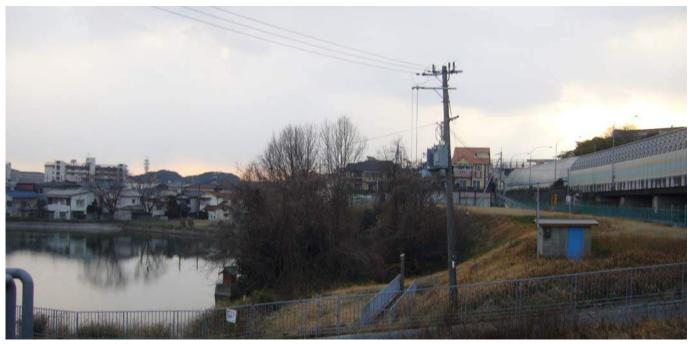




闘鶏野神社越しに闘鶏山古墳(名神を渡る橋より)

南平台側より闘鶏山古墳 全景





岡本の町より 継体天皇陵を望む 2007.3.8.

古墳時代の決川・三島地域の位置付け 三島古墳群の成立-初期ヤマト政権と淀川-より

邪馬台国の地と考えられるようになった纏向遺跡そして そのあとの倭王権(三 輪王朝)などヤマト王権の最も重要な通商路・外交路は瀬戸内から朝鮮半島・大 陸へと続く西への道である。当時の交通 物資の輸送は舟運が基本であり、 瀬戸内海から淀川を遡るルートと大和川を遡るルートがある。

しかし、河内を通って大和川を遡るルートは途中に二上山の麓 亀の瀬という 難所(現在の柏原市)があり、通行ができず、二上山の厳しい竹之内峠越えを余 儀なくされる。 一方 淀川・木津川から平城山を越えるルートは平坦地であり、 木津川の河港「泉津」にも近い。したがって、大和初期王権の時代には 瀬戸 内海からヤマトへの主要交通路は大和川よりも、淀川・木津川ルートであったと 見られる。 そして 瀬戸内から淀川・木津川を遡って 大和へ至る その中間点 に三島が位置し、交通路を守る重要な拠点として 直接 大和王権を支えたと考

えら、この地に初期古墳群が築かれたゆえんであり、この過程で 世紀後半の前 方後円墳 が築かれる。



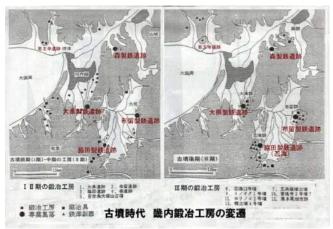


闘鶏山古墳 また、三島と ちょうど対岸 の森古墳群 や南山城の 三角縁神獣 鏡が32面も 出土した椿

井大塚山古

墳の地も同じように淀川・木津川水系の重要拠点であった。 そして、大和王権の中心が河内に移ると瀬戸内への門戸は 難波津や住吉津など大阪湾沿岸に淀川・木津川流域の重要性は相対的に低下してゆくが、重要な通商路の拠点として 三島の役割はその後も引き継がれてゆく。実際にその後も 太田茶臼山古墳や今城塚古墳など巨大な前方後円墳が築 かれ、さらに終末期の阿武山古墳まで引き続かれる。

また、この古墳時代の製鉄遺跡(鍛治工房)を見ると 大和川・淀川水系の大和の主要拠点に鍛治工房が置かれており、 これらの地に製鉄技術を持った渡来人が数多くやってきて、鉄で大和王権を支えていったことがわかる。 このような渡来の新技術は鉄にとどまらず、数多くの工房が畿内に配置されている。





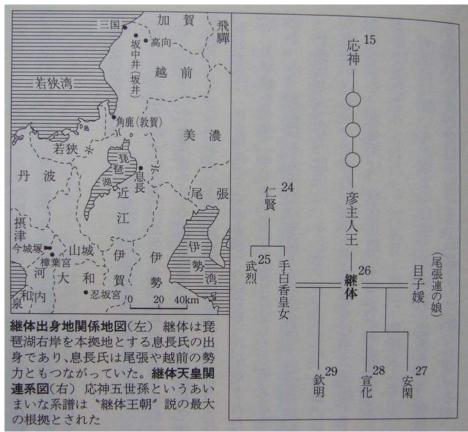
● 鉄の王朝 継体天皇の出身関係図

継体天皇は河内王朝の系譜が絶え、応神 5 世孫との系譜で天皇になったとされ、この皇統の系譜が現在までも続いているといわれる。継体天皇は 越前・琵琶湖北岸を本拠地とする息長氏の出身で、息長氏は尾張・越前にもその勢

力を伸ばしていた豪族で その 力の背景には鉄があるといわれ、天皇の座につき 大和へ 入るのに 20 年かかったことな ど、謎多き天皇で大和王権が 引き継がれたのではなく、王朝 交代がなされたと考える説もある。

『古事記』、『日本書紀』によると継体天皇は応神天皇5世の孫であり、父は彦主人王。近江国高嶋郷三尾野(現在の滋賀県高島市あたり)で誕生したが、幼い時に父を亡くし、母の故郷である越前国高向(たかむく、現在の福井県坂井市丸岡町高椋)で成長した。

『日本書紀』によれば、506年に武烈 天皇が後嗣定めずして崩御したため、 大連大伴金村らは越前に赴いて男大



迹王を大王に推戴した。これを承諾した王は、翌年58歳にして河内国樟葉宮で即位。武烈天皇の姉手白香皇女を皇后とし、526年、大倭(後の大和国)に都をおいた。その直後、継体は百済救援の軍を送ったが、新羅と結んだ磐井により九州北部で九州で磐井の乱が勃発し、その平定に苦心している。しかし、この記述が事実とすれば、継体は507年に即位してから、大和に都をおくまで約20年かかっており、天皇家周辺で何らかの混乱があったとする見方もある。

531 年に後継を皇子の勾大兄に譲位(記録上最初の譲位例)し、その即位(安閑天皇)と同日に崩御したという。また『日本書紀』は『百済本記』を引いて、天皇及び太子、皇子が同時に死んだという説を紹介しており、何らかの政変によって殺害されたとの見方もある(「辛亥の変」説)。また、『古事記』では没年を527年としている。

史跡今城塚古墳の第10次調査 (現地説明会資料)

調査面積 約300㎡ 調査期間 平成18年12月1日から 調査主体 高槻市教育委員会 調査担当者 宮崎東越 佐伯かぐみ

1. はじめに

三島古墳群の中央に位置する今城塚古墳は、6世紀前半に築かれた淀川北岸で最大の前方後円墳です。全長 190m、南北には造出を伴い、墳丘の周囲を巡る二重の濠と堤を含めた総長は 350mをはかります。墳丘は文禄5(1596)年の伏見地震による大規模な地滑りのため、各所で大きく崩壊しています。

高槻市では今城塚古墳の保存整備に向けた規模確認調査を平成9年度から実施し、古墳本来の姿を 追究してきました。今回の第 10 次調査は、後円部の北側墳丘の遺存状態や盛土の状況などを探るためにおこないました。

2. 調査でみつかったもの

調査前の地形は、後円部中央から北にむかって地すべりによる落差約4mの滑落崖が東西方向に そそり立ち、北側には崩壊した盛土が各所でこぶ状の高まりとなっていました。トレンチ(調査区)は、 以前におこなった第2次と第8次の調査区とをつなぐかたちで南北方向に設定しました。

◆石室基盤工

後円部北半部、崩落崖裾の北側で、花崗岩類や川原石を用いた「コ」字状の石組を検出しました。全体に滑落部の後(崖)側が大きく沈みこむという、典型的な地震による地滑り(円弧滑り)の状況を示しています。東西の長さは 17.7m、南北は東辺で現存長 11.2mです。西辺は北端の隅石とその南側の一部の石材が遺存していました。石組の外縁部は、方形や長方形の石材の直辺部(最大長 1.15 m)をそろえて一直線に並べ、西北の隅部は一辺約 50cm の座布団状の石材を用いていましたが、東北隅部は石材が崩れ込んでいました。北辺は中央部が高く、東西の隅にむかって低くなり、西隅では北西側へさらに落ちこんでいます。東辺も中央から折れたように南北が低く、一部は崩壊していました。

外縁の石材は東西辺、南北辺ともに目地を通して最高で3段に積み、高さ(厚さ)は最大で約80cmをはかります。この内側には一辺20~40cmほどの川原石や板石をびっしりと詰めています。

石材の大部分は、花崗岩類とホルンフェルスで、北方約5.5km の摂津峡(芥川中流域) やその周辺から運ばれてきたと推定されています。他にも緑色片岩や結晶片岩などがわずかに出土しました。

石組外側の土層を観察すると、石積みの進行にあわせてその都度盛土をよせている状況がよくわかり、この石組が露出せず、盛土内に構築されていたことが判明しました。

遺物としては、凝灰岩(二上山白石・阿蘇ピンク石・竜山石)や金銅製品(刀装具・馬具)、鉄製品(鏃・甲冑など)の小片、ガラス小玉などの副葬品類があります。

凝灰岩は小片となって崩落土中に散在していましたが、二上山白石とピンク石には明確な加工痕が認められました。二上山白石では両面に加工痕のある厚さ約15cmの板状の破片が出土し、石材の厚さから組み合わせ式石棺である可能性が高くなりました。底石とみられる1点にはわずかに朱がのこっています。阿蘇ピンク石の一部にも朱が鮮やかに残っていました。金銅製品・鉄製品・ガラス小玉などは、崖際の石組上に堆積した流土中に散在していました。

◆円礫敷

石組遺構の北側に接するように、東西 6.6m、南北 1.5mの範囲からこぶし大の円礫が集中して検出されました。古墳の表面被覆土と同様の均質な黄灰色土上面にこぶし大の円礫がまとまり、二上山白石・ピンク石、竜山石などの凝灰岩や形象埴輪(器台)片、鉄釘などが上面から見つかっています。円礫は淡路島・洲本市付近の海岸で産出することが明らかになっています。

3. 調査でわかったこと

後円部の石室の位置や、構築法を知るうえで重要な手がかりを得ることができました。

石室基盤工は、検出状況や崩落崖との位置関係から判断して、現況の後円部上面の北側付近にあったものが、地すべりによって崩落したと判断できます。後円部上面でおこなった第8次調査では、南側へ滑落した礫群がみつかっています。その検出状況や石材の形状・種類などが似ていることから、本来は一体であった石組が南北に分かれて崩落したと考えられます。

石組を盛土内に埋めこみ強固な基盤を構築して、上方に設置される大きな重量物(横穴式石室)を直接 支えるとともに、その重量を盛土全体に分散させようとしたと考えられます。

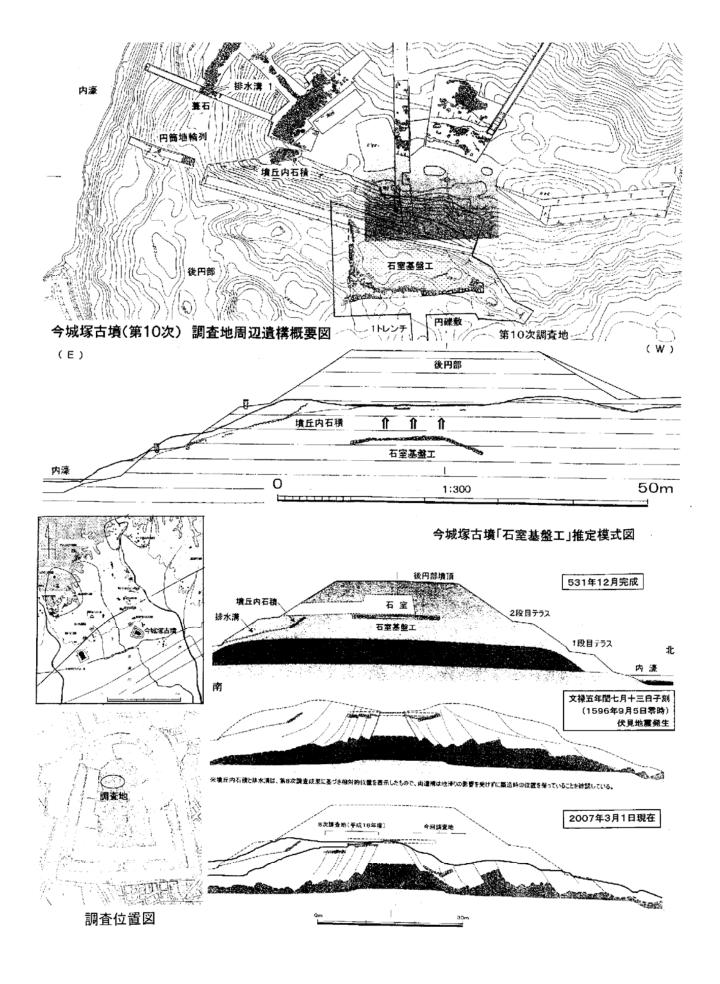
これまで横穴式石室の基礎構造は、宇治二子塚古墳(京都府)や市尾墓山古墳(奈良県)などで一部が確認されている程度で、これほど大規模かつ具体的な状況が明らかになったのは初めてのことです。

横穴式石室のような重量物を人工盛土の最上段に築き、なおかつ不等沈下や盛土崩壊を防ぐため、 強固な基盤を構築し、あわせて第8次調査で検出した墳丘内石積や排水溝などの設備の状況を考え合わせると、墳丘の造成と石室の構築が如何に周到に計画され、入念に施工されていたかがわかります。

4. まとめ

以上のことから、後円部には横穴式石室が築かれていたことが確実となりました。石室基盤工の検出状況から判断すれば、石室は後円部中央付近にあり、古墳の東西軸に平行、もしくは直交して築かれていたと考えられます。石室の規模は不明確ながら、現存する墳頂部付近が石室基盤工の底面にほぼ相当する高さと推定されることから、本来の墳丘は三段築成であり、最上段となる三段目の盛土内に横穴式石室が築かれていたと考えるのが至当です。ただ、複数の調査地点から石棺片や副葬品類が出土するため、文献にもあるように、早い段階で盗掘を受け、1596年の伏見地震以前に石室はすでに解体されていたことが明らかになりました。

今回の調査では、今城塚古墳の主体部にかかわる遺構をはじめて確認することができました。築造 当初の姿や古墳の復元を考えるうえで重要な成果を得ただけではなく、今後の大王陵級の古墳を研究 するうえでも、大変貴重な資料になります。



史跡 闘鶏山古墳 平成 17 年度調査 (現地説明会資料 平成 18年2月4日)

調査 地調査主体調査担当者

高槻市氷室町 6 丁目 1 番 3 地内 高槻市教育委員会

高橋公一・西村恵祥

1. はじめに

闘鶏山古墳は、平成 14 年の調査によって未盗掘の主体部(竪穴式石槨) 2基をそなえた古墳時代前期 前半(4世紀前半)の前方後円墳であることが明らかとなり、平成 14 年に国史跡の指定を受け、恒久的 な保存が図られています。高槻市では闘鶏山古墳の保存整備に向けて、継続的に確認調査を実施してい ます。

これまでの調査により、全長86.4m、墳丘は二段に築造され、斜面には葺石を施すとともに墳丘上面やテラスにも礫敷を伴うことがわかっています。ただ、埴輪を用いた形跡はありません。また墳丘からベンガラを塗布した土師器の破片が少なからず出土することから、何らかの祭祀がおこなわれていたと推定されます。

今回の調査は、前方部の形状と、古墳の南側に付設されたとみられる土壇状遺構の状況を把握するためにおこなっています。調査は平成17年10月17日から開始し、調査面積は約400㎡です。

2. H17年度調査の成果

前方部

前端部の三方に設定した調査区(1~3トレンチ)により、第1段(下段)及び第2段(上段)斜面と第1段目テラス(平坦面)を検出しました。また前方部頂に設定した調査区(6·7トレンチ)では、前方部の盛土の状況が明らかになりました。

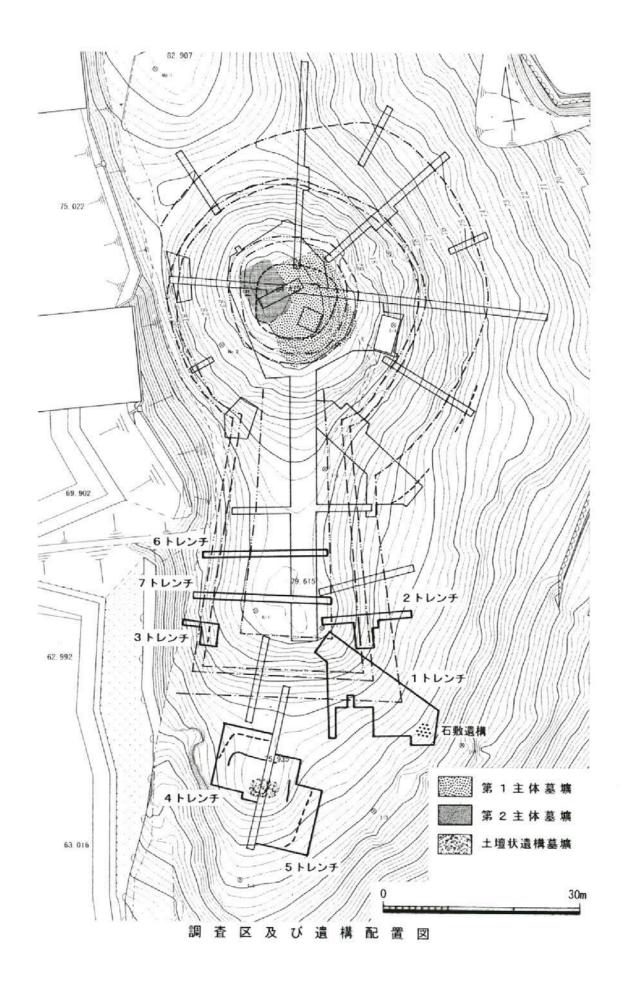
【第1段斜面】前端面(1トレンチ)と東側(2トレンチ)で葺石を検出しましたが、東隅角部はすでに流失し、前端部裾ライン及び東側裾ラインともに明確とはいえません。しかしながら、検出した傾斜変換点と前回までに確認している葺石裾部を手がかりに、失われた東隅角部を復元することができました。一方、西隅角部については、西側裾ラインが3トレンチのさらに外側に位置することがわかり、今回の調査では確認できませんでした。

1トレンチの前端部で検出した、縦 1.0m、横 0.8m、高さ 0.3m の大きな石は、前端面裾ラインに 位置していること、転落して現在の位置に偶然留まったものとは考えにくいことから、古墳裾部を明示 する役割を担っていたと推定されます。

【第1段目テラス】前端面(1トレンチ)・東側(2トレンチ)・西側(3トレンチ)でテラスを検出しました。いずれも上面に直径 10cm 以下の礫を敷いており、前方部テラスにおいても後円部西側と同様の礫敷を確認しました。テラスの幅は前端部で1m、東側と西側は1.5mと考えられます。

【第2段斜面】前端面(1トレンチ)と西側(3トレンチ)では斜面の大半が流失し、一部で葺石を検出したところです。一方、東側(2トレンチ)では長さ約5mの範囲で検出でき、葺石についても、第1段目テラスに接する最下段には一回り大きな石(直径25~30cm)を使用して基底石とするなど、良好に遺存していました。検出できなかった隅角部については、これらの基底石のラインをよりどころに復元することができました。その結果、第2段斜面の前端面の復元幅は約25mと推定されました。

【前方部の盛土状況】前方部の盛土状況については、平成14年度の断ち割り調査によって、東半部の盛土を構築したのち、西半部の盛土がおこなわれたことがわかっていましたが、今回はさらに前方部中央付近の盛土状況を把握するため調査区(6トレンチ)を設定しました。また、以前の断ち割り調査区を西側と東側に延長し、土層の確認につとめましました(7トレンチ)。



前方部中央付近(6トレンチ)でも、墳丘中軸線を億に乗半部の歴土と西半部の盗土が異なっていました。乗半盛土は中軸線付近からはじまる東側に顛斜した小規模な工層が幾層もみられ、連続的な構築であったことがわかります。これに対し、西半盛土は東半路土の西側斜面を、約40~30度の斜面として割りなおした後に、盛土をおこなっていました。同様な削りなおしたみられる斜面が、この地点からさらに西側約3mの位置にもみられました。この斜面は約40度の角度で、西側に下降しており、西半層土中にも削りなおし斜面が存在することがわかりました。

mather 2007 前方部南半部(フトレンチ)では、東半盛士はまず東側に積約する小規模な工層を積み、0.4~0.2m の厚さで水平方向に積んだのち、西側斜面を約50度の斜面で削りなおし、それより西側の塩土は厚さ 0.3m 程度の小規模で不規則な工層となっていました。今回が張した西端付近では、前方部南西端に位置し、東側に横約する斜面をもつ盛土塊をあらたに検出しました。小規模な工層によって構成される西半番士は、この西端路土と東半路土によってつくられた谷部を埋め立てるように持まれたものであったことがわかりました。西端艦土の機能としては、西隅角部の構築にあたり、外野ラインを先行し、かつ入窓におこなう必要があったためと考えられます。

また、6トレンチとファレンチの所見から、前方部の精筆はまず東半部をおこない、次いで西半部を施工したことがほぼ確定できました。

さて中央付近と商半部で共通して検出した東半盤土の削りなおし給面は、下部に位置する盛土の表稿 を削って解析にすることにより、上部の盛土との接着を強くすることが目的とみられ、現代工法でも一 定の期間を終た盛土塊の上に、さらに富土を施す場合におこなわれている手法です。こうしたことから、 西半路上は東半盤土の構築後、一定の空白期間をおいて施工されたと考えることができます。一方、中 央付近では西半盤土内でも削りなおし斜面がみられ、また商半部では西半盤土に先行する西端艦土が存 在するなど、盛土状況が異なっています。これは前方部の構築において、それぞれの場所に適恵した手 離で数土がおこなれれていたためと推測できます。

「繊 物」とトレンチがでは資産器の設さが出土し共したが、これは問題出古墳とは直接階級のない。認識と考えられます。 今回の割首では、関端出古道に伴い過物は出土しませんでした。

「石敷遺構」東隅角部東南側のゆるい斜面地(1トレンチ)では、南北 2m、東西 15m の範囲で、 直径 15cm 以下の石を敷き詰めていました。これに伴う遺物はありません。こうした石敷遺構は、後 日郎南東側でも検出しており、その性格については古墳祭祀に伴うものと考えられます。

上增状遺構

土壌状造構については、1次調査において基填状の土坑を検出しています。今回は、北西部(4 トレッチ)と南東部(5 トレンチ)において土壌および土坑の形状と規模について調査しました。

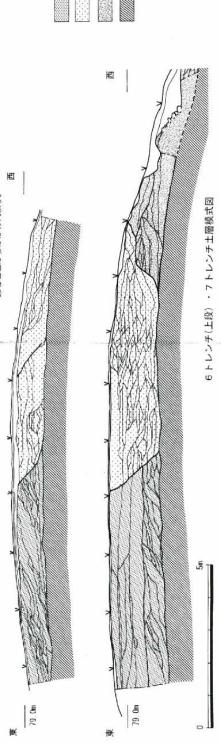
【外表施設】4・5トレンチのほぼ全面に、粗密はありますが、直径 10cm 以下の梁を用いた占数を検出しており、特に北面及び東面では直径 15cm 程度の右がほぼ直線的に並んで分布していました。特に東面では全体的に右も大きく、斜面に沿って組み上げたとみられる部分もあり、これらは古墳の音石と同様のものと考えられます。

土壌は酪土によって形成されており、石敷は酪土の上面に施されています。 土壌の高まりの範囲は裾部分がゆるい植料面となっているため判然としませんが、横斜変換点と周囲の観察により、およそ南北17m、東西 16m の方形と想定しています。

【母錦施設】前回確認していた土坑の全体を検出することができました。土坑は頂上平垣面のほぼ中央に位置し、上面は東西 4.6m、南北 2.8m の隅丸方形です。掘形はすり鉢状に下ったのち平坦となり、さらに下段を深く届り込んでいます。下段の平面形は東西 3.5m、南北 1.0m、長方形です。深さは 0.8mですが、低部西側がやや低い構造です。週物は出土していません。こうした 2.段の構造をもつ土坑は、いわゆる 2.段参媒と呼ばれるタイプの埋葬施設と考えられます。木棺などの痕跡はみられませんが、下段隔形の平面形は長方形となっており、棺の埋納が想定されます。木棺などの痕跡はみられませんが、下段堀形の平面形は長方形となっており、棺の埋締が想定されます。

3. H17 年度調査成果のまとめ

今回の調査では、前方部の形状や規模について重要な成果がありました。両隅角部が消失していたものの、東隅角部の復元が可能となりました。また、前方部でも第1段目テラスで操数を検出したことで、 貸丘全域が石で覆われていたことが判明しました。さらに、前方部は全体的に乗半部を先行して盛土し、 構築されたことが確認できました。これは狭い尾根上に立地する問鶏山古墳が持つ特性の反映と受け取れるとともに、尾根の西側が急峻であったことが作用したものと思われます。また同じ前方部であって もその部位によって盛土状況が異なることが検証され、墳丘構築の一端が明らかになった高義も大きい 土庫状遺構についてはほぼ全体像を把握することができました。そして、形態および墓構の状況からこの土壇は、「墳墓」としてとらえることが可能となりました。闘鶏山古墳との関係については、接した也置にあり、全面を石で覆うなどの共通点から、古墳と同時期あるいは被葬者向土に深いつながりがあることがうかがわれます。



E

4 4 4

選 選 選

計 計 票

東西西地

8.

物部氏伝承 備前一宮 石上 布都魂神社を訪ねて Country Walk

岡山県 赤磐市旧吉井町 8 岡山市旧御津町

0706futsu00.htm by Mutsu Nakanishi 2007.3.15.



【 内 容 】

- 1. 旧吉井町仁堀 より 石上へ 中国山地の山間を Walk
- 2. 「石上」 石上东都魂神社
- 3. 石上布都魂神社から 南へ 旭川水系の御津町 金山へ

岡山県東部 吉井川と旭川にはさまれた山また山の真ん中に物部氏と関係の深い「石上布都魂神社」がある。スサノオノミコトが退治したヤマタノオロチの中から出てきた草薙ノ剣が奉納されたところといい、また 物部氏の根拠地 大和布留の石上神宮の元宮といわれる。 背後の旭川水系・吉井川水系の中国山地は 古代吉備の大製鉄地帯。 そして この地には大和王国の中心にいて、軍事・鉄の生産を直接支配した物部氏の足跡が点々と残っていて、

歴史作家??? 関裕二氏は

物部氏のルーツはこの地 初期大和王権成立にかかわった吉備は = 物部氏ではないか・・・ との説を唱えている。

「眞金吹く 吉備」古代の大製鉄地帯の中 この地は古代の産鉄と深くかかわった土地である。



物部氏の出自は九州とも色々いわれているが、よく解っていない。

物部氏のルーツがわかれば、古代 日本誕生のドラマや鉄 精錬鍛冶の歴史が見えてくるかもしれない。

鉄の先進地 吉備のその真ん中に 物部氏の製鉄伝承地が点々と残り、しかも 物部氏の根拠地「石上神宮」の 元宮の伝承がある。 そして、物部 = 吉備 の説である。

物部氏の始祖「ニヒハヤギ」の降臨伝承のある生駒山の北麓河内磐船。

数年前 その磐船にある5世~6紀の製鉄鍛治工房遺跡をしらべていて、この地を支配した肩野物部氏と吉備 旭川中流に注ぎ込む誕生川流域が密接にかかわりがあることが、強く印象に残っていました。

社」があり、また この神社は物部氏の根拠地 大和东留の石上 神宮の元宮といわれる。そして、 吉備=物部氏である。

まったく根拠のないはなしでもなく、関氏の話はいつもながら、 面白くて 魅かれる。

吉備=物部氏であれば、古代製鉄の話も面白くなる。

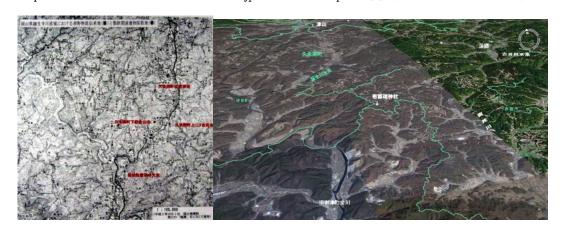
そんな 「石上布都魂神社」の地とはどんなところなのか・・ 興味深々。

代吉備の製鉄地帯からははずれ、東過ぎるのも面白い。伝承のあ る誕生川とは山の壁がある

3月15日 ぼかぼか陽気の春 青春18キップ使って岡山へ

● 北河内の古代の郷 肩野物部氏の本拠地 交野界隈 walk 大和王権 を支えた鍛冶工房 森製鉄遺跡を訪ねて

http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron2/5iron11.pdf 変更後のリンクアドレスが隠れています



石上布都魂神社 岡山県赤磐市石上 備前一宮の説もある 由緒ある神社であるが、地図を調べるが、位置が良くわからない。

「石上」の地名も御津町と赤磐氏両方にあるし、岡山県東部を形 成して 南北に流れる 旭川と吉井川の間の丁度真ん中 どこを 見ても山の中で、交通機関なし。もうひとつ 不思議なのは赤磐 市属するこの地は吉井川水系 どちらかと言うと美作・吉備の端。

吉備の中心からすると遠いし、物部の本拠だろうか・・・

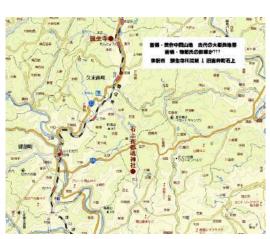
よく解らず、赤磐市の市役所に電話して、行き方を聞くが、不思 議そうに教えては貰ったのですが、あいまい。

- 岡山駅と姫新線 林野駅の間を走っているバスに乗って、 30分ほど 仁堀で降りて そこから 1時間ちょっと 歩くしかないと・・・
- ・ 誕生川沿いに走る津山線の駅から近いのでは・・・と聞いてみるがかいもく解らない。 やっぱり、生活圏は吉井川流域

ちょっと 不思議というか ミステリアスな気持ちで 気分的には面白い。 1時間ぐらい歩くのは毎度のこと 何とかなるだろうと出かけました。

行って 場所の謎は解けたのですが、やっぱりすごい山の中でした。

誰もいない山中の岩山を登ると 大きな磐座がそのままどっしりと座っていて、山又山を見下ろしているのには やっぱり、この地が中心であったじだいがあったかも・・・と感じ、感激でした。



教(枚の裏り)方院 同年(整武天皇十年・天平五年)十月十五日に続す。

むかし此さとに個多野部長者これとなんいへるとみ人ありけり。 雑主大大神の神ことにたよとみ おもひけるに、御神(中山神)に宮所をゆつりまして後は、こと所にしつまわおはしまずといっ

とも、神威のいたくおとろっきせ給ふ事をはいなく思ひ、御神のことにきかへお話します事をそ わみ事りける心にや持りけん。 警報活動の棒いかりましていたくとか**め始**年により、**けいし**、

美しい棚田の久米南町北庄 古代 吉備の産鉄地帯 誕生川流域

集田尼院

(##1) fe##)

大巴爾之紀を奉す。

巴上、河内国東田郡宇春村に在る。

表ともことことく母目かりなんとす。乙丸ドレエキャ 我ところを立しりそき、人間にかって親二日

専新部は育野物部を移せしの辞なり。展説 所の地を弓削住と号す。あんずるに物部質 事長の東南西丁許り始纤の際に在り。 相伝

まがねふくきびの中山和びにせるほぞたに

この新は無べのきびの(にのうた

旧吉井町仁堀 より石上へ 中国山地の山間を Walk



石上布都魂神社は、 (供物を排げられる)を



ればたふとし」と詠んだの われています。 はれる小社があり、 3磐座として信仰され、毎10条、大岩は、神が鎮座す 現在、旧社地に本官と呼 椎の原生林で、 池田綱政より社領 山上にあったの 磐座祭が行

3月15日朝 岡山からバスに乗るつもりで出かけたのですが、上郡でストップ。 多くの人が智頭急行のほうへ みんな青春 18 キップを持っているところを見るとご同輩。 聞いてみると すぐ 連絡があって 佐用 まで行って姫新線に乗り継ぎ、津山に一番スムーズに行けるという。

ならば 急遽変更で 姫新線湯郷・林田駅から岡山へ下るバスにする。

結局 林野駅で1時間ほど待ったので、時間的には短縮できなかったが、美作の東部を流れくだり、吉井川に 合流する吉野川沿いの国道 374 号線を走って約30分ほどで津山から、亜鉛・磁鉄鉱の鉱山の町棚原を通って、 流れ下ってきた吉井川との合流点周匝。大河吉井川沿いに少し下ったところで、 旧吉井町の中火仁堀に向かう。 いよいよ 国道を離れ、山の中に入ってゆく。

このあたり以前「ツチノコ」が発見されたと話題になったところで、まだ ツチノコの看板があったりするが、 山間の小さな集落が道沿いに続く。林野駅から40分ほどで仁堀中のバス停に降り立つ。

郵便局があるが、店もなく人通りもなし。周りは小高い山がぼこぼこ続く。

一緒にバスから降りたばあさんを逃すと人がいない。

地図を眺めながら、 布津魂神社への道を教えてもらう。 行くのはええけど、 1 時間では行き着かんという。 とにかく 地図片手に前方に見える道路標識を頼りに左手 南に下りて 山間に入る。こぶの峠を越すと数軒の 小さな集落があるといった山間を抜けてゆく。道がいいので気にはならないが、誰もおらず、 布都魂神社の案内 板もなく多少不安であるが、人を見つけては話しながら、山間を抜けてゆく。







北から南へ美作を流れ下る吉井川 周匝周辺 旧吉井町 仁堀中仁堀中







仁堀から石上への山間の道 2007.3.15. よく整備された道路が集落をつなぐが、人ばかりでなく 車にも出会わない



石上 布都魂神社の位置と周辺の鳥瞰図 Google Earth より

1時間弱ほど歩いた小さな集落の十字路に大きな道路標識があり、左「石上」の文字が見え その下に 布都神社への矢印の案内板がある。 地図にある天納の集落。やれやれ、「石上」までもうすぐである。 天理の「石上神宮」 がある「布留」とこの「石上布都魂神社」のある備前「石上」 この地名・名前の類似。



石上布都魂神社の案内標識がでてきてほっとする天納集落周辺

2007. 3. 15.

2. 「石上」 石上 布 都 魂 神 社

備前一宮の神社 石上神宮の元宮というので、神社周辺だけでも もっと華やかと思っていましたが、まったく、人気のない山中。 こんな令は人気のない山中が物部氏の本拠地だったのだろうか・・とびっくりする。

でも ここは 旭川水系 吉井川水系に挟まれ、 両方をにらめる場所。物部氏が支配する製鉄集団だとすると 格好の場所かもしれない。 ここが旧吉井町の石上。 山又山の中である。

石碑のところから丘と丘の間の道をまっすぐ西の神社へ向かう。

前方に小高い山が見え、この山裾の丘に布都魂神社の社殿があり、社殿からこの山の頂上に立派な磐座があり、 昔社殿はこの磐座のある頂上にあったらしい。 また、この道の南側 丘に囲まれた狭い土地に数戸家が見え、 石上の集落のようだ。 地図に「石上」の名前が付されているものの廻りになにも書き込みがなく、どんなとこ ろか・・と興味津々でしたが、本当にひっそりした場所で、人っ子一人いない。 この山際のところに鳥居があり、 そこから山裾を廻って参道を山裾の丘にのほるとそこ小さな広場になっていて まだ新しい社殿や社務所が建っ ていましたが、どうも無人のようでした。







布都魂神社への道 正面の山が布都魂神社の本宮 磐座のある神奈備山







布都魂神社への参道



布都魂神社 社殿

布都魂神社の祭神は、現在祭神はスサノウノミコトとなっているが、明治までは、素盞鳴尊が八岐大蛇を斬った「布都御魂」の剣。 この剣は、古事記では、「十拳剣」、日本書紀には、「十握剣」「蛇の麁正」「韓鋤の剣」「天 蠅斫」と記し、古備の神部のもとに安置され、いまの石上にあると記されている。この石上は奈良県の石上神宮 ではなく、この地の石上であるという。

この剣で八岐大蛇を斬った時、その尾からでてきたのが「天叢雲剣(アメノムラクモノツルギ)」で後に草薙剣と 名付けら熱田神宮のご神体とされる。

これらの伝承を性格には解き明かせないが、朝鮮半島の製鉄鍛治技術がこの吉備の石上の地に伝来し、この地で 花開いていたことを示す伝承とも推察される。

また、これらの伝承の伝える「石上」そして「石上神宮」と物部氏の関係や 早くからこの吉備東部の製鉄地 帯に物部氏がいたことなど考えると、 大和「石上・石上神宮」が物部氏の本拠となる以前 この吉備東部の製鉄 地帯に物部氏の本拠があり、渡来の製鉄技術をいち早く取り込み、その鉄の技術が物部氏の力の源泉であったと 考えられる。 後でおしえてもらったのですが、この布都魂神社の宮司さんの姓は今も「物部」であると聞きま した。

誰もいない境内のすぐ後ろのところから、本宮・磐座のある山への参道が続いている。なだらかな山に見えていましたが、林の中でよくは解らないが、ごつごつした岩と崖がある傾斜のきつい岩山で急な山道が頂上へ続いている。すこし登ったところで、南側が開けた展望が聞く場所に出て、岡山方面 山又山の景色が見える。

鳥居があり、頂上へのきつい石階段を登ると本宮 その後ろに 柵で囲まれた禁則地として、立派な磐座がある。 おそらく、この頂上から四方の山が見渡せたのだろう。

明るい森ではあるが、木々に囲まれて 山の頂上に磐座。 やっぱり何か 神秘的。 神話の世界のイメージが 広がってゆく。

スサノウのヤマタノオロチ退治の場面はどんなだったろう。

物部氏がいたというところはこの山裾 どの辺りだったのだろうか・・・

そのたたら場はどんなだったのだろうか もう製鉄技術を習得していただろうか・・・

ここにも 古代たたらの痕跡があるのだろうか・・・・

等々









山上の本宮へ向かう参道 2007.3.15.

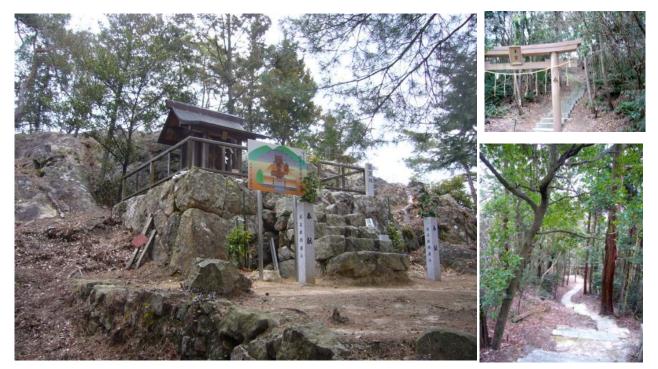


本宮すぐ下の展望所から南 岡山方面の眺望





山上の本宮と磐座 2007.3.15.



布都魂神社 本宮と磐座 2007.3.15.

3. 石上布都魂神社から 南へ 旭川水系の御津町金山へ



小さな丘が両側に連なる狭い谷間の道を縫いながら南へ 御津金山へ向かう 2007.3.15. 神社の山から下りながらも、まだしっくりこない。

「 なぜ この地に 製鉄集団の神を祭る物部が拠点を構えたのだろうか・・・・

も遠く吉井川から離れた場所に神社があるのか、どうも腑に落ちない。

この地で製鉄をしていたことが考えられるにしても

 歩いてきた北からの道はづっと山間を抜けてきた道で、石上で西の旭川水系に簡単に出られないとすると、しいて、北からの道とこの石上を結ぶものもない。だとすると やっぱり 南に旭川水系の製鉄地帯・吉備の中央部とつなぐ何かがあるのか・・・バスも通っていないし、南へ帰る方がどうも遠そうであるが、南へ下って、御津・金山まで、歩くことにする。

歩き出して 15分ほどで、上記の疑問は一気に解消。

小さな丘が両側に連なる狭い谷間の道を縫いながら15分も歩かぬうちに、南へ八の字に大きく広がる盆地の端に出た。 北から来たので、随分 山の中と思っていたのですが、段々畑が広がるかなり広い盆地が南に伸びている。そして、その南西の端で旭川が流れる御津金山につながっている。

南から来ても山中には違いないが、耕地の広がる盆地の北側の神奈備山が布都魂神社の地 石上 そして この盆地が製鉄集団の本拠だとすると布都魂神社の位置が理解できる。

そんな南側の盆地の中へ降りていく峠道を下ったところに「布都神社 社務所 宮司宅」と書いた案内板の大きな屋敷があり、また、この地が御津町「石上」との標識もある。

神社のある地が吉井町「石上」 社務所が南に広がる盆地の端 御津町石上にある。

やっぱり、もともと「石上」は御津・吉井の両方に広がる地で、この盆地側がむしろ石上の中心集落なのだろう。 ずっと抱いてきた疑問がやっと解消である。







御津町石上の集落に入って 北側の山裾を眺める 2007.3.15.





御津町石上から盆地の中をさらに下って盆地の中央で東側の赤磐市赤坂から西の御津金山への広い道とTクロス。 このTクロスを西に歩くと金山。石上からやっぱり 2時間ぼとの周囲をきょろきょろ眺めながらの長い walk でした。 正直 旭川の土手にでるとほっとしましたが・・・・。







旭川 旧御津町 金山周辺

たたら遺跡そのものを見に行ったわけではありませんが、古代製鉄の先進地吉備の製鉄地帯の真っ只中にいるとの思いがひしひし。

しばし、旭川の流れを見ながら 吉備の製鉄地帯の山並みに見入っていました。

物部氏がここで本当にどんな痕跡を残しているのか・・・・

本当に 物部氏がここを本拠として 鉄の技術をバックに大和へ出て行ったのか 確かなことはまだ 何も知りませんが、 山又山の中の布都魂神社と森につつまれた山上の磐座の神秘的な 神話のイメージに浸れて 満足でした。

2007.3.15.夕

御津金山 旭川にかかる大橋から北野山々と川の流れを眺めながら

Mutsu Nakanishi

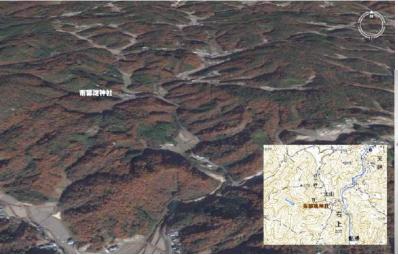
ついでながら 津山線御津金山駅に行くと津山線が不通。まったく知りませんでしたが、金山駅の南 旭川沿いの線路に土砂崩れがあって、岡山までバスによる代替運行の真っ最中。 久しぶりに代替バスにも乗りました。 出かけて見ると本当何が起こるかわかりませんが、何でも見てやろう 風来坊です。

> 物部氏の古い本拠地と考えられる 布都魂神社のある吉備「石上」は 山又山のどんつき まるで 隠れ里 山の中にひっそりと石上布都魂神社があり、 神社の背後の岩山の頂上部に立派な繋座がありました



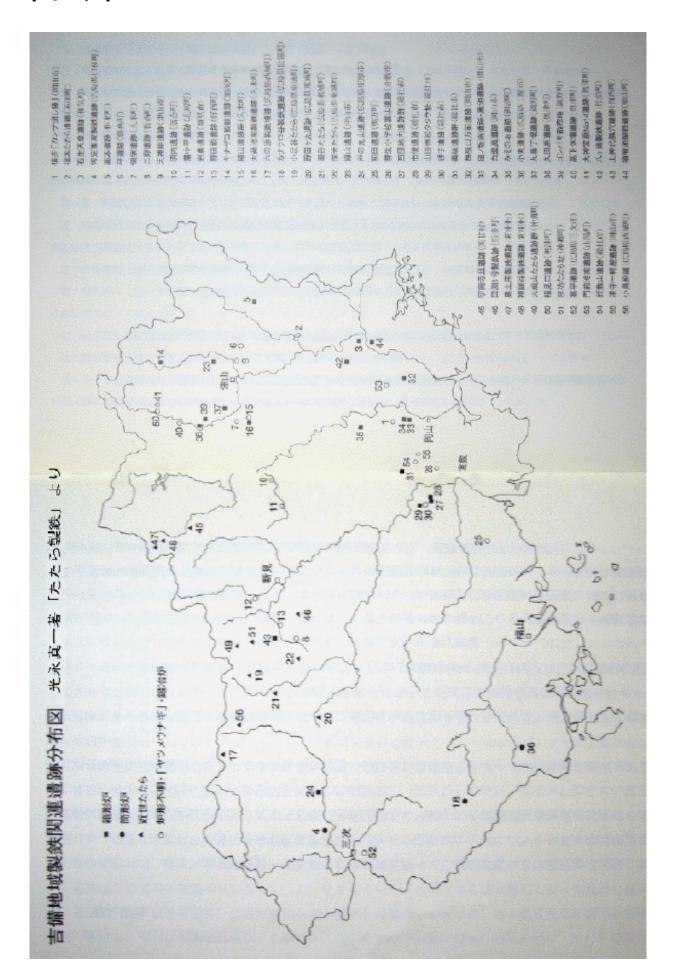








粉部氏の古い本拠地と考えられる 布都魂神社のある吉備「石上」 2007.3.15.



古代 大和への鉄の道 [2]

大和川 亀の瀬・龍田越 Country Walk 2007.4.20. 8 4.29.







三郷町 大和川土手より 龍田山

大和川 亀の瀬岩

亀の瀬周辺 地滑り防止対策地区

河内と大和の境 大和川 亀の瀬・龍田越



古代 大和への鉄の道 [2] 大和川 亀の瀬・龍田越 Country Walk

- 1. 龍田大社から大和川沿い峠集落を経て亀の瀬・河内堅上へ龍田越南路を歩く
 - 1.1. 龍田大社から大和川沿いに峠集落へ
 - 1.2. 亀の瀬・地滑り対策地区にはいって
 - 1.3. 亀の瀬から 河内堅上へ
- 2. 河内堅上・青谷から雁多尾畑・御座峰へ 古代製鉄集団の痕跡を訪ねて
 - 2.1. 金山彦神社から 広い明るい谷筋を龍田山の尾根・雁多尾畑集落へ
 - 2.2. 金山媛神社 8 雁多尾畑集落
 - 2.3. 龍田神が降臨した御座峰 周辺で
 - 2.4. 帰路 雁多尾畑・御座峰から信貴山へ
- 3. 龍田神の道を 三室山から御座峰・留所の山へ 古代たたらの痕跡を捜す





地滑り防止工事地区より 留所の山周辺

この上 留所の山より 地滑りが起きたところ

古代の製鉄集団の住んだ雁多尾畑集落 河内から大和への龍田山 乗越周辺

大阪湾から 古代大和に入るには 紀ノ川・吉野川 大和川 淀川・木津川 のいずれかを遡るルートがある。前回の淀川・木津川のルートに続き、大和川を遡るルート 大和の入り口 大和川亀の瀬・龍田越を訪ねました。 大阪湾から大和川を遡ると 25km で大和と河内の境 亀の瀬。南北に連なる生駒連山と葛城・金剛連山の割れ目 渓谷をなすここを大和川が急流になって、大和から河内へ流れ下る。古代大阪湾から遡ってきた舟はこの亀の瀬の急流を遡れず、ここで舟を降りて 陸路 渓谷沿いの険しい山越をせねばならない。 竜田越である。 ここを安心して 船で越えられるようになるのは 江戸期 亀の瀬の改修が行われてからという。

また、大和への入り口として、古代には 龍田の関が置かれ、古代の歌人たちが 紅葉を読んだ「竜田川」もこの亀の瀬渓谷から上流の龍田の森あたりまでの大和川と考えられている。

そして この龍田越の乗越の尾根の上には「雁多尾畑・カリンドバタ」という響きのいい古代からの集落があり、 製鉄集団といわれ、この龍田越道は大和への鉄の道だという。

いったい 大和川の難所 亀の瀬とは・・・・

難所を山越えした龍田越とは・・・・

この渓谷を JR 関西線が通り抜け、何度も電車から見ているが、それほど険しい渓谷が続くとは思えない。

でも、実際に歩いてみて 大違い。 やっぱりすごいところでした。

また、単に大和の入り口というだけでなく、「大和への和鉄の道」 そんな 痕跡が点々とあり。

名前だけはしっていましたが、ここは日本有数の地滑り地帯 今も地滑りとの戦いが続き、この地滑りがどうも 大和川亀の瀬の難所を形成する一方、 古代たたらの黎明期 鉄鉱石を川に露出させ、製鉄の試みがこの山で行われたのではないか・・・・

その痕跡が 亀の瀬を越えた大和側 三郷の風神 龍田大社 河内側 雁多尾畑集落ではないか・・・・

行って見てはじめて知った「亀の瀬」のすごさでした。









亀の瀬岩周辺を描いた江戸時代の絵図

亀の瀬岩

亀の瀬岩周辺の激流

亀 の 瀬 後方 渓谷に沿って国道・関西線が走る 2007.4.20.







三郷町 大和川土手より 龍田山

雁多尾畑の尾根の頂周辺より南東河内側の遠望

風神 龍田大社

【**河内と大和を結ぶ古道 龍田越古道** 龍田大社を起点に龍田山を河内に越える3つの道があったといわれている 】

◎龍田越北路、信責山参詣道から御座峰・雁多尾畑へ

龍田大社~今井集落~御座峰(312m)~雁多尾畑~上徳谷~横尾~生津~安堂へ、

雁多尾畑~青谷~高井田へ

(信責山へは御座峰~本堂~信責山)

◎龍田越中路は、三室山稜線道から御座峰・雁多尾畑へ

龍田大社~高山~三室山~稜線道~留所山(276m)~御座峰~雁多尾畑~上徳谷~横尾~生津~安堂へ 雁多尾畑~青谷~高井田へ

◎龍田越南道は、亀の瀬渓谷沿いの高巻き道

龍田大社〜高山〜峠〜亀の瀬地すべり地〜春谷〜高井田へ 峠〜雁多尾畑〜青谷〜高井田へ

リンクアドレスに変更後の新しいリンクアドレスが隠れています

- 1. 古代大和の鉄の道を訪ねて【1】 淀川・木津川から大和へ 大和の外港 木津「泉津」を訪ねて http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron3/7ironpdf
- 2. 「鉄の 5,6世紀」大和の日本統一を支えた大県製鉄遺跡 北河内の大規模専業鍛冶工房 大県製鉄遺跡探訪 http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/4iron12.pdf

1. 龍田大社から大和川沿いに峠集落を経て亀の瀬・河内堅上へ 龍 田 越 南 路 を 歩 く 2007.4.20.







奈良県三郷町 大和川より、龍田山 & 大和川 亀の瀬の急流

○龍田越北路、信責山参詣道から御座峰・雁多尾畑へ 龍田大社〜令井集落〜御座峰(312m)〜雁多尾畑〜上徳谷〜横尾〜生津〜安堂へ、 雁多尾畑〜青谷〜高井田へ (信責山へは御座峰〜本堂〜信責山)○龍田越中路は、三室山稜線道から御座峰・雁多尾畑へ

龍田大社~高山~三室山~稜線道~留所山(276m)~御座峰~雁多尾畑~上徳谷~横尾~生津~安堂へ 雁多尾畑~貴谷~高井田へ

○競田越南道は、亀の瀬渓谷沿いの高巻き道競田大社〜高山〜峰〜亀の瀬地すべり地〜青谷〜高井田へ峰〜雁⇒尾畑〜青谷〜高井田へ

【 龍田越古道 龍田大社を起点に3つの道があったといわれている 】





河内と大和の境 亀の瀬・龍田山周辺 龍田越 鳥瞰写真とルート図

の瀬の急流をみると、まず 舟ではこえられず、 手前で降りて、亀の瀬をこえねばならない。 そのルートは3路あったといわれているが、地 すべり地帯を通り抜けねばならず、色々変化し ていたと考えられる。

古代 初期のルートとしては 亀の瀬の渓谷に沿って龍田山裾を越える道が一番だろう。しかし、亀の瀬 周辺が閉ざされたときには 河内側からも 大和側からも 亀の瀬まで船ではいらず、陸路 御座峰を越えるルートが使われたとかんがえられるが、いずれにしろ 厳しい山道を越えねばならなかった。



河内と大和の境 亀の瀬の衛星鳥瞰写真 大和側より 中央が亀の瀬 その右側 亀の瀬地滑り防止対策地

1.1. 龍田大社から大和川沿いに峠集落へ

a. 風神 龍田大社 龍田越の大和側の出発点 風の神を祭る龍田神社







龍田大社 朱塗りの大鳥居 と 入り口鳥居周辺の杜

大和川 亀の瀬は南に葛城・金剛 北に生駒山地に挟まれた狭い渓谷 大阪湾・河内平野からの風がこの渓谷を吹き抜ける 古代製鉄に必須の風がある 古代の製鉄集団が この地で 製鉄を始めた由縁であろう 河内側から亀の瀬の渓谷を抜け大和に入ったところに風の宮 龍田大社がある。朱塗りの鳥居が森の新緑に映えて美しい。 JR 関西線 三郷駅からすぐの場所である。

大和川の難所 亀の瀬を避けて ここから 龍田の山を越えて 河内側へでる龍田古道の起点である。 祭神は「天御柱神、国御柱神」天地の大気・生気・風力を司る「風神」。御神名の"御柱"とは「天地万物の中心 の柱」と解釈され、別名の"志那都"とは《息長》の意味で「気息の長く遠く吹き亘る」と解釈。

天地宇宙の万物生成の中心となる『気』すなわち〈空気〉或いは風の神様で、五穀豊穣など幅広〈御神徳のある神様。(龍田風神祭祝詞)

崇神天皇のとき、五穀凶作が続いたので、天皇が悩み、夢にこの神が現われお告げがあったので創祀したとあり、日本書紀には、天武4年(675)に風神を竜田の地に祭るとあり、持統天皇譲位の持統11年(697)まで毎年4月と7月に祭りを行ったとある。

(竜田大社由緒略記ほかより)

そして、龍田大社の背後の龍田山の御座峰があ り、龍田神が降臨した聖地とされている。

宮司さんから丁寧に龍田大社の由緒や御座峰などに ついて教えてもらった。



三郷駅の東南 大和川より 三室山 & 龍田山 (左:留所の山 & 右:御座峰)

河内と大和を隔てて南北に伸びる金剛・葛城山地と生駒山地がこの地で 途切れて大和川が流れくだり、大阪湾からの風の吹き上げ口である。近江・美濃の境の伊吹山も同じ風の通り道。

この龍田山か北に伸びる生駒山地は古代の大製鉄地帯。河内側の生駒山地の南端 大県には大鍛治工房があり、 御座峰から河内側に尾根を越えた雁多尾畑集落へと続く竜田越古道の谷筋には金山彦、金山姫の命が祀られてい る。風神は製鉄の為にはなくてはならない強風の吹くことを祈る神。それが、農業の守護神として風を鎮める神 へと時代と共に変遷して行ったのかもしれない。

龍田の神 風神と古代製鉄とつながる伝承がないかと宮司さんにもお聞きしましたが、特にはないとののことでした。 また、この地は瀬戸内から大和への侵入の最後の拠点であるとも言え、天武天皇の時代に竜田の関が設けられ、日本四関の一つとされる。このようにこの地は大和にとって 最重要地であり、その守り神が龍田大社であったといえる。 生駒山裾のもう少し東側の斑鳩町を北から南に大和川に流れ込む「龍田川」があるが、どうも万葉集に歌われる有名な「龍田川」は亀の瀬からこの龍田大社あたりの大和川のことらしい。 異説もあるが、僕にはこの方がピンと来る。

b. 龍田大社から大和川沿いに峠集落へ







JR 関西線 亀の瀬 - 三郷間 車窓より

2007. 4. 20.

亀の瀬の渓谷をぬけると視界がひろがり、左手に龍田の山なみを眺めながら

菜の花が土手に美しい鉄橋をわたると三郷の駅

JR 三郷駅のすぐ西周辺は磐瀬の杜 古代 大和の守り 龍田の関が置かれたところ

駅の北西側の龍田大社から、JR 三郷駅の前に戻り、そこ から西へ JR の線路と大和川に沿って西へ 50 メートルほどのところに磐瀬の杜の碑がある小さな公園がある。

このあたり、古代には 磐瀬の杜と呼ばれ、龍田の関が 置かれたところである。 このあたりまで、龍田の森が 広がり、河の対岸には葛城・二上山の山裾が大和川に切 れ落ち、右手には龍田・三室の山が迫り、その間を渓谷 となって大和川が河内へ流れ下って行く。

古代 この亀の瀬の急流を船で越えることができないので、この渓谷を避けて、ここから、龍田山を越えて河内へ向かった。

河内から来た人たちも龍田山を越えて、このあたり、磐瀬の杜でほっと一息をつき、龍田大社に参って それから大和の国にはいっていったに違いない。山が低いといえども 馬が入ってくる5世紀までは陸路も大変だったと思う。また、時代が下ると、この渓谷の亀の瀬のごく近くまで入り、亀の瀬岩を始め、急流の中に岩が立ちはだかる亀の瀬だけを陸路で 船を乗り換えることも行われている。 いずれにせよ 河内 - 大和の重要な交通路の難所である。また、この亀の瀬の難所は逆に大和を守るとりでであり、大和王権成立後 ここに龍田の関が設けられている。

ここから土手に沿って、さらに50メートルほどの行

くと北西に街中を三室山への道とそ のまま川沿いの道とに分かれる。

広い国道と JR の線路はこの先で、大和川を渡って対岸を大和川沿いに狭い亀の瀬の渓谷の中を抜けてゆく。

この亀の瀬渓谷は日本有数の地滑り地帯で JR の線路も当初はこちら側龍田山の山裾にへばりつきながら

亀の瀬の谷を抜けていったのが、地滑りで 対岸を迂回するルートに付け替えられたと



龍田越南路 Walk ルート図



大正橋周辺 大和川が亀の瀬の渓谷にかかるところ





JR 三郷駅のすぐ西側に 磐瀬の杜の碑があった 2007.4.20. 古代には 龍田の杜がこのあたり大和川周辺まで広がっていたという

いう。

大和川の土手には菜の花が満開で、山の新緑 川の流れとあいまって 美しい里山の郷の景色を造っている。右手にはどっしりと龍田山。







大和川沿い国道へ出る道と三室山・龍田大社へのY字路にある道標には墓石が使われていて、ビックリする。 菜の花 満開の大和川の土手の脇に置かれた大和川の標識には河口から 25km 。 案外近いのに驚き

地図を片手にいわゆる古代竜田越 南路のルートを歩く。今回の主眼は まず 亀の瀬の急流がどんなところ かを確かめるのが、まず第一。 龍田大社で宮司さんからも進められたが、三室山を 登ってゆくルートを取らず、大和川と龍田山の山裾の崖の上をまっすぐ亀の瀬へ向かうルートを歩く。



三郷町 大正橋周辺より 亀の瀬・龍田山を眺める (写真合成) 2007.4.20.



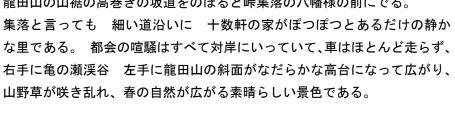
龍田の山 左 留所の山 右 御座峰 JP 高山鉄橋から三郷・大和方面 2007.4.20.

JR 高山鉄橋周辺から 三室・龍田の山を眺める 春真只中 淡い緑の野山の中 菜の花の黄色が目にしみる

c. 亀の瀬の渓谷 龍田山の山腹にへばりつく峠集落 周辺

大和川 亀の瀬に行くには 龍田山の麓から 対岸の国道を大和川沿いに 渓谷をゆくか、この地高山から、龍田山の山裾の崖の上 峠集落に出て、急 な坂を下って亀の瀬の川岸に出るしかない。 崖下の渓谷沿いには道がない。 JR 三郷駅の西 北側の龍田山・三室山山裾の集落 高山から、川から離れ、 龍田山の山裾の高巻きの坂道をのぼると峠集落の八幡様の前にでる。

な里である。 都会の喧騒はすべて対岸にいっていて、車はほとんど走らず、 右手に亀の瀬渓谷 左手に龍田山の斜面がなだらかな高台になって広がり、 山野草が咲き乱れ、春の自然が広がる素晴らしい景色である。











峠集落の峠八幡神社 2007.4.20.





峠集落で 2007.4.20.



山野草が咲く向うで地滑りを止める工事



果樹園の広がる集落の上に龍田山・留所の山が見える

でもこの地形はどうも地滑りで得られた地形らしく、今も地すべり防止の格闘が続いていた。後で、亀の瀬の 地滑り対策地帯に言ってはじめて知ったのですが、年月をかけたすごい大工事で、ここの地滑り防止の格闘が続 いていました。

また、ここから、龍田山の頂上部へ急な斜面をジグザクに登ってゆく道も見え、昔はこの峠の八幡様の前から山の頂、御座所の峰に上り、山越えて 雁多尾畑の集落から河内へ越えてゆく道があったようだ。

峠の集落の崖の縁に行って 大和川の渓谷を覗き込む。 垂直に近く深く切れ落ちていて、対岸を行く国道のトラックや JR のでんしゃが小さい。

これはきつい。 こちら側に道は付けられないと納得するが、急流の大和川も良く見えず、亀の瀬の流れも良くわからない。

この切れ込みは中途半端ではない。



峠集落から亀が瀬への道

でも まだ、この集落の中にいる時には 地滑りが昔あったところ程度の軽い気持ちでしたが、亀の瀬の川に下りるため、すぐ西の地滑り防止地帯に入って、そのすごい地滑り対策工事がびっくりしました。



峠集落から 急な崖下の亀が瀬 を眺める 2007.4.20.





峠集落は龍田山が 亀の瀬渓谷に落ちる南 斜面中腹で、地滑り地帯の中にある。

大規模な地滑り地帯の真只中 大規模な防 止工事が続く

この亀の瀬で、地滑りが起きて 大和川に土砂が滑り落ちると 大阪・大和への大動脈が止まるだけでなく、川がせき止められ、

大和・河内の平野が水没??するかも???

1.2. 亀の瀬・地滑り対策地区にはいって



亀の瀬

亀の瀬 地滑り防止対策工事地域

龍田山の山腹にへばりついて 大和川に沿って狭い帯状に広がる峠集落を抜けると地滑り防止対策工事が延々と 続いている亀の瀬地滑り対策地区。 見上げる上に電波塔のある龍田山 留所の山が見え、その頂上部からすっぽ り山崩れがしたのだろう。

まるで日本アルプスに残る氷河の削り跡のごとく すり鉢底状のカール地形になっていて、その地下には数々の 現代の技術を駆使した地滑り対策工事の諸施設が埋め込まれている。 この地下には 水抜きパイプが埋め込ま れ、大きな円形集水井戸と水抜き水路と共に、地下にある地滑り面を貫く100メートルもの深さに直径6.5 メートルのコンクリート円柱が何本も建設されている(深礎工法)という。

突如として現れたすり鉢状の草原に唖然とする。





亀の瀬 地滑り地帯と地滑り防止対策工事の概略図

亀の瀬の急流をみると、まず 舟ではこえられず、手前で降りて、亀の瀬をこえねばならない。

そのルートは 3 路あったといわれているが、地すべり地帯を通り抜けねばならず、色々変化していたと考えられる。古代 初期のルートとしては 亀の瀬の渓谷に沿って龍田山裾を越える道が一番だろう。

しかし、亀の瀬 周辺が閉ざされたときには 河内側からも 大和側からも 亀の瀬まで船ではいらず、陸路 御 座峰を越えるルートが使われたとかんがえられるが、いずれにしろ 厳しい山道を越えねばならなかった。

この見上げるすり鉢状の地形を登るのにも魅力がありますが、今日はまず、「亀の瀬」の急流へ。

このカール地形の中心部に入らず、底のところから、急斜面に諸工事のために付けられた舗装道路を大和川亀の 瀬へ降りてゆく。 地下に埋め込まれた集水井戸の丸い屋根の向うに大和川 その川の真ん中に亀の瀬岩が見える。 ここが大和と河内を隔てる難所 亀の瀬。

流れが、あわだっているが、以外にも上流側も下流側も想像していたよりも静かな流れである。そして、狭い 渓谷 川にへばりついて、国道と JR の電車がここを抜けてゆく。 狭い渓谷が続いている。

何度も地滑りを起こして 大和川が埋まった。ふっと大和の地図が頭をよぎる。

ここで 大和川がせき止められると大和は湖。そして かつて 河内湖だった標高の低い河内も堰が切れるとす ごいことになる。 交通の要衝というだけでなく 現在も 近畿の息の根が止まってしまう。 今も地滑り防止の大工事がつづく理由だろう。

いつも 地滑り工事やっているなあ ぐらいで、まったく 知りませんでした。

a. 亀 の 瀬 大規模地滑り防止工事が続く急斜面を降りて







地滑り防止 集水井の上から 亀瀬岩を眺める

深礎工 工事現場を見上げる



亀の瀬周辺 20074.20.

とにかく 亀の瀬の川まで降りてみようと集水井戸の横の急な階段を川の端まで下りてゆく。 川の端に小さな

踏み跡がかわにそってあるので、これを行けば 亀の瀬 岩のところまで降りられそう。 途中でふみ後もなくな りますが、木々の間から 河原が見えているので、降り られそうなところを捜して河原へ降りる。

亀岩のすぐ下側 川が逆く「く」の字になっている小さ な浜で 亀の瀬岩のすぐ横にまで近づける。

「ざあ ざあ」と瀬の音が心地よい。 上から見るのとは大違い すごい流れ。 上流側から段になって 下流側に水が噴出しているといったような流れ。

「ここは越えられない」 納得である。











亀の瀬岩周辺 左 下流側 右 上流側 下流側は水深が深いが、上流側は浅い。 2007. 4. 20. 河原には わずかですが、砂鉄が堆積。踏み跡の途中でも見つけた赤茶けた赤鉄鉱状の石もある。 ひょっとして 川にさてつがあるのではないか・・・と少しは期待していたのですが、なんともいえないわずか の量ですが、見つけられて満足。

河内側にある古代の大製鉄地帯 大県や これから河内側から登ってゆく龍田山「雁多尾畑」や大和側 葛城山麓「忍海」を支えたのはこのあたりの鉄ではないかと ふっと頭をよぎる。











逆「く」の字に曲がって流れる亀の瀬 2007.4.20. 崖道を降りると小さな浜 砂鉄が少しと赤い鉄分交じりの石がゴロゴロ

やっぱり この山間には「風」だけでなく、「鉄」もある

いつも電車でとおり抜ける亀の瀬 電車から見るイメージと本などで読む亀の瀬の難所の間にイメージの差があって、古代も ひょっとして 亀の瀬は舟で遡れるのでは・・・???とも また、急流がもっと続いているとも 思ってやってきましたが、実際は亀の瀬のごく 短い区間が、急流の難所。

川中に岩が沢山落ち込んでいて、大きな亀岩が川の真ん中に居座り、ここで極度に川が狭まり、丁度堰のようになっていて、上流側と下流側で段差になっている岩の間を急流が駆け下る。 この段差や岩が昔はもっと続いてていたのでしょうが・・・・・。 この急流は 古代 船で行き来するのは無理。

でも 区間が短いので、絵図にあるように人や荷物を上・下流の船に移し変えて 川を行き来するか 龍田山を 陸路山越えするしかないだろう。

ほんの短い区間のみに岩がゴロゴロしていてるので、おそらく、今も続く龍田の山の地滑りが昔々この谷で起こって 大和川に大岩が転げ落ちた産物なのだろう。地滑り地帯のすごさです。

また、亀瀬岩周辺は 通行可能にするため、何度か大規模な工事がされているが、実際に亀瀬岩を越えて 通過 できるようになるのは江戸時代以降したがって、昔はもっと岩も大きく 荒々しい渓谷だったと想像される また、この地まで大阪湾から約 25km その近さにもびっくりです。

「亀の瀬と古代製鉄との関連」について 後で聞いたり見たことを別途まとめますが、 川に下りると亀の瀬岩のすぐ下の砂浜に少しですが、砂鉄が堆積。 また 周辺には鉄分を含んだ赤い鉄分を含んだ石がありました。 すぐ上の地滑り防止対策地帯の真ん中に集められたこの周辺から掘り出された石の中に 磁石に反応する岩石があり、また、この龍田山の地下には今も鉄の鉱脈があるとも柏原歴史資料館で聞き着ました。

この崩れの中に鉄鉱石の鉱脈があって、それが川に落ちて、この龍田山周辺を古代大和 黎明の時代の製鉄地帯にしたのではないか・・・・ などと根拠はありませんが考え始めています。あまり期待していなかった龍田山・亀の瀬での 古代たたらとの出会いでもありました。

b. すごい 亀の瀬の地滑り対策工事







亀の瀬の急流をみると、まず 舟ではこえられないだろう。手前で降りて、亀の瀬をこえねばならない。 現在の川では、 亀の瀬のごく短い区間を除けば、すぐ近くまで、渓谷沿いにやって来て、船を乗り換えるのが、 一番楽であるがこの地帯は地滑り地帯。 古代には 絶えず 谷の状況が変化し、川筋そのものも もっと険し かったと考えられ、地滑り地帯を避けながら 龍田山を越えねばならなかったのだろう。

陸路 御座峰を越える龍田越のルートが使われたと考えられるが、いずれにしろ 厳しい山道を越えねばならなかった。

1.3. 亀の瀬から 大和川に沿って 河内堅上へ

大橋をわたらず、そのまま龍田山側の崖の上にでると山と川との間の狭い崖の上に亀の瀬の集落が続く。ここには昭和初期旧関西線の線路がつづいていたが、亀の瀬の地滑りによって、対岸に線路が移って、今はその線路跡が生活道路になって河内堅上の方に続いている。 関西線がまた こちら側に移ってくるとまもなく河内堅上。 亀の瀬から約30分ほど 緩やかな大和川の流れを眺めながらの walk 道端には春の野草が咲いて 気持ちのいい walk でした。



地滑りで今は対岸を走る JR の旧線路跡が生活道路となって その狭い道の両側に数戸 家が並ぶ亀の瀬の集落



亀の瀬の南側でまた線路がこちらに戻ってくる 亀の瀬から河内堅上駅へ 大和川を眺めながらのハイキング









亀の瀬から河内堅上駅へ ハイキング

山と川に挟まれた狭い田圃に咲いていた野草の花 2007.4.20.

2. 河内堅上・青谷から雁多尾畑・御座峰へ 古代製鉄集団の痕跡を訪ねて

河内堅上から大和川沿いの 高台を国分へ下る。そのまま大 和川沿いを下れば高井田・河内 平野へ出る。

今日はそのままくだらず、尾根を回り込んで青谷集落から雁多尾畑・御座峰へと一つ東の谷筋を北へ龍田山を登りなおす。この谷には金山彦神社・金山媛神社があり、上り詰めた尾根の上が雁多尾畑の集落でそのすぐ上に御座峰がある。





河内堅上駅



河内堅上から青谷の集落へ

「雁多尾畑」とは「狩人」がなまったもので、古来 山を駆け巡った金属精錬の集団を指すとの説があり、生駒 山地・龍田山周辺の鉄鉱石をつかって、製鉄を営んだ集団の村が雁多尾畑といわれる。

もともと、この谷筋のすぐ北側の山裾大県にいた大製鉄鍛治集団がこの谷の尾根の上に移動して行ったともい



古代製鉄集団の集落といわれる雁多尾畑 河内平野が遠望できる

|われ、この谷筋に彼らの守り神 鍛治神「金山彦・ |金山媛」を祭った。

古代製鉄集団の谷である。

現在谷筋にある金山彦神社・金山媛神社ももと もとはもっと上の尾根の上にあったといわれ、「風 神 龍田神」が降臨した御座峰と重なる。

大阪湾・河内平野からの風がこの谷を吹き上がり、 この風を利用して、製鉄・鍛治を行い、頂上・御 座峰に彼らの神を祭ったのだろう。

そして、この御座峰から大和側へは、御座峰に 降臨した龍田神が大和側 龍田大社へ下って行った「神の道」がつづく。

このルートが 「最初の龍田越」 そして 古代 大和王権を支えた「大和の鉄の道」重要路かもしれない。

大陸・朝鮮半島の鉄の大和への供給ルートとしての「大和の鉄の道」を考えてきましたが、ここでは それらの鉄を鍛治加工して、大和に持ち込む鉄器生産鍛治の道でもあった。

まだ しっかりと確認はされていないが、早くから渡来人を受け入れ、生駒・龍田の山の鉄鉱石を用いて、 製鉄までもこの集団が行っていたかも知れぬ。

古代 初期の頃 河内から大和へ出るには 険しい難所「亀の瀬」大和川を遡るよりも この龍田山越・竜田越の道が本道だったのかも知れぬ









狭い谷筋に裕福な村と感じる大きな屋敷が細い街道に密集している青谷の集落 2007.3.15.

2.1. 金山彦神社から 広い明るい谷筋を 龍田山の尾根・雁多尾畑集落へ

家々が密集した青谷の集落をぬけ、谷筋を雁多尾畑に上ってゆく、広い道路にぶち当たる。この道の端に池があり、鳥居が見える。 ここからは家並が途切れ、木々につつまれた坂道が奥に続いている。ここが 金山彦神社。 鳥居の傍に神社の概略を記した案内板があり、この地古代製鉄との関係などや、もともと 龍田山・嶽山に神社があったことなどが略記されている。







谷の上り道の両側にびっしり建て込む青谷集落をぬけると池之端に金山彦神社がある 2007.4.20



この鳥居の傍に人が集まっていて、この奥の保育所や小中中学校から子供たちが帰ってくるバスを待っているのだと。ここから奥 雁多尾畑まで集落もなく、人もいないところに・・・と思いましたが、この雁尾畑へ登ってゆく谷筋は竪上のメイン道路。 神社の杜を抜けると派出所もあり、広い谷筋に段々畑田畑が広がる丘陵地の上の方に学校の建物が建っていました。振り返ると随分高くまで、登ってきたことが解る。 遠く河内平野が遠望され、足元に広がる田圃にはレンゲの花が満開でした。

朝 歩いた峠の集落や竪上までの大和川沿いの道を含め、春の里山がこんなにきれいとは・・・・ あらためてびっくり。もっとも この龍田山周辺はまったく 道標がなく 地図をちゃんともっていないと と んでもないところに行きそうですが、ひともおらず、春の里山の景色を独り占め。









金山彦神社を抜けて さらに奥につめると正面に龍田山の尾根が見え、 山の丘陵地に果樹園が広がる 田圃には蓮華の花が素晴らしい

2007. 4. 20.



堅上の田圃にひろがる蓮華畑 龍田越 青谷-雁多尾畑

2007. 4. 20.

登りのきつい傾斜道を里山の景色を楽しみながら、中学校 そして次に小学校・保育所などをながめながら登ってゆく。 大和川まで下った国分からも このかなり奥の小学校まで通うというから、驚きである。

もっとも 通学バスがあって、さっきの金山彦神社のところで降りて、みんな学校まで登ってくるという。 小学校の横を過ぎるといっぺんに谷が細くなって 峠道 いよいよ 龍田山の尾根の上へと登ってゆく。

雁多尾畑の集落はこの尾根の上からこちら側 南西斜面に広がる集落で、曲がりくねって 登ってゆく峠道が 見える。

2.2. 金山媛神社 8 雁多尾畑集落

少し登ったところ 左手の山腹 石垣の上に神社が見えるのが、金山媛神社。 雁尾多尾畑の集落の入り口である。 金山彦神社と同じ神社略記が書かれていて、二つの神社とも同じ由来を持っている。

宮司さんも同じという。 境内 で掃除をしているおばさんに 「鉄」の話を言うと 宮司さん がこのあたりで 出た「古い 鉄」を持っておられることを教えてもらった。



谷の一番奥 雁多尾畑の集落への入り口 集落へ上り詰める手前の尾根の山腹にある金山媛神社 2007.4.20.







谷の一番奥 雁多尾畑の集落への入り口 金山媛神社 2007.4.20.





金山媛神社のところから急坂を上り詰めれば 雁多尾畑の集落である



雁多尾畑集落の広がる谷

背後は河内平野

雁多尾畑の集落の上の龍田山の尾根より

2007. 4. 20.









雁多尾畑集落 街中 2007.4.20.



左手 南より 雁多尾畑の集落を抜け尾根の頂上部に登りきった十字路 正面の石垣の上の峰が御座峰と後で知れる

宮司さんに電話してあげるとの話をお断りして、坂道を登ると坂道の両側にびっしり広がる雁多尾畑の集落。 こんなに大きな集落が こんな山の中にあるのかと ビックリである。

とにかく 集落の中を抜けて 尾根筋の頂上にあがり、御座峰を捜したい。 日の昼 人もまったく歩いていない。 ひっそりと集落は静まり返っている。

標識がなく、また ハイキングマップもなく、インターネットからダウンロードした2万5000分の一の地図だけが頼りであるが、よくわからない。

とにかく 集落で色々教えてもらいながら、上へ 上へと尾根の頂上を目指して 集落の中を抜けてゆくと程なく頂上部の十字路。 十字路のところ 北西角に石垣がありその上に登ると周囲が良く見える。

南には今上ってきた雁多尾畑の集落の谷筋から河内平野が遠望され、東には 葛城・金剛の山並みが重なって見える。

雁多尾畑を登ってきた道はまっすぐ北へそのまま尾根筋の北側の斜面 大和側を信貴山を経て三郷へ続いている。 十字路を東に折れると朝 歩いた亀の瀬・峠集落へ行く道。下から見上げた電波塔のある留所の山のすぐ横をまっすぐ東へ下って行く。 西へ行くと尾根の南側河内側の斜面を尾根に沿って、信貴山・高安山の方へ続いている。

でも 御座峰の位置がわからない。地図から言うと 今たっている石垣のすぐ北側あたりなのですが・・・・・ 北への道 すぐそこに人影が見えるので、御座峰をたずねに行く

【尾根を登りきった頂上部の十字路からの展望】



南東側 河内平野 左後方に二上山・葛城山・金剛山が重なって見える 2007.4.2.







南側 河内平野 遠望

雁多尾畑を抜けて尾根の上、御座峰の周辺からの展望 2007.4.20.

雁多尾畑から留所の山の端のところを左へ尾根筋をまっすぐ亀が瀬へ下って行く道が伸びている。 雁多尾畑から 亀の瀬・峠集落へ下って行く龍田山越の古道が見える。

2.3. 龍田神が降臨した御座峰 周辺で



御座峰の周辺より 大和平野が広がる南東側

前方の斜面にぶどう畑が広がり、左後方より 右中央へ大和川が流れ下る 2007.4.20.

北への尾根筋道に人影を見つけて 北へ登ってゆく。 すぐ右手に小さな小屋があり、そこの人だ。

ちょっと 登るとすぐ東側から北へ 大和平野の大パノラマが広がり、崖下の斜面には広大なブドウ畑が続いて

いる。小屋のところがガレージになっていて、いい展望所。 御座峰の位置確かめるよりも 大和平野の大パノラマに見 とれる。 纏向の古墳群から三輪山 そして 大和三山も くっきりと見える。

ふっと見ると 子供の猪が檻に飼われている。小屋は下に 広がるぶどう園の管理小屋で 出てきた爺さんがウリ坊を 捕まえて育てているのだといい、ここの景色は見飽きない だろうと自慢する。

「特に夜大和平野に灯がともると本当に見とれる」と。 本当に大和全体が遠望できる素晴らしい場所である。 「ところで 御座峰てどこ。 また 昔の鉄の話きいた ことありませんか・・・」と聞くと道の反対側の小さな 丘が御座峰だという。



御座峰の登りロ 中央樹木のところから右へ 10メートルほど入ったところが、御座峰の頂。

また、 「このあたりは 畑などから鉄がでて 自分も見つけたことあるよ。御座峰のしゅうへんもあるかも・・・・。 先日も孫がこの龍田山の古道を訪ねるハイクにいって、鉄見つけてきたよ」という。「でも この下の古道は荒れていて どこがとうなっているか わからんし、どこで孫がみつけてきたのかも知らん」という。 ほんとかいな・・・・と半信半疑ながらありうると。

よし、鉄滓が転がっているかもしれん・・・と 御座峰へ

御座峰の上り口の小道をほんの 50m ばかり、あがったところが、御座峰。

雑木を刈り込んだ小さなスペースに「御座峰」の碑が立っている。 ほんの小さなこぶの頂で、何もなし。







龍田大社の祭神 風神「龍田神」が降臨した御座峰

雑木の頂上部 ここだけが刈り込まれていました

河内側から北東へ雁多尾畑の集落を抜け、 尾根の上に出た道が、そのまま尾根の東側を北へ信貴山を経て大和側の三郷へくだってゆく。 尾根の上に出たところで東から登ってきた亀の瀬・三室山からの道とクロスする十字路から北東に延びる尾根すぐの小さなピークが御座峰。十字路から 100mほど北に行った左手の上がり口をまっすぐ 50m ほど登ったところが御座峰

雑木を刈り込んだ小さなスペースに「御座峰」の碑が立っていました。





北東側 大和平野が一望

南東側 葛城・金剛の山が重なって見える

「風神 龍田神」が降臨した御座峰からの眺望

集落の人によると ここに たたら場があったという人もいて、 地面に磁石をはわせたり、目を凝らせて 鉄滓がないか 見ましたが ありませんでした。

でも この御座峰は 南に河内平野 北に大和平野を見渡せる頂「風神 龍田神」が降臨したところ。

河内平野から雁多尾畑の谷を吹き上げる風の頂上部で、周辺には豊富な山の木々があり、亀の瀬の谷には捜し求めていた鉄原料がある。

ここで、渡来人たちといっしょになって 古代の製鉄を試みたとしても不思議でない。

時代は定かでないが、この周辺で見つかるという鉄滓の存在はたたら製鉄がこの周辺で行われていたことを物語る。



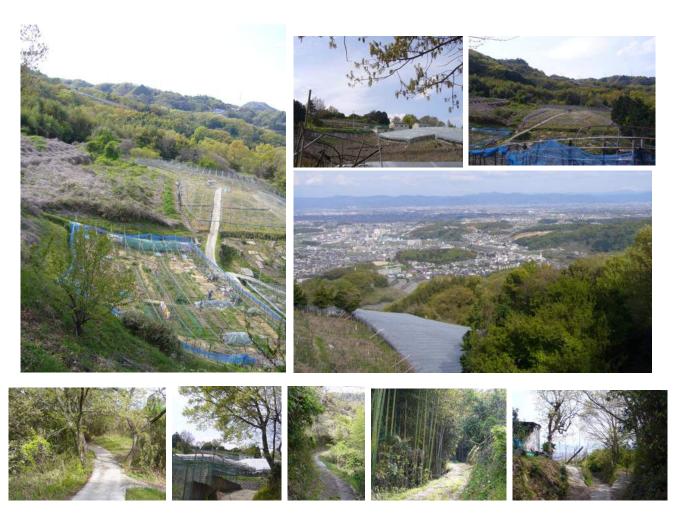
製鉄遺跡や製鉄炉跡をみたわけではありませんが、亀が瀬の地滑りがもたらす鉄鉱石 雁多尾畑の谷の製鉄 集団 そして この谷を吹きあがる風とその頂上に位置する風神 龍田神の御座峰 そして 雁多尾畑で聞 く数々の鉄の話。大和への南からの入り口 ここにも 確かに製鉄集団がいて、日本誕生黎明期の古代 日 本誕生をささえたのでは ないでしょうか・・・・。

● 御座峰から東側 急斜面を段々にして 関西では有名な 雁多尾畑のブドウ畑が広がっている 御座峰の東斜面の下が峠集落 そして 亀が瀬の地滑り地帯である。

この斜面に広がるブドウ畑への道がいくつもあり、立派な道がついているが、 いずれも麓までは通じていない。 自分たちの果樹園までである。これも 地滑り地帯のすごさか・・・

どうも 広がるぶどう畑は 雁多尾畑の人たちの所有で 下へ下る道は必要でなかったようである。

鉄滓が落ちているかも知れぬと聞いて この中に入り込んで 下ってゆけば、どこかで、三郷から御座峰への古 道 南路・中路どれかの道に出れると思いましたが、ここもやっぱり、カール状。隣の方へはトラバースできず、 まったくのはずれ。道標がまったくないので、迷路。下まで降りられそうで、結局 降りられませんでした。



ぶどう畑が広がる御座峰東側 急斜面の中に入り込んで、

2007. 4. 20.

雁多尾畑の集落を抜けて尾根上り詰めたところで そのまままっすぐ尾根筋を北東へ行くと御座峰。

東へ下ると亀の瀬へ下りてゆく道。 この亀の瀬に下る道を100mほど留所の峰の横まで行って、そのまま下らず、北から伸びてくる枝尾根筋を降りるのが、古道龍田越中路であることが、後でわかりました。

御座峰へ行く途中に古い道標があるところから古道に入れると思ったのですが、この古道龍田越 南路はどう も 雁多尾畑の人たちが、自分たちの畑・果樹園までの道を整備していて、それよりも下側は畑が荒れて消えて しまっている。

今回のwalkは 河内から大和へ入る入口 大和川・亀の瀬がどんなところなのかを見るのが主。

竜田越のルートを確認するつもりで、雁尾畑の山越をしたのですが、この龍田山の河内側の麓 大県が古代山と 王権を支えた大製鉄鍛治工房であるのは知っていましたが、こんなに広く古代たたらの痕跡が伝えられていると は考えていませんでした。

今回は もう 午後 4 時近くになってきましたので、朝 龍田神社の宮司さんに聞いた御座峰から 龍田大社の 磐座を経て降りる古道をあきらめ、雁多尾畑・御座峰から、しっかりしたドライブウエイが続いている信貴山へ 久しぶりに行って そこから三郷町の龍田大社へ下ってきました。

道標もなく、迷路のように枝尾根に果樹園が広がり、集落を離れると人もいない。

里山も馬鹿にするとえらいめに会いそう。

「もう一度 竜田越 今度は「たたら」を意識して しっかり 竜田越の尾根筋を下からあるこう。 また 留所の山にも入って、亀が瀬の地滑り防止地帯の鉄もしっかり見てこよう 」と。

この龍田越と古代鉄の関係については ほとんど奈良側の三郷町で聞くことが、できませんでしたが、河内側の 雁多尾畑の集落では古代の鉄の話を色々聞くことができました。

- 1. 留所の山周辺・御座峰の山の周辺の畑では時折鉄滓が採取されるという。 御座峰にもたたら場があったという人もいて、御座峰の碑の周辺を鉄滓が転がっていないか捜しましたが、よくわからず。
- 2. 留所の山が地滑りを起こして、亀の瀬側に山の東斜面が崩れ落ちた。この山周辺にあったたたら場も一緒に崩れたらしい。 その崩れた石が亀が瀬の地滑り防止地区の真ん中あたりに積み上げられていて、鉄の塊があるという。

今回は 時間的にも遅くなったので、後日確認しましたが、たたら場がくずれた石というのはともかく、磁石に引っ付く石もありました。 亀が瀬で石や砂鉄があるのもうなづける。また、後日 柏原歴史民俗資料館に電話で亀が瀬の石・鉄滓について問い合わせると間違いなく鉄滓や鉄分を含んだ石がある。しかし 鉄滓の年代は少しあたらしいかもしれない。また、今の地滑り工事で地下 100mm 近くまで、垂直に掘るとその過程で、砂鉄の鉱脈にぶち当たって、鉄を含む石が掘り出されるので、それらも混じっていると聞きました。

3. 「雁多尾畑」のルーツは製鉄集団と何度か聞きました。

「古代から朝廷に仕えていて、年貢は常に朝廷 明治になっても天皇直属の部下の時代が続き、 近衛兵だった。」と。

「雁多尾畑」は「狩人」つまり「山中深く分け入る人 山中に入って 金属精錬にかかわった人 たち」がルーツと。 したがって、集落が麓というより、尾根の上の方にあり、麓との関係が薄 いのもこの流れと理解しました。

また、柏原歴史民俗資料館の話によると雁多尾畑の製鉄集団は大県の後の時代で 大県の集団 が谷を遡って、 雁多尾畑に移って行ったのではないか・・・と聞きました。

2007. 4. 20. 御座峰から信貴山への道を歩きながら

2.4. 帰路 雁多尾畑・御座峰から信貴山へ

雁多尾畑から大和側の三郷の町へ出る整備された現在の車道は亀の瀬へ下って、大和川沿い対岸を三郷へ出る道とこの尾根の上を北東に信貴山・本堂へ出て、そこから、王寺・三郷へ下る 雁多尾畑集落を南北に貫くのが本道である。 北へ 右手の大和川側の深い谷を眺めながらあるく。随分遠回りで、距離がながい。1 時間以上かかって、信貴山毘沙門天にたどりつく。

この雁多尾畑の集落は大和側の三郷の町とは亀の瀬経由か信貴山経由となり、すぐ下に見えているのに まっすぐ 三郷の町へ降りる道はなく、話を聞く印象も大和側とはつながっていない。それだけ厳しい山であると理解できる。



2007.4.20. Mutsu Nakanishi



御座峰の大和側東斜面の谷間に広がる葡萄畑から信貴山を眺める

信貴山縁起絵巻で有名な信貴山毘沙門天本堂







雁多尾畑から尾根の上を北東の信貴山・本堂へ向かう道で この深い山中の尾根の上にもぽつぽつ集落がある 今は広いドライブウエイではあるが、古代からの古い道筋であることがわかる

● 信貴山 毘沙門天

信貴山へ行くのはもう何年ぶりだろうか・・・・

信貴・生駒電鉄に乗って 信貴山下から、長い信貴山ケーブルに乗った記憶がある







信貴山毘沙門天 本堂



旧信貴山ケーブル跡の遊歩道 三郷への下り道 素晴らしい静かな遊歩道になっている

3. 龍田神の道を三室山から御座峰・留所の山へ 2007. 4. 29. 古代たたらの痕跡を捜す



三郷 大和川の土手から見た龍田山左端より 留所の山三室山御座峰 2007.4.29.

前回 御座峰から降りることができなかった三室山から三郷・龍田大社への道を逆方向に龍田大社から御座峰・留所の山に登って、留所の山が崩れた亀が瀬の方に下って、雁多尾畑周辺で色々教えてもらった古代たたらの痕跡を探す

- 1. この龍田大社から三室山を通って御座峰へ至るルートは古代龍田越の本道。御座峰を越えて古代鉄集団の雁多尾畑の集落を河内側へ下って行く。
 - かつて、風神龍田大社はこの道筋の三室山を越えたところにあり、今も数々の磐座が残っている。
- 2. 御座峰・留所の山を中心に河内側の谷に広がる雁多尾畑はこの谷を吹き上げる風を利用した古代製鉄集団の集落という。

そして、今も雁多尾畑の畑や留所の山から鉄滓などが見つかり、また地滑りで崩れ落ちた鉄滓が亀 の瀬の地滑り地帯で見られるという。

河内大県の大鍛治工房や雁多尾畑で作られた鉄・鉄器がこの道を越えて大和へ この竜田越の道が大和への「和鉄の道」の本道といえるかもしれない

3.1. 三郷龍田大社から三室山龍田大社元宮・磐座を経て 留所の山・雁多尾畑へ



三室山から龍田大社の元宮・磐座を通って御座峰の古道へ

谷へ降りないので、歩きやすい。 上までゆっくり歩いて1時間弱で尾根を登りきれる。

三郷駅周辺 磐瀬の杜の碑のところから 北へ 高山の市街地を山の方へ抜けたところに三室山から御座峰への登口がある。磐瀬の杜から東へ高山の新しい住宅街を抜けると三室山の展望台までよく整備された遊歩道。 その上もよく手入れされた道が龍田大社本宮・磐座を通って御座峰へ 雑木林の中緩やかな登りが尾根筋につづく。

この景色と対峙できる山の斜面の林の中に小さな磐座がいくつかある。

ここから約15分ほどで 尾根の上 御座峰の周辺に登りきれる。





三室山への登口近く形が崩れてよくわからないが7世紀前半の方墳が2つ三室山古墳1・2号墳近くにもう一つ3号墳がある。

この地は大和の入り口 龍田の関がおかれた重要地点 この地を守る豪族が配されていたのだろう







よく整備された遊歩道をぶらぶら30分ほどで三室山展望台大和の国が一望それにしてもコース案内板がなく枝道も多く解りにくいのがたまにキズ

● 龍田古社の磐座群

なだらかな尾根道の雑木林の中を歩いて、三室山展望台を抜けると、龍田本宮跡。

現在は山裾の三郷駅近くの市街地にあるが、元はこの尾根道の三室山を越え多と頃にあった。 この道がかつての龍田社への参道であった。

先日 雁多尾畑から途中まで下った武道畑は この尾根筋の北西側。 谷筋の厳しい起伏道と比べると雲泥の差。

なだらかで 歩きやすい。 この道なら、古代も安心して 雁多尾畑の 峠まで登って、河内側へ越えられただろう。

登口から、約30分。 よく整備された遊歩道から展望台からは山道となるが、少し尾根をのぼると 斜面の木々が切り開かれて、ぱっと視界が開け、

大和川・大和が一望でき、その斜面に背後の杜につつまれ、眼前の大和の 景色と対峙するかのように磐座が点々。

一番手前に龍田大社本宮跡と記されていた。









尾根筋道の南斜面上の龍田本宮跡 周辺

南側には樹木が切り払われ、大和川・三郷の町の向うに大和川が広がっている 2007.4.29.





眼前に大和の大パノラマ 尾根筋道の南斜面上の龍田本宮跡







龍田大社本宮跡背後の森に磐座が点々静かな隔絶された空間 神山の厳粛な雰囲気が漂っている 2007.4.29.





龍田大社本宮跡 磐座が点々と続く森を上ってゆく古道静かな神山の厳粛な雰囲気が漂っている

磐座が立ち並ぶ森の中を登りきると道はなだらかになり、空が開ける。もう雁多尾畑の尾根の頂上部に近く、点 在するブドウ畑の向こうに電波塔のある留所の山が見え、その方向へなだらかな道が続いている。

雁多尾畑の尾根を桜でうずめる桜の園運動を展開している人たちの植樹地の一つで、せっせと雑草を刈り込んでいる人がいる。 登り始めて、初めて出会う人である。

先日 雁多尾畑で聞いたこの周辺のたたらの話をベースにこの古道周辺で鉄滓が落ちている場所や御座峰のことなどをたずねる。

「話は聞くが、自分はしらないなあ・・・・。

雁多尾畑の金山彦神社の宮司さんがそんな鉄の塊保管されていると聞くよ。

でも この留所の山周辺と違うかなあ・・・。

ただ 亀の瀬の地滑り防止対策地の真ん中に岩が集められているが、それは 鉄の岩だよ 」と。

地図を出して、「地図に亀が瀬の鉄の岩の位置を記してもらう。」

なんせ きっちりしたマップ・道標がないので、人に出会ったときに きっちり教えてもらわないと解らなくなってしまう。

やっぱり、雁多尾畑の人はみんな 昔 留所の山にたたら場があって、それが地滑りで亀が瀬の方へ崩れたという。









空が開け、電波塔のある留所の山が見えてくるともう尾根の頂上部 2007.4.29.

● 尾根の上留所の山と御座峰の間の雁多尾乗越周辺







北側 御座峰 北東側ブドウ畑の奥に信貴山が見えるすぐ横留所の山への登り道

留所の山の小さなピークの下のところで、東から登ってきた亀が瀬からの車道とぶつかると尾根の頂上部。 北 に御座峰がブドウ畑越しにみえ、その向うに信貴山のこんもりした山が見えている。

すぐ横 新しく切り開かれた墓地の横から 留所の山への道が見えているが、東に車道をまず尾根の頂上部 河内と大和の乗越部へゆく。

乗越の十字路の北西の角の石垣に囲まれた上の小さなピークが御座所の峰で、この石垣に登れば、南東の河内側 雁多尾畑から登ってきた谷筋から河内平野 そして 葛城・金剛の山並みが一望である。 またこの御座峰・留 所の山が北に伸びる生駒山地の南の端でここから大和川亀の瀬に切れ落ちている。

雁多尾畑からの谷の上 十字路の石垣の上に立つとやっぱり 谷を吹き上げてくる風が強い。

風神 龍田の神が降臨したところ この風はたたらのためには古代必須だったろう。

日本のたたら製鉄でしっかりとしたふいご構造が持ち込まれるのは、8 世紀。 それまで、山や丘の頂上部にあったたたら場が山腹に下りてくる。

鞴がしっかり装着されるまでは 自然の風が製鉄には必須であった。たたらの集団が風神を祭った由縁であろう。 また、平野部からは孤立したこの尾根にかつての雁多尾畑製鉄集団の大集落が今も残り 尾根の上にかつて金山 彦・金山媛寮神社が祭られていたとの伝承も

すべてこの風による。

しばらく、周りを見回しながら 風に吹かれていました。

【尾根の頂上部 河内と大和を結ぶ南北乗越道と東からの峠集落・亀が瀬からの道の十字路】



尾根の乗越手前の道が亀の瀬から登ってきた道



中央の御座峰の下 雁多尾畑から信貴山への道が越えてゆく



乗越から雁多尾畑の集落の中へ下って行く道

● たたら場があったという留所の山 今は雑木が生い茂る金網の中

十字路から亀が瀬への車道を少し戻って、留所の山への小道を南東側へ回り込む。丁度 亀の瀬の地滑り地帯の 山の上である。

この留所の山を挟んで、裏側が雁多尾畑の集落で 昔は この山の中に広場があり、よく遊んだと聞きましたが、 今は金網に囲まれ、立ち入り禁止になっていて、雑木が生い茂っている。

金網に沿って、金網の中を覗き込みながら、入り道を探すがなし。金網の中も 少しあるいてみましたが、雑木林の中 雑木・雑草が生い茂り、完全に道は消えている。

金網に沿う狭い小道の反対側は垂直に切れ落ちていて、木々の間から、亀の瀬の地滑り地帯が見え、金網の中の 林から下へ地滑り地帯の検知・測定器が組み込まれたパイプだろう。下へ数箇所伸びている。 小道の端で金網 が西に曲がって雁多尾畑畑の淵を取り囲み、反対側は地滑り防止地区への垂直に近い急な石段が降りている。

ひょっとしたら、鉄滓があるかもと期待していましたが、だめでした。 階段をおりれば、そのまま地滑り地帯 へ降りれますが、御座峰からの昔からの道 峠集落への道から、亀の瀬の地滑り地帯へ入りたくて、もう一度十字路の方へ引き返し、亀の瀬への車道を歩く。



留所の山は東が地滑りで垂直に亀の瀬・大和川へ滑り落ちて急な崖 2007.4.29.



頂上部は地滑り防止対策の景気などがおかれ、柵で中に入れないかつて運動場があったというが 雑木が生い茂り、まったくわからない 2007.4.29.

留所の山の中で鉄滓を拾ったことがあると聞きましたが、まったく捜しようもなし。

■ 留所の山の下亀が瀬の地滑り対策地に降り、鉄探し







留所の山の横から亀の瀬へ下る車道

2007. 4. 29.

亀の瀬への道を地滑り防止地帯へ下って行くと 防止地帯の真ん中あたりにごろごろ鉄滓があるという。 前回は 亀の瀬へ降りるため、この地滑り防止地帯の中心部に入らなかったので、きずかず。

留所の山の横から亀の瀬へ山腹を斜めに下って行く立派な車道を歩く。 道がいいので、苦にはならないだろうが、やっぱり傾斜がきつい。やっぱり随分山の上に上っていたことを感じる。大和川へ落ちる尾根の山腹を斜めに巻きながら地滑り対策地へ降りてゆく。留所の山から垂直に切れ落ち、園土砂で、少し高台となり、さらに下へ崩れ落ちている。 その丁度真ん中の高台のあたりの地滑り帯の縁に出る。峠集落へはそのまま下ってゆくが、高台をトラバースしながら地滑り対策地の真ん中を下る道に入る。

氷河が山を削り取ったカルスト地形とまったくおなじすり鉢状の地形が広がっている。

この地層に 100m もの深さの杭を何本も掘り込み地滑り層をとめ、水抜きパイプも切りめぐらして、その監視網を張り巡らしている。 地滑り防止地区と知らなかったら、素晴らしい草地の景色である。







地滑り地帯から見上げると留所の山からパスッと崩れた様子が良くわかる 2007.4.29.

 ● 再度 留所の山の地滑り部の縁を頂上部に登って、たたらの痕跡さがして萎こぎ 草地の中 取り囲む留所の山の頂上部の端へ登ってゆく、道が見えたので、 この草地の上から眺めようと 車道を歩く。 後ろから来た軽トラから「どこへ行くのだ」との声がかかる。 この道は留所の山の南肩を越え て、狩多尾畑へ入る道だという。

また、「留所の山の端のところから 確か金網の中に道があり、 鉄の塊や大きな石が数個あるところへ 行けるばず」と聞いて、再度 挑戦しましたが結局だめでした。











先ほど上から見た留所の山の頂上部まで再度 崩れた縁を登る 2007.4.29.

















再度 留所の山の金網の中 歩きましたが やっぱり 道は消えてなし

地滑りした縁をまっすぐ そのまま登り、頂上部に出て、頂上部を取り囲んだ柵の中に入って、藪の中あちこち歩き回るのですが、つい 数十年前まで 運動場や生活の痕跡があったなど、まったく解らない。ましてや 鉄滓が落ちている場所など論外で、30 分ほど薮のあちこちを歩き回って撤退

● 地滑り防止地帯の中央の石の集合場付近で鉄滓を捜す

再度 地滑り地帯の高台へ戻って、 地図を広げて、朝 教えてもらった岩石が詰まれて置かれている場所を探す。 中段の高台部から、さらに下って行く車道のそばに 2 ケ所ほど 岩石が詰まれた場所が見える。

あんなに……???? これは鉄滓の類ではない。岩 石で、たたら場のものではないだろう。

本当なのか 半信半疑でしたが、地滑り防止対策地 区にまぎれもなく磁石がひっつく岩がありました。 火山活動の灰と礫が一緒に降りそそいで形成され た岩石で均一な石の塊でない礫岩・礫性凝灰岩の 類と普通の岩石など 大きく分けると二つの種類。

そのどちらの中にも磁石に引っ付く石がありました。 地滑り 但しその素性は良くわからないということのようですが・・・・。



地滑り防止対策地区に積まれた岩石

集落で話を聞いて、 山上のたたら場が落ちた残骸から出た鉄滓がいっしょに見つかること期待していたのですが…見つかりませんでした。





地滑り防止地区のど真ん中に積み上げられた岩石の山 その中に強くはありませんが、磁石の引っ付く塊が沢山ありました

この対策工事時にこの周辺での岩があつめられたものといわれていますが、地下から掘り出されたものを含め、 留所の山が崩れたときに 一緒に山の上から落ちたものという







礫性凝灰岩上の岩 いろんな岩が混入し磁、部分的に石の引っ付く岩がある





普通の石ですが、磁石を近づけるとくっつきました

磁石を近づけると反応して引っ付くもののごく普通の岩石・礫性凝灰岩状の岩いずれも引っ付くものがありました。 この周辺には 鉄の鉱脈があり、今でもこの地滑り防止工事の地中から鉄鉱石が掘り出されることがあり、 磁石が引っ付く岩石はそれかもしれません。

この地滑り帯の地滑り面を項制夷するのが、水を透過しない礫性凝灰岩層といわれ、

その面を貫いて穴を開け、楔を造ることが行われており、2種類の岩があるのはそのため可も知れません。



留所の山の崩れた中央部の下のほうには放置されたままの岩石がゴロゴロ





留所の山の崩れた中央部の下のほうには放置されたまま ところどころに ゴロゴロ 留所の山の電波塔から まっすぐ下へ 帯状に岩石が散らばっていました

積み上げられた岩石のところばかりでなく、下りてゆくと集められず、そのまま放置されている岩石がごろごろありました。

前回この付近を歩いた時には この地滑り防止地帯の中深くは入らず、峠集落から亀の瀬の川に下りてしまったので、気にも留めずに 見過ごしたのですが、雁多尾畑の集落の人に「鉄の塊」だと教えてもらって本当にびっくり。 「鉄の塊」はちょっとオーバーですが・・・

柏原民俗資料館によると亀の瀬で見つかる岩や鉄滓のルーツははっきりしないところがあり、見つかる鉄滓も 意外と年代があたらしいとの見方があるとききました。

この磁石に引っ付く石の塊を見ていずれにせよ この龍田山周辺で製鉄が行われたのは事実なのだと。 こんな山崩れがおきて、 製鉄原料がむき出しになって、それが古代この地で見つかって、谷を吹き抜ける風と 都あいまって、製鉄がはじまったのでは ないだろうか・・・。

瀬戸内海から大和へ入る古代の入り口 大和川・亀の瀬とこの亀の瀬をさける山越えの道を調べるのが、目的でしたが、その古道がそっくりそのまま製鉄集団が歩いた道。

大和への古代の鉄の道 この龍田山で大阪湾から吹き上げる風を利用して鉄を作り、その頂上部周辺に「風の神」「製鉄神」を祭ったのだろうか・・・。 それが、龍田山に残る龍田大社と磐座群 そして雁多尾畑の集落の谷にある金山彦・金山媛神社なのでしょう。

古代のたたら伝承ではいつも 鉄原料がどこか・・・・よくわからないことが多いのですが、ましてや 初期の鉄鉱石精錬ではその鉄鉱石の出所がわからない。 でも この亀の瀬では どうも 地滑りにより、崩れた山の中から 鉄鉱石が露出していたのではないか・・・・ その鉄を原料に渡来の製鉄技術集団たちと一緒になって、製鉄自給の試みが 雁多尾畑の尾根のどこかで行われたのではないだろうか・・・・

まったく 根拠のないも妄想かもしれませんが・・・・・・ 地すべり地帯のすごさと共に たたらの山の謎が解けたようで、びっくりする展開でした。 やっぱり、でかけてみないと解らない。

古墳時代 初期大和の黎明期 大和への入り口は 紀ノ川・吉野川 大和川 そして 淀川・木津川の3ヶ所。 大和に邪馬台国があったとして 卑弥呼が通った道はどこだろうか・・・・・・・

この 3ヶ所 の入り口近く 渡来の製鉄集団と関係した大製鉄工房がある。 この道はいずれも「大和と朝鮮半島をつなぐ鉄の道」ではないか・・・・

軽い気持ちで 訪ねた大和川 龍田山・亀の瀬渓谷 地滑り地帯と鉄との関係 本当に 驚きでした。

また 古代人が愛し、何人もが歌に詠んだ紅葉の 「龍田川」は 龍田の森が広がる三郷から亀の瀬あたりまでの 古代の大和川亀瀬渓谷の流れであったこと また、今も地滑り防止の大工事・地滑りとの戦いが続いていることも知りました。

いままで、電車ですっと通り抜けていた龍田山・亀が瀬渓谷 違った目でみなければ・・・・・

2007. 4. 29. Mutsu Nakanishi

10

日本三彦山の一つ 越後 弥彦山 Walk 2007.5.16.

古代の鉄」の国「越」 越後 弥彦山に鍛治神の痕跡を探して



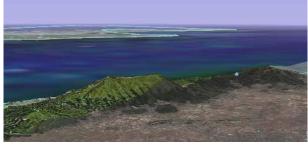
- 1. 日本三彦山の一つ 越後 弥彦山 Walk
- 2. 越後平野の不思議な地形 謎の越後平野 (資料)
- 3. 弥彦山と鍛治神伝承 (資料)

日本三彦山の一つ 越後平野の稲穂の中にぽっかり浮かぶ信仰の山「弥彦山」

越後平野の稲穂の中にぽっかりと浮かぶ弥彦山 標高 638m と低いのですが、越後平野の海岸に立ち、越後平野や海のどこからでも見える山で古くから信仰を集めた山である。 隣の峰続き多宝山・634mと双耳の峰を有する独立峰で、深田久弥著「日本百名山」は「山 高きをもって尊しとせず。だが、ある程度の高さが無くては、私の指す山のカテゴリーには入らない。例えば、越後の弥彦山や、京都の比叡山や、豊後の英彦山など、昔から聞こえた名山には違いないが、あまりに背が低すぎる」とあとがきで書いている。

また、九州の英彦山 播磨の雪彦山とあわせて「日本三彦山」と呼ばれ、これらの山の周辺では古代から金属を求めて「山師」が山中に分け入り、金属採掘・精錬 特に「銅」と関連が深い。弥彦山にも銅を採掘した跡(北側の多宝山山麓の間瀬銅山など)や数多くの鍛治関連伝説が残され、弥彦山「弥彦の神」は鍛治と関連した神(谷川健三著「鍜治場の母」など)といわれる。





ゆっくりと一度は歩いてみたい山でしたが、やっと実現です。

5月15日 柏崎に出土した古代の製鉄コンビナート軽井川南製鉄遺跡群を見て、JR長岡駅前のビジネスホテルに泊まる。

長岡に泊まっておれば、簡単に行けると思っていましたが、大間違い。車でない と厳しく、昔から頭にあった「新潟県の交通網の不思議」を思い出しました。

北陸から苦労して海岸線を通ってきた汽車は 広大な越後平野を目前に、柏崎で 90 度 内陸側に折れ曲がって、しかも内陸側の越後平野の縁の山裾を走る。

また、さほど遠くない海岸にも越後線が走り、おまけに、新潟市へは新津から盲腸線ではいる。 北陸や東京から東北へ向かう北の特急は新津からそのまま北へ向かい、新潟には入らない。

東京-新潟を結ぶ上越新幹線も 後から出来た為でしょうが、越後平野の長岡にはい



ると、今までの鉄道網を無視するかのように まっすぐ新潟へ越後平野の中央を横切って行くのである。 燕・三条駅など電車に乗り換えようとすると大変です。

(なお、燕・三条は 自動車道網では北陸自動車道が通り、非常に便利がいい。 まさに古い鉄道網から —新幹線・自動車道の体系に組替えられているのが新潟です。)

「何でこんな不思議が・・・」と思うのですが、昨今 衛星写真が発達して、空から見る地形図見ると実に面白い。越後平野をその衛星写真で見ると実に不思議な地形が次々と見えてくる。

弥彦山の山塊もなぜか 広大な平野の中、本当に狭い幅で日本海沿岸にへばりついて、山地が延びている。 また、信濃川が海岸への出口を求めて、越後平野をのた打ち回って流れるさまも面白い。 新潟の地形の成り立ちを知らないと本当に不思議なところ。

今回 私の知らなかった疑問を少し調べましたので、別項でお話します。



越後の地形は海岸・平野・山地いずれも南西から北東に流れ、川を中心とした末広がりの平野でない。

衛星写真で見る信濃川も新潟市が河口のた打ち回っていますが、河口の幅は小さく、広い川幅を持つ阿賀野川とは対照的。

柏崎の北の海岸にへばりつく越後・東頸城丘陵にみる魚の骨のような不思議な地形。この中を越後線が走る

衛星写真に見る越後の不思議な地形と交通網

弥彦山の上からそんな不思議な地形がどうみえるのか?????

ちょうど 米どころ新潟は田植えの季節 水田に水が入り、広大な越後平野全体が海となって、きらきら太陽に輝く姿がみられるだろうか?????

また、弥彦山と古代の「銅」の関係は日本三彦山の関係から解るのですが、古代鉄の国「越」で、その越後で本当に古代「鉄」の痕跡がみつかるのだろうか????

イメージをいっぱい膨らませての 日本三彦山のひとつ 弥彦山への walk

標高 638m の低い山でしたが、気持ちのよい新緑の山歩き。しかも さえぎるもののない360度の素晴らしい展望。古代越の国に思いをめぐらせながらの楽しい walk でした。

また、「越後は筒石 親不知 ひゅるり~ ひゅるり~ 風が吹くだけ(倍賞千恵子が歌う NHK 深夜便「冬のたび」)」のメロディーと中越大地震の被災の様子が頭をよぎっていましたが、それらが、大古から背負ってきた越後の自然との戦いの歴史であり、土地の人たちの語り、教えて抱いた明るい姿にも ほっとした旅でもありました。

1. 日本三彦山の一つ 越後 弥彦山 walk

5月16日朝 快晴 眠気まなこで5時39分発新潟行の普通電車に乗る。東三条で弥彦線に乗り換えて弥彦まで1時間。 この電車を逃すと次は弥彦に着くのがずっと後になる。新幹線で燕·三条駅に出る方法もあるのですが、時間的には差がなく、やっぱり、弥彦線に乗らねばならない。長岡から斜めに越後平野を横切れば早いのですが、そんな便利なバスもなし。

朝が早いので、車内にはほとんど人影なし。車窓からは左手に上越から奥只見の山がうっすらかす、反対側の車窓からは田園風景の向うに弥彦山が双耳の峰を見せている。双耳の峰の左が弥彦山 右が多宝山 そして、一番左

端のずっと低い山が国上山 いずれも古くからの弥彦信仰の山々 これらを総称して弥彦山と呼ばれることもある。この山塊の右 新潟市に近いところにもうひとつ春の花の山角田山が弥彦に重なって見えている。

日本三英彦山の一つなので、もっと荒々





しい男性的な山かと思っていましたが、関東平野に浮かんで見える筑波山と同じ感じである。東三条で乗り換え、市街地を抜け、信濃川をわたると、まっすぐ正面の弥彦山に近づいてゆく。

三条・燕の市街地を抜けるとまたのどかな田園地帯。ゆったりとした気分で ついつい眠りこけて、ふっと車窓を見ると大きな赤い鳥居が家並みの中に見え、赤く柱が塗られた駅舎が見え、寝ぼけて反射的に飛び降りる。

弥彦駅の一つ手前の無人の「矢作駅」でした。



弥彦線矢作 英彦山神社の赤い鳥居が見える

まだ、「朝は早いし、歩いて弥彦の街へ入るのもいい」と田園地帯の中、まっすぐ弥彦山へ向かう街道を歩きだす。 山が低いこともあるのですが、弥彦の山は田園地帯からいきなり、弥彦山がそびえている。







弥彦の一つ手前 矢作の集落から弥彦への街道が まっすぐに田園地帯の中を伸びている 正面左手手の峰が弥彦山 その右にロープウエイの駅も見える

30分ほど歩いて、小さな坂を越えると弥彦の街。

弥彦山山麓の傾斜地緑に包まれた弥彦の街が広がっている。

「弥彦の神」を祭る弥彦神社の門前町であると共に、弥彦温泉の街。 弥彦山が古い火山であることを思い起こしてくれる。旅館や土産物屋などが並ぶ中心街の坂道がまっすぐ山へ向かって伸びている。

朝が早いのとシーズンオフでほとんど人影なし。もっとケバケバした街かと思っていましたが、落ち着いた静かな門前町。弥彦神社への街道筋をそれて、JR弥彦駅にゆく。雑誌やTVで何度も見た印象の強い赤い神社建築の駅舎。 この赤に寝ぼけてしまったのである。街道筋に立ち並ぶ観光地の家並みを眺めながら、弥彦神社へ坂道を登る。



弥彦の街への入り口 2007.5.16.

弥彦山の頂上には弥彦神社の奥社があり、弥彦神社の奥から登山道がついている。また、ロープウェイも同じである。今日はできれば、糸魚川まで行きたいので、登山道を登って帰りはロープウェイのWALK計画

ふと道際の料理屋の軒先を見ると腹を開いた 「鮭」が何本も軒先にぶら下がっている。岸田劉 生の「鮭」の絵はもっと北の村上市であるが、ま ったく同じ光景である。そういえば、昨日夜 入 った郷土料理の店でも 鮭そしていくらが出て来 て、「なんでやねん」と思っていましたが、越後 の川には鮭が遡上し、確か信濃川の上流 長野県 の千曲川に鮭を呼び戻す。

運動をしている市民グループの話を読んだ記憶がある。関西では見られぬ景色でした。

■ 早朝静かな街を弥彦神社へ

まだ、人気の少ない街中を弥彦野山にまっすぐ近づいてゆき、弥彦神社への案内 板にしたがって、右へ折れると正面に赤い鳥居が見えてくると弥彦神社の入り口の正面 位置の鳥居前。 鳥居に「弥彦神社」の金文字の額があがり、背後には 緑の森が広がって、そのコントラストが美しい。







JR弥彦駅

弥彦神社への広い道路

料理屋の軒先につるされた鮭









弥彦神社 一の鳥居前の家並み

弥彦神社の赤い鳥居をくぐると 緑に包まれた静寂の世界。

石畳の参道の向うに社殿に向かう。まっすぐに立ち並ぶ杉林の中 右に折れて石の二の鳥居をくぐると綺麗な随神門がみえ、弥彦山を背に門の奥に拝殿の姿が見える。随神門をくぐると正面に堂々とした拝殿が見え、その後ろ左手に奥宮のある弥彦山の頂上がみえる。弥彦山は双耳峰であり、この山全体が信仰の対象だったのだろう。拝殿・社殿はこの双耳峰の山を正面から拝むようになっている。

この弥彦神社の創建年代は詳でないが、社記によると和銅4年(711年)、詔により神域を拡げ社殿を造営し、延喜式に名神大社と記されている。祭神は金属精錬と関係の深い天香山命で、越後国開拓の詔を受け、越後国の野積の浜(現長岡市)に上陸し、地元民に



漁労や製塩、稲作、養蚕などの産業を教えたと伝えられ、越後の国を造った神として弥彦山に祀られ、「伊夜比古神(弥彦神)」と呼ばれて崇敬を受けている。







本殿に向かう杉林の中の参道

舞殿

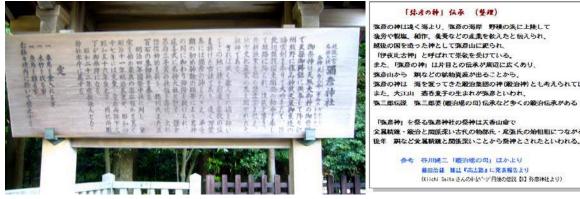
随神門





弥彦神社 拝殿と背後 弥彦神社の神域弥彦山 2007.5.16. 左弥彦山頂上に奥宮がある 弥彦山は双耳峰であり、この山全体が信仰の対象だったのだろう。

拝殿・社殿はこの双耳峰の山を正面から拝むようになっている。



「外方の神」 伝承 (整理)

弥彦の神は遠く海より、弥彦の海岸 野種の浜に上陸して 強労や製塩、稲作、養養などの産業を教えたと伝えられ、 越後の国を造った神として弥彦山に祀られ、 「伊夜止古神」と呼ばれて崇敬を受けている また。「弥彦の神」は片目との伝承が周辺に広くあり、 また、大江川 直各童子の生まれが弥彦といわれ、 第三郎伝説 第三郎婆(鍛冶場の母)伝承など多くの鍛冶伝承がある 「弥彦神」を祭る弥彦神社の祭神は天香山命で 全属精錬・鍛冶と関係梁い古代の物部氏・尾張氏の始祖祖につながる。

参考 谷川健三「鍛冶場の母」ほかより 建田治建 雑誌『高志路』に発表報告より (Kitchi Saito さんのかふ^・)・円接の伝説【6】外彦冲社より)

弥彦神社の由来と弥彦神伝

弥彦山の頂上 へ

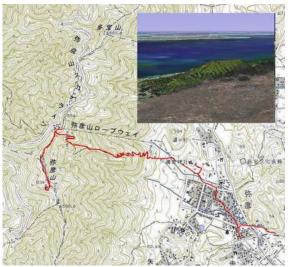
弥彦神社の拝殿のすぐ横から神社を抜けて左手の林の中に入った ところから、弥彦山山頂まで約1時間 良く整備された登山道が 続いている。

奥社のある山頂への参道でもあり、石の鳥居と赤い神橋がかかっ ていて、山頂に向かって登山道が続く。すぐ右手北側の谷筋に口

ープウエイがかかっている。

地図で見るとまっすぐ尾根 筋をつづら俺の道が続いて ロープウエイの駅の横の稜線 に出る高度差約500mの登りで ある。













弥彦山への登山口周辺 頂上に弥彦神社の奥社への参道で9合目まで標識が整備されている

入り口からすぐに林の中の急な登りが続くが、先がわかっているので、気楽なものである。

ジグザクの上り坂が続くが、淡い新緑の緑が心地よい。

時折、木々の間から、ちらちらと眼下に広がる越後平野の水田が輝いている。

登りだして 30分ほどで4合目を過ぎ、五合目に差し掛かると、頂上部の稜線上にあるロープウェイの駅の辺りが見え、ロープウェイのかかっている谷のすぐ横の尾根を登って、やっと半分か。



弥彦山 登山道の緑 2007.5.16.

林の中の斜面を抜け、尾根筋に出たところに石の鳥居があり、道は尾根を越えて、反対側に巻き道になって、少し下っている。ここが五合目。見ると尾根筋にロープが張られ、尾根通しを待つすぐ上って行くルートもある。 参道はどうも随分下ってから巻き道になっているようなので、ちょっと 昔の荒々しい山道も味わいたいとそのまま、直登の尾根通しを行く。

ロープを便りの岩を乗り越え、乗り越えのルートでしたが、眼下に越後平野を眺められ、20分ほどで左手からの巻き道と合流して、程なく9合目の標識のある稜線に出た。







五合目の上周辺から見る越後平野 2007.5.15.



丁度双耳の峰の間で、左へ行くと弥彦山 右側は ロープウエイの山頂駅から多宝山へと続く稜線の道。 ここで、初めて日本海側が見える。ロープウエイ駅までもどるが、海を隔てて 西側に浮く佐渡は残念なが、うっすらと島影が見えるのみで、よく見えませんでした。



稜線へ登りきった9合目



弥彦山 稜線から見た日本海側 海の向うにうっすら佐渡 海岸沿いの砂浜は 田ノ浦・間瀬へと続く海岸 この周辺山腹からは銅が出たところ



南側の峰 弥彦山



日本海 佐渡遠望



北側の峰 多宝山

ロープ ウェイ山頂駅のある山頂公園で

弥彦山がここでそのまま西の海に没しているのが見える。南側にはアンテナの乱立する弥彦山 そして、北側には きれいな円錐状の多宝山が見え、日本海側の山腹を縫って登ってきたドライブウエイも見える。

見下ろす海岸沿いは 銅など鉱物資源が採掘・精錬に携わった精錬鍛治集団が海を渡ってきたところで、この弥 彦山が「弥彦の神」と崇敬される数々の伝承を持つところ。古代数多くの山師たちがこの山中を渡り歩いたろう。







山上公園から弥彦山頂上へ 弥彦山の頂上部には アンテナが乱立 ここが越後の中心であることを示す

山頂公園から、南へ引き返して 弥彦山山頂へ向かう。アンテナが乱立する弥彦山の頂上部 二つほどコブを乗り越え、ぱっと視界が開けたところが、南の端 弥彦山の頂上で、弥彦神社の奥社が祭られている。

そばに社務所がある鳥居をくぐり 石段をあがるとそこが狭い峰の頂で、右手に弥彦神社の奥社が祭られ、左手の狭い広場からは、越後平野から日本海が展望できる。

まっ青な空に青い海と緑の山 そして キラキラと太陽にきらめく越後平野のモザイク模様素晴らしい景色が広がっていました。

弥彦の街から頂上まで約 1時間の walk。 眼下には今登ってきた弥彦の集落 そして 越後平野をのたうつ信濃 川 季節によっては能登半島まで見えるという南には 柏崎米山をバックに出雲崎の狭い白砂の浜にへばりつく 越後丘陵。そして、海には佐渡へ向かう高速船が白いラインを描いていました。

丘陵地の緑の帯を断ち切る信濃川の放水路が寺泊海岸へ抜け、弥彦から続く酒天童子の故郷 国上山。その海岸は「弥彦の神」が海を渡って 上陸したという野積の海岸。

これら越後平野の縁には 南海岸の柏崎米山から北へ 信州・上越の山々 越後三山から奥只見の山々 そして 飯豊の山々がぐるりと取り囲んで 遠く霞んでいる。

ずっと座っていても飽きない景色でした。







弥彦山頂上 弥彦神社 奥社

■ 越後平野展望

弥彦山からの展望(1)

南側海岸沿い 雨乞い山・国上山と続き、その奥に越後丘陵が海岸沿いを柏崎へと続く・右手 越後平野長岡周辺









信濃川放水路河口 寺泊

弥彦山からの展望(2) 中央眼下 岩室・弥彦から燕三条方面





弥彦山の下に広がる越後平野の水田群 岩室周辺

弥彦山からの展望(3) 日本海







佐渡島 遠望

広大な越後平野が弥彦の向うに広がっていました。

残念ながら 佐渡島 そして 反対の内陸部 越後平野の向うにそびえる飯豊・奥只見・越後三山・上越の山々 はうっすら霞んでいましたが、越後平野の水田に水が入り、太陽に照り輝いて 素晴らしい光景でした。

奥宮の社務所につめておられる神主さんによると、この時期 越後平野に水が入ると その水蒸気で周辺の山 が霞んでしまうと聞きました。

また、衛星写真や地図で気になっていた弥彦山周辺 越後平野・海岸の地形。やっぱり、この山地をぶち抜いて流れる場所はなさそう。丘陵地ではない火山の地形・断層隆起の地形なのでしょうか 山は低いのですが、急峻な山が平野部からダイレクトに海岸に立ち上がり、そのまま海岸に落ち込んでいます。

南側の越後丘陵から北のこの弥彦山塊と海岸沿いに並ぶ山々が壁となって 海岸への流れ下る川を阻み、内陸部

の現在の越後平野の中を流れ下る信濃川に合流しつつ、大河がのた打ち 回りながら流れ下ったことが良くわかる。

本当に起伏の少ない広大な平野が内陸側に広がっているのが見えます。また、流れ下ってきた信濃川は唯一海岸へ出られそうな幅の狭い山地の切れ目がある分水町で人工的に海岸部に向かって 掘りぬかれた直角に放水路で、寺泊海岸に流されているのが、頂上からくっきりと見えました。

寺泊の南の海岸沿いを走る越後丘陵に見えるあの「魚の骨状に幾筋にも平行に広がる枝谷」どうなっているのか???? 興味津々でしたが、これも本当でした。



柏崎の北 越後・東頸城丘陵の不思議 な地形 右端は信濃川

丘陵地の真ん中背骨の平地が南 北に走り、その両側に幾重にも重 なり合って、丘陵地が並んでいる のが見えました。

泥岩を主とする山に刻まれた 枝谷がこの正体。

海の中で長く眠っていたホッサマグナの大地溝帯が地殻変動で隆起し、褶曲・断層の繰り返しの中で出来た南西から北東に伸びる幅の狭い泥岩質の山地に雨

水の流れが刻んだすさまじい模様でした。



弥彦山は日本三彦山と呼ばれるほかの二つの英彦山・雪彦山が、修験の山として険しい山であるのとはちょっと違う感じの山でしたが、広大な越後平野の真ん中に立つ独立峰。しかもその周囲の越後平野は氾濫を繰り返す大河と泥の湿地だったという。そして、低山ながらそこで、深山と同じように鉱物資源が発見され、この山を目指して 海も渡った鍛治集団がいた。

天変地異の中 どこに居ても常に変わらず堂々と立つ姿に崇敬を抱いたと考えられ、その念は日本三彦山のほか の山とも変わらない。

また 海を渡ってきたものにとっては、海岸にぽっかり浮かぶ様はすごい山と写ったことでしょう。 帰りは もう一度 山上公園に戻って そこから ロープウェイで、越後平野を見ながら山を降りる。

越後三山を含め、数々の名山 が越後平野周囲を飾っていますが、この頂上からの風景 この広大な越後平野の中央にどっしりと浮く様は、その周辺の地形のすさまじさも含め、越後平野の盟主にふさわしい。

「弥彦神」が居ます弥彦山はやっぱり存在感のある山 日本三彦山に数えられる所以と納得です。

古代 鉄の国「越」 その盟主 弥彦山 今 回の walk で はっきり鉄の道の痕跡を見つけられませんでしたが、数々の製鉄関連伝承のあることを知りました。また、越後平野のすぐ隣 柏崎では古代の 日本海側では かつて見られぬ大規模な古代の製鉄コンビナートが発掘されました。 今後 さらに 越後の鉄が日本文化に与えた影響 越後の和鉄の道が見えてくるものとイメージを膨らませています。

佐渡 そして 内陸側越後平野の向うにくっきりと浮く山並みはみられませんでしたが、念願の弥彦に上って、満足感で一杯。 ロープウエイからの広大な越後平野を眺めながら降りてきました。

フォッサマグナ帯の山と言うと日本アルプス の山々を考えますが、今回調べていて、この越後平野がすっぽりそのままフォッサマグナ帯に収まっていること、弥彦山がその中の活動で生まれた山であること をはじめて知りました。

中越地震もそんな活動のひとつだったのでしょう。 厳しい試練。

でも、自然変化の厳しい越後平野の厳しさを長年に わたり克服してきた新潟。

中越地震に立ち向ってきた話を語られるのをあちこちで聞くことが出来、気持ち的にほっとしています。 早く立ち直ってほしいと願っています。

> 2007. 5. 16. 昼 弥彦のロープウエイから 越後平野を眺めながら Mutsu Nakanishi





2. 越後平野の不思議な地形 謎の越後平野 (資料)

■ 不思議な地形 謎の越後平野











越後 広大な平野が新潟を中心に海岸に沿って広がる日本有数の米どころ そして そんな平野部の中 島のように浮かぶ弥彦山

これが関西にいるわたしたちの新潟のイメージ

でも、昔から、頭に残る腑に落ちないことがある。

苦労して糸魚川・直江津と海岸沿いを走る汽車が越後平野にかかる柏崎で突如 海岸を離れ、内陸を海岸に平行に走り、 そんなに離れていない海岸にも、もう一本線路が走る。しかもどちらも 新津で合流して、新潟は盲腸線でつながれ、 本線は北へすり抜けてゆく。トワイライトエクスプレスなど日本海側を走り抜ける特急は新潟に入らないという。 これらの日本の平行に走る線路の間を上越新幹線が新潟へ突き進む。 途中 燕・三条なる駅が2本の鉄路を結ぶよう にある。 東西に伸びる越後平野の中 交通網は本当に不思議なのである。

また、新潟は北の会津から流れ下る阿賀野川そして 信州から流れ下る信濃川の河口と思っていましたが、信濃川は 新潟では狭くなってしまって、むしろ 寺泊海岸へ付けられた放水路へ抜ける。 これもイメージが違う。

そして、衛星写真で見つけた弥彦山の南の海岸に沿って伸びる低い丘陵地・越後丘陵のまるで魚の体の骨のような地形。 もう 不思議でいっぱいである。これは 何なのか・・・・ 僕が知らないだけなのか・・・・

弥彦山に登れば 何か解るだろう。また 弥彦山は日本3彦山の一つで、古くからの信仰の山で、「彦山」と言うと金属 精錬とりわけ銅と関係が腑あるといわれているが、この平野部に鉄の痕跡はあるのだろうか???? これも 知りたい。

上 越後平野稲穂の海に浮かぶ弥彦山

- 中 寺泊周辺
- 満から流れてきた信濃川は90度方 向を変えて、放水路へ
- 下 寺泊海岸 海岸に伸びる丘陵地の 特異な姿

日本の大地溝帯「ホッサマグナ」上に堆積した泥岩質褶曲地を刻む暴れ川と海岸の波が広大な低地・越後平野を作った

不思議な地形の新潟・越後平野 そんな越後平野の海岸にほっつり 弥彦山がある

- 1. 広大な越後平野が広がる新潟 その新潟への鉄道はなぜか 内陸の新津を経由した盲腸線 なぜだろう
 - 銀不知の難所を克服しで海岸を走ってきた鉄路がなぜか 越後平野に入る柏崎で 90 度曲がって内陸へ
 - 鉄道は広大な越後平野の中を避け、内陸の山際を走りぬける
 - 海岸に扇状に広がるのでなく 海岸に斜めに並ぶ3つの丘陵地に挟まれた内陸深くに広がった特異な平野
- 2. 柏崎北 海岸沿い丘陵には 魚のあばら骨状の不足議な形で無数の谷が刻まれている こんな不思議な地形 見たことなし



新 潟 の 地 釆 南西から北東へ 平行に並ぶ丘陵・山地の間を のたうって流れ下る信漁川・阿賀野川が一つになって越後平野を作っている

柏崎の北 越後・東頭城丘陵の不思議 な地形 右端は信濃川

■ 新潟の地形の成り立ち

越後平野はそっくりそのまま日本の大地溝帯「フォッサマグナ」の上にある

これらの話が示すとおり、現在の越後平野はすっぽり、フォッ サマグナ・日本の大地溝 帯の中に収まっており、このフォッサ ママグナ帯が海底にあった時代に、泥や火山堆積物がつみかさね られ、それらが その後の造山活動で降起・褶曲・断層作 用で 地溝帯の中に複雑な幾筋もの褶曲山脈が出来た。 れらの間を流れ下る川と海岸の潮流によるラングーンの形成に より、内陸部では扇状地・氾濫 原が山の間を埋め、海岸近くで 広大な低湿地と潟が形成された。

特に越後平野の海岸部に沿って越後丘陵と弥彦山地が、流れ下 る幾筋もの川が海岸に流れ出るのを阻んだため、内陸部に広が る広大な氾濫源・低湿地を形成した。





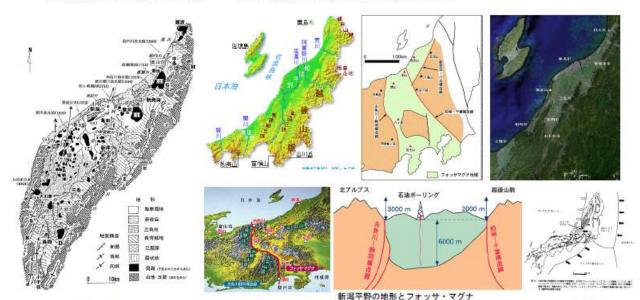


また これら泥岩質の山地・丘陵地には数々の断層が複雑に走り、雨によりその泥岩層がけづられ、複雑な枝谷 を形成しつ つ、泥を低湿地まで運んでいった。

したがって、越後平野の中流から下流部にかけての中央部は常に変化する泥質層であり、中央部はのたうつ信濃 川が流れ下り、交通網はおのづから中央部をさけ、山裾を通ることになる。

そして、特に信濃川河口の新潟周辺はその名 が示すとおり、海岸を砂州で閉じられた低湿地であり、交通路も制 限された。また 越後丘陵の走る海岸部の山裾も数々の枝谷が形成されており、結局 越後平 野の内陸側の縁が 交通路の主力となり、それが、越後平野現在の鉄道網として 残っていると思われる。

新潟の地形の不思議をとく鍵 フォッサやナ帯とそこを流れる大河 信濃川と阿賀野川



新潟県は、日本の弧状列島形成に重要な意味を持つフォッサマグナの大地溝帯上にあり、日本有数の複雑な地質構造区に属する。

県域の多くがフォッサマグナに積層した比較的新しい年代の地層上にあり、主に山地、丘陵地、低地からなる。

山地は、山形・福島・群馬・長野・富山各県界にまたがる朝日山地、飯豊 (いいで) 山地、越後山脈および飛騨山脈の山々より形成。越後 山脈はフォッサマグナ形成の隆起地形として険しい山容を呈している。丘陵地は、海岸沿い弥英彦山に続く越後丘陵そして信濃川中流域に 魚沼丘陵・東頸城 (ひがしくびき) 丘陵などが分布する。

低地は、信濃川・阿賀野川・関川・姫川等の河川流域および河口部に発達しており、中でも信濃川・阿賀野川流域に広がる越後平野は日本 最大の面積を有する平野であると同時に軟弱地盤地帯を形成する。また、越後平野沿岸部には砂堆が発達し、山地山麓部や丘陵地では小河

川や降雨浸食のために数多くの谷が分布している。 新潟県は地すべり多発地帯としての側面も持っているが、これは主に山麓地や丘陵地が泥岩質の層状構造や褶曲を成 し、その上に風化土や崩積土などの二次的な堆積構造が被覆しているなどの複合的な要因によると考えられている。

日本の大地溝帯「ホッサマグナ」帯の上にある新潟。

泥岩質の層構造の地層が褶曲・断層でできた丘陵地・山地が南西から北東へ平行して立ち並び、それらを刻んで 無数の枝谷を形成しながら、大河が大量の土砂を飲み込んで、地後退の中を出口を求めて海岸部へ流れ下り、海 岸に到達した土砂は波に押し戻され、堆積し海岸に砂州・潟を作る。まさに「新潟市」周辺はそんな大湿地帯。 越後平野は海岸に広がるというより、丘陵地・山岳部の泥岩層から吐き出された大量の土砂が地溝帯を埋め尽く してできた平野である。湿地の改良が新潟の歴史であったろう。

越後・頸城・魚沼の3丘陵に刻み付けられた魚のあばら骨のような幾筋もの谷がそんな歴史を示している。

また、暴れ川 信濃川も寺泊への放水路の完成し、それによって 湿地「新潟」の土地改良もすすんだのだろう。 現在は日本の大穀倉地帯である越後平野の水田も かつては腰まで使っての田植えといわれ、暴れ川信濃川とあいまって、平野の中央部には鉄道を通せず、内陸部の山地・丘陵地の端を通らざるを得ず、内陸部に迂回せざるを得なかったのだろう。魚のあばら骨のような枝谷がいくつも形成されている海岸沿いの越後丘陵の中も同じで、この中に引かれた越後鉄道線も信濃川を渡って新潟にまでつながったのはずっと後年といわれる。





いくつもの枝谷を越ながら狭い谷あいを越後線が走る越後丘陵



かつては大きな「潟」だった新潟市周辺 交通網

■ 大古からの日本列島の成り立ちと深い関係のある新潟の地形

越後平野の形成

越後平野は日本の大地溝帯 フォッサマグナの中に形成された平野で、ユーラシア大陸から切り裂かれ、日本列島が形成されてゆく過程で、形成された日本の大地溝帯 フォッサマグナの中に形成された平野で、その土台は白亜紀後期の花崗(かこう)岩類と新生代第三紀の火山岩類や堆積岩類からできています。

ユーラシアブレート 北米ブレート 太平洋ブレート フィリピンブレートのぶつかる地点に日本列島があり、数々の地殻変動・火山活動・造山活動と共に、機度となく海底になったり、陸に成ったりを繰り返し、今から約 12000 万年前に今の日本列島の地質・構造骨格ができ、この枠組みの中 河川・潮流が大量の土砂を堆積させ、平野部を形成して行った。

特にフォッサマグナ帯には、プレート相互の動き・圧力による褶曲作用によって 「新潟方向」と呼ばれる北北東-南南西~北東-南西への地質構造配列(断層・山地・ 丘陵)が立ち並び、その間を土砂堆積でうずめたかたちで、越後平野が形成されている。

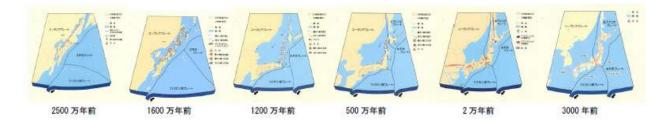
特に 海岸線の弥彦山地が隆起して日本海をさえぎったため、山地北東線から村上へ砂丘列が形成して内陸側が隔離され、広大な湾や潟湖が形成され、ここへ注ぎ込む信

濃川・阿賀野川の作用とあいまって、広大な越後平野が 形成されたていった。このため、阿賀野川・信濃川の河 口である新潟市を中心とした地域は海岸部を砂州で仕切 られた潟が連なる広大な低湿地である。

越後平野の南西端から北東に広がる長岡市間辺は 西を海岸部の越後丘陵・弥彦山地 東を頸城・魚沼 丘陵に挟まれた間を流れ下る信濃川の扇状地 そし て その下流 蕪・三条間辺は氾濫原でその下の河 ロヘ三角州・湿地を形成している



また、越後平野の北東部には 北から順に、荒川・胎内川・加治川・阿賀野川が南東から北西方向に流れて日本海にそそぐが、海岸部と背後の山地が近くしかも海岸 部砂丘で閉塞されるため、それぞれが扇状地や氾濫ゲンを形成しつつ 越後平野の北東部を形成している。



3、 弥彦山と鍛路神伝承 (資料)

弥彦山周辺の 鍛活神・金属精錬の伝承・痕跡

西蒲原郡弥彦村と長岡市との境 新潟県の海岸に面して、越後平野の稲穂の真っ只中にぼっかりと浮ぶ弥彦山。標高は 638m の低山あるが、古くから"おやひこさま"と呼ばれる信仰の山で、日本三彦山の一つ。深田氏が「日本百名山」の後書きに て、名山には違いないが絶対的な標高が足りなかったと語った美しい山でもある。晴天なら日本海の向こうに佐渡も見える。

「彦山」と言うといずれもその国の「鍛治神・開拓神」と関係する信仰の山で、古い銅鉱山が近くにあり、弥彦山と峰続きの多宝山の周辺には古い銅山跡が残っている。「銅のあるところでは鉄も出る」。この弥彦山・寺泊から南柏崎に続く海岸は「砂鉄の浜」また、確か大古い鉄の国「丹後」の大江山の酒呑童子は越後の弥彦山塊 国上山の生まれ。鉄の国「超」の

弥彦山 「鉄の痕跡もあるに違いない。」と。 弥彦山への walk の予備知識として 弥彦山周辺の「鍛 治神・金属雑錬の伝承・痕跡」を調べました。

■ 1. 弥彦神の片目伝承 Kiichi Saito さんのホームページ丹後の伝説 [6] 弥彦神社より整理 http://www.geocities.jp/k_saito_site/bunken6.html

越後の一の宮である弥彦神社の祭神が片目であるという伝承は越後一帯に分布している。 地元の篠田分雄氏が雑誌『喜志路(こしじ)』に魅力的に発表している。

以下、藤田氏の報告によって、この伝承をみることにする。

伝承の内容は各地とも大差ないが、その一、二例を示す。

1. 西蒲原郡岩室村間瀬

「弥彦明神様は開村の神様である。神様が弥彦へ移られる時、鬼の道案内で山を登られたが、 山中でウドで目を突かれたそうで、古来弥彦山にはウドが生えないといわれる」

2. 三島郡寺泊町野積字内川

「弥彦の神様が妻のおヨネと十二人の子を野積(のづみ)浜に置いて身を隠そうと弥彦山へ 登る時、足をすべらしてウドで目をつついた。それで弥彦山にウドが生えず、弥彦の神様 は片目である」

この問題と野積とは弥彦山をはさんで弥彦神社の裏側にあたり、日本海に面している業落である。 藤田氏は、この野積と問題の境界線を中心とした一帯は弥彦信仰における鍛冶神の痕跡がもっとも濃厚 にあらわれている地帯であるというが、それは弥彦神がウドで目を突いて片目神であるという伝承と一 致する。

また、『地名辞書』はこの間瀬と野積には、元禄年間(1688~1704)に鋼のつる(鉱脈のこと)を見立てて 掘ったが途中でやめたという記録のあることを紹介している。





弥彦山塊 周辺マップ

■ 2. 弥彦神社

弥彦山の麓に弥彦神社があり、弥彦山全 体がこの弥彦神社の神域である。 そし て その山頂に奥の院があり、古くから の信仰の山である。

弥彦神社は、「万葉集」にも詠われてい る古社であるが、創建年代は不詳。祭神 は天香山命。

越後国開拓の詔を受け、越後国の野積の

浜 (現長岡市) に上陸し、地元民に漁労







弥彦神社 2007. 5. 16.

や製塩、稲作、養養などの産業を教えたと伝えられ、越後の国を造った神として弥彦山に祀られ、「伊夜比古神」と呼ばれて崇敬を受けている。また、弥彦神は女神との 伝承もあり、『妻戸配』には、祭神は天香山命の妻となっている。天香山命を弥彦神としたのは後世のことともいわれているが、天香山命が銅の精錬に縁由ある神なので もってきたのであろう。

天香山命の「カグ」に共通する言葉は「鉱山」とする説がある。

日本神話 伊弉冉神が最後に火之加具土神を生み焼死する物語は金属精錬、銅の流れ出す様を表した神話とされ、「カグ」に共通する言葉が「鉱山」だという。 天香山命は天照皇大神の曾孫にあたり、饒速日を父とし、尾張氏の始祖といわれ、神武天皇に神剣を献上して東征を助ける大功があり、のち神武天皇の命を奉じて越後に 来て開拓を進め産業を異したとされる。

■ 3. 間瀬銅山跡

弥彦山の北 蜂続きの多宝山は銅が産出され名前のとおり宝の山。この弥彦・多 宝山と続く山の西側山麓 海に面した旧岩室村間瀬地内より真川を溯ったとこ ろに間瀬銅山が広がっていた。銅が出ることは古くからよく知られていたが、元 禄14年(1701)から採掘が始まったといわれる。最盛期は大正前半で、県 内外の人々がどっと流入した。間瀬銅山の銅鉱石は良質で安定した産出で山麓に 選鉱場、精錬場がつくられ、銅として燕市に運ばれ、銅の加工産業を興し、その後 の金屑加工産業につながり街が栄え発展し現在につながる

「日本鉱産誌」によれば、この地は第3紀中新世(寺泊層下部)の粗流玄武岩 を貫く閃緑ヒン岩中の鉱脈で、黄銅鉱、黄鉄鉱、閃亜鉛鉱、方鉛鉱そして石英 を座するとある。



弥彦山 2007.5.16. 燕・三条周辺 信濃川岸より (左端 国上山 中央左 弥彦山頂 右端し 多宝山)

弥彦山の周辺には数々の「鍛治神」伝承が残っており、古い銅山もあり、日本三彦山と関連づけられる「銅」精錬との深い痕跡が見られる。 でも、周辺の海岸には砂鉄が堆積しているが、古代の製鉄との関係はいまひとつ良くわからない。

しかし、「弥彦の神」が片目であり、「海を渡って野積の 海岸に上陸し、越後を開拓した」との伝承は、農耕・治水に「鉄」 の道具かきわめて重要だった古代 各地に伝わる「開拓神・製鉄神」伝承そのもの である。

製鉄と関連付けられる大江山の酒呑童子の生まれが弥彦山 というのも「鉄」との関連をうかがわせる。

鉄の国「越」 その海岸沿いに立つ弥彦山で海を渡ってきた製鉄集団が鉄鍛治をはじめたのではない か・・・

そして、古代 8世紀末から9世紀 越後平野に隣接する 海岸の柏崎の丘陵地で 古代の大製鉄コンビナート(柏崎軽井 川南製鉄遺跡群)が作られてゆく礎となったのではない か・・・・

そんなイメージを膨らませている。

「弥彦の神」 伝承 (整理)

弥彦の神は遠く海より、弥彦の海岸 野積の浜に上陸して 漁労や製塩、稲作、養蚕などの産業を教えたと伝えられ、 越後の国を造った神として弥彦山に祀られ、 「伊夜比古神」と呼ばれて崇敬を受けている。

また、「弥彦の神」は片目との伝承が周辺に広くあり、

弥彦山から 鋼などの鉱物資源が出ることから、

弥彦の神は 海を渡ってきた鍛冶集団の神(鍛冶神)とも考えられている。

また、大江山 酒香童子の生まれが弥彦といわれ、

弥三郎伝説 弥三郎婆(鍜治場の母)伝承など多くの鍛治伝承がある

「弥彦神」を祭る弥彦神社の祭神は天香山命で

金属精錬・鍛治と関係深い古代の物部氏・尾張氏の始祖祖につながる。 後年 銅など金属績錬と関係深いことから祭神とされたといわれる。

> 参考 谷川健三「鍜治場の母」ほかより 藤田治雄 雑誌『高志路』に発表報告より

(Kiichi Saito さんのキームページ丹後の伝説 [6] 弥彦神社より)

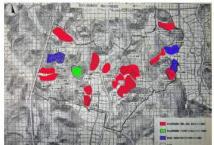




古代「起」の大製鉄コンビナート 柏崎市 軽井川南製鉄造踏桿 2007 5 15



市 解井川南野鉄道部学長 左奥 米山 中央 下ケ久保製鉄造跡群 右千刈 C 遺跡 右幼奥 大善寺遺跡







古代の製鉄遺跡 軽井川南遺跡群 千刈 C 製鉄遺跡 西地区8世紀末·東地区9世紀 千州 C 西地区 箱型炉 1基 半地下式未按炉 3基 千州 C 東地区 半地下式豎型炉 2基 地下式未按炉 8基

















千刈 C 百地区 箱型炉

千刈 C 東地区 半地下式整型炉

千刈 C 東地区 半地下式整型炉

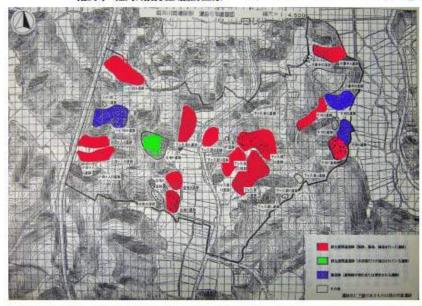
- 10、日本三彦山の一つ 越張 弥彦山 Walk 2007.5.16、 古代の鉄の国「越」 弥彦山に鍛活神の痕跡を探して 【完】
 - 1. 日本三彦山の一つ 越後 弥彦山 Walk
 - 2. 越後平野の不思議な地形 謎の越後平野 (資料)
 - 3. 弥彦山と鍛治神伝承 (資料)

古代「越」の大製鉄コンビナート

越後柏崎 軽井川南製鉄遺跡群を訪ねて 2007.5.15.



帕崎市 軽井川南製鉄遺跡全景 左奥 米山 中央 下ケ久保製鉄遺跡群 右千刈 C 遺跡 右端奥 大善寺遺跡







8世紀から9世紀にかけて、日本統一を確立していく過程の大和律令政権が地方重要拠点で経営したと推測される 多くの製鉄炉が立ち並び、製鉄から鉄製品の製造までを一環生産する「古代の大製鉄コンビナート」遺跡が各地 で次々と発掘調査されています。

昨年 そんな古代の大製鉄コンビナートが 日本海側の越の国 越後でも見つかった(柏崎軽井川南製鉄遺跡群)。柏崎市の南の広大な丘陵地約 28ha(280000 ㎡ (530m 平方 甲子園球場の約20倍))の新産業団地・柏崎フロンティアパークの用地から8世紀から12世紀にかけて35もの製鉄遺跡とともに、8世紀から11世紀にかけて20を超える製鉄炉が出土。

● 参考 8-12世紀 越・柏崎に眠る大製鉄コンピナート 軽井川南製鉄遺跡群 (資料)

http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron3/7iron02.pdf

柏崎市遺跡考古館から資料などを送ってもらいましたが、本年1月末に発掘調査がほぼ終了し、遺跡の一部が埋め戻されて現地保存されるが、大部分は記録保存にとどめられ、産業団地の用地に造成されるという。

「東国・東北経営には日本海側にも大製鉄コンビナートがあったはず」と思っていましたが、それが現実になり、しかも 古代鉄の国の一つ「越」の越後で出土と聞いて興味津々。

「今だったら まだ 発掘調査された製鉄炉がそのまま見れる」と聞き、早く行かないと破壊されて企業団地になってしまうと気をもんでいましたが、5月15日見学することが出来ました。

柏崎の市街地・海岸部から少し内陸に入ったまだ残雪に覆われた円錐の姿が美しい「米山」が見下ろす丘陵地に切り開かれた造成地 数多くの丘の斜面の一つ一つに製鉄遺跡遺構があり、6世紀頃に始まった製鉄が急速に技術革新を遂げ、古代完成期の大型炉 それも、技術変遷を示す箱型炉・竪型炉両方が同じ場所に建ち並ぶ。

「なぜ これだけ密集した貴重な製鉄遺跡群が残せないのだろう」と残念でなりませんが、一部もうすでに造成さていましたが、丘陵地の斜面に立ち並ぶ製鉄遺跡遺構を見ることが出来ました。

この時代 律令制を確立した大和政権は蝦夷地征伐に代表される東北経営を推進する一方 戦乱の朝鮮半島・大陸からの侵略の脅威に備えた九州など地方経営の拠点に大和王権の防衛基地を築き、その地方の開拓安定化を推進するため、大型製鉄炉が立ち並ぶ製鉄コンビナートを造り、鉄による武器・工作道具・農耕具などを調達・供給してきた。

近江の瀬田丘陵 源内峠製鉄遺跡や野路小野山製鉄遺跡などで大型・安定生産技術を確立させた製鉄技術を基に 北九州糸島半島の付け根部の元岡・桑原製鉄遺跡群 太平洋側東北の福島県原町金沢製鉄遺跡群などの大製鉄コンビナートを作った。 四国伊予の今治 佐夜ノ谷 II 製鉄遺跡 そして 日本海側のこの柏崎でも そんなコンビナートが出土した。

この柏崎 軽井川南製鉄遺跡群は8世紀から12世紀のきわめて長期にわたり、製鉄が続けられた場所 蝦夷征 伐の拠点とイメージして出かけたのですが、その最盛期は蝦夷征伐を終えた後の9世紀 むしろ 越後・東国開 拓の拠点の性格が強いと柏崎埋蔵文化財センターで教えてもらいました。

すごい古代の製鉄遺跡群が 日本海側からの「越」の国からも出ました。でも まだ この製鉄コンビナートを統括した官営組織や官衙は見つかっておらず、この古代の製鉄大コンビナートの性格はよくわかりません。 すぐ北の海岸沿いには 古代から越後の信仰を集めている「弥彦山」。「弥彦の神は鍛治神。海を渡ってやってきた鍛治集団とともに越後を開拓した」との伝説も海岸沿いに数多く残っている。

今後 この越後でどんなドラマが展開されるのか興味津々です。





1. 柏崎 軽井川南製鉄遺跡 2007.5.15.

5月の連体が過ぎ、大阪から新潟へ行く夜行バスがあるのに気がついて、このバスに乗れば、一日有効に歩けるのに気がついて、このバスで柏崎の軽井川南製鉄遺跡を訪ね、そのあと 越後の弥彦山・長岡の博物館にある縄文の火焔土器を見に行く計画を作る。ところが、天候不順 晴れと雨が交錯して 中々安定せず、やきもきしながら 何とか2日間天気が持ちそうとの予報に5月14日夜9時40分「新潟行」夜行バスに乗り込む。翌朝燕・三条のインターで降りて、柏崎まで電車で引き返す予定。本当に久しぶりの夜行バス 乗客は佐渡ドンテン山の

ハイクにゆく山グループと外人が数組とざっと 20 名ほど。座席は 3 列 リクラインシートが 90 度近くまで倒れるので快適。家内などは「眠れ ないのでもうこりごり」というが、寝台列車や飛行機の深夜便そして 以前の 4 列の夜行バスを思うと本当に快適。これで、目的地に朝 6 時に はつくのだから。

朝5時には夜が明け、親不知海岸から新潟県に入る。天候は晴れているが上越をすぎ多頃から雲が多くなり、天候が怪しくなる。米山の山合を抜けると水田の広がる柏崎であるが、バスはノーストップ。そのまま



北陸道 柏崎周辺

走りぬけ長岡を過ぎて、川幅の広い信濃川を渡る頃から遠くに弥彦山がうっすら見えだすとまもなく燕·三条 IC のバス停。一人バスを降りる。街のはずれで 新幹線の高架が走っている殺風景な何もない場所で 500m ほど離れたところに新幹線燕・三条駅が見える。







信濃川 長岡-三条間 北陸道より

三条周辺 遠く弥彦山が見える

上越新幹線 燕三条駅



新潟県のJR網は複雑で実にややこしい。新幹線燕三条駅は新潟駅と長岡駅の間にあり、在来の弥彦線も通っているのですが、隣の東三条駅まで行かないと新潟・長岡どちらにも直接行けない。しかも弥彦線の列車は短くて一時間おき 午前・午後数本づつ。電車の便悪く、新幹線で長岡まで戻って そこから信越線に乗り換えて、8時過ぎに柏崎に到着。柏崎は今回地図を良く調べるまで知らなかったのですが、北に日本海が開けるが、皆にしに円錐型の美しい「米山」がそびえ、街の周囲をグルリと丘陵地が取り囲み、海岸沿いの盆地と

言った風なところ。地図によると海岸の反対側の南側市街地に隣接した丘陵地に目的の軽井川南製鉄遺跡がある。まだ、朝が早いので、市内にある柏崎市遺跡考古館も開いていないのと今にも雨が降り出しそうな天気になって

きたので、コンビニで握り飯を買って、とにかく遺跡を見学に先に行くことにする。いつもながら 万の悪いことにバスも時間的に駄目。タクシーに飛び乗ると遺跡は知らないという。リュックから地図を出して、見せながら、新産業団地・柏崎フロンティアパークの建設用地の入り口 の前で降ろしてもらう。駅から15分足らず、市街地を通り抜け、丘陵地にかかって、下軽井川集落と書いた案内板から 、

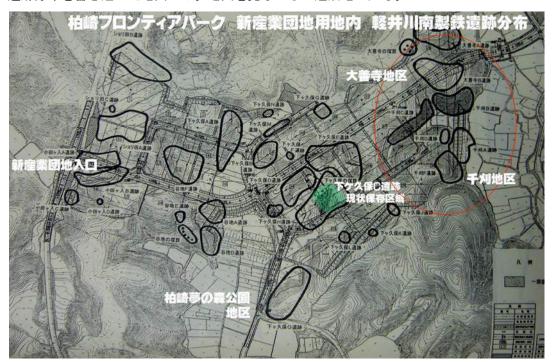




、軽井川の集落と柏崎フロンティアパークの建設用地の入り口

丘陵地を切り開いた新しい道を少し丘陵地に上っていったところ。まったく人の気配なし。 丘陵地の上に、すでに造成された広大な造成地が広がっている。もう丘陵地がほとんど削り取られている。 果たして 製鉄遺跡は見られるだろうか・・・・

頼りは柏崎市遺跡考古館から送ってもらった遺跡図とインターネットから採取した 5 万分の一の地図に開発計画 図ならびに遺跡分布を書き込んだ地図のみ。地図を見ながら 造成地に入る。



甲子園の約20倍 広大な丘陵地に広がる古代の製鉄コンビナート 柏崎・軽井川南製鉄遺跡群



新産業団地入口から見た造成地全体 ここにすっぽり柏崎・軽井川南製鉄遺跡群があった 2007.5.15. 正面奥左端部の丘陵地が千刈・大善寺地区 発掘調査時のままの姿で 製鉄炉・木炭窯などの遺構を見られた 正面奥左手前の造成地周辺 下ヶ久保地区 造成がすすみ、一部現場保存される遺構が埋戻し保管されていた 正面奥丘陵地の向こう側 柏崎 夢の森公園 自然と親しむ森の公園として整備が完了し、次週オープンを待つばかりになっていた

入口からまっすぐ奥へ幅の広いメイン道路が造成され、両川に一段高く造成された用地が並んでいる。 入口から、小田ケ入地区 谷地地区の造成地でかつてはここも製鉄炉や木炭窯などの製鉄遺構あった地区であるが、すっかり整地されている。 整地された土地のところどころにうっすらと砂鉄粉のや細かな赤茶けたスラグ粉が散在しているのが見える。 さらに奥へ進んだ丘陵地は今造成が進んでいる場所で、下ヶ久保地区とおもわれるが、ほとんどどこに製鉄遺構があるのか良くわからない。 ところどころに青いグランドシートの

かぶせられた跡や土がかぶせられた跡があり、製鉄遺構があった場所と思われるが、良くわからない。





谷地地区





谷地地区 造成地に砂鉄の黒い跡



下が久保地区 製鉄炉・木炭窯遺構と思われる 埋戻しの土が盛られていた

半分あきらめ気味で、右手東奥の丘陵地を見ると幾つかの丘陵地の斜面に掘りこまれた遺構が並んでいるのが見えた。まだ、発掘調査されたままの姿で残っている製鉄遺跡遺構があった。

地図で見ると千刈地区 どうにか遺構が造成される前に見られた



千刈地区 製鉄遺跡群 左 千刈 C 遺跡 中央奥 刈 B 遺跡 右千刈 D・A・F 遺跡の丘

しっかりと丘陵地の斜面に刻み込まれた製鉄遺構が見え、だいたいの想像はつくのですが、製鉄炉と炭焼窯の確認が良くわからない。千刈 C 遺跡の反対側の丘の上に登って 正面にすわりこんで、以前いただいた資料と着き合わせながら製鉄遺構の確認をする。 誰も居ないので、まさに遺跡を独り占めである。 駅前のコンビニで買った握り飯をほほばりながら、遺跡図と眼前の遺跡を照らし合わせる。こんなに幾つもの丘に一度に立ち並ぶ製鉄

遺跡を見るのは 本当に久しぶり。 ビックリである。

本当に ラッキー もうほとんど 壊されているかしていてて、 造成地の周りをぶらっと歩いて 帰ること になるのでは と思っていましたが、東に米山がぽっかり浮き、静かな緑の森に囲まれた丘陵地で、この千刈地 区ばかりでなく、隣接したすぐ北側の丘陵地 大善寺遺跡の製鉄遺構を含め、発掘された状態のままで 沢山の 製鉄遺跡遺構が見れて、本当に感激でした。。(あとで 埋蔵文化財センターの人に聞くともう造成工事に引き渡されていて、工事の段階。この地区の造成で破壊される直前。カバーも何もかかっておらず見られてラッキーでした。)



千刈地区 製鉄遺跡 左から千刈 C・ 千刈 B 中央の丘下 千刈 D 右 千刈 A・F また、左手千刈 Cと千刈 B遺跡の丘の間を左に上ったところか大善寺地区である。 正面は東の方角なのですが、軽井川の集落の田畑が見え、中央奥に田尻野工業団地が見える。



千刈 C 製鉄遺跡 遺構



右手 手前 千刈 B 遺跡 奥 千刈 C 遺跡 千刈 B 遺跡 斜面に削り込んだ四角い平面があるのが見え、どうも鍛治工房の跡らしい。



大善寺 A 製鉄遺跡 木炭窯遺構群



大善寺 A 製鉄遺跡遺構全景 大善寺 A 製鉄遺跡遺構



下ヶ久保製鉄遺跡

千刈地区の手前 西側の遺跡中央部が下ヶ久保地区。 西のほうに「残雪を擁いた米山」がぽっかり浮かんでいる

これだけ多くの製鉄遺跡遺構が発掘された状態のままの状態で、しかも隣接してみたのは始めて。

箱型製鉄炉 竪型製鉄炉 木炭窯 が並んでいる様はすごい。 操業最盛期には この丘のあちこちから製鉄炉・木炭窯の煙が立ち上り、薪や砂鉄を運ぶ人たちそして ここで精錬された鉄素材そして加工された製品を運

ぶ人たち本当に沢山の人たちが、この界 隈を歩いたに違いない。

8 世紀後半から 12 世紀まで続く製鉄遺跡とはいいながら、これだけ密接して製鉄遺跡群があるのも本当に貴重な遺跡である。

製鉄遺構は 製鉄炉・木炭窯・排滓溝 排滓場などが出ているのですが、あちこ ち歩き回って、資料とにらめっこで、諸 施設の特定を考えるのですが、もう一つ はっきりしない。特にこの時代からふい ごが発達して、製鉄炉の大型化そして箱 型炉から竪型炉への遺構をささえたと いわれるが、それも知りたい。

番号		80	鉄 炉	廃滓場	末	是 窯	120 77 720 1		MAN THE R
	遺跡名		半地下式竪型炉		半地下式(溝)	地下式(トンネル)	鍛冶炉	焼土坑	備考
1	ショリ田A							4	縄文の業落跡
2	ショリ田B		2	2		2			
3	ショリ田C							- 1	
4	小田ヶ入A	1		1	4				
5	小田ヶ入B	- Charles	2	1		3		1	
6	小田ヶ入C				1			古代・	中近世の製炭運動
7	小田ヶ入D								
8	谷地A	1		1	2				
9	谷地D	1			3	6		1	
10	谷地E					2			
11	谷地F				4	-			
12	下ケ久保A				2	1	-		溶解炉
13	下ケ久保日		2	1		15			/M D+W
14	下ヶ久保C		3	1	13	5	3		
15	下ヶ久保D	1		1	6	-	-	-	
16	下ケ久保E		2	2	4	1			
17	下ケ久保H			-	3	- 1			
18	下ヶ久保し			-	1				
19	下ケ久保M	170.00	2	-	-				
20	下ケ久保N		1	4	4				
21	大善寺A	1	2	1	3	9			
22	千刈B				3	9			銀治工房跡?
	千刈C 東		2	4		8			4K101-T-0489 (
23	千刈C 西			- 1	3	8		2	
24	千刈D (平	P)		- 1	3				粘土採掘坑
25	于刈F		The second secon			10			和工体组织 未完成箱型炉1?
26	干刈A					10			來元以相坐於1: 集落跡?
190	合 計	6	40				-	15	
	- 10	製鉄炉	18	14	方1 木炭窯	62	3	15	

色々歩いている間についに雨が降り出し、雷も鳴り出した。一旦遺跡を後にして、埋蔵文化財センターで少し教 えてもらい、柏崎の浜にも行って、天気が回復すれば、製鉄炉の位置を確認できれば一番いい。

雨が降る前に遺跡が立てたのはラッキーでした。雨だと宿の心配もしておかねば・・・・

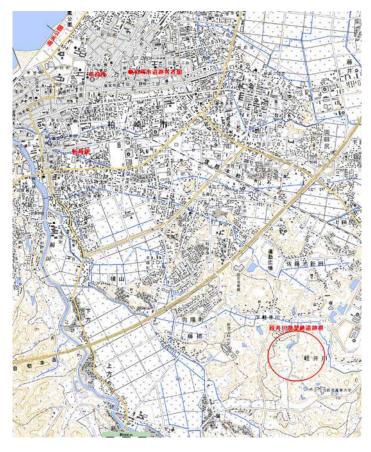
ラッキーなことに30分ほど待てば、下軽井川から柏崎に戻るバスがありました。





本降りになった軽井川の遺跡を一旦 町に戻る 2007.5.15.

2. 柏崎市遺跡考古館を訪れ 砂鉄を見に柏崎海浜公園へ







JR 柏崎駅前





柏崎の市街地



海浜公園

柏崎市の地図

JR 柏崎駅前に戻ると、幸いなことに雨もあがり、先ほどの雷と大粒の雨がうそのように晴れ上がる。交番で市街地地図をコピーしてもらって、以前資料をもらった柏崎市遺跡考古館に行く。

柏崎市は人口 10 万人足らず 新幹線からも外れ、大きな工場もないので 発展から取り残されているとの感じは 否めないが、上越市と長岡市・新潟市の間にある日本海沿岸 越後の中核問いの一つである。

柏崎市遺跡考古館は柏崎市教育委員会に属する埋蔵文化財センターの役割を担っている部門で、駅前から北へ商

店が並ぶ中心街をぬけて、15 分ほど歩いたところ。商店街が並ぶ街道筋から少し住宅地に記いったところにあり、解りにくい。訪ね訪ねしながら、この考古館の近所で訪ねた人が、考古館の学芸員の人で、目的を話して考古館に連れて行ってもらった。

ちょうど 軽井川南製鉄遺跡の発掘に携わった方が居られ、発掘で出土した数々の鉄滓や鋳型などを見せていただきながら、この日本海側の大製鉄コンビナートの位置づけなどを教えてもらった。



柏崎市遺跡考古館

- この製鉄遺跡群は8世紀と12世紀を特定できる遺物を伴う遺構はみつかっていないが、少なくとも9世紀から11世紀までの 300年間続いた製鉄遺跡群で、精錬から鍛造・鋳造まで 鉄の生産から鉄の加工製品までを作った古代の大製鉄コンビナートの遺構である。
- 2. また、製鉄炉は箱型炉 6基 半地下式竪型炉 17 基計 2 3 基の製鉄炉 そして 1 1 4 基の木炭窯が見つかっている。 製鉄炉はいずれも鞴が装備された製鉄炉で、8 世紀後半に確立されたといわれる自然通風の大型炉は見つかっていない。また、この柏崎から北にかれての海岸には砂鉄が大量に堆積されており、製鉄の原料として用いられたと考えている。
- 3. そして、この大製鉄コンビナートを特徴づける性格は東北経営・蝦夷征伐の武器・武具など兵器庫の

性格というより、開拓に必要な農耕具や宗教的道具・各種民具が中心であったと出土した鋳型などの遺物 から考えられている。

このことはこの遺跡群がもっとも栄えたのは9世紀で、すでに蝦夷征伐は終わっており、蝦夷征伐と対比される福島県の金沢製鉄遺跡群の栄えた跡の遺跡であることとも符合する。

4. しかし、この製鉄遺跡群と関連付けられる大きな官衙遺構などは周辺から見つかっておらず、性格などについては 今後 よくつめてゆかねばならない。

この柏崎は奈良·平安時代の北陸道三嶋駅の置かれたところ、あるいは三嶋郡衙が置かれたところと推定されているが、よくわかっていない。

わたしは、この製鉄遺跡群が大和王権 蝦夷征伐の日本海側拠点であったのではないかと思っていましたが、 これらの製鉄遺跡群はその時代をすでに過ぎたあとの製鉄遺跡群のようです。

しかし、この地に古代の大製鉄コンビナートがあったことは疑いなく、越後はもとより、ここから日本海や陸路 で東北・東国しいては信州までも鉄が運ばれたのかもしれない。

「これだけ 大規模な古代の製鉄遺構群 本当に残したかったが、 どうしても 全体を残しえなかった」と考 古館の人達も残念そう。どうしても製鉄遺構は操業の都度 製鉄炉が壊されてしまうため、産業廃棄物かしてし まうため、派手さがなく、調査の後 記録保存にとどめられ、壊されてしまう。さびしいかぎりである。

(このときはまだ知らなかったのですが、 午後 再度 軽井川南製鉄遺跡を訪れるとこの遺跡に隣接した 南側には広大な自然の森公園が整備され、オープンを待つばかりになっていた。

「隣接するこの公園と産業団地がそつくり いれかえられれば、 遺跡群ももっと大規模に

残ったろうに・・・・」と思う。ほんとうに 悔しいかぎりである。

考古館で新しい資料をいただいて、今 発掘されたままの姿で見られる千刈地区 大善寺地区の製鉄遺跡群の

製鉄炉の正確な位置を教えてもらって、考古館を後にする。

考古館の人たちの話によると「柏崎の海岸の北の方に行けば、今も砂鉄を採取している場所があるが、柏崎の街の海岸でも砂鉄の堆積が見られる」と教えてもらって、海岸まで歩いて20分ほどで、柏崎の海岸。砂鉄を見に行く。

柏崎の海岸には防風林帯とコンクリートの頑丈な堤防が市街地と 浜を隔て、浜は黒々 砂鉄が堆積していました。

また 風が本当に強いのでしょう 堤防の上にも風で飛ばされた砂鉄 が堆積していました。

そして 西には海岸の向うに「米山」がそびえ、反対の東は浜が細り、テトラポットの海岸がつつき、その奥は海岸まで丘陵地が迫る浜が遠望される。ここも 砂鉄が堆積しているのだろう。 また、まっすぐ伸び、高い煙突が浜に遠望されるあたりが、刈羽原子力発電所のあたりか・・・・。



柏崎 海浜公園周辺の海岸(1) 西に米山がみえ 浜は砂鉄で黒い



柏崎海浜公園周辺の海岸(2)東は浜が細り、遠く刈羽の丘陵地が見える



砂鉄が堆積する柏崎の浜 海浜公園で





風が強いため、砂が舞い、防波堤の上まで砂鉄が溜まっている

軽井川南遺跡の製鉄炉 再度 軽井川南製鉄遺跡へ 製鉄炉の確認に







オープンが待たれる 「柏崎夢の森公園」 2007.5.15.

浜から柏崎の駅に戻り、再度軽井川南製鉄遺跡に行く。

駅の南側から新潟工業大学までのバスに乗り、終点から30分ほど歩いて ぐるりと南側へ丘陵地を回りこみ、 南側から遺跡に入る。南側は広大な「柏崎夢の森公園」として整備され、オープンを待つばかり。この公園の中 を北へまっすぐ歩くと隣接する遺跡群の南端になる。

こんなに広い公園がすぐ隣に作られているのに何故 遺跡群が保存できないのか・・・との思いがあるが、地方都市の財政からは持ちこたえられないのだろう。

公園をまっすぐ北に抜ける道は朝北側から入った新産業 団地のちょうど南北に真ん中を貫くメイン道路。

南から公園を抜けると下ヶ久保地区である。

遺跡の中に再度入って、今度は しっかりと遺跡考古館で教えていただいた製鉄炉の位置とタイプなどを見たい。この遺跡では甲子園球場の約20倍の広い丘陵地に9世紀から11世紀(8世紀から12世紀まで広がるかもしれない)古代300年にわたる鉄生産ならびに鍛治・鋳造による鉄製品の生産が行われた。

そして、その遺構として 24 基の製鉄炉・113 基の木炭炉 3 基の鍛治炉などが出土した。

また、数多くの製鉄場とともに 残念ながら 整地されていて、自分ではよく確認は出来ませんでしたが・・・・遺跡の中心部 下ヶ久保 A 遺跡では 鋳造場遺構 下ヶ久保 C 遺跡では製鉄場と共に鍜治場 (5 基以上の鍛治炉) 遺構が見つかっている。

下ヶ久保 A 遺跡からは溶解炉が 3 基以上がみつかり、壊れた溶解炉や鋳型などの廃棄場も見つかっている。

ここでは青銅のついた坩堝などの破片もみつかり、 青銅の鋳造も行っていたようです。





下ヶ久保 C 遺跡では製鉄炉の密集地点の北側から 5 基以上の鍛治炉がみつかり、A 遺跡からも金床石・椀形滓・鍛

造剥片などが見つかっている。鍛治工房はこのほか千刈地区千刈 B 遺跡も明確ではないが、鍛治工房遺跡と見ら れている。

そして これらの製鉄遺構をはさんで南北の端からショリタ A 千刈 A の二つの集落跡がみつかっているが、こ の軽井川南製鉄遺跡と関連付けられる古代の集落は千刈A遺跡都考えられている。

また、ショリタ A 遺跡は縄文時代を中心とした集落跡であるが、この遺跡からも古代の土坑が見つかっており、 鉄生産にかかわりがあるかもしれませんが、よくわからない。

長い期間製鉄が行われたこの遺跡群では製鉄炉の技術革新に伴いその変遷もみられるという。

7世紀後半畿内近江の源内峠製鉄遺跡などではじまった製鉄炉の大型・安定化の技術革新はその後「ふいご」の 装着や箱形炉と共に竪型炉も導入され、古代の大製鉄コンビナートとして地方重要拠点へ伝播していった。 図は柏崎市遺跡考古館でいただいた資料から再整理した軽井川南製鉄遺跡群の諸設備を再整理したものである。

(図には自然送風箱形炉の図を入れていますが、軽井川南製鉄遺跡群ではこのタイプの炉は 出していない。また、軽井川南製鉄遺跡群では 当初箱形炉での操業が始まり、その後 竪型炉も順次導入されたと考えられています。



柏崎 軽井川南製鉄遺跡群 諸施設イメージ図 柏崎市遺跡考古館 [柏崎に成る古代の製鉄遺跡] より巻理



千刈 C 西地区 箱型炉 千刈 C 東地区 半地下式竖型炉

千刈 C 東地区 半地下式豎型炉

1. 下ヶ久保地区の製鉄炉





この地区には1基の箱型炉と10基の半地下式竪型炉があったメイン地 区であるが、ほとんど造成が完了しつつあり、製鉄炉を直接見ることは出 来ませんでした。また、この地区は遺跡の中心部でほかに鋳造工房や鍛 治工房が発掘されており、一部製鉄炉など我が保存されるため埋め戻され ているという。

造成で丘陵地の形がかわっているため、状況がよくわからず、 それぞれ の特定が出来ませんでしたので

見学した時の下ヶ久保地区周辺の写真とインターネットに掲載された下 ヶ久保製鉄遺跡の発掘時の写真から採取して 掲載しました。



下ケ久保遺跡全景



下ケ久保 C 遺跡 箱型炉、竪型炉、廃サイ場、木炭窯、鍛冶炉その他 こげ茶の部分が廃サイ場





下ヶ久保 E 遺跡箱型炉、竪型炉、廃サイ場、木炭窯 下ヶ久保 A 遺跡鋳造溶解炉、鋳造関連廃サイ場。。 下ヶ久 保 B 遺跡製鉄炉、廃サイ場、木炭窯。



インターネットより採取した下ヶ久保製鉄遺跡 発掘現場



下ヶ久保遺跡周辺(1)



2007. 5. 15.















2007. 5. 15. 下ヶ久保遺跡周辺(2)

2. 千刈 C 製鉄遺跡の製鉄炉

古代の製鉄遺跡 軽井川南遺跡群 千刈 C 製鉄遺跡 西地区8世紀末·東地区9世紀

千刈 C 西地区

半地下式木炭炉 3基

千刈 С 東地区 半地下式整型炉 2 # 地下式木炭炉

















千刈 C 西地区 箱型炉

千刈 C 東地区 半地下式竪型炉

千刈 C 東地区 半地下式豎型炉

3. 大善寺 A 製鉄遺跡の製鉄炉

古代の製鉄遺跡 軽井川南遺跡群 大善寺 A 製鉄遺跡 2007.5.15.

箱型炉 1基 半地下式豎型炉 2基 半地下式木炭炉 3基 地下式木炭炉 9基



4. 千刈 B 遺跡 鍛治工房跡とかんがえられている

木炭窯 1 基と共に斜面を毛津って平坦な平面をつくり、ここからコの字状の溝が出土しその内側に柱穴群など掘立柱の建物または上屋があったとみられる。また、近接する木炭窯からは愚痴が見つかっており、鍛治炉や鍛造剥片はみつかっていないが、鍛治工房跡と見られている。

古代の製鉄遺跡 軽井川南遺跡群 千刈 B 遺跡 鍛冶工房遺構??



5. 千刈 F 遺跡

製鉄炉はしゅつどしていないが、木炭炉 10基(東側斜面6基 南側斜面4基)出土

古代の製鉄遺跡 軽井川南遺跡群 千刈F製鉄遺跡[1]



千刈F遺跡(左) と 千刈C遺跡(右)





古代の製鉄遺跡 軽井川南遺跡群 千州F製鉄遺跡[2]











4. 柏崎 軽井川製鉄遺跡群をおとずれて まとめ

越後 軽井川南製鉄遺跡群 甲子園球場 20 個かゆうに入る丘陵地一帯に広がる日本海側 大製鉄コンビナート 大和王権が東日本の日本海沿岸から東国・信州をにらんだ大製鉄コンビナートと思っていますが、まだ、その性 格は確かではない。

今年1月 発掘調査域の調査が全部完了し、新産業団地用地への造成が進む。「今だったら 立ち並ぶ古代の 製鉄炉が見れる」と出かけてきました。

遺跡の中心部 下ケ久保地区はすでに造成地に姿を変えていましたが、南東端の千刈・大善寺地区の製鉄遺跡群を見ることが出来ました。

畿内で製鉄創業の安定化ならびに大型化が確立され、地方へ伝播していった鉄アレイ型の製鉄炉が、鉄器供給と新しい製鉄技術伝播を通じて 支配力を強め、地方を開拓し、大和王権の地方支配を確立してゆく そんなドラマを越後に描いての軽井川南製鉄遺跡群の訪問でした。

自然風の製鉄炉で端待った製鉄の量産化が地方でどのように展開していったのか・・・

ふいごが投入されて 人工的な送風が始まる8世紀 どんな炉に変わったのか

また ふいごはどんなふうに装着されたのか・・・・

この軽井川南製鉄遺跡は「9世紀から11世紀の長期の製鉄遺跡群でも8世紀まで遡れるかもしれない」と聞いて、「蝦夷征伐など大和王権が東日本征圧を進めてゆく過程での前線基地 兵器庫ではないか」とおもっていましたが、遺跡考古館で聞くと「この遺跡の最も栄えた時代は東日本の征圧がおわった後の時代9世紀。 武器ではなく むしろ 農耕具・工具が主体のコンビナートのようだ」と聞きました。でも これだけ大きな製鉄コンビナートを維持してゆくには 大きな支配力が必要であり、そこの遺跡を支える拠点が周辺部にあるはずと思われるのですが、柏崎周辺ではいまだ そんな拠点は見つからず。考えられるのは 日本海沿岸の交通の拠点「三嶋駅」またはこの地「三嶋群衙」跡がみつかれば、それらとの関連で何か新しい性格が御津かもしれないが、今ははっきりしないという。

でもすごい遺跡でした。

ふいごが装着された箱形炉と半地下式の竪型炉 古代の大型製鉄炉跡が「踏みふいご」の跡もくっきりと見ることが出来ました。そして 製鉄炉の数に比べて 隣接する木炭窯の下図にもビックリしました。

「たたら製鉄がはじまれば 山は丸裸」と頭ではわかっているのですが、製鉄炉のすぐ横に幾つもの木炭窯が立ち並ぶ姿は始めてみる光景。

この千刈や大善寺の製鉄遺跡群のあるこの丘陵地の斜面にそのまま箱形炉・竪型炉そして 木炭炉が立ち並ぶ 姿が復元されれば、どんなに壮観だろう。 事実古代には ここにそんな姿があった。

「鉄は産業の米」とは言いたくはないが、今日の日本のルーツをたどれば 鉄の果たした役割ははかりしれない。 鉄の遺跡のまわりをみると そこには人の歴史があり、文化がある。

いつの日か スポットライトがあたるまで、残されないものか・・・・・ それが無理なら、遺跡としてどこか一つでもいいから 製鉄炉単体でなく製鉄遺跡群として のこせないものか・・・・・

失われてゆくものへのないものねだり出はないが、「鉄にはそれだけの価値がある」といいなら 遺跡を跡にしました。 仰ぎ見る「米山」の山襞も深くなってきた道をバスがある新潟工大の前まで また ぶらぶら歩く。 でも 素晴らしい遺跡また 古代の製鉄炉が見られて ご機嫌。また柏崎の砂鉄の浜も印象的でした。

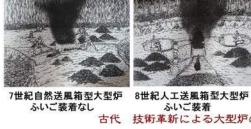
ついでながら 柏崎の祭りは「風の陣」という。この「風」は 古代製鉄の風神 または 弥彦の鍛治神を指すのかと思いましたが、どうも 層ではなくて、古くからの祭りに新しい風を吹き込んで 活力ある街にしようと始まった祭りにちなんで付けられたという。

でも 9世紀の遠い時代に この越後の柏崎で そんな「新しい風」が吹いたことを柏崎の人たちはしっているのだろうか・・・・・

勝手なことを考えながら、明日は「弥彦」に登ろうと柏崎を後にしました。

2007.5.15. 柏崎で Mutsu Nakanishi









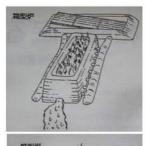


ふいご装着

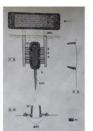
人工送風竪型大型炉 ふいご装着

鍜治場





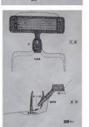












木炭窯 鋳造場

軽井川南製鉄遺跡群 諸施設イメージ図 柏崎市遺跡方古館「柏崎に眠る古代の製鉄遺跡」より整理













千刈 C 西地区 箱型炉

千刈 C 東地区 半地下式竖型炉

千刈 C 東地区 半地下式竖型炉

番号	遺跡名		铁 炉	廃 滓 場	木	炭窯	SER -4- FEE	24 1 14	-
		長方形箱型炉	半地下式竪型炉	196 洋 场	半地下式(溝) 地下式(トンネル)		鍛冶炉	焼土坑	備考
1	ショリ田A							3	4 縄文の栗落跡
2	ショリ田B		2	2		2			1
3	ショリ田C						Market Market		2
4	小田ヶ入A	1		1	4				1
5	小田ヶ入B		2	1		3			
6	小田ヶ人C	198 -			1	W. Carlotte		古代・	中近世の製炭遺跡
7	小田ケ入D								1
8	谷地A	1		1	2			- and the	
9	谷地D	1			3	6	-		1
10	谷地E					2		70 80	
11	谷地F			10	4				
12	下ケ久保A				2	1			3 溶解炉
13	下ヶ久保B		2	1		15			
14	下ヶ久保C		3	1	13	5	3		
15	下ヶ久保D	1		1	6			-	
16	下ケ久保E		2	2	4	1			
17	下ケ久保日				3			1000	
18	下ヶ久保L				1				
19	下ケ久保M	100000	2						
20	下ケ久保N		1	1	1				
21	大善寺A	1	2	1	3	9			
22	千刈日				1	9			鍛治工房跡?
23	千刈C 東		2	1		8			WATER CONTROL
23	千刈C 西	1		1	3	0		2	
24	千刈D (平	友)		- '	9			-	粘土採掘坑
25	于刈F		No. of the last of		1	10		- 70 - 50	未完成箱型炉13
26	干刈A		-	-		10			集落跡?
	合 計	6	18	14	51	62	3	15	
-		製鉄炉	24	14	木炭窯	113	3	10	F-172-17

【 参考 】1. 軽井川南製鉄遺跡群現地説明会資料

柏崎市教育委員会 柏崎市立遺跡考古館編「柏崎に眠る古代の製鉄遺跡」

2. 軽井川南遺跡群報告会資料

柏崎市教育委員会 柏崎市立遺跡考古館編「眠りからさめた古代の製鉄遺跡」

3. 柏崎市立図書館ホームページ「陽だまり」<u>http://www.kisnet.or.jp/~hidamari/</u> 製鉄遺跡現地説明会

http://lib.city.kashiwazaki.niigata.jp/hidamari/kashiwazaki/photo/2005/20050619/shimogakubo.html http://lib.city.kashiwazaki.niigata.jp/hidamari/kashiwazaki/photo/2005/20051030/shimogakuboc.html

4. 8- 12 世紀 越・柏崎に眠る大製鉄コンビナート 軽井川南製鉄遺跡群 (資料)

http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron3/7iron02.pdf リンクアドレスの上に更新した新リンクアドレスが隠れています 12.

8世紀後半 古代 九州 防人の兵器庫 九州の大製鉄コンビナート 福岡 元岡製鉄遺跡群を訪ねて 2007.6.10.









北九州 福岡県玄界灘に突き出した糸島半島周辺は大陸・朝鮮 半島に一番近い魏志倭人伝に記された伊都国の地で、大陸・朝 鮮半島との交流がいち早く始まったところで、数々の遺跡が眠 る地である。

この半島の付け根 福岡市の西端 元岡の丘陵地に九州大学が新しいキャンパスの建設を進めているが、ここから、縄文から江戸時代まで 特に古墳時代・古代の遺跡が数々出土している。(元岡・桑原遺跡群) なかでも、幾つかの谷の斜面から 50 を超える8世紀半ばの製鉄炉をはじめ、数々の製鉄遺跡が見つかり、この糸島半島一体我古代の大製鉄コンビナートである事がわかってきた。

当時、朝鮮半島 白村江の戦い(663)で唐・新羅連合軍に敗れた 大和王権が、日本侵攻を恐れ、日本各地から防人を集めるとと もに、北九州一体に防衛土塁・石垣・城を築いている。この元 岡に当時の最先端の大型炉である鉄アレイ型製鉄炉が多数整然 と建ち並ぶことから、日本防衛の前線基地北九州防備に必要な 武器調達のための国家規模の大製鉄コンビナートを作ったと考 えられている。



九州大学の元岡新キャンパス建設に伴う 275ha (甲子園球場の約 20 倍) の広大な建設地周辺の 1 次調査 (1997) から 42次調査 (2005) まで数々の発掘調査で古代の製鉄 生産遺構群や古代官衙遺構 古墳後期群集墓 (約70基) や前方後円墳 (7基) などが次々と出土した。これらの製鉄生産遺構群や数々の遺跡は記録保存の後 現在 建設進行中の九州大学新キャンパス用地として消えてしまう運命にあり、既に一部は消えてしまっているが、製鉄炉が建ち並ぶ第 12 次調査の谷や 20 次調査地点などの重な製鉄遺跡をはじめ、幾つかの製鉄遺跡は将来の遺構整備・保存を前提に現在埋め戻し・盛土の保存がなされており、今後の整備が九州大学・福岡市で協議が進められている。

(現在はどの遺跡も柵と金網に囲まれた九州大建設用地の柵の中にあり、まだ公開整備されておらず、直接見る事は出来ない)

1. 元岡製鉄遺跡群が眠る九州大学 伊都新キャンパス walk (1) センター地区







6月10日の午後 大宰府の九州博物館を見に行った帰りに 九州自動車道を福岡へ引き返す。

ドタ袋の中に元岡遺跡の資料を入れた心算が入っておらず、ただ「九大の元岡キャンパス」建設地である事だけが頼り。いつもの計画性のなさを家内に怒られながらの古代の大製鉄コンビナート 元岡遺跡見学 Walk である。博多港を眺めながら都市高速 1 号線を西へ ビックりするような高さから博多湾・博多の市街地を眺めながら 1 〇分ほどで都市部を抜け、丘陵地が続く市街地に入るといと志摩半島の山々の手前に 前方に山肌が大きく切り 開かれた丘陵が見えてくる。大きく切り開かれた造成地 おそらく これが九州大学の新キャンパス。 今宿インターチェンジから、北へ街中を北へ海岸に出たところから 九州大学新キャンパスの案内板を見つけ、左手丘陵地の方に入り、新しい市街地を抜けると田園地帯が広がり、その中を新しい道がまっすぐに正面の丘陵地に向かっている。



丘陵地の下に広がる田園地帯 東 今宿方面を眺める 2007.6.10.

丘陵地の丘の谷間に入って少し進むと左手に広大な丘陵地を切り開いた九州大学の新キャンパスの入口。すで に 工学部が移転していて、入口からまっすぐ丘陵地の上にメインロードが伸びているが、まだ建設途上でまだ

むき出しのままの千線に工事用の金網 が張られている。入口は駐車場と同じで 自動開閉式のバーが降りていて、すぐ横 に警備室。そして、すぐ横にビジターセンターの建物が建っていて、そこへ行って、登録しないと学内に立ち入れない。ビジターセンターがあるところが、最近 の開かれた大学を目指す令風で、そこへ行くと学内見学のコースが用意されていて、案内もしてくれるという。大学も 変わったものである。



九州大学 元岡 新キャンパスの入口ゲート

ビジターセンターに行って 学内立ち入りの手続きと共に 製鉄遺跡の位置など教えてもらおうと思ったのですが、するのですが、「時折 同じように製鉄遺跡を訪ねられる人がいるのですが、学内の地図にも載っていないし、

良く解らない」とまったく要領を得ず。

ビジターセンターにパソコンが並んでいるのを見つけて、インターネット経由で元岡製鉄遺跡群(12次調査地点)の地図を出して、位置を確認。「その位置は 学内からは今は行けず、一旦外へ出て、周辺部から廻ってください」と聞いて、地図にマークをつけ、まず、学内の丘陵地の頂まで上がって、それから学外へ出て、丘陵地の周辺をめぐることにする。

2. 古代の製鉄炉群遺構が出土した 12 次調査地点・24 次調査地点の製鉄遺跡 概 要





次数・通知名		調度	調整年	数键性		ESTRIC	5.0 8.0		調査報
Q銀石+元古珠門 神田調査	森原学石ケ元	9656	HB~ H10		古墳	門塘	19		盛り土保存
O原金屋古墳 連絡調査	桑原宇全座	9657	H8		古墳	新方積円頃・割竹形 木棺	1	界架線	盛り土保存
元間石ヶ原古墳	元尚字石ヶ原	9658	H8:		古墳	前方發円塘(石ヶ原 古塘1次調費)	-1	演览器、土路器、 鉄旗	ENNA
に関・血療道計算 成態	元間	9602	H8		縄文一中世	連跡の分布、観囲な どを確認			ENGT
)次 D原石ヶ元古道群	元简字石ヶ元	9656	H9	100	古墳	円塘	12	武昌、馬帛、鎮治 具	21次と合わせて32基 調査し、内18基を保存
2.2	森原字持ヶ元	9659	H8~ H9	3,007	篇文一古代	溝、土壤、水田		調文土器、須恵 器、土師器	EBST
*	元四字瓜尾	9763	H9~ H11	3,500	縄文~古墳	确文石組炉、弥生住 底跡、円墳	1	調文土器、石油、 石槍	12部保存
次	▲原字石ヶ元	9764	H9~ H10	1,219	古代一中世	挺立杜建物路、满		土馬高、中国南征 高	Essa
5.00	桑原字石 ヶ元	9811	H10	2,500	古代	土壤、包含層		項意器、土部器	EBST
次	森原字石々元	9812	H10.	2,880	古墳	包含層、ピット		消息器、土路器	EBG#
*	元回字池ノ浦	9813	H10~ H11	7,500	古地一古代	提立柱建物群、池状 連構、製鉄炉		「壬辰年」木棚。 碗、瓦	7,500㎡を選成送機 部分に進め関し保存
次 同古境群州群	元简字大板	9829	H10		古墳	円埔	1	消息器、土袋器	E894
冰	元田字池ノ浦	9851	H10	190	秀生・近世	整穴住居跡、近世墓		外生土器、陶磁 器、鋼銭、煙管	1210年17
0次	元四字楷十清	9854	H11	1,336	古代~中世	包含層		石斧、尖弧器、頭 恵器	1211/9/4
120	元四字線ヶ浦	9855	H11	1,650	古墳~古代	主権、主器り、演		土師器、鉄製廠 先、鉄族	2897
2次	森原字線形	9902	H11~ H12	5,500	古代	製鉄即		鉄津、炉澤、木製 品	盛り土保存
3次	元與字立論	9903	H11		古墳	円頃・前方後円頃	3	須恵器、土師器、 鉄製品、ガラス王	2094
4次	元尚字報ヶ清	9904	H11	1,241	古代	包含層、ピット		土師器	記録保存
5次	森原子提形	9923	H11.	3,500	古代~中世	包含層、水田		須惠器・土師器。 「解除」木種	盛り土保存
6次	A原字牛切	9933	H11	1,224	古代	包含層		土師器	記算保存
7次 開古城郡8郡	元四字池ノ浦	9934	H11		古墳	円塘	2	演意器、土師器、 ガラス王、鉄器	2000
8次	鱼原字别府	9946	H11~ H14	16,800	古墳~中世	据立柱建物路、池状 遺構、製鉄炉、円墳	2	木築、器書土路、 旧石器	記録保存
2121	THE RESIDENCE OF THE RES	THE RESERVE	100 000	ALCOHOL:	10 Av. 470 Car. Sec. 140	POPULATION POPULATION		100000	ACCUSE OF THE PARTY OF THE PART

次数・減砂名		西 有		面積向					
20.X	鱼等字产山	0001	H12~ H15	20,130	古墳~古代	發穴住居跡、提立柱 建物跡、製鉄炉		紀年木製、播書土 器、董卓	15,000mfを盛り土作 存
21次	桑原字石 ヶ元	0002	H12	2,900	古墳	丹填	3	ガラス王、鉄湾、 夏器	記錄保存
22.0t	鱼等字字级	0033	H12	3,890	古代	据立柱建物跡、製鉄 炉、井戸		土師器、順恵器、 鉄澤	15884
の次・確認調査	元司・森里	0019	H12	9,106	2	投焼き室		炭化物	7,300㎡ 医糖油原存 验区以
477	桑華字金羅	0034	H12~ H15	5,500	古墳~古代	努力住居跡、製鉄炉		銀港、炉港	記録保存
75次 鱼新古迪斯A群	元尚字石ヶ海	0052	H12~ H13		古墳	円塊	7	酸冶工具、頂度 器、切子玉、鉄珍	128971
88次	桑原字严山	0110	H13	5,487	古墳~古代	整穴往居跡、振立柱 建物跡、石組遺構	4	土部省、田忠省	盛り士保存3,442ml
27.00	向西 字产山	0153	H13~ H14	4,495	古場~古代	發穴住居跡、漢、盤 治炉	3	土師器、領恩器、 鉄河	議物位置変更と盛り出 による保存1600ml
28-X	元四字池ノ浦	0154	H14	2,214	古代~中世	自然流路、焼土場。 ピット		弥生土器、領意 器、黒曜石、鉄河	一部盛り主保存
19/K	元與字石ヶ寨	0204	H14~ H15		古墳	円頃	9	項思路、土路路、 發旗	起線保存
90-Jx	点理学中切	0240	1114	2,450	古代	包含度、伏块土壤			記録保存
312k	0878 ts	0242	H14~ H17	9,000	古墙~古代	及確定り、指立柱建物 時、報治炉、及実施		发、土部器、原理 器、数率、子持ち 写玉	調査中
32.X	元同字宫草 確認調査	0257	H15	1,700	古墳一古代	発穴住居跡、溝、ビ ット	100	賽帽、土師器、頂 患器	調査予定
(3次	△東字子川	0303	H15		古雄	円埔	1	MES	尼田保存
14.7Z	元周字石ヶ原	0310	H15	333	古墳	丹浦	3	領市路	STREET.
15.X	元明字石》是	0340	H15~	13	古墳	前方後円填	*	用电路-土路路	移動技术整備
16次 日曜古墳	企業子深田 他	0341	H15~	2,220	古墳~近世	大型円墳。近伐基埔	13.	MM. RES	盛り土保存
3772	元尚字石ヶ月	0365	H15~ H16		古道	Pa Pa	4	鉄製馬具・消息 器・鉄刀	2897
183k	云岡宇大久保	0371	H16~ H17	7,000	中堂	中田山城 (米級城)		±MB	2800
10 K	元與幼稚園	0404	H16	880	秀生	物生時代の包含層		为生土器・石器	記録保存
40%	A 等字藻田	0410	H16	2.000	8A~FE	包含糊		資金器・土局器・ 銀河	2884
4132	元與字基	0435	H16	1,500	秦皇~平安	古代の包含層	100	報告書・数年	調査中
42.00	元尚字二义	0452	3116	9,000	李生~古语	祭生~古墳時代の包 金属		水製業員、勿生士 図、建築部材	頭食中

福岡市教育委員会 九州大学新キャンパス地内 元岡・桑原遺跡群発掘調査パンフレットより 整理転記













九州大学伊都新キャンパス 2007.6.10.

入口からまっすぐ西に伸びる丘陵地の間をまっすぐ頂上部に向かってメインロードがつけられ、両側はすでに整備された造成地に大学の建物が建てられている。南の丘陵地には工学系研究棟の大きなビル群が建ち並び、北側の丘陵地は緑地の間に低層の建物があり、上部は崖になっていてこの丘陵地を取り囲むが、木々に覆われていて

良く解らない。この北側の丘陵地の尾根筋には数多くの古墳群があり、32基が調査され、18基が残されているという。 まだ、学内が工事だらけで、メイン道路から外れられないので、近づけない。工学系研究棟を抜けた丘陵地の頂上部が広く整地され、広場になっていて、広い駐車場が作られている。この頂上部から北に下る丘陵地は令整地の真っ最中で、これを降りてゆけば 古代の製鉄炉が建ち並んで出土した 12次調査地点の方へ行けそうであるが、ストップされていた。また 崖の縁から北の斜面下をのぞくが、やっぱり、製鉄炉群が出土した 12次調査地点は見えなかった。



九大キャンパス北側に沿う道路から東を眺める

製鉄炉群が出土した 12 次調査 地点を眺めたかったので、学外 へ出て、北側桑原の集落に出て T字路を西へ

ちょうど谷を挟んで九大キャンパス沿いの道路から、12次 調査時点を探す。南に工学系の研究棟が良く見えているが良く解らない。この道路から小さな谷を挟み南側が九大のキャンパスなのですが、ここでも



九大キャンパス北側より谷を挟んで 石ヶ元古墳群の丘 工学系研究棟

工事用金網でキャンパス内へ入る道がすべて クローズされていて近づけない。

12 次調査地点は道路沿いの池の向う側周辺なのですが、ちょうど西から伸びてきて東の谷に落ちる小さな丘に阻まれて見えない。この丘の向こう側南斜面から東の谷にかけてが、製鉄炉遺構が建ち並ぶ 12 次調査地点で、今は調査が終わって、完全に埋め戻され、保管処置がとられているというが、こちら側からは丘に阻まれ見えない。





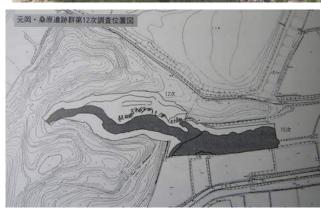
九大北側より、建ち並ぶ製鉄炉遺構が出土した 12 次調査地点周辺を眺める 2007.6.10.







鉄アレイ両排滓型標準製鉄炉(23号製鉄炉)





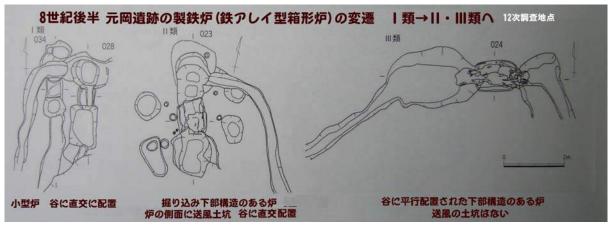
8世紀後半の製鉄炉が建ち並ぶ 12 次調査地点 製鉄遺跡群

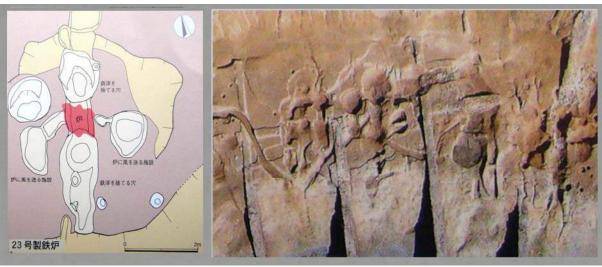
「鉄と古代国家 ~今治に刻まれた鉄の歴史~」福岡市元岡・桑原遺跡の調査概要(菅波正人)より

3. 古代の製鉄炉群遺構が出土した 12 次調査地点・24 次調査地点の製鉄遺跡概要

(「鉄と古代国家 ~ 令治に刻まれた鉄の歴史~」福岡市元岡・桑原遺跡の調査概要(菅波正人)より)

今治で開催されたシンポジュウム資料「鉄と古代国家 ~今治に刻まれた鉄の歴史~」の中にある「福岡市元岡・桑原遺跡の調査概要」(菅波正人)によると この 12 次調査地点では 東側に開口した幅 20~40m の谷部の北側斜面 (上記した観察地点から見た丘側から言うと丘の南斜面)を平坦に造成して 東西約 60m に渡って製鉄炉が 27 基 (谷に直交するもの 22 基 平行するもの 5 基) が建ち並び谷は排滓場になっていて、鉄滓が埋め尽くされていたという。古代製鉄 鉄生産の大遺構である。製鉄炉は大和王権が畿内で育んだ標準タイプ 両側に排滓坑がつく箱形炉(鉄アレイ型箱形炉)で 炉床規模は幅 30~80cm 長さ 40~130cm で 炉の側面に送風に関わると考えられる土坑があるものとないものの炉があり、次に示す I のタイプの製鉄炉から II III のタイプの製鉄炉に変遷し





12 次調査地点より出土した古代の製鉄炉群遺構

出土遺物は土器類(須恵器・土師器等)・製鉄関連遺物(炉壁・鞴羽口・鉄 字等)・木製品(火鑚具・送風管・書き出し棒など)があり、製鉄炉が建ち 並ぶ谷には大量の鉄字・壊された炉壁が破棄されている。

出土した炉壁には送風孔が複数付いており、谷の底からは半割りにした木の内面を刳り貫き、あわせて作った径 8~10cm 長さ約 60cm の片端がいずれも焦げた管 送風管が出土している。箱形炉 II の送風土坑の遺構と炉の間が約 60cm であるので、これらの送風管は箱形炉 II に伴うものと思われる。また、土製の送風管も少数であるが出土している。

土器類の出土寮は少ないが、それぞれの遺構からの土器類から、製鉄遺構の操業時期は8世紀中頃から後半で9世紀には終わると考えられている。また、24 次調査地点からは大型化したII 類の炉が7基と大量の鉄滓が出土している。









■24 次調査地点の製鉄遺跡の製鉄炉 概要

全回は調査地点は近づけなかったが、現在は埋め戻され盛土保管されているというので、今後、九大キャンパス の遺跡整備計画の中で、また 整備されて公開されるものと楽しみにしている。

3. 元岡製鉄遺跡群が眠る九州大学 伊都新キャンパス walk (2) 東地区 と総括

12 次調査地点北側の道を桑原集落の方へ戻り、九大キャンパス入口への T 字路を曲がらず、そのまま桑原集落を抜けて、もう一つ大きな製鉄生産遺構が出土した東地区 (20 次・24 次調査地点) の方へ行くが、こちら側もずっと金網が張り巡らされ、九大キャンパスに近づけない。



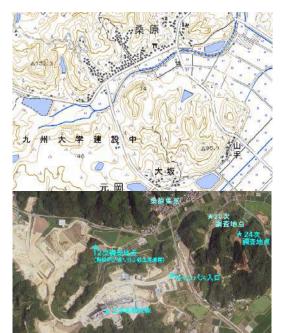


九大キャンパスの東端 24次調査地点周辺から桑原集落方面(北)を見る 2007.6.10.

桑原集落から九大キャンパスの丘陵地を眺めながら東へ進み、丘陵地の東端のところで、道を折れると、田畑の中 正面に見える丘陵地の東端と道を挟んで小高い丘(元岡塩除古墳)の間を抜けている。この古墳に差しかかる手前に整地工事場跡と思われる雑草で覆われた広場があり、「九大キャンパス 第Ⅲ工区その3」の看板が付けられている。この周辺部の九大キャンパス内が 製鉄遺構が出土した 24次調査地点である。ここに車を止めて、この地点がながめられるか、柵の中や周辺を探してみるが、よくわからない。



九大キャンパス第Ⅱ工区その3の看板があるキャンパス東端周辺



道の反対側の田圃の中に青いグランドシートがかけられた所が見える。多分発掘調査中の場所だろうが、製鉄炉がある場所ではなさそう。反対に この広場の南側に隣接する丘陵地の端にロープが張られ、赤茶けた土が露出した発掘場所が見える。





とにかく、丘の上に登ると、斜面上に幾つもの発掘された土坑や溝が見え、鉄錆の赤茶けた色が広がる場所も見えるが、何の遺構か良く解らない。24次調査地点の周辺ですが、そこはもっと丘陵地の奥である。 残念ながら きっちりした遺跡図持ち合わせず、よくわからず。











22 次調査地点に隣接した丘の発掘中の遺跡 詳細は不明 2007.6.10.

北から東へ広がる田園と桑原集落が良く見える小さな尾根筋の端の高台の上の傾斜地に 一部 青いグランドシートで覆われているが、古墳や墓ではなさそうで、 斜面の頂上部と下に 2条の溝があり、 炉跡と思われる長方形状の赤茶けた窪地がところどころに出土していて、製鉄関係遺跡のように思うのですが、総計には結論できない(後で資料を見ると 22次調査地点 掘立て柱建物跡や製鉄炉などが出土した地点に隣接した場所のようだ)

4. 総括



丘陵地の下に広がる田園地帯 東 今宿方面を眺める 2007.6.10.

8 世紀後半から 9 世紀にかけて、大和王権が大陸や朝鮮半島からの侵略におびえながら構築した九州の砦。 それを支えた鉄の大供給基地が糸島半島の根元にある元岡・桑原製鉄遺跡。古代の国家的事業である大製鉄コンビナートであった。また、北には東北 蝦夷への対応のため、常陸 金沢製鉄遺跡群の大製鉄遺跡群がある。

一度 是非 自分の眼で確かめたかった元岡製鉄遺跡群 残念ながら 製鉄の製鉄遺構そのものは見られませんでしたが、場所が確認され、また 規模の大きさが実感されて満足でした。

九州大学の移転整備計画は 工学系の移転が始まった

ばかりで、またまだ先まで続きます。この長期にわたる移転工事計画の中で、この貴重な製鉄遺跡群が 忘れ去られることなく 早い機会に きっちりとした遺跡の保存と公開がなされることを期待しながら、元岡の丘陵地を後にしました。

ついでながら、この大きな古代製鉄コンビナートを含む古代の大遺跡群については 未だに 断片的で レビューすら公開されていません。 まとまったものはなく、その中心にある九州大学でもほとんど中身が知られていないのには驚きました。研究者間の価値にとどまることなく、早く 一般の眼に触れられる資料・レビューが早くまとめられ、一般にも公開することもお願いしたいものです。

2007.6.10. 元岡遺跡の丘陵地から東へ 戻りつつ

Mutsu Nakanishi



【 参考資料 】

- 1.「鉄と古代国家 ~今治に刻まれた鉄の歴史~」愛媛大学考古学研究室・今治市教育委員会
- 2. 「桑原遺跡の調査概要」福岡市博物館 菅波正人
 (鉄と古代国家 ~令治に刻まれた鉄の歴史~」 高橋佐夜ノ谷 II 遺跡の類例より
- 3. 九州大学新キャンパス地内 元岡・桑原遺跡群発掘調査パンフレット 福岡市教育委員会 文化財部

縄文の心を映すストーンサークル

縄文の遺跡を訪ねて 風来坊 縄文の円環遺構 レビュー -





鹿角 大湯ストーンサークル と 青森 小牧野ストーンサークル みなさんには どのように 映りますでしょうか

2007年 7月 By Mutsu Nakanishi

- 三内丸山縄文遺跡で、縄文人の精神世界を語る赤坂憲雄さんの講演に魅せられて、訪ねだした縄文 集落の中心の広場に眠る祖先・死者をサークル状に取り囲んで住居を建てて暮らす縄文人 そんな縄文人が作った「ストーン サークル」
 - ◎ ストーンサークルは縄文の心・世界観を映す
 - ◎「戦さ・穢れをしらず、死者を忌み嫌わず、心やさしき縄文人」 そんな言葉にも魅かれています。

ストーンサークルに魅かれるのはその円環ばかりでなく、日時計状遺構の存在 この円環と石柱 これが何を表し、一体となってどんな縄文の心・世界観を表すのだろうか・・・

「縄文人の心」が共同墓地のある広場を住居群が取り囲む縄 文の環状集落を作り上げ、「ストーンサークル」絆の象徴とし た共同墓地・共同祭祀の場を作る。北海道の周堤墓や北陸・ 越後のウッドサークルも同じ趣旨であろうか????

縄文土器などにもこの「サークル」・「渦巻き」文様が繰り返 し描かれている。そして、このサークルを立体的に構造化す る「木柱」・「立石・石棒」の存在。

この資料を整理している途中で ストーンサークル・立石と 木柱が建つ糸魚川市の縄文遺跡 寺地遺跡のジオラマを見ま

した。縄文の集落はこんなだったのか・・・・と今まで見てきた縄文集落 やストーンサークルなどをだぶらせていました。

この縄文人が残した「サークル」と「柱」,立石,石棒はどんな願いがこめられているのだろうか

今 何を感じればよいのか

令まで訪れた縄文遺跡を もう一度 引っ張り出して この視点で整理してみました。

かつて、訪ねた縄文人の円環遺稿のアルバムを提供します 皆さんには どのように映るでしょうか・・・・・



木柱列とストーンサークルの瓜方がある 寺地遺跡縄文機制 配石遺構のイメージ図



縄文後期のモデル ストーンサークルと周堤墓

縄え人の「円」と「枝」は何をあらわすのか・・・







大型化した大集落が 縄文中期末以降の寒冷化による森や海の変化によって、集落が維持できず、分散移動を余儀なくされた集団の共同墓地・祭祀の場所と考えられている。また、石棒は生殖・再生のシンボルといわれている。でも、集落内に立つ立石の数々や巨大柱にまで広げると もっと広い永遠・「再生・命の継続」と言った願いがこめられているのではないでしょうか・・・・

三内縄文遺跡で講演された森本哲郎氏はこの「柱(ハシラ)・ハシ」の言葉に「異界をつなぐ」という意味を説き、後に「端・橋・箸・梯・柱・艀」などに当てられる意味から「天上と大地 生者と死者」をつなぐシンボルを見る

諏訪大社御柱祭 伊勢遷宮御柱はそんな縄文の祭祀の令の姿なのかもしれない。

「縄文人はすばらしい景色が広がる高台に住んでいた」が私の縄文遺跡を巡った印象。それからすると私の 感じもそれに近い。

「柱」に「異界をつなぐ」意味を見出し、「サークル」は「大地・自然・集落」か???「円」と「柱」は それこそ森の民 縄文人が毎日みなれた森、畏敬する自然か そして、それらを通して亡くなった祖先と対話し、永遠と再生を願う。

石棒を中心に回りに石を配する三内丸山遺跡の小型のストーンサークル墓が立ち並ぶ墓の道 埋葬された死者が天空と大地・村を通う出入り口がストーンサークルではないか???? そしてこの円環が大地・村・自然へと広がっていったのではないか???

もちろ、死者と生者とをつなぐ??????

これらと同じようにして、数々の縄文の円環が意識され、展開して行ったのではないだろうか・・・・

- 1. 縄文が色濃く残る東北には令も屋敷庭墓が残る。
- 2. 縄文の竪穴住居の入り口付近には、幼児・胎児を埋葬した甕と石棒.
- 3. 広場・墓地を中心とし住居がそれを取り囲む環状集落
- 4. 土偶. 縄文土器 現代に通じるダイナミックなエネルギーとその形・文様にこめた願いと祈り これらの縄文時代を代表する精神文化・遺物も 「縄文の宝物」として、輝いて見える。

天空にまっすぐ立つ巨木にエネルギーを感じて数々のモニュメントが造られた「円+柱」。それが 生活の場「村・大地」そして「山」「森」の「自然」を表わし、「自然への畏敬と対話を通じて、共に永遠の命を願う心」が「縄文の心」「日本人の心」として今にまで 連綿とつながっているのではないか????

縄文遺跡に立ち、眼前に広がる大自然のパノラマの爽快感を味わいながら、そんなことを思い浮かべます。 縄文遺跡そして ストーンサークルに代表される円環遺構にどんなイメージを感じられますでしょうか??? 私の今までに歩いた縄文遺跡の円環遺構をそんな視点でりストアップして、整理しました。

○ 参考資料

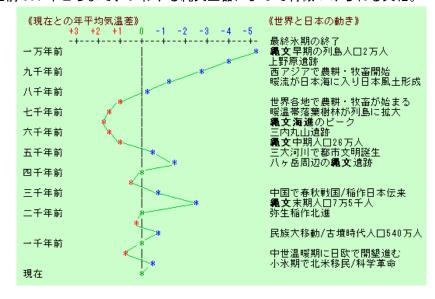
- 1. 三内丸山発信の会「縄文ファイル」 赤坂憲雄氏および森本哲郎氏講演・対話ほか
- 2. 縄文文化の超自然観 -死と再生のシンボリズム・ 明治大学蛭川研究室公開資料 世界の人類学より 整理 http://www.kisc.meiji.ac.jp/~hirukawa/anthropology/area/ne_asia/Jomon/index.htm
- 3. 発掘された日本列島 2005 & 2006 ほか
- 4. 三内丸山遺跡から縄文列島へ「縄文文化の扉を開く」
- 5. 三内丸山遺跡と北の縄文世界 ほか
- 6. Mutsu Nakanishi H.P. 「和鉄の道縄文遺跡を訪ねる Country Walk」遺跡訪問記より

1、縄えの時代已分と縄ええ化

1.1. 縄文時代の 時代区分 縄文時代は階層を発達させつつあった社会

縄文文化は西暦紀元前 11000 年〜紀元前 300 年ごろまで、いわゆる縄文土器によって特徴づけられる文化。

1万年におよぶ縄文時代は、変化に乏 しかったわけではなく、大きな変化 があり、通常 下記の6つの時代に 区切られる。日本列島に住み着いた 人たちが、森や川・海岸の高台に定 住を始め、集落が形成されると共に、 狩猟・採取から栽培・共同漁労など 集団・社会を形成してゆく過程にあ り、階層を発達させつつあった社会 であり、特に中期以降 それぞれの 地域で、華やかな縄文文化を展開す るとともに、交易・交流も盛んにな る。



草創期 BC1100 ~ BC7500 早期 BC7500 ~ BC4100

土器・石鏃の使用が始まり、定住化が進む。

小型の土偶つくられる。数個の竪穴住居で一集落を構成する。

縄文の海進が始まる人口約2万人。

前 期 BC4100 ~ BC2700 竪穴住居が広場を囲んで集落をつくる。気候温暖で海面・気温上昇(縄文海進) 進む。 現在の内陸部に貝塚。湖沼の発達により丸木船がつくられ漁労活動開始。 常緑照葉樹と落葉照葉樹の豊かな森の形成 人口約10万5000人。

BC2700 ~BC2000 中

立体的文様のある大型土器が流行する。三内麿山遺跡など集落の規模が大きくな り東日本では大規模環状集落が発達。植物の栽培をうかがわせる。海岸線ほぼ現 在に近くなる。大型貝塚形成。石棒・土偶などの呪物が盛んにつくられる。石柱 祭壇。抜歯の風習が始まる。気温低下始める。人口約26万人。

期 BC2000 ~BC1000

温暖から寒冷へ。森の様相が変化し東日本では集落移動がおこる。

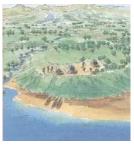
交易目的の漁労民発生。大型貝塚。製塩土器。製塩専業集団、塩媒介集団、塩消 費集団。伸展葬。大湯環状列石などストーンサークルが東北・北海道地方に集中 形成。ウッドサークル(巨大木柱遺跡)。敷石住居址。人口16万300人。

東日本で亀ヶ岡文化。 北九州で水田耕作が始まる。

人口 7万 5800 人。

BC1000 ∼BC 350 晩





1.2. 縄文時代に花開いた文化

縄文時代に花開いた文化 【1】















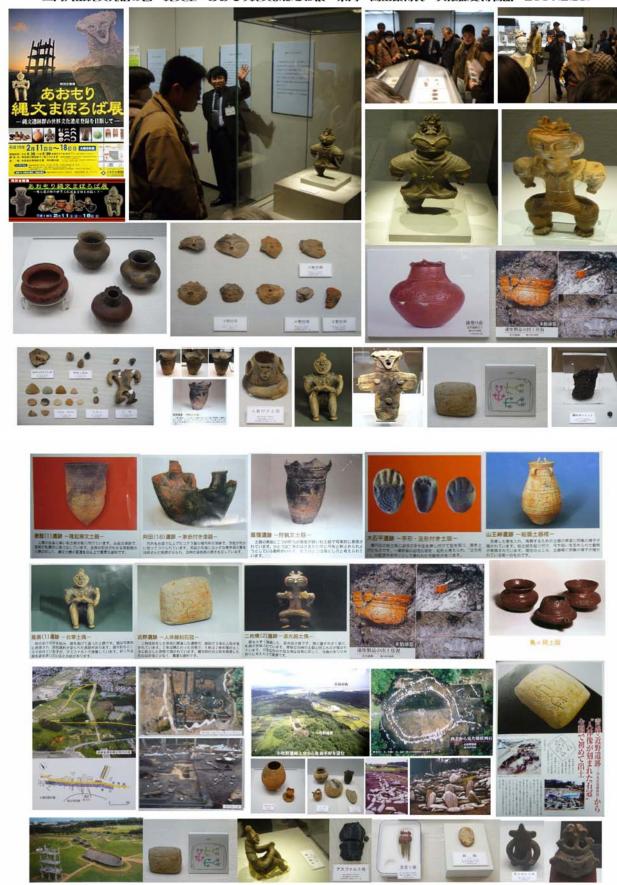






縄文時代に花開いた文化 【2】

三内丸山縄文発信の会 縄文塾 あおもり縄文まほろは展 宲内 岡田康博氏 大阪歴史博物館 2007.2.16.



2、 縄文の心を映すサークル 「サークル」遺構のある縄文遺跡リスト

1. 環状集落

岩手県西田遺跡 中期中葉 約 4500 年前の環状集落遺跡

直径 150 メートルを優に超える本遺跡の環状集落は中央広場を囲むように大小多数の掘立柱建物群、その外周を住居群、さらにその外周を貯蔵穴群が2重・3重にめぐる重環状構造をみせており、広場からは列状に分布する少数の墓を中心に放射状に配列された200基近い土壙墓群が発掘されている。

長野県梅ノ木遺跡

中期 5000 年前の遺跡 南アルプス・釜無川を見晴らす茅ヶ岳の山麓の台地 100 軒を越える竪穴住居が広場を囲んで そっくりそのまま見つかった。谷への水場へ向かう道・作業場も。 縄文のモデル村が具体的な姿をあらわした。

2. 環状貝塚·馬蹄形盛土

千葉市 加曽利貝塚 都川上流の台地上にあり、縄文中期の直径約130mの北貝塚と縄文後期の約170mの南貝塚から成る日本最大の 貝塚。単なるゴミ捨て場でなく、周縁の集落の共同作業場(貝の干し場等)との考えがある。貝塚から貝を煮

詰めた痕跡なども出ている。 加曾利 E 式土器·B 式土器の標式遺跡としても名高い。

岩手県 御所野遺跡 縄文中期後半 4500 年前の大規模集落。 中央部広場に二つの隣接した配石遺構と土坑墓が中心に向かって 環状に取り囲む。配石遺構はところどころに土坑墓の上に造られている。この周囲に 3 つの住居群 (掘立柱住 居群・竪穴住居群)が取り囲み、あわせて 600 軒を越える住居跡。 また広場の片側に盛土遺構 また焼失住

居から屋根に土が乗っていた。

北海道 垣の島遺跡 南茅部町の現在の海岸線から標高で50メートルほどあがった比較的平らな海岸段丘でほぼ完全な馬蹄形の盛

土遺構がみつかった。西北西に開口部を向けて、長軸が約120メートル、短軸が約95メートル、盛り土 自体の高さは1~2メートル、幅は約15メートルほど。盛り土が作られたのは縄文時代後期初頭(約40

00年前)盛り土としては、最古の時代に遡ると思われる。

青森三内丸山遺跡 縄文時代を代表する中期 5000 年前の大規模集落 6 本柱・大型住居・墓の道・栽培植物・盛土遺構・土偶

や土器はじめ大量の種々の出土品の多さと広く各地との交流等々 縄文観を変えた遺跡で世界遺産登録を目

指す

3. ストーンサークル・環状列石

三内丸山遺跡墓の道 縄文中期 4500 年前 村の中心へ向かう 2 本の大きな道 その道の両側には 墓が並び その上に小さな配石 遺構・ストーンサークルが立ち並ぶストーンサークルの原型

長野県 大野遺跡 縄文中期後業4000年前の遺跡で、中央広場に直径20mのストーンサークルがほぼ完全な形でみつかつかり、 その周りを住居群が取り囲む。集落の中にあるストーンサークルとして、次の時代の集落外ストーンサーク

ルへと発展する注目遺跡

青森県 小牧野遺跡 縄文後期前半 4000 年前 青森市の郊外南部の荒川と入内川に挟まれた舌状台地の標高 140m 付近に位置する

縄文のストーンサークルを代表する一つ。円環を構成する区分それぞれが石組構造になっていて、膨大な日数と労力をかけて作られており、縄文人の組織力を見せつけるモニュメント。3 重構造の環状列石のほかに竪穴式住居跡、土器棺墓や土坑墓群、貯蔵穴や遺物の捨て場、湧水遺構、道路跡等が見つかっている。ストーンサークルの内側と外側の輪の間からは、「甕棺土器」と呼ばれる土器で作った棺が3つ埋められた状態で見つかっている。 甕棺土器は、一度墓に埋葬した遺体を、数年後に肉が朽ちた後に取り出し、その取り

出した遺骨を再び埋葬するための骨壷であると考えられている。

秋田県伊勢堂岱遺跡 縄文を代表するストーンサークルの一つ。雄物川に近接する大館能代空港近くの標高 40~45mの台地上に位

置する、縄文時代後期前半(今から約4000年前)の大規模な遺跡で、A~Dの4つのストーンサークルや墓、、 掘立柱建物跡、土壙墓、捨て場など、多くの祭り・祈りの施設・道具(ヒョウタン形の土器や板状土偶、キノ

コ形土製品など)もみつかり、墓場・祭祀の場と考えられている。

4 つのストーンサークルからやや離れた場所に、日時計型組石???が数個みつかり、この組石の中心からスト

ーンサークル A を見ると、夏至の日に太陽が沈む位置とだいたい一致すると考える説もある。

秋田県大湯環状列石 野中堂、万座に所在する2つの環状列石を主体とする縄文時代後期(約4000~3500年前)の大規模な集落跡。 縄文を代表するストーンサークルの一つで、ストーンサークルの完成形と考えられている。

約 130 メートルの距離をおいて東西に対峙する野中堂と万座の環状列石。いずれも 100 基以上の配石遺構の集合体で、特殊な位置を占める「日時計状組石」1 基以外は全て 2 重の環状 (外帯・内帯) に構築されている。なお、両列石の規模は野中堂環状列石が径 42m、万座環状列石が径 48m である。組石は万座では 48 基、野中堂で 44 基。それぞれの組石の下に墓壙があることや副葬品が発見されたため大規模な共同墓地と考えられている。さらに万座の周辺調査から掘立柱建物跡群が巡らされていたことが明らかになり、これらは墓地に附属した葬送儀礼に関する施設ではないかと推測されている。また、大湯環状列石には日時計状組石があり、この日時計中心部から環状列石中心部を見た方向が夏至の日に太陽が沈む方向になっている。

北海道鷲ノ木 5 遺跡 北海道森町の海岸線から 1km 内陸 標高約 70m の台地に位置する縄文後期前半(約 4000 年前)の環状列石で 同時期の集団墓地と考えられる竪穴墓域とともに発見。

> 駒ケ岳のすぐ下 厚い火山灰でパックされていて良好な保存状態。石の上のほうが埋まりきらずに見えてい たために発見された。環状列石は、外帯・内帯・中央帯の3重に石が丸く並べられ、これまでの調査では石 の下にお墓はない。外側の形はやや楕円形で、長軸約37メートル、短軸約34メートル。外帯と内帯はお よそ0.5メートルの幅で巡らされ、内帯は長軸が約35.5メートル、短軸が約33メートル。中央帯は環 状列石の中心部にあり、長軸4メートル、短軸2.5メートルの楕円形。

> 環状列石の石の数は約530個あり、穴を掘って埋め込まれているものやそのまま置かれたものなどが見ら れ、大きさは20~60センチメートルほどのは平状と棒状の石を桂川の川原から運んで来たものと考えら れる。また、環状列石をつくる前には、あたりの地面を削って平らにする大掛かりな土木工事をしていたこ とが地層の観察からわかった。出入り口と考えられる部分や、埋設土器とよばれるもの1ヶ所が見つかりま した。これ埋設土器は乳幼児を入れて埋葬したり、遺骨が骨になった段階で再埋葬するのに使われたものと 考えられている。また、環状列石に接して発見された墓域は大型の竪穴(最大 11.5m)を掘り込んだ中に大小 11基の土坑墓。

この墓域は縄文末期3000年前に北海道でみられる周堤墓の原型とも推定されている。

環状列石のまわりには、竪穴式住居など集落の跡が見つからず、ふだんの生活の場所とは離れた葬送や祭祀 を行う神聖な場所と考えられます。

北海道 忍路遺跡群 約3.500 年前縄文時代の後期のストーンサークルで、この時代に出現する「区画墓」と呼ばれる集団の墓地 と考えられている。小樽市街を抜けて西へ海岸沿いを余市のほうへ10kmほど行った標高約130mの三笠山の 麓にある。大きさは現在の指定の面積で 821 平方メートル、直径は南北約 33m・東西約 22m の楕円形でサーク ルは 2~3m の幅に高さ 10~20cm の小石を環状に重ね置き、その内側に高さ 100~200cm の大石を配置されいる。 石材はその一部を、余市町のシリバ岬一帯の柱状節理の輝石安山岩に求めている。近代になり、一部手を加え られ、造られた当時とは異なった所があります。

> この環状列石の北側に隣接する同じ時代の忍路土場遺跡から巨大木柱が発見されており、環状列石と関連す る祭祀的な遺跡と考えられ、大量の土器、石器、建材、漆製品、等が出土。

> 小樽・余市の間はストーン・サークルの密集地帯で、ほかに地鎮山のストーン・サークル、余市町西崎山の ストーン・サークルがある。地鎮山のストーン・サークルはあきらかに墓の様相を呈している。

4. 周堤墓

キウス周堤墓群

縄文後期(約3000年前)の集団墓地 千歳市キウス周堤墓 干歳市の中心から東方9km、石狩低地帯を望む馬 追丘陵南西麓のゆるやかな斜面に立地。地面を丸く掘り、掘った土を周囲に土手状に積み上げ、その内側が墓 地になっており、周囲に堤があることから「周堤墓」と呼ばれている。キウス周堤墓群 7 基の墓のうち、最大 のものは直径が75mにも達します。土手の上から竪穴の床までの深さは5.4m、最も小さな墓の直径は20mです。 現在、キウス周堤墓群とその周辺には24基の墓が見つかっている。

5. ウッドサークル 環状木柱列

石川県チカモリ遺跡 金沢市西南部にある縄文時代後・晩期の集落遺跡 環状木柱列(ウッドサークル)

直径約80cmほどのクリの木を縦に半分に割った巨大な木柱を直径約7mの環状に立て並べた環状木柱列が重複 して発見され、縄文人の木工技術の高さを示すと共に、その性格を巡って注目を集めた。環状木柱列は柱の根 元が残るだけで上部の構造は推測するしかなく儀礼の場や特殊な建物などいろいろな考えが出されているが、 今のところはっきりとしない。

直径 30~85 センチメートルの巨木が総計 347 本も発見され、それら木柱の多くは縦に半分に割られ、断面がカ マボコ形になっているものやリ字形に加工されている。これら木柱のうち直径50センチ以上の23本の巨大な 木柱は、集落の中央広場付近に8~10本が組みになって、直径6~8メートルの円形に規則正しく並べて立てら れ、環状木柱列が重複して出土。これら、木柱根の出土が縄文時代の遺跡の中で極めて多く巨木文化の存在が 考えられ、祭祀施設と想定されている。

石川県 真脇遺跡 縄文時代の前期初頭(約6000年前)から晩期終末(約2300年前)まで、約4000年の間繁栄を続けた長期定住 遺跡。能登半島の先端から少し内海に入った入江の奥にあって、採集・漁撈の生活を営む集落で、標高4~12m の低地に位置する湿地遺跡であったため、普通は腐って残りにくい動植物で作られた遺物が大量に保存されて いた。特に前期末から中期初頭(約5000年前)の層から大量のイルカの骨が出土し、その数の多さから真脇の 縄文人はイルカ漁を行っていたと考えられている。

> また中期中葉(約4500年前)の層からは板敷き土壙墓が4基見つかり、晩期(約2800年前)の土層からは巨 大なクリの木を半割りし、円形に立てて並べた「環状木柱列」が見つかった。

> 木柱列はクリ材の半円柱 10 本で直径 7.4 メートルの環状に取り囲み、各々の柱を半分に割り、丸い方を円の内 側に向けている。その太さは直径80~96センチもある。小さな環状もあり、環状木柱列は何度も立て替えられ たと考えられる。

3、円環遺構を有する縄文遺跡 【1】

3.1. 縄文中期 出現期のストーンサークル 集落内環状列石

◆ 大野遺跡(長野県大桑村)の環状配石遺構(縄文中期4千数百年前)

http://www.interq.or.jp/www1/chungush/kiso/iseki.files/iseki_1.htm より

大桑村長野の大野遺跡は、縄文時代中期後葉(約4千年前)の環状配石遺構(ストーンサークル)で、竪穴式住居跡のほか、直径20mほどの環状配石遺構が、ほぼ完全な形で発見された。ストーンサークルは、祭祀の場や墓地などと考えられている。日本でこれまで発見されたものでは、最も古い。

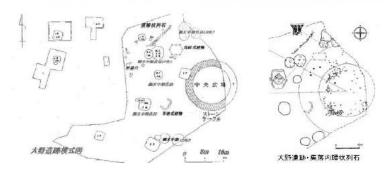
また、同心円状に存在する住居跡と一緒に見つかる例は少なく貴重な例。また、 遺跡の北側には直線状列石が見つかり、 集落を区画するような形になっていま すが何を意味するかわからない。

ストーンサークルを中央広場として、その外側に住居跡、高床式、地面に直接建った高床倉庫、平地式倉庫、その外側に住居跡が点々とある。

環状列石を中心に同心円として真ん中には広場、環状列石、建物さらにその外側に竪穴の住居跡がまわるという同心円。 ストーンサークルの内は祭祀、お祭りの中央広場でそれを囲むように石が配され、石の下に、お墓があり、墓石として石を置き、結果としてまるく輪に







村の中にあるストーンサークル大野遺跡 縄文中期

なった。 中央広場は縄文時代当時においては、非常に神聖な場所で人が住む住居跡のある俗世間、中央の聖なる場所と俗世間を区画する意図がある。

● 三内丸山遺跡 縄文中期の墓の道 三内丸山遺跡のストーンサークル群







縄文中期 中葉 4500年前 三内丸山遺跡 縄文中期の墓の道

3.2. 時代と共に進化する縄文のストーン サークル

● 進化する縄文のストーン サークル石の数・石組みの複雑化・大規模な土木工事



左上 三内丸山遺跡中期中葉 4500 年前

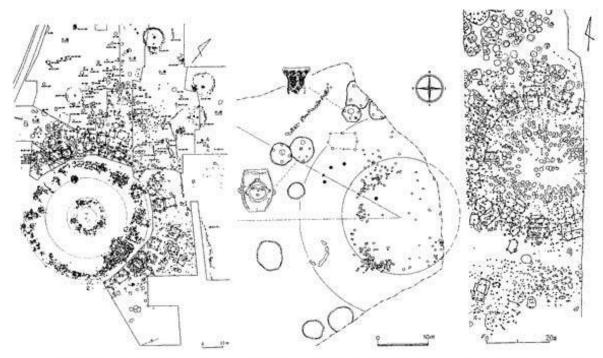
右上 大湯のストーンサークル後期 4000 年~3500 年前

左下 北海道鷲ノ木遺跡 後期前半 4000 年前

右下 秋田伊勢堂岱遺跡

永遠の未完成 進化するストーンサークル 三内丸山縄文の会「縄文ファイル」より

● 集落内から 大規模な集落外ストーンサークルへ



大湯遺跡·万座環状列石 縄文後期 4000年~3500年前

大野遺跡·集落内環状列石 縄文中期 後葉 4000年前

西田遺跡・環状集落 縄文中期中葉 4500年前

4、 **円環遺構を有する縄え遺跡** 【2】 縄文の心を映す円環遺構

みなさんには どのように 映るでしょうか……

● 馬蹄形盛土と環状集落



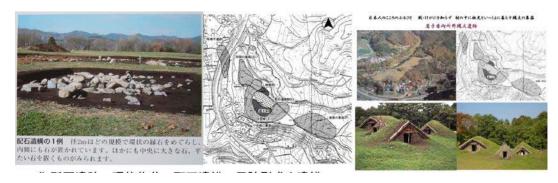




垣の島遺跡 馬蹄型盛土

縄文の環状集落梅ノ木遺跡

集落内環状列石大野遺跡



御所野遺跡 環状集落・配石遺構・馬蹄型盛土遺構

● ストーン サークル





三内丸山遺跡墓の道







秋田 伊勢堂岱遺跡 C 環状列石と A 環状列石

縄文の代表環状列石 小 牧 野 遺 跡 青島市





青森 小牧野遺跡

秋田 大湯環状列石









北海道 小樽市忍路海岸 環状列石群





北海道 森 鷲ノ木5環状列石

● 北海道 千歳の周堤墓

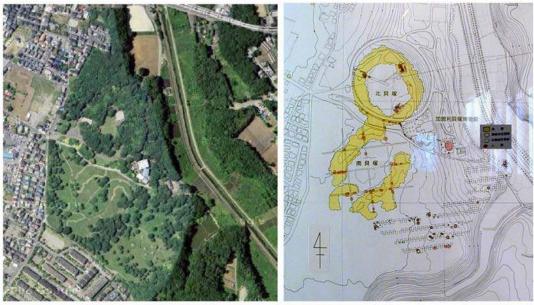




北海道 千歳市 キウス周堤墓群



● 環状貝塚



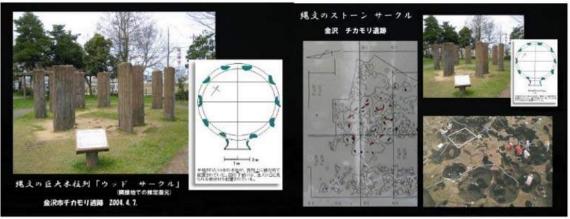
日本最大の大型貝塚 加曾利貝塚の全景 縄文中期~後期 千葉市若葉区加曽利

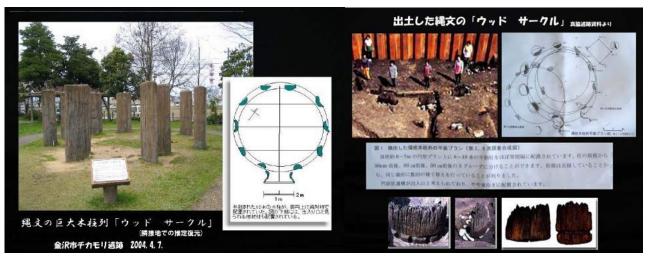


千葉 加曾利大型貝塚

● 雪深い北陸に出現した縄文のウッドサークル

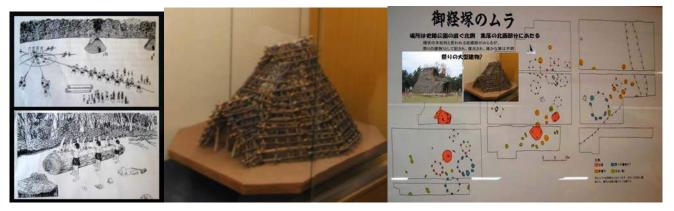






金沢市チカモリ遺跡

石川県能登 真脇遺跡



野々市町 御経塚遺跡でも ウッドサークルと同じ木列が発見 大型樹居かも??? でも 住居だと内部に何も見つからないのが 不自然・・・・

5、まとめ 縄文のストーンサークルとは・・・ (根拠はありませんが Mutsu Nakanishi の私見)

環状集落・ストーンサークル・ウッドサークル・周堤墓など縄文の円環遺構は「縄文人の絆・心の象徴」 そんな中に建つ立石や木柱がある。 これらを通して、縄文人は自然や祖先と対話し、永遠の命・再生を願い、 共に生きることを確かめ合ったのではないか・・・

ストーンサークルは共同墓地の性格が強く同じ意識集団の祭祀の場でもあることが、明らかになりつつある。

「柱」に「異界をつなぐ」意味を見出し、「サークル」は「大地・自然・集落」か・・・ 「円」と「柱」は それこそ森の民 縄文人が毎日みなれた森、畏敬する自然か そして、それらを通して亡くなった祖先と対話し、永遠と再生を願う。

「縄文人はすばらしい景色が広がる高台に住んでいた」が私の縄文遺跡を巡った印象。 自然の大パノラマを前に思いをめぐらすとき そんな感じがする。

「サークルと柱」は再生・命の絆 それを天空・自然に求める縄文の象徴ではないだろうか・・・・

ストーンサークルの東日本・ウッドサークルの北陸・御柱の諏訪の文化圏。それらが重なる縄文人交流の拠点姫川に近い海を臨む糸魚川市青海の高台に「柱・立石」「ストーンサークル」が揃った縄文中期から続く翡翠の加工工房集落がある。 そして、そのジオラ



マが新潟県長岡市の県立歴史博物館にあり、当時の縄文の村・円環遺構を再現している。

東日本には数々の縄文の円環遺構が見つかっている。しかし、西日本・関西では まだ ストーンサークルはま だ発見されていない

関西にもストーンサークルはあるのだろうか・・・・

西日本の縄文人は「縄文人の絆・心の象徴」の象徴を何に求め、どこで祭りをしたのだろうか・・・

神奈備山と磐座 この流れが 西日本の縄文の痕跡か・・・・・

神奈備山と自然信仰・御柱そして各地に残る磐座は時代を超えて受け継がれ、これからも、日本人の心の象徴と して受け継がれていくのではないか・・・・

2007.6.6. Mutsu Nakanishi

参考資料 リンクアドレスに変更した新しいサイトのリンクアドレスが隠れています

- 1. M. Nakanishi 縄文のストンサークル等訪問 Country Walk
 - 縄文人の心を映すストーンサークル東北 秋田・青森のストーンサークル http://www.ne.jp/asahi/mutsuo/nakanishi/jstlaa07.pdf
 - 〇 日本最大の大型縄文貝塚加曾利貝塚遺跡探訪加曾利縄文貝塚公園 http://www.ne.jp/asahi/mutsuo/nakanishi/kasori.pdf
 - 北陸・能登に点在する縄文のウッドサークル探訪金沢チカモリ・能都真脇・小矢部桜町遺跡 http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/4iron09.pdf
 - 早春と冬が入り混じる「北の大地」を風来坊北の縄文を訪ねて http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/pdfwalk/4walk05.pdf
 - 日本人の心の故郷 縄文の集落がそっくりそのまま見つかった 茅ケ岳山麓の北杜市梅ノ木縄文集落遺跡を訪ねる http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron2/hskzu01.pdf
- 2. 発掘された日本列島 2005 & 2006 ほか
- 3. 三内丸山発信の会「縄文ファイル」
- 4. 三内丸山遺跡から縄文列島へ「縄文文化の扉を開く」
- 6. 三内丸山遺跡と北の縄文世界

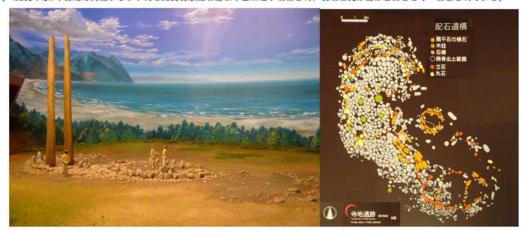
ほか

2007.6.6. 川西縄文の会レビューまとめ

■ 参考-1

縄文の心を映すストーンサークル 木柱列と配石遺構の両方が一緒に見つかった糸魚川市寺地遺跡

条 魚 川市 寺地遺跡 【1】 木柱列と配石遺機が一緒に発見された縄文遺跡 3000 年前 縄文映期 東西約150メートル、南北約650メートルの範囲内にある縄文時代の中期から残期の遺跡で、ヒスイの玉造をしたとされる「榎玉工房跡」(縄文中期)や祭祀の形態がうかがえる縄文映期配石遺機や巨木柱が検出され、現在は史跡遺跡公園として 整備されている。



















配石遺構出土品

縄文中期翡翠工房竪穴住居群と出土翡翠原石

御物石器も出土



国指定史跡の「寺地遺跡」は田海川河口近くの西岸に位置し、東西約150メートル、南北約650メートルの範囲内にある縄文時代の中期から晩期の遺跡で、ヒスイの玉造をしたとされる「硬玉工房跡」(縄文中期)や祭祀の形盤がうかがえる縄文晩期配石遺構や巨木柱が検出され、現在は史跡遺跡公

園として 登備されている。



遺跡公園に接して 北側に道路 南側に北陸本線が走り、遺跡の一部がそれぞれにかかっている。

縄文中期のヒスイの玉造工房の発見された遺跡の西側部分からは 硬玉製玉類や蛇紋岩製石斧の生産を実施した工房である竪穴住居7基が検出された。 遺物は中期土器のほか、硬玉製玉類(大珠・丸玉)、蛇紋岩製打製及び磨製石斧、板状石器、約針状石器、紋石、石鏃、石鐐、石鐐、石鎚、銀石製大珠、砥石、研磨砂斧が出土した。 なお、第1号住居跡は、完埋された硬玉工房跡としては、わが国最初のものである。

また、道路の北東角から北西道路そして南側に掛けて縄文晩期の配石遺構、組石墓、木柱群等が検出された。

配石遺構はいくつかの小単位が集合し、全体として長径16メートル、短径10メートルの楕円形を呈していた。

中央に炉状配石が存在し、北側に楕円形積石配石と弧状配石があり、南側に方形配石と弧状配石があり、相互を廊状の敷石が結ぶという対照的 構成である。また北側には大形有孔石が、南側には大形石棒が多く出土して注目された。

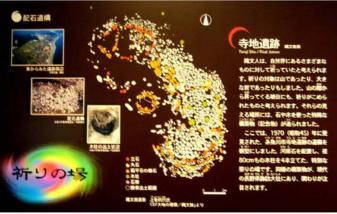
中央の炉状配石は径約2メートル、河原石を二重に配し焼土が充満し、内部北端に10体分の焼人骨埋納ビットがうがたれ、南の方形配石は一辺約3.6メートルで原平石を横立して垣状に内外を区切り、四隣に石棒と立石を配し、中央に直径60センチの根元にえぐりのある木柱4本を

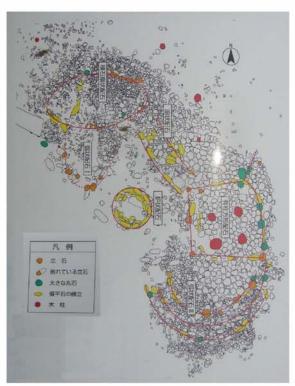
90センチ間隔で対照的に直立させていた。

また、本配石遺構の北側一帯からは、大小多数の木柱及び組石墓が検出された。

遺物は地域的特色の濃い大洞CI〜A式比定土器のほか、土偶、土版、スタンプ形土製品、土製円板、球体土製品、耳栓、打製石斧、磨製石斧、御物石器、石剣、石鏃、石錘、石錐、石棒、石鍋、筋砥石、平砥石、石皿、凹石、朱漆塗櫛、藍胎漆器、有孔円板状木器、箸状品、丸材、割材、クルミ、竹、山桜皮、人骨、獣骨、魚骨、牙、アスファルト塊、朱塊、硬玉製勾玉、丸玉、小玉、垂玉、硬玉原石、削片など。







縄文の社会と文化 概 説

縄文文化の超自然観 -死と再生のシンボリズム・ 明治大学蛭川研究室公開資料 世界の人類学より 整理転記

http://www.kisc.meiji.ac.jp/~hirukawa/anthropology/area/ne_asia/Jomon/index.htm

人口が急増し、精神文化の遺物を多数残した中期以降の東日本の文化に焦点を当てて 縄文の社会・文化がわかり やすく 全体を概説されていたので、その資料を整理・転記して、縄文の精神生活を考えるのバックホーン解説 としました。

(自分の理解したところで、抜粋・要約作ろうとしましたが、ほぼ整理・転記となってしまいました。詳細 正確には上記インターネットサイトより 原文をごらんください。)

階層を発達させつつあった社会

■ 縄文人は文字を残さなかった。弥生時代、日本列島に大規模な文化の流入があったため、縄文人が弥生文化以降の日本人の直接の祖先かもはっきりしない。

その言語人類学的系統は不明だが、前半は古アジア諸語、後半はオーストロネシア語族などとの関係が指摘されている。

■ 縄文人は狩猟・採集をベースにしながらも、高度な漁撈と根菜・雑穀の単純農耕を 行い、定住性の高い社会をつくっていた。

(写真:長野県与助尾根遺跡復元集落/中期/茅野市尖石縄文考古館)

■ 集落の構造や遺体の埋葬方法からみて、明確な社会的階層は存在しなかったと考えられる。埋葬人骨の抜歯パターンによる分析や子どもに対する副葬品の分析を合わせて考えると、縄文社会は基本的には母系的な部族社会であったが、晩期北日本の亀ヶ



岡文化では、北米北西海岸にみられるような、高度な漁撈にささえられた、より父系的な首長制社会が形成されていったらしい。

また前期~後期の中部・関東で発達する環状集落には2分節、4分節の構造がみられるので、単系出自・双分制、さらには重系出自・四分制の親族組織が存在した可能性がある。

(縄文文化と関係が深いとされるアイヌの社会は重系である。)

政治的指導者と宗教的職能者

■ また後期以降には、埋葬法は一般人と同じでも、一部の人物が装身具とともに葬られていることがあり、 政治的な首長ないし宗教的職能者であった可能性が高い。

腰飾りは男性に多く、貝輪は女性に多く、ヒスイなどの石の玉、耳飾りは男女双方が身につけている。この ことから、あるていど男女の政治・宗教的分業が行われていたことがうかがえる。

(写真:ヒスイ製大珠/晩期/山梨県金生遺跡/大泉村歴史民俗資料館)

- 一般に、狩猟・採集社会では男性の脱魂型シャーマンが政治的リーダーでもあり、農耕・牧畜社会になると、男性の祭司的首長と女性の憑霊型シャーマンが分化する。このモデルにしたがえば、まさに縄文時代にこの分化のプロセスが進行したものと考えられる。
- しかし、かりに、もっとも希少であったヒスイの首飾りを政治的首長の象徴と考えると、縄文社会では男女の両方が政治的なリーダーになることができたということになる。さらに、腰飾りを祭司的男性、貝輪をシャーマン的女性の象徴とすると、たとえば福岡県の山鹿貝塚(後期)から出土した、玉と多量の貝輪を同時に身につけていた成人女性は、シャーマンと首長を兼任する存在だったということになる。これは、職能者の分化の一般モデルにはあてはまらない。そして逆に、弥生時代以降の文献にあらわれる、シャーマン的女王との連続性をうかがわせる。

(写真:ヒスイ製首飾りをつけた女性像/茅野市尖石縄文考古館)





土偶と女神信仰

■ 土偶は縄文文化を特徴づける呪物である。北部ユーラシアの旧石器時代にみられる、いわゆるヴィーナス像の系譜を受け継いでいる。前期以前は平たい、シンプルな板状土偶が主流だったが、中期以降は多様な形態を持った立体的な土偶がつくられるようになる。

(写真:「縄文のヴィーナス」/長野県棚畑遺跡/中期/茅野市尖石縄文考古館)

- 土偶の用途については諸説あるが、その大多数が女性の姿であることからみて、なんらかの 女神崇拝があったと考えられる。
- 土偶の中には、合掌しているような姿勢のもの(写真左:青森県風張遺跡/ 後期/八戸市博物館)や、仮面をかぶっているような形をしているもの(写 真右:長野県中ツ原遺跡/後期/茅野市尖石縄文考古館)がある。これらが、 シャーマンなどの宗教的職能者の姿をかたどったものだという可能性もあ る。もしそうなら、縄文社会の宗教的職能者の大半は女性 だったというこ とになる。





■ 後期~晩期の東北地方を中心に出土する、しゃがんだ姿勢の「屈折土偶」は、背中が平らなものがあることからみて、座っているのではなく仰向けになって出産の姿をあらわしているという解釈もある。いずれにしても土偶が象徴しているのはあきらかに「母としての女」であって、もしこれ

が宗教的職能者のイメージだとすると、未婚の「姉妹としての女」としての色彩の 濃い弥生時代以降の巫女と

は微妙に意味がずれることになる。

- 土製の仮面は後期~晩期の東日本に多く出土する。人間の顔と同じぐらいの大きさで、左右に紐を通すための穴があいているものもあるので、じっさいに儀礼や舞踊に使われたらしい。 (写真:土面/長野県下原遺跡/中期/東京国立博物館)
- ■「仮面土偶」は、長野県中ツ原遺跡、縄文後期の墓地から出土した。人骨は残っていなかったが、被葬者の頭部にかぶせたものらしい鉢があわせて出土した
- 骨が残りやすい貝塚からは、じっさいに鉢を被せ葬られた人骨が発見されている。 写真は千葉県さら坊貝塚で発見された、縄文時代中期後葉の中年女性の遺骨(千葉 市立加曽利貝塚博物館)で、左腕に、おそらくはシャーマンのシンボルである貝輪 をはめている。土偶がシャーマンをかたどったものかどうかはともかく、縄文のシャーマニズムにおいて重要な役割を果たしていたであろうことはまちがいない。

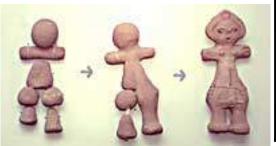
「殺された女神」仮説

- 土偶の、妊娠しているという特徴は特異なものである。未来の考古学者がわれわれ の文化の遺物を研究しても、裸体の女性を崇拝?していたと考えるかもしれないが、そこで崇拝されているの は性の対象としての女性であって、母としての女性ではない。縄文文化からは、アンデスのモチェ文化のよう な、性行為を行う男女の像なども見つかっていない。
- 妊婦であるという特徴を重視すれば、土偶は安産・多産の女神だという解釈がもっと も自然だといえる。
- しかし、それだけでは、壊されたり、埋葬されたりしているという奇妙さが説明できな

い。数千年前の土製品が割れることはむしろ当たり前なので、意図的に壊されたことを

証明することは難しいが、 同じ土偶の破片が遠く離れた場所から見つかる。

土偶を X 線で調べると、あらかじめ壊すこ





とを前提にしたような造られかた(分割塊作成法)をしているなどの間接的な証拠が挙げられている。(写真: 土偶の X 線写真と分割塊作成法/山梨県釈迦堂遺跡博物館)

■ また、神話学の知見からは、殺され、埋められた女神の身体の各部から各種の栽培植物



が発生するという、オーストロネシア文化圏などにみられるハイヌウェレ神話との関係が指摘されている。 日本では『古事記』のオホゲツヒメ神話、『日本書紀』のウケモチノカミ神話にハイヌウェレ神話素がみとめられる。

■ 縄文人は、土偶を壊し、その身体の一部を埋葬することで、豊穣を祈ったのかもしれない。



(写真:土坑に埋葬された状態で発見された土偶/山梨県釈迦 堂遺跡/釈迦堂遺跡博物館)

■ しかし、ユーラシアのヴィーナス像は旧石器時代に多く発見され、土偶も縄文草創期から出現するので、縄文中期以降に粗放 農耕が行われていたとしても、土偶祭祀と農耕を直接結びつけることはできないとして、北方狩猟民の家の守り神と結びつける考えもある。また、土偶だけでなく石棒にも意図的に壊された形跡があり、一般に使い終わった呪物は壊してから破棄するという観念があったのかもしれない。

容器のデザイン







■ 中期の勝坂文化圏で出土する人面付深鉢や人面付釣手型土器は、それぞれ、食物の調理と火を灯す用途に使われたものら しい。いずれも妊婦のような形をしており、人面把手付深鉢の中には子を出産しつつある姿が描かれているものもあるの で、これらの土器は<容器としての女性>を象徴しているといえる。

(写真左:人面把手付深鉢/中期前半/長野県梨ノ木遺跡/茅野市尖石縄文考古館)

- そのほかにも、岡本太郎(1973: 42)をして「超現代的日本美」と言わしめた縄文土器の模様、とくに「火焔土器」(写真中:馬高式深鉢/中期/新潟県馬高遺跡/東京国立博物館)や、「水煙土器」(写真右:曽利式深鉢の「水煙把手」/中期/山梨県釈迦堂遺跡/釈迦堂遺跡博物館)など、中期の深鉢には不思議な隆起線文様が描かれることが多く、シャーマン的意識状態で体験されるサイケデリックなヴィジョンを思わせる。
- たとえば、アマゾンの根菜農耕民シピボの、妊婦をかたどった、顔の付いた壺の表面には、サイケデリック植物であるアヤワスカを摂取したときに見える、不思議な幾何学模様が描き込まれている。縄文土器が同じような意味を持つ可能性もじゅうぶんに考えられる。

他界と交流する技法

- 縄文のシャーマニズムはおそらく脱魂型から憑霊型へ移行していったものと考えられるが、脱魂型の色彩の濃い時代には、太鼓や向精神薬などの積極的な意識変容技術をともなっていたはずである。
- 縄文人が使用していた楽器の証拠あまり多くないが、おもに中期に 出土する土鈴、土 笛・石笛がある。ほかに、晩期の東北で出土





する箆形木製品は弦楽器の一種だったと考えられている。

■ 特異なものとしてひときわ目を引くのが有孔鍔付土器である。ややこしい名前だが、ようするに、口の部分に ほぼ等間隔で小さな穴が開けられており、見るからに太鼓のようである

(写真左:山梨県釈迦堂遺跡/中期/釈迦堂遺跡博物館)

■ 1990 年には土取利行(1990, 1999)により「縄文鼓」の実験的な復元と演奏が行われた。

(写真中: 鹿皮を張って太鼓型に復元した有孔鍔付土器 /茅野市尖石縄文考古館)

■ いっぽう、有孔鍔付土器の中からヤマブドウの種子が発見されたことや、注口部を持つものがあることから、これを一種の酒樽とする説もある(武藤, 1970)。この場合、口につけられた穴は、醸造のさいのガス抜きないし装飾用だと解釈される。 (写真右:羽根飾りをつけて復元された有孔鍔付土器/富士見町井戸尻考古館)

- しかし、太鼓にしても酒にしても、意識の状態を変容させ、霊的な世界とコンタクトするために使われたということには変わりはない。またどちらも日本の土着信仰=神道の儀礼には欠かすことのできなかったものであり、弥生以降の文化との連続性を感じさせる。
- 酒以外に、日本列島の自然条件で、意識状態を変容させる向精神薬として使用された可能性が考えられるのは、 麻、ベニテングタケ、シビレタケなどのシロシビン系キノコ、そしてヒキガエルである。
- 中期の勝坂文化圏から出土する土器、とくに有孔鍔付土器には蛇やデフォルメされた人物像が描かれることが多いが、これをカエル(の精霊?)と解釈し、古代中国のヒキガエル崇拝と結びつける考えもある(井戸尻考古館・田枝,1988)。(写真)縄文人はイヌやイノシシなど身近な動物たちを写実的にかたどった土製品を多数残しているが、その伝統の中で奇妙にデフォルメされた動物像は異彩を放っている。それは、あたかも身近な精霊たちを「写実的に」かたどったものであるかのようだ。
- アサ (大麻) は縄文前期にはすでに縄や布として利用されていた。ただしそれが繊維材料ではなく向精神薬として用いられたかどうかはわからない。『魏志倭人伝』には弥生時代の西日本で酒が好まれる一方、麻の栽培が行われていたことが書かれているが、それが向精神薬として用いられていたという記



述はない。しかしその後も大麻は神道の伝統の中では神聖な植物でありつづけた。(写真:福井県鳥浜遺跡/前期/福井県立若狭民俗資料館)

■ 東北〜北海道の縄文後期の遺跡からは、しばしば環状列石にともなってキノコ形の土製品が出土する。キノコが神聖な植物とみなされていた可能性があるが、これが古代メソアメリカにあったような、向精神性のキノコ崇拝なのかどうかはわからない。傘が凸状のもの、凹状のもの、赤く着色されているものなど、いろいろな形態のものがあるが、どれもベニテングタケやシビレタケ類のキノコには似ていない。 (写真:青森県観音林遺跡/後期/五所川原市歴史民俗資料館)



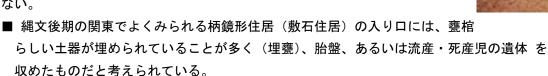
再生への信仰?

■ 縄文時代の葬送法は土葬で、楕円形の土坑墓に手足を折り畳んで葬る屈葬が一般的だった。これは、伸展葬が一般的となった弥生時代以降とは対照的である。 岩を胸に抱かせて葬る抱石葬がみられることもあるので、正常死か異常死かを 問わず、縄文人は死者がよみがえってくるのを恐れていたという解釈がある。 逆に、屈葬は子宮の中の胎児の姿であり、再生への願望をあらわしていた、と いう解釈もなりたつ。あるいは、たんに土を掘る労力を節約したのだという解釈もある。



(写真:屈葬された男性/千葉県加曽利貝塚/後期/千葉市立加曽利貝塚博物館)

- 中期~後期の中部・関東に発達する環状集落は、中心に墓地、周縁に居住地という構造を持っている。死者を 穢れたものとして周縁化するよりはむしろ、積極的な祖先崇拝のような観念 があったことをうかがわせる。
- 中期以降には遺体を甕棺に入れて埋葬することもあったが、そのほとんどが 胎児か乳児で(菊池, 1983)、流産・死産の子を特別に葬ったと推測される。これ にも、死んだ子を子宮=甕棺に戻して再生を願うという意味があったのかもしれ ない。



(写真:東京都新山遺跡/中期/東久留米市教育委員会)

- これを、死産児の遺骨を、住居の近辺のトイレや玄関など、女性がよくまたぐ場所に 埋葬して再生を願うという、近年まで残っていた風習と結びつける考えもある。
- 長野県唐渡宮遺跡から出土した埋甕(写真右:中期/富士見町井戸尻考古館)には、性器を広げた女性の姿が



描かれている。そこから下に伸びる線は、赤ん坊にも見えるし、子どもの魂が立ち昇って子宮に帰っていくよ うにも見える。

■ 埋甕の中には、上下を逆にして底部に穴を開けたものも多い(逆位底部穿孔埋甕)。 子どもの霊魂が抜けていけるようにとの配慮だろうか。

(写真右:山梨県釈迦堂遺跡/中期後葉/釈迦堂遺跡博物館)

配石の世界観

- 中期~後期の中部・関東では、男性器をかたどった石棒が、ふつう住居の中、とくに入口-炉端-奥壁に立てられるようになる。石棒は土偶と同様意図的に壊されたり、意図的に焼かれたりして「 いるものが多く、なんらかの儀礼的意味を持っていたと考えられる。
- 土偶とは違い、男根崇拝は現在の日本の民俗社会にもみられるもので、ふつう、女性が石や木の男根に触れる ことで、子宝に恵まれると信じられている。縄文の石棒にも、同じような、生殖力への崇拝という意味があっ たと考えることができる。
- 柄鏡形住居の入口では、石棒と埋甕が対になって出土することもある。埋甕+石 棒(あるいは柄鏡形住居全体+石棒)=女性器+男性器=妊娠・出産(再生)と いう象徴的な構造が考えられる。棒状のものをなんでも男性器、穴や容器をなん でも女性器とみなす象徴論は、やりすぎるときりがないが、少なくとも石棒の一 部が確実に男性器をかたどっていることは間違いない。



(写真:新潟県籠峰遺跡/後期~晩期/中郷村教育委員会)

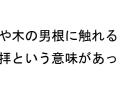
■ 石棒は晩期の東北を中心に、男性器の写実的表現を離れ、石剣、石刀などのより抽象的な形態 に発展していく。また中部・北陸地方では、石棒は「石冠」に発展する。ひとつの石に男性器 のような突起と女性器のような溝の両方が彫り込まれているものが多く、ここにも女/男とい う象徴的二元論をみてとることができる。

(写真:石剣/山梨県金生遺跡/晩期/大泉村歴史民俗資料館)

- 配石は北海道から九州まで、縄文時代全体をとおしてつくられた。祭祀の場所だったと考え』 られているが、同時に墓地だったことが確認さ れているものも多い。
- 住居の中に置かれた小型の石棒とは別に、縄文後期には大型の石棒が配石の中心など、屋外 に立てられるようになる。 配石墓の中央に建てられた石棒には、抱石葬同様、死者の霊を 鎮める意味があったのかもしれないし、逆に、死者の再生を願うシンボルとしての意味があ ったとも考えられる。(写真:復元配石/山梨県金生遺跡/晩期)
- 後期の東北地方を中心につくられた環状列石(ストーンサークル)は墓石だったらしい。ま た後期~晩期の北海道では環状土籬(周提墓)が、北陸では、環状木柱列(ウッドサーク ル)がつくられた。
- 環状集落などの構造もあわせて考えると、縄文人の世界観は、北/南、山/ 海のような直線的な二元論ではなく、円環的で同心円状だったといえる。 しかし、写真右の野中堂環状列石のように、おおよそ東西南北の四方向 に大きな石が置かれているのをみると、縄文人は東西南北という方位をあ るていど意識していたことがうかがえる。環状集落にも四つに分節されて いるものがあること、土器の模様は4を単位とするものがもっとも

多いことも視野に入れると、縄文文化に四分制的世界観が存在したことも想定できる。

(写真右:秋田県大湯遺跡野中堂環状列石/後期/鹿角市教育委員会)





紀ノ川のランドマーク 紀州富士「龍門山」に磁石石を訪ねて Walk

2007.7.24. by Mutsu Nakanishi





古代大和への入口 紀ノ川 と 紀ノ川のランドマーク 粉河の龍門山 2007.7.24.



和泉・金剛山山塊と龍門・九度山・高野山・吉野の山塊の間の谷を東西に流れる紀ノ川 龍門山の山頂より、 2007.7.24.

古代日本の中心地となった大和は要害の地

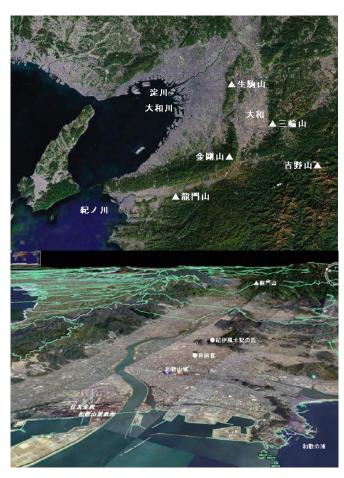
大和へ入るには 北の淀川・木津川を遡るか 東からダイレクトに大和川 そして 南の紀ノ川・吉野川を遡らねばならない。記紀神話では物部氏の祖は「ニヒハヤギ」。天皇家(神武天皇が大和に来る前にすでに天磐船に乗って淀川水系の生駒山山麓 交野・岩磐に舞い降り、生駒山山麓の河内を根拠地として、勢力を伸ばし、遅れて和歌山から熊野・吉野を経て大和にやってきた天皇王家(神武天皇)に大和をゆずり、大和が建国されたという。

また、大和王権に先立つ古墳時代 三輪山の山麓纏向には 大形の前方後円墳が築かれ、大和王権の先駆けとなる卑弥呼 の邪馬台国があった。

いずれにしろ、この卑弥呼の時代から 初期大和王権が成立 する3世紀後半から4・5世紀 日本が統一される過程 その 中心は大和であり、その支配力の中心には「朝鮮半島の鉄」 があったと呼ばれる。

「鉄」と言うとすぐ武器ということになるが、「鉄」で作られる数々の道具が、国土開発を可能にし、国を富ませる数々の 古代開拓の神々の伝承が残っている。

大和が勢力を伸ばしたのも、まだ、日本で製鉄ができず、大 陸・朝鮮半島の鉄素材の輸入に頼っていた時代に、北部九州



諸国が握っていた朝鮮半島の鉄の支配力をこれら諸国に取って代わったことによるといわれる。

大和に邪馬台国があったとすれば、卑弥呼はどのルートで朝鮮半島の鉄を運んだのであろうか???? また、三輪山山麓の初期大和王権もどのルートが鉄のメインルートだったのだろうか???

奈良時代の「シルクロード・絹の道」に先立つ3世紀後半から5世紀にかけ、大和と朝鮮半島・大陸を結ぶ「鉄の道」が あり、この鉄とともに数々の渡来人がやって来て、日本統一の道筋が作られていった。

5世紀にならないと馬は日本に居らず、舟に乗って、川筋を遡るルートがメインのルートだったろう。そして、其処には 必 ず、「鉄」の痕跡が残っている。

淀川・木津川水系 大和川水系 そして 紀ノ川水系の3ルートの「古代 鉄の痕跡」を求めての walk をはじめた。 そして、淀川水系 大和川水系を歩き、残る紀ノ川水系の walk に取り掛かった。

紀ノ川の河口 和歌山製鉄所には随分仕事で通ったのですが、紀ノ川沿いとなるとまったく知らず、その奥は九度山など猿 飛佐助・霧隠才三など忍者が活躍する深山の世界と思っていましたが、認識不足。

行って見て 随分違うと思いました。

この古代の和歌山には 古代大和王権と強く結び つき、航海術にたけ、大陸・朝鮮半島との交流・通称 に力のあった紀伊氏がいた。 また、紀ノ川の奥の大 和の入り口 五条・御所の金剛・葛城山の山麓には紀 伊氏の同族といわれる葛城がおり、渡来の製鉄・鍛治 集団を数多く抱え、大きな鍛治工房を持っていた。

さらに 日本書紀などによると、ヤタガラスに化身し て、神武天皇東征の折、熊野・吉野から大和へ導いた という鴨氏。初期大和葛城王権とのつながりが深い鴨 氏の本拠地も金剛山山麓である。

そして、この紀ノ川が東西に流れる広い谷筋は ま っすぐに九州・四国を貫き紀伊半島を東西に和歌山から 伊勢へと貫く日本の資源地帯 中央構造線であり、この 🎢 紀川とこれら氏族そして、大和の初期王権のつながりが、 日本統一の大きな支えであった。

その中心は支配力の源泉となった「朝鮮半島の鉄」であ り、その鉄の系譜が鴨氏・紀氏・葛城氏と紀/川に繋がっ ていたのではないか・・・・

平群 和一 物部 皇室 大伴。 幕城 細作





紀/川は大和と西日本・朝鮮半島をつなぐ 一番最初の大和の和鉄の道ではないか

阪神間に住む私には 淀川・大和川に比べると本当に遠い存在でしたが、考えて見れば、古代の鉄と深く結びついていた

所に違いない。

そんな紀ノ川を調べている矢先、「山 と渓谷」6月号に紀州富士「龍門山」が 紀ノ川のランドマークとして紹介され、 その山の山頂部には 磁石の磁針が 狂う「磁石岩」。そして麓の紀ノ川の川 岸には赤茶けた鉄分を含む龍門温泉。 これは、古代 大和への鉄の道のランド ーマーク。

紀ノ川を歩くのに先だって まず、この 龍門山に登って、磁石岩に出会って、

頂上から紀ノ川の流れをみよう・・・と

夏の日差しのきつい7月24日 青春18キップ片手に 朝早く家を出て、紀州富士「龍門山」に登ってきました。

1. 紀ノ川のランドマーク 紀州富士「龍門山」へ

7月24日 快晴。 日が昇り始めた早朝 神戸の家を出る。もう20年も前になるが、いつも 早朝 難波8時10分発 和歌山市駅行 南海特急に乗るため 眠気まなこで家を出たのを思い出す。 和歌山へ行くのは何年ぶりだろうか・・・ 今日は南海電車ではなく、乗り継ぎの便利なJR 阪和線の大阪駅7時15分発紀州路快速に乗り、和歌山駅で和歌山線に乗り換えて、紀ノ川沿いを龍門山の麓粉河駅まで行く。1本電車をはずすと 粉河に着くのが昼になってしまう。 阪和線の駅の多さと遅さには閉口で 南海で行くのが、定番でしたが、今は快速電車が走り、沿線に関西空港ができたこともあって、和歌山への行き方も随分変わったようだ。

天王寺から阪和線に入って 40分ほど 大阪湾沿いから 大阪/和 歌山の境 和泉山脈のトンネルを抜けて、山を下りだすとぱっと和歌山 平野が広がり、海岸側とは反対側の右手奥 遠くの低い山並みの端に 左右バランスの取れた秀麗な山が見える。これが 龍門山で、そのバランスの取れた山の姿と紀ノ川河口周辺の海岸から その姿が捉えられることから、古くから「紀州富士」と呼ばれ、紀ノ川を遡って 大和へ入る道筋のランドマークとして よく知られた山だという。

電車は平野部に下り、ほどなく広い紀ノ川を渡る。

鉄橋からは河口の西側にある和歌山製鉄所が遠く見え、家並みの中に滑り込んで、行くと程なく和歌山。 東へ広がる家並みの向う遠くに龍門山の姿が見える。以前は もうすこし河口よりの南海電車からの景色ではあるが、何度も観た景色であるが、紀州富士を意識しながら見たのは初めて。





家並みの奥に紀州富士 龍門山遠望 2007.7.24.



紀ノ川 JR 阪和線紀ノ川鉄橋より 河口海岸部を遠望



市街地の奥 和歌山製鉄所遠望 風土記の丘より

また、何度も和歌山へは来ているといっても、和歌山製鉄所と紀州の殿様 和歌山城の和歌山市街地のほかは 以前 西国三十三ヶ所の札場 粉河寺へ行った事がある程度で 紀ノ川沿いの地形や和歌山の古代史については まったく知らずで、今回は和歌山を知る良い機会。龍門山に登って 近畿の屋根 大峰・吉野の山中から流れ下る大河「紀ノ川」を眺めながら、この川筋の歴史をイメージするとともに、日本の鉱物資源帯でもある大断層帯 中央構造線を流れる紀ノ川 よく知られた「水銀」のほか 数々の鉱物が採取されたろう。 この山上にあるという磁石岩 近畿でやっと探し当てた磁石石 本当に磁針がくるうだろうか・・・・

また、磁石石は「『古代 和鉄の道』の道しるべ」 この川筋の和鉄の道を垣間見るのも楽しみである。

和歌山駅で連絡のある和歌山線の小さなジーゼル車に乗り換え、紀ノ川は良く見えないが、紀ノ川沿いに田園の中を東へ。





JR 和歌山線で 粉河へ 2007.7.24. 古代紀氏と関連する岩橋古墳群がある風土記の丘周辺

左手には和泉山脈の山並み 右手には和歌山の海岸沿いから東へ延びる丘陵が続き、これら南北の山々の間に広がる田園地帯の中を紀ノ川がゆったりと流れ下る紀ノ川の下流部。 そんな谷というにはあまりにも広い谷間を奥へ進んで行く。

岩出の街に入る手前で紀ノ川の南岸沿いに走っていた和歌山線が北岸へ鉄橋を渡る。 その鉄橋からは紀ノ川の流れの向うに美しい龍門山の姿が見え、このあたりから、谷間の幅が少し狭まってきて、ぐんぐん山が近くなって来る。 標高 756m ほどの小さな山であるが、どっしりとした大きな山体がほかを圧し、紀ノ川のランドマークにふさわしい。







岩出市の紀ノ川鉄橋周辺より 龍門山

粉河周辺より龍門山の山並み

和歌山駅から 30 分ほど 9 時過ぎに粉河駅着。 紀ノ川の対岸に堂々とした龍門山の山体が見えるところが、粉河駅で、この駅前から粉河の集落の中をまっすぐ北側へ続く広い坂道を約 2km ほど登ったところに粉河寺がある。

龍門山へは駅の少し東側から南側正面の龍門山に向かって、紀ノ川へ注ぐ小さな川沿いに紀ノ川を渡って対岸へ続く広い通をゆく。

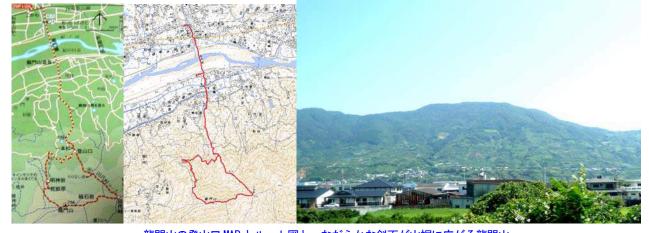
ガイド地図によれば、紀ノ川にかかる龍門橋を渡り、まっすぐ集落、そして 果樹園の広がる傾斜地を中腹まで登ってゆけば、約1時間ほどで一本松の登山口である。そこから 左の田代峠への道を登って、龍門山の左肩から稜線を頂上に登って、頂上からまっすぐ北へ明神岩を通って、中央コースを通って一本松登山口へ降りてくる約4時間ほどのハイキングコースである。山全体が蛇紋岩でできた山で、いたるところに蛇紋岩あり、頂上部に磁石石があるという。



紀ノ川 龍門橋とその対岸 標高 756m. 龍門山 2007. 7.24. 龍門山の登山口 粉河で

蛇紋岩は マントルに一番近い超塩基性の 深成岩であるカンラン岩が熱水などにより変

質した変成岩で、鉄やマグネシュウム クロムなど鉱物を含んでおり、この地が中央構造線沿いの鉱物資源帯の真っ只中の 象徴とも言える。でも 紀ノ川と古代鉄 産鉄集団を思わせる話もなく、紀ノ川に砂鉄を産した話も聴かず、まだ 半信半 疑である。



龍門山の登山口 MAP とルート図と なだらかな斜面が山裾に広がる龍門山

龍門山のなだらかの山頂部ビークの右端が頂上 左端部に磁石石 山の左側暗部が田代峠

広大な山の下部斜面に桃や梨・ぶどうの果樹園が広がる ちょうど中央部果樹園の上が一本松登山口

2. 紀ノ川にかかる龍門橋を渡って 龍門山登山口へ

粉河駅の南側にでると広い国道が紀ノ川に沿って東から西に この広い谷を貫いて和歌山へ走っていた。

「国道24号線」だという。これも驚き。 僕の頭の中は 国道24号線と言うと京都と奈良を結ぶ国道。

この国道 24 号線が 京都から 奈良・大和高田そして 御所と奈良盆地を貫き、南端 御所から五条に入り、紀ノ川沿い を和歌山まで結んでいる。

初めて知りましたが、この道は逆に取ると和歌山から紀ノ川沿いを遡り、金剛・葛城の山塊と吉野山塊の谷間 五条から御 所に抜け、王城の地大和へ入り、そのまま京都へつながる古代の幹線の道筋そのまま。この紀/川沿いの道が行き来しやす い通商路であったことが、うかがえる。

この時は まだ 紀/川は大阪からすると本当に遠い都会から離れた山中と思っていたのですが、 この道をまっすぐ 東へ行けば 大和。また、粉河の東の橋本から気味峠を越えれば 河内はすぐ其処で、この紀/川流域も 大阪へのベッドタウンと発展しているところ。京阪神・京阪奈のベルトだけではないと後でつくづく感じました。

そんな 紀/川流域 谷とはいえぬほど広い明るい谷筋が龍門山の頂上から見られました。

この国道 24 号線を横切ると、すぐ向うに まっすぐ龍門山に向かう大きな鉄橋が見える。

この谷間を東から西へ流れ下る紀ノ川にかかる龍門橋。

河口からすでに約30キロの中流域 谷間に入ってどんな風に流れているのか???龍門橋から 直接見る紀ノ川である。幅の広い大河がゆったりと東から西へ流れている。また、すでに谷間に入ったといっても 両側の山々は 中央の紀ノ川まで、山麓の広い傾斜地を引いていて、谷間の感じはしない。

南の和歌山側には、ぽっかり風土記の丘の丘陵地が浮かんでいるのみで、広い河口デルタの田園地帯が感じられる。

一方、北側の上流側にも急峻な山は見えず、広い河岸段丘地が、流れ下ってくる奥の奥まで広がっていて、明るい。

大和の北の入口 淀川・木津川が笠置の山々に至るまで とうとうと流れるように 紀ノ川も奥の吉野の山々に差し掛かるまではとうとうと流れているようだ。

上流側のすぐ向うは 霧隠才蔵・猿飛佐助の九度山で、小さい頃の忍者の活躍する深山 山奥のイメージが頭に焼き付いて いるのですが、そんな面影はどこにもない。都会近郊の里山の景色が川沿いに広がっている。

古代から ずっと 緩やかに流れ下ってきたのだろう。縄文・弥生そして古墳時代とこの流域には数々の集落があり、大和 への重要な交通路であったというが、容易に奥地へ遡れたのだろう。 私の考えていたイメージとは随分違う。







粉河 龍門橋からみた紀ノ川 2007.7.24. 左:北方向粉河の街 中央:東の上流側 右:南の龍門山方向





西方向 河口側 和歌山方面を眺める

東方向 上流側 九度山・橋本方面を眺める



龍門橋を渡って 龍門山山麓の集落の中をまっすぐ山麓へ。 標高は低いのですが、遮る物もなく、見上げる堂々とした山 体に圧倒される。集落の上の山腹中央へ 緑の中をまっすぐ 登ってゆく道が見え、これが1本松登山口への登り道。

集落を抜けると龍門山への標識もあり、果樹園が広がる龍門山の山裾の傾斜地を登ってゆく。

桃・梨・ぶどうの果樹園を見ながら きつい坂道を登ってゆくと一歩松の登山口の標識の横に出る。ここから右に行くと山腹を少し右にトラバースして、そこから直接頂上へ登る中央コース。左は田代峠に出て、稜線縦走路から磁石岩を通って頂上へのコースで、いずれも1時間30分ほどで頂上に立てる。今日は左の田代峠コースから登って、中央コースを降

りる。駅から約1時間 いよいよ登山道に入る。

振り返ると いままっすぐ登ってきた、紀ノ川の龍門橋や粉河の町並みがはるか下に見える。 また、東のほうには、流れ下ってくる紀ノ川の向うに葛城・金剛の山並そして 吉野の山々が見え、頂上に登れば、 素晴らしい紀ノ川の眺望が楽しめると浮き浮きである。



龍門橋



龍門橋からまっすぐ龍門山への集落



集落を抜け、龍門山山腹下部の傾斜地を登る







龍門山山腹下部の傾斜地はどちらを向いても果樹園 眼下に東西に流れ下る紀ノ川 その向うに和泉山脈 東端には金剛山も見える



龍門山中腹 一本松登山口周辺の果樹園



3. 田代峠を経て磁石岩へ

一歩 登山道へ踏み入れるともう静かな樹林帯の上へ上へと道が続く。緑が濃いというのか、来た斜面なので日差しが入り込まず、蒸し暑い。 また 登山道には 道の底に岩が露出していて、滑りやすいが、良く整備された道が尾根筋に続いている。小さな沢から水が流れ落ち、水場になっていて、ここを横切るとすぐ上に地蔵が祭られている。おそらく、かつて この道も南へ 峠越えの生活道路だったのかもしれない。

植林された林帯や雑木の林の中を道が登ってゆく。所々で赤土が出ていたり、掘り切りの道もあるが、総じて、土が少なく、 石ころ道で、周りの林も雑木の木々で、大きな木がない。幹の細い木々が密集していて、緑の葉の間から空の光が漏れて美 しい。 この山が草木の育ちにくい超塩基性の蛇紋岩質であるためかも・・・・・。



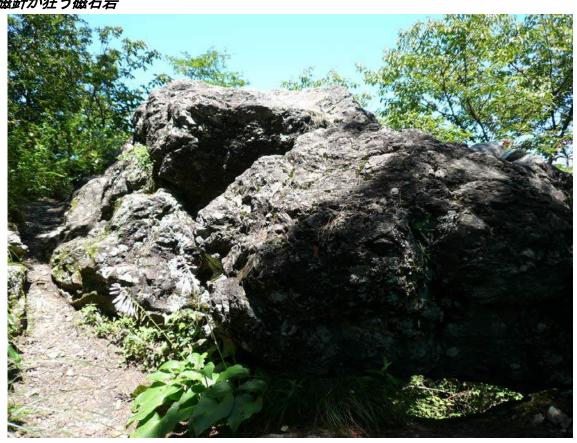
登山口から田代峠へ



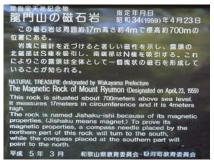
田代峠から縦走路を龍門山頂上へ

木々の間から漏れ来る空を眺めながら上り詰めると龍門山の稜線上の田代峠に出る。ここは広場状になっているが、やはり空は開けているのですが、周囲は雑木で、視界が開けない。ここは龍門山と東の飯盛山の鞍部で、ここから左へ縦走路を登って、二つほどコブを乗り越せば龍門山の頂上である。 相変わらず、潅木におおわれていて、その中を歩く。ところどころに 大きな石がゴロゴロ。この時は気がつかなかったのですが、どうも みんな蛇紋岩の岩。急なのぼりを過ぎて、頂上部の平坦部に出るところで、道をふさぐように大きな岩を回り込む。ここに案内板があり、「磁石岩」。

4. 磁針が狂う磁石岩



龍門山の頂上部 縦走路にどっかり座る磁石岩 2007.7.24. この岩にコンパスを近づけると磁針が狂い、磁石は吸い寄せられる







龍門山の磁石岩

この岩の成因はなんだろう。 やっぱり、雷による帯磁なのか・・・
それとも蛇纹岩への熱水変成過程で帯磁したのであろうか・・・

また、古墳時代 この紀ノリを遡っていった人たらは 磁石が鉄を吸い付ける事や方位磁石を知っていたろうか・・・・

周囲 17m 高さ 4m の蛇紋岩の大岩で頂上部の縦走路にどっかりと座っている。

方向磁石を近づけると磁針が狂う。また、マグネットを近づけるとパチンと石の表面にひっつく。 間違いなく磁石石。 山口県須佐の高山の頂上で見た磁石石は斑レイ岩であったが、この龍門山の磁石石は蛇紋岩。どちらも 鉄分(磁鉄鉱)を含む深成岩質である。 近畿にも生駒山系にあると聞いたりして、探していたのですが、この龍門山で出会えました。 磁石岩の上に載って、コンパスの磁針の狂いをみたり、マグネットを取り出して 石の表面に引っ付けたり。







磁石の指針が大きく狂う しかも 石の位置で指針の方向が違うのはこの岩が一つの磁石であるためか・・・・ また、中央写真は マグネットを石に近づけるとビタッと引っ付いてしまう

コンパスを岩のあちこちに持っていったり、地図の方向と磁針の狂いを調べたり、マグネットをあちこちに引っ付けたり 30 分ほどこの岩に乗っかっていました。大きな磁石岩にほんとうにびっくり。

また、龍門山の頂上部にある岩なので、木々の間を通して、下の紀ノ川や粉河の町並みが見えている。

昔はもっと良く下が見えていたかも知れぬ。巨岩の岩のすぐそばでは、シャガがひっそりと咲いていました。





磁石岩の上から、木々の間からちらちら 紀川沿いの粉河の街がみえ、岩の傍らには シャガの花が咲いていました

龍門山の麓には 中腹にある蛇紋岩の巨岩「明神岩」とすぐ横にある「風穴」にまつわる龍門山の土着の「大明神」の化身 「竜」が「龍門山の蜘蛛」を退治する伝承がある。この伝承も龍門山の鉱物資源・鉄を求めて入り込んだ人たちとの紛争と 巨大な「明神岩」をふくめ、龍門山にある磁気を帯びる蛇紋岩の不思議な魔力が重なって生まれたものでないだろうか・・・・ 伝承にある明神岩や、風穴は龍門山山頂の向こう側の中央コースを少し降りたところに龍門山の北斜面から飛び出して まっすぐ谷に落ち込む切り立った崖となって この巨岩「明神岩」そびえ、眼下の紀ノ川流域を見下ろし、そのすぐ横のところに風穴が口を開けている。

この「明神岩」も蛇紋岩の大岩で 帰路立ち寄って マグネットを近づけると磁石に引っ付いた。

また、縦走路の磁石岩近くの少しはなれたところにある別の岩に磁石を近づけるとやっぱり磁石が引っ付き、コンパスを 近づけると磁針が狂うものもあった。 試しに赤茶けた部分の縦走路の土にマグネットを這わしてみると砂鉄が少しですが 採取できる。石を拾って砕くと簡単に割れて平滑な破面がでて、引っ付かなかった磁石がこの破面には引っ付く。 蛇紋岩はその変成過程で鉄など鉱物質を割れ目に析出させることがあると読んだところだったので納得である。







縦走路で コンパスの磁針が狂う蛇紋岩









蛇紋岩が顔を出す縦走路マグネットを土に引っ付けるとわずかであるが砂鉄が引っ付いてくる。

やっぱり、この龍門山はただの山ではない。古くから良く知られた山だったのだろう。

竜神伝承というと「水銀」や「水・雨乞い」との関係がなども考えられるが、この山中にある「磁石の不思議な魔力」や「鉄」 に吸い寄せられた集団などを含め、古代にはこの龍門山に数多くの人たちが分け入り、そんな中で生まれた「鉄」の伝承か もしれないと思っている。

【参考 磁石石・蛇紋岩の解説】

解説 1. 磁石は何時ごろ日本にはいってきたのだろうか・・・・・

解説 2. 麓の集落に残る龍門山のルーツについての伝承

解説 3. 龍門山・磁石岩を形成する蛇紋岩解説

蛇紋岩には鉄・マグネシュウムほか 多くの鉱物を含んでいる

解説 1. 磁石は何時ごろ日本にはいってきたのだろうか・・・・・

中国では磁石を乳房にたとえると、それに吸い寄せられる鉄はわが子。それを慈しむ母親の姿を連想して、磁石を「慈石」と書いたといわれ、古くから、鉄を吸い付けることを知っていた。また、「韓非子」(紀元前220年頃)には磁石を用いて方角を定めたとの記述もあるが、確かではない。11 世紀の書物『武経総要』に、羅針盤のルーツである磁針を木製の魚の腹につけ、水に浮かべ方位を知る「指南魚」の記述があり、これが西洋につたわり、広く羅針盤が使われるようになる。

一方、日本では続日本紀に 713 年に天皇への献上品の解説の中に「大倭・参河の両国は雲母、伊勢は水銀、相模は硫黄石・白樊石、近江は慈石を献ず。」 との記述がある。

また、822 年に編纂された日本霊異記序文に「世間の人々の行動を観察していると、学才や才能を持ちながら卑しい行為を している者がいる。利益を得ようと願って財物を貪ることは、磁石が鉄の山から鉄を余すことなく吸い取ることよりも甚だし い。」と記述されている。この頃には 広く 磁石が鉄を吸い付けることが知られている。

解説 2. 麓の集落に残る龍門山のルーツについての伝承

龍門山の蜘蛛伝説 「水原村大明神縁起」より

8世紀(奈良時代)頃、龍門山は高畑山と呼ばれていました。この高畑山に大蜘蛛が住みつき、麓に住む村人や道行く人々の物を奪ったり、殺したりして荒らしまわっていました。大蜘蛛を恐れて誰も道を通らなくなり、付近はさびれてしまいました。このことが朝廷に伝えられ、天皇はさっそく藤原房前に命じて軍隊をさしむけて、大蜘蛛退治が始まりました。

山の麓に到着した朝廷軍の大将は、村人に「九頭龍王をお祭りした神社」の事を聞き、神社に行って「我々に蜘蛛を退治させて下さい。我に神力を与えたまえ。」とひたすら祈った。

祈り続けて3日目の昼過ぎに、山の上空に黒雲が広がり、大粒の雨がポツリポツリと降り出し、瞬く間に空は真っ暗となり、ものすごい勢いで雨が降り出しました。やがて山頂より少し下がった峰に、すさまじい音響とともに岩石が吹きあり、ぽっかりと穴があきました。

すさまじい勢いで雨風が穴から吹きあげ、滝のように流れ出して、麓は大洪水となりました。真っ暗な中から何か光るものが見えたと思うと、穴から大きな龍が姿を現し、龍王は大きな岩へ頭を乗せ、西方の山頂をぐっとにらみつけました。そして、大蜘蛛のいる山頂へと向かったのです。

龍王と大蜘蛛の激しい争いとなり、蜘蛛は口から数百条の糸をはき出し、龍を捕えようとし、龍は口から火を吹き出して、蜘蛛を倒そうとして、戦いの末、ついに龍王が蜘蛛を退治しました。疲れた龍は、静かに山から下り て神社の前の渕へ入って行きました。

麓の村に平和が甦り、人々は龍門山と呼ぶようになりました。龍が出現した穴を風穴(ふうけつ)、頭を乗せた 岩を明神岩と言います。また、大雨が降って麓が大洪水になったことで、その一帯を水原(すいばら)=杉原と 言われるように

なった。









風穴

明神岩 でっかくて崖にそびえているので全体が捉えられない



竜門山の頂上周辺には大量に磁石に引っ付く蛇紋岩がゴロゴロ顔をだし、 また、魔力を秘めた磁石岩もある

解説3. 龍門山・磁石岩を形成する蛇紋岩解説

1. 蛇紋岩には鉄・マグネシュウムほか 多くの鉱物を含んでいる

蛇紋岩は、地下深部でできた岩石が断層に沿って上昇してきた岩石で、岩体の中には、多くの割れ目が走り、もろく崩れやすい。

割れた面を見ると、こすれあった跡が筋となって残っていたり、こすれあって鏡のように光っていたりする。蛇の皮のような模様や光沢があるので、「蛇紋岩」と名がついた。

蛇紋岩は マグネシウムに富んだかんらん石や輝石などの超塩基性の深成岩がその岩の割れ 目に入り込んだ熱水による変質作用で蛇紋石類に変化し形成される. したがって、蛇紋岩は



蛇紋石(化学組成 Mg, Fe) 3Si 205 (OH) 4 のケイ酸塩鉱物) を主成分とし、磁鉄鉱、クロム鉄鉱などを含む岩石で、黒〜暗緑色を呈し、炭酸塩の細かい網状脈を伴うことがある.

かんらん岩は地球のマントルに最も近い超塩基性の深成岩で、マグネシウム、鉄などを多く含んでいて、このカンラン石など超塩基性深 成岩の不規則な網目状割れ目に熱水が進入して 蛇紋石と磁鉄鉱が生成される反応(蛇紋岩化作用)が進行して、蛇紋岩ができる。

この時,元の原石にふくまれていた Fe や Mg などが余り,黒い粒となって元の割れ目に沿って析出する。このため、割った破面が酸化鉄の茶色に覆われている場合もあり、磁石にひっつく物が数多くある。

この蛇紋岩化作用の程度は岩体により様々で、作用の弱いものは元の原岩を構成する鉱物が多く残り、作用の強いものはそのほとんど が蛇紋石化していて、鉄やマグネシュウム クロム、石綿、ニッケルなど鉱物資源を内包している事が多い。







蛇紋岩中に見られる網目状の模様

このように 蛇紋岩はマントル成分が変質したものであり、鉄分が多く含まれており、この蛇紋岩が風化作用によって分離され、川筋に 集積すると砂鉄となる可能性がある。また、山口の須佐高山の磁石石は磁鉄鉱を含む斑い岩であるが、山中にある蛇紋岩に含まれる鉄分 が雷などで帯磁すると磁石石となったのかもしれない。紀ノ川沿いは中央構造線が東西に走る鉱物資源帯。 水銀の産出が広く知られて いるが、古代 この山中で同じく 産鉄の民も数多く分け入っていたのかもしれない。









龍門山で拾った蛇紋岩 金鎚で簡単に割れ、平らな破面が立体的に出る 2007.7.24.

割った破面が酸化鉄の茶色に覆われている場合もあり、磁石にひっつく物が多い

2. 蛇紋岩をつかった 二酸化炭素固定化による地球温暖化対策の研究がなされている

地中奥深いところで形成されたマントル成分の岩石が、断層や地殻変動で無数の割れ目を帯び、その割れ目に沿って進入する熱水によって、変質して 数々の鉱物資源を析出しつつ、蛇紋岩ができる。

今 この蛇紋岩の「蛇紋岩作用」を使用して、世界の緊急課題となっている【炭酸ガスによる地球温暖化】問題の炭酸ガスの固定化埋蔵 の方法が研究されていることを知りました。

財団法人 地球環境産業技術研究機構 二酸化炭素固定化·有効利用技術研究

蛇紋岩体の地化学環境を利用した原位置試験による 002 地中鉱物固定のための基盤技術の開発 (2006年度終了)

蛇紋岩の風化に伴い、蛇紋石の主成分のであるマグネシウムと大気中などの炭酸ガス、それと水とが結びついてマグネシウムの含水 炭酸塩鉱物が網目状に二次的に生成されることがある。この蛇紋岩の持つ炭酸ガスを固体の炭酸塩固定化作用を利用して、蛇紋岩地 帯の地中深くに炭酸ガスを吹き込み、炭酸ガスを固定化する。

本当に こんなことができるの?????? ですが、すごいですね。やっぱり、蛇紋岩には 得体の知れない不思議さ 魔力がある。 蛇紋岩の山「龍門山」 形が秀麗で眼下を流れる紀/川の流れが素晴らしい山 であるとともに やっぱり独特の雰囲気を持つ不思議な山。

龍門山頂上と紀ノ川流域の展望 5.



龍門山頂上からの 和泉山脈を背に 東西に 東の大峰・吉野から流れ下る紀ノ川の流域の展望

磁石岩から視界の開けない潅木の林の中を 10 分ほど小さな登り下りを繰り替して、最後の登りを登り終えると突然広い木 がない草原の頂上に出る。 北側 木の川沿いの展望がひらけ、ゆったりと眼下を東から西へ流れ下る紀ノ川全体が見える。

東の端の山の向こうが大和 はるか遠くに吉野・大峰 の山々が浮かび 其処から金剛山から南葛城・岩湧山 と続く和泉山脈の山裾をゆったりと紀ノ川が流れる。 やっぱり 上からみても吉野までは途中にさえぎるも のもなく川を遡れそうで、古墳時代から西からの大和 への重要路となって早く開けたことがうかがえる。

川の南側にはこの龍門山・飯盛山から九度山・高野 山 そして熊野へと山並みが幾重にも折り重なって続

き、頂上からは樹木に阻まれて見えない。 縦走路のところどころで、木々のかいだから、時折



龍門山の南側 折り重なるように続く紀伊の山々 縦走路より 龍門山の南側 折り重なるように続く紀伊の山々山々が見えるのみである。



龍門山頂上よりはるか大和を眺める

中央奥 金剛山 その右奥に大和平野がかすんでいる



和泉山脈の奥に大阪湾和歌山方面



龍門山直下 粉川を流れる紀ノ川

龍門山頂上より眺める紀ノ川流域 2007.7.24.

広い頂上部の草原のいたるところに赤茶けた流紋岩が草の間から顔をのぞかせ、草原いっぱいにシャガの花が咲き誇ってい た。残念ながらこの龍門山の山頂周辺で真っ白に咲き誇るというキイシモツケソウの花は観られなかった。





龍門山頂上より、紀ノ川流域 2007.7.24.







龍門山頂上 赤茶けた流紋岩がいたるところに顔をのぞかせ、この山が他の大和違う顔を見せている



シャガの花が咲き誇る龍門山頂上周辺 2007.7.24.

真っ青の快晴 誰一人いない頂上 眼下の素晴らしい景色を眺めながら、昼にする。

汗だくの昼であるが、夏が来たことを実感する暑さが心地よい。和歌山の山は初めてであるが、ほんの近くにこんな静かな山があるとは ごきげん。磁石石に出会え、そして、磁石石をいしきしたおかげで、縦走路の岩が次々と磁石に引っ付くのをみつけたのですが、こんな 山も初めてである。 この紀ノ川沿いがこんなに明るい谷筋であるも始めて知りました。

やっぱり中央構造線沿いの山 何か違う 不思議な山で、ラッキーです。

帰路は蛇紋岩の巨岩「明神岩」から、中央コースの急な尾根筋をまっすぐ降りる





頂上よりまっすぐ中央尾根を北に下る 頂上をでるともう緑濃い森の中

昼寝もして、午後 1 時頂上を後にする。今度は朝登った田代峠への尾根のすぐ西側 頂上からまっすぐ北に伸びる中央尾根の西斜面に付 けられた急な下りが続くという中央コースを降りる。

頂上の草原の端からすぐ潅木外の中に入ってすぐに、そのまま西の 勝神峠へ下ってゆく道と中央尾根を降りる分岐に出る。

この分岐から右手に森の中の急な下り道が続く。このあたりは頂上 の縦走路とは少し違って、縦走路に土があり、顔を出している岩が すくなく、雨水の通り道になっている。 そして 良く観ると そ のところどころに砂鉄がたまっている。これだけ鉄分の多い蛇紋岩 の山 砂鉄があっても不思議でないと思っていましたが、ごくわ

ずかですが、雨水で運ばれた砂鉄が道端に溜ま っているのを見つけました。

森の中を下ること 20 分ほどで「明神岩」の案内 板。右手に行くと大きな岩が北に突き出て視界 をさえぎる。これが、「明神岩」でこの岩の上に 登らないと様子がわからず。

岩によじ登ると、正面にはぱっと紀ノ川流域が 眼下に広がり、右は谷の向うに田代峠の尾根 筋が延びている。下は足元がすくむ断崖絶壁 の谷である。

高さというか長さ 30mの蛇紋岩の一枚岩が 斜めに谷に突きでて刺さっている感じなので すが、全体が良く解らないが、巨岩です。 岩のすぐ横の反対側の山の斜面に深い穴が開 いている。これが風穴。



登山道に溜まっていた砂鉄















龍門山の中腹にそそり立つ蛇紋岩の一枚岩 「明神岩」

2007. 7. 24.

「村びとの願いを聞いた守り神の化身「竜」がこの風穴から抜け出てきて、この岩に頭を置き、山をにらみつけ、悪さをする大蜘蛛と戦って退治した」との伝承の明神岩である。

これは磁石引っ付かないだろうとマグネットをとりだしましたが、これもきっちり引っ付きました。

全体が見えないので、岩のすぐ横 山の斜面側にある「風穴」の横を通って、少し小道をトラバースすると岩全体が見え、垂直な崖となって、谷に突き出しているのが見える。





山の斜面 東側から見上げる「明神岩」

明神岩のすぐ横の山の斜面にある「風穴」

明神岩からまたた、山の潅木の森の中に入り、下へ下へと下って、明神岩から30分ほどで キイシモツケの潅木のゲートをくぐりぬけて、 一本松中央コースの入口の駐車場のところに飛び出る。キイシモツケの案内板が立っているが、やっぱり 花は見られませんでした。



中央コース 登山口へ下山 2007. 7. 24.

ここからは、今日朝 出発した一本松登山口へ 龍門山の山腹をトラバースして、其処からまた、まっすぐ果樹園の中を下って行く。 山の中は 森の中なので問題なかったのですが、里にでると遮る物のない直射日光。本当にきつい。 とにかく、はやく下って、紀/川の龍門橋のたもとにある龍門温泉に行こう。





登山口から 果樹園の中をまっすぐ紀/川に向かって下る 2007.7.24.

7. 龍門山温泉につかって 龍門山 Walk を振り返って









紀/川 龍門橋のふもとにある龍門山温泉

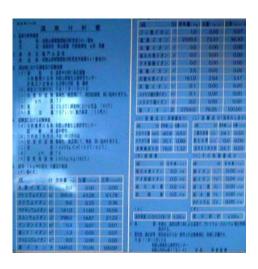
龍門山の麓 紀川のそばに湧く「龍門温泉」はどうだろうか・・・・

鉄分のある赤湯だろうか・・・・龍門山が鉄の山なら、赤湯であるはずと・・・ 汗を拭き吹き龍門橋のたもとから、紀/川沿いに龍門温泉に飛び込む。

「ナトリウム・カルシウムー塩化物泉で飲むこともできるしよう効く」と。 「ここは鉄泉ですか・・・」と聞くのですが、分析値が張ってないのでよく わからず。 とにかく、温泉に飛び込む。



龍門山温泉 薄く黄褐色の色を帯びている



龍門山温泉の温泉分析値

温泉に入るとお湯が薄茶色。やっぱり、鉄が含まれている。 これは ええぞ・・・・・と。

湯船の壁一杯に温泉分析値や効能書きが張られている。 Na イオン Ca イオン Mg イオンほどは 多くなく、1.3mg と 鉄線とはほどとおいが、2 価の Fe イオンが含まれている。 やっぱり、鉄分がある。

やっぱり、「和鉄の道」の温泉 赤茶で納得 うれしくなる。

湯船につかりながら、この不思議な山 龍門山の一日を振り返る。

和歌山から伊勢へ 日本の資源地帯であり、大断層地帯 中央構造線沿いを悠々と流れる紀/川にそびえる龍門山

念願の磁石石にも合えたし、山中の赤茶けた蛇紋岩は鉄を含有し、磁石にバチバチ引っ付く鉄の山

川の流れの奥には大和の国がかすんでみえ、川の流れを阻む障害もない。縄文・弥生・古墳時代 この川を遡って、大和へ数々の人たちが入る通商路。そんな交易の中心は紀/川河口の紀氏 大和の入り口御所にいる葛城氏が重要な役割を演じた「朝鮮半島の鉄」だったろう。 鉄素材の輸入・鍛治加工をしながら、必死に日本での鉄精錬をゆめみて、その原料を探したに違いない。

龍門山はそんな山でなかったか・・・・・

静かな山中に 赤茶けた鉄の石 蛇紋岩 そして 磁石石がころがり、眼下にはすばらしい紀/川の流れが見える

むかしも今も 不思議な山 美しい山。

私にとっては、大和へ通じる鉄の道にふさわしいランドマークである。

次はこの紀/川沿いを大和まで 遡ろう。

紀/川の河口の紀氏 そして大和の葛城氏は 朝鮮半島の鉄と密接な関係を持っており、数多くの渡来の鍛治集団をも抱えて、この紀/川沿いを行き来している。

古代この地を数多くの製鉄・鍛治の技術集団が鉄を求めて通ったに違いないと思うのですが、良く解らない。

鉄分が多い龍門山。今回 山中には酸化鉄で赤茶色に変色した流紋岩がいたるところにあり、また、ほんのわずかですが、雨水の流れで流れ出た砂鉄もありましたが、色々聞いたり、調べましたが、紀/川の川では砂鉄は見つかっていないと、紀/川流域での砂鉄精錬の痕跡は見つかっていないという。

でも この紀/川流域は製鉄集団の通った「大和への和鉄の道」といいたい。 そして、この龍門山はそんな大和への和鉄の道のランドマークだったろう。

2007.4.24. 龍門さん温泉につかりながら

Mutsu Nakanishi

後日談ですが、

ゆっくりお湯につかって、ぶらぶら龍門橋を渡るときにはもう、午後4時前。

いままで、深山の真っ只中と思っていて あまりにも印象の異なる橋本・五条まで行こうと橋本行のジーゼルに飛び乗り、橋本まで。 やっぱり、明るい。 山はみえるが、深山とはとても思えぬ開けた地 もう びっくり。

汽車がないので、ふと 南海電車の窓口を見ると橋本から堺の北野田まで480円。

そんなに近いのか・・・と北野田にいる友人に電話すると20分で来れるので すぐおいで・・・と。

ほんとに深山と思っていたところが 大阪にこんなに近いのかとビックリ。北野田で途中下車してビールで再会。 ほんとうに愉快な一日でした。











古代大和への入口 紀ノ川 と 紀ノ川のランドマーク 粉河の龍門山 2007.7.24.

参考 リンクアドレスに変更後の新しいリンクアドレスが隠れていますので、 **和鉄の道** アドレスの上へマウスを持って行ってください

古代大和の鉄の道を訪ねて【1】 淀川・木津川から大和へ 大和の外港 木津「泉津」を訪ねて http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron3/7iron05.pdf

古代大和の鉄の道を訪ねて【2】. 大和川 「亀の瀬・龍田越」 Country Walk http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron3/7iron09.pdf

金剛・葛城山麓 葛城氏の鍛冶工房「忍海」 渡来人が住み鉄鍛冶の技術を伝えた古代「忍海」 http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/5iron05.pdf

磁石石って 知っていますか 山口県須佐町高山に磁石石を訪ねて http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/4iron11.pdf

紀ノ川のランドマーク 紀州富士 「龍門山」に磁石石を訪ねて Walk





古代大和への入口 紀ノ川 と 紀ノ川のランドマーク 粉河の龍門山 2007.7.24.



□泉・金剛山山塊と龍門・九度山・高野山・吉野の山塊の間の谷を東西に流れる紀ノ川 龍門山の山頂より、 2007.7.24.



龍門山の登山口 MAP とルート図と なだらかな斜面が山裾に広がる龍門山 龍門山のなだらかの山頂部ビークの右端が頂上 左端部に磁石石 山の左側暗部が田代峰

広大な山の下部斜面に桃や梨・ぶどうの果樹園が広がる ちょうど中央部果樹園の上が一本松登山口

古代大和への道【4】 紀ノ川水系【2】

古代「紀路」 紀ノ川の流れに沿って大和へ Country Walk 2007,7,31, 15



- 1. 初期大和王権の重要路 紀ノ川水系 と 其処を本拠とする紀氏・葛城氏
- 2. 紀ノ川の流れに沿って 大和へ Country Walk
 - 2.1. 紀ノ川の入口を押さえ、大陸・朝鮮半島の窓口となった紀氏
 - 2.2. 紀ノ川の中流 古代大和の玄関口 五条
 - 2.3. 五条から陸路 金剛山の東麓 風の森峠を越えて 大和・葛城へ
- 3. まとめ 和歌山から紀ノ川を遡って五条から葛城へ やっと古代 葛城の道・紀路が一つに繋がりました



紀氏の古墳群といわれる 風土記の丘 岩橋千塚古墳群



紀伊一宮 日前宮 紀氏が代々祭祀を司る



五条市をゆったり流れる紀ノ川 ここより東へ90度方向を変え、吉野へ







金剛山東山麓 大和と紀ノ川・五条の境 風の森峠とこの地を本拠とする鴨族の高鴨神社

7月30日早朝 再度 紀ノ川へ

前回は龍門山に登り、龍門山の頂上部にある磁石石を見ると共に和歌山から吉野・大和へと悠然と流れる紀ノ川の流れを見 てきました。 吉野・大和から和歌山へ 龍門山の麓を悠然と流れる大河 紀ノ川。 間違いなくこの川が古代の重要な交 通路だったと思いました。 今回は 4・5 世紀 この紀ノ川の河口を根拠地に初期大和王権の中枢として 朝鮮半島諸国と の交流・鉄をはじめとした文物の移入に大きな果たした紀氏の足跡を訪ね、古代日本の成立に果たした紀ノ川の役割を考え たい。

また、紀ノ川を和歌山から遡り、大和への上陸地となった五条 そして五条から陸路大和・葛城へ至る「紀路」のルート「風 の森峠」にまでたどって、本当にこの道がこの時代の最重要交易品「鉄」や文物の通商路として 役割を果たせるかどうかを 確かめたい。 紀氏の古墳群 岩橋古墳群のある風土記の丘の丘陵地に登れば 紀ノ川の河口にある和歌山製鉄所を和歌山 平野越しにゆっくりと眺められるだろう。

また、大和と紀ノ川の分水嶺 金剛山の東山麓は地形的にもおもしろい場所でもありました。

今年の春まで和歌山線の北宇智駅にはスイッチバックがあり、

スイッチパックがあるということは地形的に厳しくて汽車が一気に坂を登れないところなのか???

そうだとしたら この古代の陸路はきびしかったのではないか????

これも 興味津々。 欲張ったスケジュールですが、一度出かけているので何とかなるだろうと。

淀川や大和川は近くて親しみがありましたが、紀ノ川は遠くて 未知の世界。

こんなに大和に近く、また
大和と密接な関係が大和王権初期にあったとは知りませんでした。

【参考】

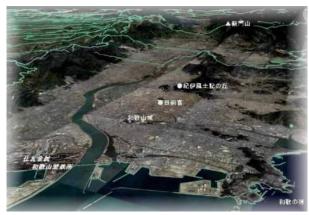
古代大和への鉄の道を訪ねて【1】 淀川・木津川から大和へ 大和の外港 木津「泉津」を訪ねて

古代大和への鉄の道を訪ねて【2】 大和川「亀の瀬・龍田越」 Country Walk

古代大和への鉄の道を訪ねて【3】 紀ノ川水系【1】 紀ノ川のランドマーク紀州富士「龍門山」に磁石石を訪ねてWalk

1. 初期大和王権の重要路 紀ノ川水系 と 其処を本拠とする紀氏・葛城氏





和歌山紀ノ川の河口から紀ノ川沿いを遡って 大和へ入る道は「紀路」と呼ばれ、すでに縄文時代から、多くの人がこの川を 遡っており、3 来期後半卑弥呼の古墳時代に始まり、大和が日本の中心として 三輪山山麓に本拠が築かれた初期大和王権 の時代の5世紀から6世紀には大和王権と瀬戸内・西日本そして大陸を結ぶ最重要道であった。

特に「鉄」の輸入とその輸入路の支配が日本統一の源泉だった大和王権にとっては生命線で、数多くの渡来人や文物がこの道を通って大和に入り、大和王権を支えた。 5世紀の後半 難波津の港が整備されると最重要路は大和川水系に移っていったと思われるが、それまでは一番重要な道だったろう。

この初期大和政権の時代に紀ノ川河口に本拠地を持ち、優れた航海術と交易により 大陸・朝鮮半島諸国との交流網をつくり、大和王権の外交・軍事の一翼として活躍したのが、紀ノ川の河口を押さえる紀氏であり、葛城に本拠を構える葛城氏であった。 葛城氏は竹内宿禰を祖とする紀氏と同族の豪族で、天皇家の外戚・大臣として権勢を誇ったといわれる。

古代の紀ノ川の河口は現在と違って新和歌浦あたりで、紀伊水門と称され、大和王権が直接管理する外港としてきわめて重要な機能を果たしたといい、その痕跡として河口から少し入った紀ノ川北岸の鳴滝には、5世紀中頃の大和朝廷の管理する大倉庫群 鳴滝倉庫群の遺構が見つかっている。 5世紀後半に難波津に大倉庫群が建てられる前には この地が大和王権の重要な外港であった。

この時代 中国南朝の諸国家や朝鮮半島の百済・新羅・伽耶諸国との交渉に際し、大和王権の使節や水軍は紀伊水門から出航し、また紀伊水門に運ばれた異国の文物や渡来した人々は、紀路を通って大和に入っていった。その後、5世紀後半に難波津の港が開かれると、大和王権の外港は次第に難波津に移り、7世紀になると飛鳥朝廷の外港は難波津に限定されていったという。



紀ノ川(奈良県を流れている区間は吉野川と称されています)は、落差が少なくて、途中に滝がなく、古代にはもっと水量

があり、紀ノ川河口から奈良県五条 そして 山間を通り抜けて下市町千石橋まで船で遡ることが出来たといわれる。 大和へ入る「紀路」は 五条で舟を降り、東の吉野へ分け入る紀ノ川(吉野川)を離れ、陸路で金剛山東麓を北の分水嶺を越えれば、大和・葛城 現在の御所市である。

この紀ノ川水系から大和への分水嶺の峠が「風の森峠」で、4世紀 天皇家の外戚・大臣として権勢を伸ばした鴨族の本拠 地「鴨神」で、さらにその北側 金剛山東山麓から葛城山麓が「葛城」で葛紀氏の本拠である。

この初期大和王権の最大の交易品は朝鮮半島諸国から移入される「鉄素材」だった。

まだ 日本で製鉄が始まらぬ時代であり、朝鮮半島からの鉄の輸入独占支配が大和王権を支えた西日本豪族連合の絆であったといわれる。したがって 数々の渡来人とともに鉄素材がこの紀ノ川沿いの道を通って、大和に入ったに違いない。「紀路」は大陸・朝鮮半島から瀬戸内海そして大和を結ぶ 初期大和王権の「鉄の道」の最初のルート上にあったと思われる。そんな中で 航海術・朝鮮半島との交流網を築いていた葛城氏を含めた紀氏一族の役割は重要で、5・6世紀のそんな朝鮮半島での紀氏一族の業績が「記紀」に記されている。そして、7世紀 律令・中央集権の国家体制が整ってゆき、藤原氏の台頭などとともに初期大和王権を支えた「氏」集団は滅亡したり、急速にその権勢が衰えてゆく。

紀ノ川下流の南側、JR 和歌山駅東方約 2km の丘陵地(標高 20~150m)を中心に分布する岩橋千塚古墳群は、現在紀伊風土記の丘として、整備されているが、5世紀から7世紀前半かけて築造された前方後円墳、円墳、方墳など約 700 基が集まり、その古墳の数の多さは全国でも最大クラスである。その範囲はおよそ3キロ四方に広がり、北に紀ノ川、西は日前宮を中心とした平野部に面している。



和歌山駅周辺から風土記の丘を望む 2007.7.31.

被葬者については確実なところは不明であるが、古墳時代以

後にこの地域で水田開発に欠くことができない用水路の設置や開発に力を注いで勢力を拡大し、初期大和王権と密接な関係をもっていた豪族 紀氏・紀国造に関連するものと考えられている。また、この丘陵地の直ぐ下の平地部にある日前宮は日本書紀にも載る日本でも一番古い神社の一つで、紀氏が代々祭祀を行ってきたといわれる。これら紀ノ川河口近くの地域からは韓式土器や鉄製品など朝鮮半島と関係を示す遺物が数多く出土し、朝鮮半島との関係の深さがわかる。



4・5 世紀頃の紀ノ川河口周辺の遺跡群 地図



大谷古墳から出土した馬冑



大和王権の外港機能を示す鳴滝倉庫群



紀ノ川流域遺跡から出土した韓式土器 紀伊風土記の丘資料館展示より







岩橋千塚古墳群 大日山70号古墳 種々の鉄製遺物を出土

5世紀から7世紀にかけて 紀ノ川の河口を本拠とした紀氏の古墳群といわれる岩橋千塚古墳群 朝鮮半島との交流を示す鉄製品や韓式土器など数々の遺物が副葬されていた 紀伊風土記の丘資料館展示より

○ 紀氏を中心とした古代日本の歴史 概 要

史実とした場合 神武東征の時期・九州東征

邪馬台国

4 世紀	i	紀氏、泉南、紀の川河口へ入る			
391	高句麗広開土王碑 岩橋千塚古墳築かれ始める? 源流は高句麗				
	1	紀氏、紀ノ川流域に勢力をはる			
	·	紀角宿彌 朝鮮半島に攻め込む			
五世紀	宮井川できる? 紀氏が 紀ノ川下流干拓 紀ノ川河口古墳爆発的増加				
	大谷古墳は熊本菊池川の石				
	馬胄は伽耶(任那)5世紀は紀ノ川北岸が古墳は優位 巨大古墳は築かれていない				
5世紀央	鳴滝倉庫 紀ノ川下流南岸の開発が進展	紀氏 朝鮮半島と大いに関わる			
5世紀後半	紀後半 紀氏、倭王朝の中枢に				
	紀の川北岸に大きい前方後円墳 紀氏、ピークの時代に				
	岩橋千塚古墳築かれ始める、源流は高句麗				
5世紀末	対朝鮮半島拠点が難波に移り始める 大谷古墳(馬冑)				
6世紀初	6世紀は紀の川南岸の古墳が優位	紀氏南朝鮮との関係切れる			
		紀直と紀臣に分離開始			
6世紀前半央	磐井の乱				
	継体朝の没落 継体一大伴一紀氏 欽明一蘇我	紀氏、平群斑鳩に進出			
6世紀央		紀臣氏復活			
6世紀	岩橋千塚古墳終了				
562	新羅、任那加耶を滅ぼす	紀男麻呂宿禰は大将軍			
587	蘇我物部戦争	紀男麻呂、蘇我氏に味方す			
645	大化改新 蘇我氏滅亡				

3世紀末~4世紀始め

3世紀に成立

紀の国は古代から昔クス・スギ等の良材の産地で、これを利用した造船技術が発達し、紀州独特の大型構造船の製造地であり、紀ノ川河口には、岩橋千塚古墳群(国内最大級の群集墳)、大谷古墳(朝鮮に関係深い馬冑・馬甲等出土)、鳴滝遺跡(紀伊水門倉庫群跡)があり、瀬戸内海から紀伊水門を門戸に紀ノ川を溯って大和に入るルートが、大和と朝鮮を結ぶ重要な幹線で、古墳時代中期は和歌浦より紀ノ川を遡り、この紀路を経由して、中国大陸や韓半島から渡来した人・物の情報が大和へ入ってきたと推定されている。

紀氏の祖は、渡来人説(百済からの渡来)や九州から3世紀ごろこの和歌山の地に移り住んだ集団(紀直)といわれ、紀ノ川南岸平野を潤す宮井川(名草溝)を切り開き、名草平野を一挙に農耕地にしたことが紀氏の豪族としての力を確立し、紀ノ川の河口に本拠地を持ち、優れた航海術と交易により 大陸・朝鮮半島諸国との交流網を持ち、大和王権の外交・軍事を担って 大和朝廷の朝鮮出兵などに活躍した。そして、5世紀末から7世紀にかけて 在地の豪族で 紀国造として地方官となる紀直と紀角宿禰(竹内宿禰)が祖と称し大和王権内で活躍する紀臣の2大集団に分かれた。

また、和歌山の河口近くにある紀伊一宮日前宮は日本書紀にも載るにほんでも一番古い神社の一つ。 紀氏が代々祭祀を行ってきたといわれる。

紀氏が活躍した4世紀から6世紀は、大和朝廷が朝鮮半島に盛んに武力関与を行った時期で、大和王権の外港 紀ノ川の

河口を重要拠点とし、大和王権の外交・軍事を担って 大和 朝廷の朝鮮出兵などに活躍したのが紀氏である。

4世紀末から5世紀初め、高句麗の南下に対抗して、高句麗の広開土王の軍と戦った倭軍は、紀路から紀ノ川河口に出て、紀伊水軍によって半島に運ばれたのかもしれない。また、雄略朝を前後する4世紀から6世紀は、大和朝廷が朝鮮半島に盛んに武力関与を行った時期とされている。任那が滅びる562年には紀男麻呂宿禰が新羅を責める大将軍になっている。

583年には、紀国造押勝が国家の重要案件である任那復興に



紀伊風土記の丘 遠望 2007.7.31.

関与を求められ、火葦北国造阿利斯登の子日羅を招いて任那復興策を検討するために、百済に遣わされている。

一方 紀ノ川を遡った奥 大和への入り口 金剛山の東山麓 葛城に本拠を構える葛城氏についても 日本書紀の記事によると「神功皇后摂政 5 年に新羅王の人質の見張りとして**襲津彦**を新羅に使わすが、対馬にて新羅王の使者に騙されて、人質に逃げられ、怒った**襲津彦**が蹈鞴津に上陸して草羅城を攻撃して捕虜を連れ帰った。この時連れ帰った人たちが桑原(現在の南郷??)・佐糜(御所市風の森 高鴨神社のあたり)・高宮(御所市名柄)・忍海の 4 邑に住む人々の祖先である。」 など葛城氏の始祖といわれる葛城襲津彦など 4・5 世紀朝鮮半島で活躍したとの記述が残されている。

2. 紀ノ川の流れに沿って 大和へ Country Walk 2007.7.31.

2.1. 紀ノ川の河口近く 紀伊風土記の丘を訪ねる 大陸・朝鮮半島の窓口となった紀氏の本拠地







7月31日晴れ 朝10時前 1週間ぶりにJR和歌山駅に降り立つ。

暑くなりそうですが、今日は古代 この紀ノ川の河口 和歌山に本拠を置いた紀氏の足跡を求めて 紀伊風土記の丘へ。 資料館があるので、ほとんど情報を持っていない紀氏と「和鉄」の関係を教えてもらおう。そして、それによって、また足 の向くままであるが、風土記の丘に点在する紀氏と関係深い岩橋古墳群を歩いて、山から和歌山を見下ろして、日前宮に出 て、電車で紀ノ川筋を遡って 古代 大和への入口になっていた五条の港周辺へ。出来れば ここから陸路となっていた風 の森峠を越えて葛城・御所へと大和に入ろう。

大まかな計画ではあるが、一応地図など事前調査済みである。

風土記の丘へはJR和歌山線で行っても 貴志川線で日前 宮川から行ってもいいし、バスもあるはずとゆっくり構えて、JR和歌山の駅前へ出たのですが、満悪くどれも都 合悪く、30分ほど待ってパスに乗る。

「そら 日前宮の方から歩いたら結構時間がかかってしんどいよ。 先に風土記の丘まで行って 歩いたら・・・・」 とバスの運転手さんに教えてもらう。

JR 和歌山から東へ、市街地を抜け、正面風土記の丘の丘

陵地が近くなり、高速道路の陸橋をくぐり、鳴滝団地を通り抜け丘を乗り越えると紀伊風土記の丘の駐車場。 和歌山から 20 分ほど 南側には緑に包まれた丘陵地が連なり、反対側は田園地帯が続く。鳴神には鳴神貝塚遺跡があり、縄文・古墳時代 この丘陵地の山裾あたりまでは、紀ノ川河口の湾内であったと推察される。

良く整備された公園内の道を歩くと丘陵地の一番下のところに資料館があり、その後の丘陵の頂上部を中心に張り出した幾つもの枝尾根に 700 を越える古墳が広がっていて、今はそれらの古墳群をめぐる遊歩道が整備され、古墳のいくつかは中が覗けるように整備されていた。

また、資料館には紀 伊風土記の丘・岩橋 千塚古墳群を中心に この紀ノ川河口部を 中心とした古代遺跡 がパネルと出土品展 示されていて、和歌 山の古代の歴史がレ ビューされていた。







紀伊風土記の丘 と 資料館

この風土記の丘と紀ノ川を挟んで ちょうど反対側の北側にある大谷古墳から出土した鉄の馬冑・大和王権の外港機能を示す鳴滝倉庫群・紀ノ川流域遺跡から出土した韓式土器、そして この岩崎千塚古墳群から出土した鉄製品や土器など数々の副葬品が展示され、この和歌山が 4・5 世紀大和王権の重要な外港として、朝鮮半島・大陸との交流の重要拠点であったことが示されていた。



大谷古墳から出土した馬冑



大和王権の外港機能を示す鳴滝倉庫群



紀ノ川流域遺跡から出土した韓式土器

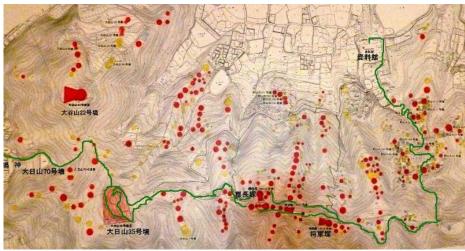


岩橋千塚古墳群から出土した鉄製品などの副葬遺物

紀伊風土記の丘資料館展示より

これら岩崎千塚古墳はこの紀ノ川河口部一帯を根拠地としていた紀氏を中心とした豪族たちの5世紀から7世紀までの古墳群(大部分は6世紀)といわれており、石室の型式やその副葬品から朝鮮半島や大陸と深いつながりがあったことが伺える。





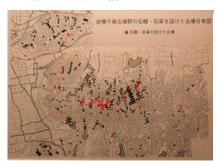
700 もの古墳が丘陵地の尾根に点在する岩橋千塚古墳群の古墳分布と歩いたコース

この岩橋千塚古墳群には首長の墓とかんがえられる前方後円墳は29基あり、そのほかは円墳・方墳である。 古い前方後円墳は花山につくられ、それから 大田に山・大日山から前山へと築造されて行ったという。

また この岩橋千塚古墳群は、横穴式石室に石棚、石梁をもつ古墳が多いことで有名であり、特に石梁はこの地域にしかみられない珍しいものである。

それぞれの古墳の埋葬施設は、結晶片岩の板石を積んで長方形の空間を造った竪穴式石室、横穴式石室などがあります。石室を設けず板石を立ててつくる箱式石棺や、木棺を粘土で包んだ粘土槨なども見られる。

なかでも横穴式石室に見られる石棚と石梁は、岩橋千塚古墳群の最も大きな特徴です。とくに石梁は、割り石を積み上げただけの石室の壁面を崩れにくくするために支える「構造材」の機能があると考えられている。これにより 将軍塚などのように天井の高さ約4.3メートルの大きな「玄室」確保することができたと考えられます。また、床の下には排水施設があり、水が外に抜けるような構造になっています。







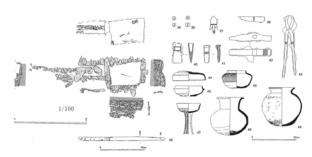


石梁と石棚のある岩橋型 横穴式石室模式図

前山 A46 号墳 前山 B53 号墳(将軍塚古墳)

私の一番の興味は この紀ノ川流域での「鉄」。この時代大和や河内など 畿内では渡来の技術集団をかかえ、大県・葛城・布留など鍛治工房が営まれている。葛城氏も忍海や南郷で鍛治工房を持っている。朝鮮半島の鉄素材の移入に大きな役割をはたしたと考えられる紀氏もこの紀ノ川沿いに鍛治工房をもつていたのではないか???と考えたのですが、残念ながら良く解りませんでした。しかし、この古橋古墳群の副葬品として数多くの鉄製品が出土しており、特に大日山 70 号古墳からは須恵器 土師器 陶質土器馬具 玉類とともに 鉄刀 鉄鏃 小刀 ヤリガンナ 鉄鉗 鉄鎚 鉄鑿 鉄斧など鉄製品・鍛治具などが副葬されていた。





岩橋千塚古墳群 大日山70号古墳 種々の鉄製遺物を出土

鍛治具が出土した大日山 70 号古墳の副葬遺物

須恵器 土師器 陶質土器 鉄刀 鉄鏃 小刀 ヤリガンナ 鉄鉗 鉄鎚 鉄鑿 鉄斧 馬具 玉類

鍛治具がこの岩橋古墳群(大日山 70 号古墳)に副葬されていたことや 多くの鍛治加工された鉄製品の遺物が副葬されていたことなどから、紀氏もまた鍛治工房の経営強いては日本における鉄生産の模索をしていた可能性はあると思っている。しかし、資料館の学芸員の方にお聞きしても、鉄滓の副葬もなく、 紀ノ川沿いでも製鉄遺跡は見つかっていないとの事でした。 また、鍛治具が服装されていた大日山 70 号古墳の位置も教えていただいたのですが、薮の中 道がないので行けないとのこと。(大日山から鳴神へ降りる尾根道を下って、池にでる手前の薮と聞きました。 下図参照)

この風土記の丘の資料館で 紀氏と朝鮮半島とに繋がる数々の遺物や遺跡 そして 700 もの古墳群(その中に首長級の墓と思われる 29 基の前方後円墳を含む)をほぼ 6世紀 100年間につくった豪族の存在を知ることが出来、大和にとって、紀ノ川が極めて重要であったことを理解できました。

資料館を出て、岩橋千塚古墳をたどる。 大日山の 頂上周辺へ行けば 和歌山市街地が一望できると教え ていただいたので、古墳群をめぐりながら大日山頂上 部にある大日山35号前方後円墳を目指す。



岩橋千塚古墳群を巡って 前山・大日山から鳴神へ

資料館のすぐ横から山へ登って、古墳群をめぐる回遊路があり、元に戻る入口に風土記の丘の案内と岩橋千塚の碑が立っている。静かな森に包まれた丘陵地の中 首長級の墓と思われる主要前方後円墳が峰の頂にあり、それをめぐれるように道が付けられ、また、数々の墓の内部が公開されており、この丘陵地の稜線のところどころで、和歌山 紀ノ川の平野部が見下ろせる。





岩橋千塚古墳群めぐりの登口

2007. 7. 31.

○ 前山古支群周辺

資料館の横から坂道と登り始めて すぐ左脇の枝尾根に広がるのが前山古墳群 岩橋古墳群の中では一番古い 5 世紀に つくられた古墳群である。 結晶片岩を積み上げた石室の壁が美しい。私にははじめての印象。





前山 A24 号墳内部

A23 号墳のすぐ上にある径 25m の円墳。横穴式石室は玄室長 2.06m、幅 1.86m、高さ 2.5m の両袖式で、石棚はなく、石梁が 1 本架設。

前壁部が開口していて、石梁を間近に見学ができた。



前山 A13 号墳とその周辺

径 18m、高さ 3.5mの円墳で保存状態の良い横穴式石室が公開されている。玄室前道を持つ岩橋型石室で、全長 5.84m。 奥壁には石棚が設けられ、上部には石梁が二本架設されています





前山 A46 号墳

径 27m、高さ 8m の円墳。横穴式石室は全長 8.8m、玄室長 3.34m、幅 2.12m、高さ 3.4m の両袖式で、前山 A 支群では最大規模。石棚 1、石梁が 4 本架設され、排水溝が設けられている。



風土記の丘の下 平野部を東西に流れ下る紀ノ川 2007、7、31、 前山 A46 号墳周辺より 直ぐ下中央に資料館もみえる

○ 丘陵地の頂上部の尾根に出て 将軍塚・郡長塚古墳へ





将軍塚 前山B53号墳

将軍塚古墳は、海抜約 150mの岩橋前山山頂付近に ある 6~7世紀 古墳時代後期の前方後円墳(全長約 42.5m)。この古墳には、横穴式石室が前方部と後円部 にそれぞれ造られている。見学できる後円部の横穴式 石室は、羨道·玄室通廊部・玄室があり、玄室の床から





天井までの高さは約 4.3 m。石室には一枚の板石からなる石棚と、石梁が1本あり、羨道にも1本の石梁がある。羨道は2 枚の扉石で閉じられ、玄室よりも約 20cm 床が高くつくられている。玄室の床には川原石が敷きつめられ、床下には玄室に溜まった水を石室の外に排水できるように溝がめぐらされている。すでに盗掘を受けていたため、どのような副葬品が置かれていたかは不明という。



将軍塚古墳 周辺



郡長塚古墳

大日山回遊路

○ 大日山35号古墳



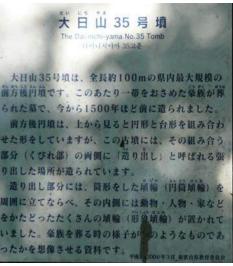


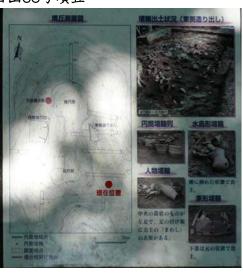




丘陵地の頂上尾根の西の端 大日山頂上部 大日山35号墳丘

首長級前方後円墳が建ち並ぶ丘陵 地の頂上尾根を西に歩いてきて、郡 長塚を過ぎると、道はこの丘陵地を 下って元の資料館の方へ行く道と その尾根筋を東へ、大日山の頂上部 大日山35号墳への道との分岐に 出る。この分岐点から 尾根につって西へ林の中を少し進むと、大日山 (標高 141.8m)の頂上部である。 木々の切れ目からこんもり盛り上がった丘が見える。 この丘の端の ところに大日山35号墳の案内板があり、ここが古墳の南側の端で





ここから北側へ 頂上付近の地形を利用して前方後円墳が作られている。 随分大きな前方後円墳で 中々全体のイメージ がつかめないが、この墳丘に沿って 周りを巡る道と墳丘に上がる道が整備されている。墳長が約96mの和歌山県で最大規模の前方後円墳で、墳丘は3段築成で、2段目の東西くびれ部に造り出しが構築されている。墳丘の築造は、結晶片岩の岩盤を整形して行い、盛土は部分的な範囲にとどまっている。このように自然地形を利用して墳丘を築造しているため、後円部が前方部より低くなったと考えられている。築造時期は、石室羨道部や造り出しで出土した須恵器を総合的に検討すると、6世紀初頭と考えられ、墳丘規模から大日山35号墳が当該期の紀伊首長墳であったといえる。さらに、くびれ部で検出された造り出しでは、多様多数の形象埴輪が整然と並べられ、豪族を葬るとき、つまり、古墳時代における王権中枢や地方首長の古墳祭祀のあり方を考察する貴重な資料である。

墳丘の北の端から斜めに墳丘に登ると、木々のない草叢平地になっている。きっちりとした古墳の形が良く見えなかったが、どうも 全体がつかみにくいのは一部 自然地形をそのまま残し、墳丘があまり高くないためかもしれない。 むしろ、墳丘の下の墳丘を巡る道を ぐるっと 1 周たどる方が、前方後円墳をイメージできる。







南の前方部 周辺 大日山35号墳の上 周辺

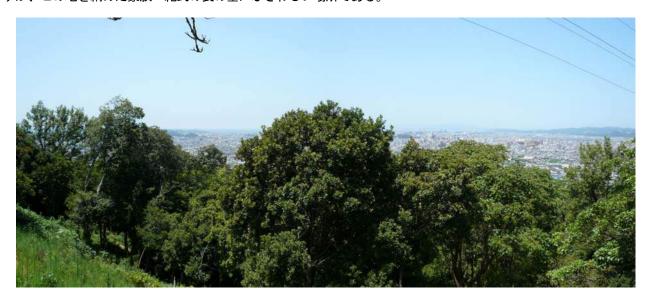


北の後円部 周辺

南の前方部の端には送電鉄塔があるが、この周辺からは 南西側 和歌浦から和歌山の市街地そして 紀ノ川流域と広がる 和歌山平野部が一望できた。北西側には 泉南の山裾を東から西に流れる紀ノ川が流れ下り、その向うには淡路島がかすんで見え、その河口部には和歌山製鉄所がどっしりと座っている。一度見たかった景色である。

古墳時代には もっと近くに 紀ノ川の流れがあり、和歌の浦の海がひろがっていて、この丘陵地からは 紀ノ川を遡って大和へゆく、舟の往来が眺められたに違いない。

さすが、この地を納めた豪族 紀氏の長の墓にふさわしい場所である。



和歌浦から和歌山の市街地そして 紀ノ川流域と広がる 和歌山平野



淡路島の手前 和歌山製鉄所 遠望



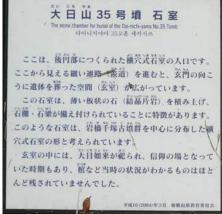
和歌山の市街地を東西に流れ下る紀ノ川

墳丘の下を一周巡る道を後円部を北に回りこんだところに石室の入口があり、石室の案内パネルが置かれていた。 石室の内部に大日如来が安置され、信仰の場になっていた時代もあり、棺や副葬品は良く判らないとのことである。













後円部 石室の入口周辺 墳丘を巡る道で

この大日山の西斜面の下は 現在の鳴神地区で、和歌山平和の中心であり、古墳時代紀氏の本拠地でもある。紀氏の本拠地から、正面に見上げる山の上に首長の墓が作られ、この平野側 大日山の南側斜面にも 古墳群があり、その一つ大日山70号墳から鍛治具などが副葬されていたという。 その場所にも行きたかったのですが、この岩橋千塚古墳群の公園整備地区から外れ、道がなく、竹やぶなどブッシュの中と聞いて断念。 でも この大日山から すぐ近くを鳴神地区へそのまま下って行く道があるので、資料館への回遊路にはゆかず、そのまま鳴神へ下る。

「紀氏の情報が集められれば、また 丘陵の丘に登れば和歌山が見えるだろう」と軽い気持ちのハイキングとかんがえていましたが、 こんなに多くの古墳があり、しかも良く整備され高達で古墳の内部がみられたのには予想外。また、薄い結晶片岩を積重ねた古墳の内部の美しさ。 いろいろ古墳を見に沸きましたが、これもあまり記憶なし。

やっぱり 知らないところ いろいろあるなあ・・・・とこの丘陵地を降りてきました。







大日山から 回遊路と分かれてあへ

鳴神地区へ 山を下る 2007.8.31.







○ 紀氏が代々祭祀を司ってきた古社 紀伊一宮「日前宮」



鳴神地区に下りてくるとちょうど昼。 午前中に 出来れば、紀氏の本拠地「日前宮」に行って、午後、紀ノ川の大和側の外港「五条」まで JR 和歌山線に乗って遡る予定。この鳴神から20分も歩けば「日前宮」。夏のきつい日差しの中、東へ鳴神の街を東へ抜けてゆく。 まもなく、朝バスで通り抜けた時に見た日前宮の森が見え、鳥居の前に出る。

伊勢神宮と同格の由緒ある神社という。

鳥居をくぐって砂利の道を北に行くと T 字路になっていて、 左側に日前神宮 右にほぼ相似の社殿がそれぞれ鎮座 している。

















日前神宮

岡縣妯ウ

ほぼ相似の二つの社殿が鎮座する古代紀氏の本拠地「目前宮」

紀伊国一宮「日前宮」は、出雲大社と並び日本最古の神社とされ、古代豪族・紀氏の本拠地としても非常に古い歴 史をももっている。日前宮の境内には相似した二つの社殿が東西に鎮座し、西の社殿を日前神宮、東を國懸神宮 といい、両神宮を総称して一般に日前宮と呼ばれる。

天香山から採取した銅を用いて天照大御神の御鏡を鋳造。その最初に鋳造された天照大御神の御鏡 前霊(さきみたま)を日前國懸両神宮の御神体として、後に鋳造された御鏡を伊勢の神宮の御神体として奉祀されたと『日本書紀』に記されている。爾来、紀氏(きいし)によって歴代奉祀され、両神宮の祭神が三種の神器に次ぐ宝鏡とされた。

また、日前宮の最初の鎮座地は毛見浜の宮であるとされ、古代海上交通の要衝から現在の稲作地帯への遷座は、紀氏の権力基盤の推移を物語る貴重な伝承である

伊勢神宮と同格の大きな地名宮なのですが、神域もさほど大きくもなく、大げさな感じもせず、古代の神社らしく、 和歌山の街の中に ひっそりと静かな森が今も保たれていました。

日前宮を出るともう暑くてたまらず、神宮の直ぐ前のローソンに駆け込み、ローソンの中でバスを待って、JR 和歌山駅へ。朝 JR 和歌山駅のバス停の広場に太田黒田遺跡の案内板が立っていましたが、弥生時代からその後古代にかけて、紀ノ川河口に開けた集落の複合遺跡。

紀ノ川の河口を本拠として、初期大和王権の中枢にあって、 大陸・朝鮮半島への外交・軍事を担った紀氏。

紀氏についてはあまり知りませんでしたが、岩橋千塚古墳群のスケールから、中央の豪族に劣らぬ勢力を持っていたのだろう。 また 伊勢神宮と同格という日前宮の存在も面白い。 和歌山と言うと 直ぐに 「熊野古道・熊野から大和へ」と言ってしまいますが、紀ノ川沿いの「紀路」の存在は非常に 興味深く、認識を新たにしました。

弥生時代から続く紀ノ川河口の集落 JR 和歌山駅前の太田黒田遺跡

午後は 和歌山ラーメンを久しぶりに食べて、JR 和歌山線に乗って 五条へ 紀ノ川を遡ります。



風土記の丘の下 平野部中央を東西に流れ下る紀ノ川 2007.7.31.

2.2、 紀ノ川の中流 古代大和の玄関ロ「五条」

午後1時50分和歌山発の王寺行に乗る。 紀ノ川に沿って 約1時間 半で五条である。

1週間前に龍門山に登るため、粉河まで行き、さらに午後橋本まで乗っているので、今日は 五条から橋本までの間でもやっぱり紀ノ川は中央構造線沿いの幅の広い河岸段丘の中央を悠然と流れ下ってくるのかを確かめ、五条が大和への入口として機能できる川岸があるのだろうか・・・それを確認したい。

五条・橋本・九度山といえば 忍者の世界 山奥の奥と思っていました が、龍門山に登って、吉野から流れ下ってくる紀ノ川を見ていると山奥 の谷間を流れ下ってくるとのイメージは すでに吹き飛んでいる。

和歌山を出て、電車が大きく 東へカーブを切ると田園の 向うに朝歩いた風土記の丘 の丘陵地が遠く見え、遠く龍 門山を遠望しながら紀ノ川 の鉄橋をわたると北側は泉 山脈から岩湧山・金剛山の





⊗ 五條東中

紀伊風土記の丘遠と紀ノ川鉄橋からみた龍門山 遠望 2007.7.31.

山並み 南側には龍門山・九度山・高野山から吉野へと山並みが続く幅の広い谷筋を紀ノ川に平行して、和泉山脈の山裾を 東へ進み、龍門山がぐんぐん近づいてきて、堂々とした龍門山の山体が車窓の南正面に見えると粉河である。

粉河を出ると電車の走る高台の下にゆったりと流れる紀ノ川が見える。この谷筋は東から西へ傾斜し、紀ノ川の流れと同様 東へはどんどん登っているのでしょうが、やっぱり山を登っているとの感じではない。ここが日本の大地溝帯中央構造線の 中ということが頭にインプットされていると 幅の広い溝の中をゆっくりと遡っているとの感じが実感される。







粉河周辺からの龍門山

粉河から橋本・五条間の紀ノ川中流

何度か 紀ノ川が眺められたり、離れたりしながら和泉山脈の山裾をはしって、約1時間半。両側の山裾が遠のき、広い盆 地上の街中が見えてくると五条である。





車窓より、五条の盆地 写真中央の木々の帯が悠然と流れる紀ノ川

やっぱり 深山の真っ只中の感じはない。 紀ノ川は広い五条の盆地の真ん中の平地を川幅を広げ、ゆったりと流れ下る。 古代も今も和歌山から大和へ抜ける交通の要衝で、紀ノ川はこの五条で 吉野川と名前を変えて、東へ曲がりながら吉野の 山中へ入ってゆく。

一方 紀路は五条から北側へ曲がって、ちょうど金剛山の東山麓と巨勢山の西の谷間を遡り、大和と紀ノ川水系を別ける

分水嶺 風の森峠を越えて 葛城・大和へと入ってゆく。

古代の「五条」はそんな紀ノ川筋の大和の外港であった。五条駅で下車して、地図を拡げて まず、紀ノ川の流れを見に行く。JR 五条駅や市街地は金剛山の南山麓の丘陵地に広がっているので、紀ノ川はずっと南側である。

駅の正面を出て、国道24号線を渡って 真直ぐ南へ紀ノ川の土手に向かい、JR 五条駅から15分ほどで、紀ノ川の堤防に 出る。川幅の広い大きな川が盆地の平地を北東から南西へゆったりと流れている。

ちょうどこのあたりが、五条の港だったのだろう。川の反対側 五条の街の背後には大きな金剛山がどっしりと座っている のが見える。







ゆったりと五条を流れる紀ノ川 五条駅から南へ 紀ノ川の川岸へ向かう 五条の街の北側にそびえる金剛山

○ 古代大和「紀路」 大和の外港 紀ノ川「五条」周辺

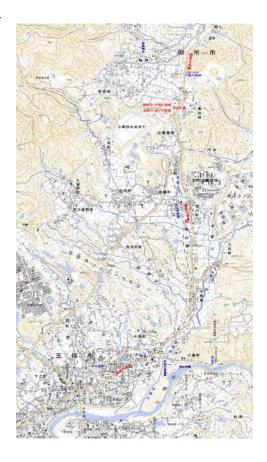


紀ノ川の五条 下流側 2007.7.31.



紀ノ川の五条 上流側 2007.7.31.

紀ノ川の土手に座って 地図を拡げて、紀ノ川の流れと周囲の景色を対比 させる。下流側は大きく開けていて、遠く龍門山・高野山の山並みと和泉 山脈の広い空間が開け、その間をゆったりとした流れが下って行く。流れ の障害もなく、河口までゆったりと下って行けそうである。



一方、上流側に目をむけると、正面左手に緑の雑木に包まれた広い中州があり、川の流れは中洲の向うになって良く見えないが、中洲のその向うに吉野の山々の端に当たる丘陵地が東から延びていて、吉野川と名前を変えた紀ノ川はこの丘陵地にぶち当たって、流れを東に変えて 吉野の山の中へ消えてゆく。吉野川の東への方向転換点にかかる赤いアーチ型の橋が中洲の向うに見える。中洲の北側背後は 金剛山と吉東に連なる吉野連山との鞍部になっていて 五条から見ると 上部に拾い空間が開けたはなだらかな丘陵地である。この低い丘陵地が紀ノ川水系と大和の葛城川・大和川水系との分水嶺で、大和へ行くには五条から陸路この分水嶺を越えて大和へ入る。

古代の「紀路」も現在の国道 24 号線 JR 和歌山線すべて同じである。もっとも 古い古墳時代からの紀路・葛城道や国 24 号線は金剛山のゆるい傾斜地の高台の上を真直ぐに分水嶺である風の森峠を越えて葛城・大和へ入るのに対し、奈良

時代の紀路は、もう一つのルート巨勢道と呼ばれる宇智から巨

勢山の東の谷間を越 えてゆく道が開かれ、 現在の JR もこのルー トを抜けて 大和へ 入っていく。

この分水嶺から真直 ぐ南へ 吉野連山の 山裾の崖下を縫って





宇智川が流れくだり、吉野川に合流している。 この宇智川と吉野川の合流点にあるのが、前に見えている緑の広い中洲で、この中洲の手前に川幅の狭い整備つれた宇智川が流れ込んでいるのが見える。おそらく古代には この中洲を含め、広い河原が形成されていて、五条の港がここに形成されていたと思われる。

古代大和「纪路」 大和の外港 纪ノ川「五条」周辺 2007.7.31、

和歌山から紀ノ川を遡ってきた「紀路」はここで紀ノ川を離れ、金剛山東山麓を北へ大和へと向かう







紀ノ川の五条 下 2007.7.31.







紀ノ川の五条 上流側 2007.7.31.



この紀ノ川(吉野川)の土手からは広い中洲に阻まれて、東の吉野の山中へながれを変えてゆくあたりが良く見えない。

土手の上を北に歩いてゆくが、宇 智川の改修工事中で北へ行く橋 がなく、そのまま土手沿いに赤い アーチ橋の方へは行けず。

宇智川の手前へ引き返し、土手 を降りて集落を抜けて国道 24 号 線「今井」の集落にでる。「今井」





は五条の街の東の端で、金剛山の広い斜面の高台の上にあり、国道は北よりに方向を変えながら、さらに大和・御所方面へ 坂道を分水嶺へ登ってゆくが、ここで東に分岐して、宇智川をトラバースして、崖下を流れる吉野川に沿って吉野へ向かう 道がある。





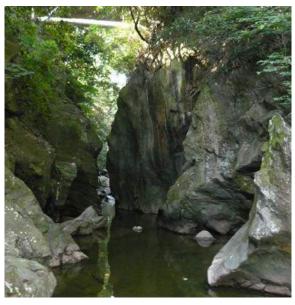
五条市今井を北へ走る国道 24 号線

大和・吉野の分岐 今井周辺の地図

北東に見える赤いアーチ橋のあたりが、その吉野川の方向変更点。この橋より北は両側が切り立った崖となったその中を吉野川が悠々と流れ下ってくる。 また、今井の分岐の直ぐ横を流れる宇智川も幅の狭い切り立った崖の中を流れ下ってくる。 金剛山の山裾の傾斜地とはいえ、こんな街の平地の中に深い溝状の渓谷があるのか??とビックリしました。

吉野川といい、宇智川といい、川の大きさが異なるが、山裾の傾斜地の地割れした溝の中を流れ下って、五条の盆地に出てきたという感じである。 日本の大地溝帯 中央構造線の川の名残であろう。

今井から直ぐ宇智川を渡る橋であるが、その下の崖に古い磨崖碑があるというので、崖を川底に降りる。本当に狭い崖である。また、今井で見るとそれほどきつく感じませんでしたが、流れ下る宇智川は傾斜がきついのだろう。









磨崖碑の崖 狭い渓谷を流れる宇智川 字が書いてあるのですが、ほとんど読めない

再度崖からもとの道に戻って、吉野へ行く道を赤いアーチ橋(栄山寺橋) の方へ向かう。

先ほどの渓谷は山裾の広い高台の中に隠されてみえない。また、西には高台の下をゆったりと流れる吉野川が見える。 赤いアーチ橋・栄山橋の上から上流側と下流側をみるが、どちらも満面と水をたたえた紀ノ川がどこまでも悠然と流れてい 「紀路」和歌山から遡ってきた五条は大和への玄関口として素晴らしい外港であったろう。 る。





吉野への道から眺める吉野川 左: 栄山橋 右: 下流側遠望 2007. 7. 31.





榮山橋より上流側



榮山橋より下流側









吉野川の傍らの高台にある古寺 栄山寺 2007. 7. 31.

淀川水系 大和川水系と比べて 山深い道を分け入るなんて と思っていましたが、いままで、五条や紀ノ川水系に擁いて いたイメージは完全に覆った walk。

ゆっくりと吉野川の眺めを見ながら すぐ傍の古寺 栄山寺の境内を歩きながら、紀ノ川水系の walk の一日を思い浮か べていました。







北の葛城・宇智方向の遠望

タ暮れ 栄山橋橋から今井へ戻る道で 2007.7.31.

2.3. 五条から陸路 金剛山の東麓 風の森峠を越えて 葛紀·大和へ 風の森峠周辺は 一番古い氏族「鴨氏」の本拠地

国道24号線の「今井」からバスで北へ分水嶺の風 の森峠を越える。いよいよ、紀ノ川から離れて 陸 路で大和へ入る。もう 時間は午後5時をまわって、 日没に近い。

この今井から分水嶺の風の森峠のほぼ中間点にある JR 北宇智駅は本年3月解消されるまで、スイッチバックがあった駅。

JR は五条から紀ノ川沿いをはなれ、金剛山と吉野山地の間の谷斜面を登って、北宇智の駅にはいり、この駅からさらに登ったところで90度方向を変え、東へ 巨勢山の東側 巨勢道を大和に入る。一方古い「紀路」・葛城道や国道24号線はそのまま真直ぐ風の森峠を越えてゆく。

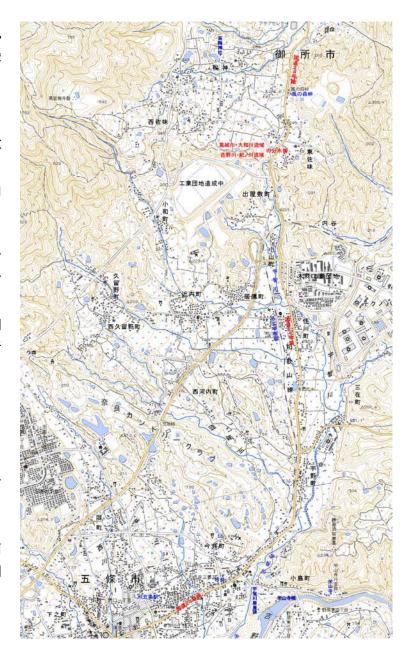
地図をみても五条周辺から見あげる分水嶺の金剛 山東山麓は田園が広がる緩やかな斜面の高台で難所 はないと思えるのですが、高台に突如現れた宇智川 の渓谷 そして スイッチバックがある。

思いもかけない難所があるのだろうか・・・・と。

やってきた大和高田行のバスの一番前に座って、 国道24号線の坂道を登ってゆく。

スイッチバックの駅も見たいのですが、日没近く今日はとにかく風の森峠へ。

今井から北宇智駅のある住川町の辺りまでは道の両側に町並みのある街道筋で、家並みの間からは田園や新しい住宅地そして、新しい道路などが入り混じって見える中をまっすぐに緩やかな傾斜地を登って、まもなく、住川町。 街道筋に家並み続き、駅の方は見えないが、特に変わったところもなし。









上今井から住川町(JR 北打宇智駅周辺)間の国土24号線で 2007.7.31.

この住川町を過ぎると左手には金剛山の大きな山体が見え、坂は少し急になりって登ってゆくが、山間の緩やかなスロープにはよく整備された段々畑が広がっている。上ってきた南側を見るが、田畑のスロープの下側になっていて、紀ノ川の川沿いは見えない。緩やかな斜面とはいいながら、随分登ってきた。







振り返ると傾斜地に田園が続いている

山間が近くなり、下に 吉野山地の崖が見え隠れするようになり、知らぬ間に分水嶺を越えて 佐見の新しい町の十字路に 出るともう 御所市である。直ぐにまた、田園地が広がる登りとなって、両側の森の中 まっすぐに登ってゆく坂道が伸び、 向うが見えない峠がみえてくる。 ここが 風の森峠。五条今井から約20分ほどで夕闇迫る風の森峠に立つ。 紀路を遡っての大和入りである。この峠を越えると御所市の市街地 葛城である。

また、紀ノ川側を眺めると 金剛山の東山麓のなだらかなスロープに 整備された段々畑が続く田園地帯がひろがっている。







風の森峠 2007.7.31.



風の森峠から 南 金剛山東山麓に広がる夕闇の田園地帯 2007.7.31.夕

バスではあったが、特に急峻な登りもなく、五条からこの峠までたどれる。古代の「紀路」そのままでないにしろ、安全に かつ、短時間で五条からこの葛城・大和へ入れたと思う。

この峠から東野金剛山東山麓の鴨神周辺は古代の一番古い氏族「鴨氏」の本拠地で、また この鳴神に続く金剛山・葛城山 東山麓は葛城氏の本拠地である。

これらの氏族はこの紀路を通じて、西日本諸国や大陸・朝鮮半島と繋がり、初期大和王権を支えた。

やつぱり、古墳時代 卑弥呼の時代 そして初期大和王権の時代の最重要路はこの紀路であったかもしれない。

紀ノ川河口の紀氏 そして 川を遡る大和の玄関口 葛城の鴨氏・葛城氏の存在がそれを示しているように思う。

○ 風の森峠の東 金剛山の東山麓の広い傾斜地は鴨族の本拠地



神武・綏靖・安寧の三代に皇后を送った鴨氏。

金剛山の東山麓に本拠を構え、神武天皇を熊野から大和への道 を八咫烏(やたがらす)となって案内し、その後 葛城川のほ とりの平野部に居を移し、初期王朝を支えましたが、崇神期に 大和を追われ9代で滅亡。鴨一族は京都の山城に移り「鴨川」、 「上賀茂」、「下鴨神社」の名を残したと言われている。

鴨氏が没落した後、今度は仁徳・履中・雄略に皇后を送った葛城氏が大和政権で勢力を奮いましたが、これも雄略期に滅ぼされました。そして、6世紀になると大和への幹線道は巨勢氏の抑えた巨勢道へと移る。

その後 葛城氏は同氏の流れを汲む蘇我氏に吸収され、紀路に 変わって 大和への幹線道となった大和川の竹内街道周辺を押 さえた蘇我氏が交易の支配権を握り、勢力を拡大してゆく。





風の森峠周辺から南側五条側に緩やかなスロープで広がる金剛山東山麓の田園地帯

風の森峠から金剛山の東山麓の段々畑の広がる斜面地を金剛山の山裾へ向かって、15分ほど登った静かな緑に包まれた山

裾の高台に鴨神の集落がありました。もう 金剛山の後に日が落ち、その残光がこちら 側に差込、刻々変化する夕闇の夕景が素晴 らしい。

金剛山の後に葛城山も顔を出し、大和の 中にいることがわかる。

鴨神の集落を抜けた金剛山の山裾森に鮮 やかな朱色の鳥居を前に高鴨神社があり ました。

もう薄暗くなり始めた境内は本当に静か。 京都の上賀茂神社・下鴨神社が鴨氏の本 拠と思ってきましたが、鴨氏が山城に入 る前にこの葛城の地に本拠をかまえ、こ こから、日本各地に散っていったという。 朱色の鳥居や社殿が懐かしい。









夕闇の 鴨氏の本拠地 鴨神の集落

2007. 7. 31.







鴨氏の本拠地 高鴨神社

参考 1. 風の森峠周辺 鴨神にいた鴨氏が 4世紀後半 葛城の中心地におりてきていた



御所市三室 鸭都被遗跡

鴨族・葛城氏との関係が考えられる弥生時代から古墳時代にかけての南葛城最大の拠点集落

参考 2. 本年3月まで JR 北宇智駅にあったスイッチバック 後日訪れました

JR 和秋山線 五条市北打宇智駅 関西唯一のスイッチトバック駅が紀伊から大和平野への入口にありました







スイッチバック当時の駅周辺









2007年 (平成19年) 3月18日スイッチバック解消

スイッチバック解消後の駅周辺 2007.8.27.

北宇智駅周辺は金剛山の東山麓斜面の傾斜地でかつ駅のすぐ北が分水嶺であり、五条川から来る汽車は 東に傾斜した斜面を斜めに登ってゆき、駅の北側で90度曲がりながら登って東の吉野ロペ下って行く。このため、駅をそのまま作ると斜め 勾配のまま作らねばならず、かつての汽車や貨物では登りされず、 スイッチバックで南へ同じ等高線上の駅への線路に入れて北宇智駅に入る。そして、平坦部からスタートしてまた、坂を上る構造になっている。馬力の上がった電車では必要なくなっており、ストレートの構造に換えられた。 見たところ この北宇智周辺が特に急勾配の厳しい場所というほど出なかった。

3、まとめ 和歌山から紀ノ川を遡って五条から葛城へ やっと古代 葛城の道・紀路が一つに繋がりました



静かな高鴨神社から、風の森峠まで、戻ったときにはもうすっかり夕暮れ。

夏の暑い一日 和歌山から紀ノ川を遡って五条から葛城へ やっと古代 葛城の道・紀路が一つに繋がりました。 紀ノ川流域はよく知らなかったとつくづく感じる一日。

夕闇金剛山東山麓に広がる段々畑や五条を悠々と流れる吉野川の流れも印象的でした。

また、朝 紀伊風土記の丘の丘をたどった紀氏の足跡 岩橋古墳群 結晶片岩を積み上げた良く整備された古墳の美しさとともに古墳の数の多さにもビックリ。

日本で製鉄が始まる前の3世紀後半から6世紀にかけて、朝鮮半島の鉄の覇権を巡って、日本各地の諸国が連合し、その確保に向かい、その絆の中から、邪馬台国・初期大和王権が生まれたという。

そんな大和と西日本・朝鮮半島・大陸を結 ぶ鉄の道があった。今日訪ねた紀路はそん な古代大和の鉄の道の最重要路。

そんな鉄の道で活躍した紀氏や葛城氏そして鴨氏の足跡に触れられた一日でした。



風土記の丘の下 平野部を東西に流れ下る紀ノ川 2007.7.31、

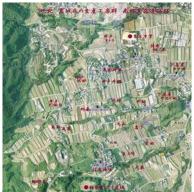
風の森峠をこえるともうそこは 葛城 葛城氏の本拠地。 金剛・葛城の山の傾斜地には 渡来の技術集団を含め、葛城 氏の鉄の生産工房が点々と建ち並び、それらを見下ろす極楽寺の丘には葛城氏の王城がそれら本拠地や 日本諸国・そして 朝鮮半島・大陸に通ずるこの「鉄の道」を見下ろしていた。

日本統一がその後なり、また 渡来の人たちも含め、幾多の技術集団が往来し、次の6世紀には日本で製鉄が始まる。

その製鉄の技術をもたらした道もこの鉄 の道だったろうと。

2回に渡って歩いた紀ノ川流域 walk 製鉄遺跡には行き当たりませんでしたが、 古代の鉄のいろいろなものが見えてきて 愉しい旅でした。





金剛山東山麓 葛城氏の鍛店生産工房群 南郷遺跡分布図

また 日本の大地溝地帯 中央構造線の溝の中を流れる紀ノ川。

本当に地形的にも 地図やインターネットの地形写真図と首っ引きでそちらも本当に面白いところでした。

淀川・木津川水系 大和川水系 そして紀ノ川水系と古代大和へ入る鉄の道を訪ね これで終わりにしようと思っていましたが、何度か 出かけながら、見つけることが出来なかった葛城氏の専用鍛治工房群 金剛山東山麓に点在する南郷遺跡 の遺跡分布図を教えてもらったので、今は完全に整備された段々畑の下ですが、生産工房遺跡を巡って、再度 古代の鉄を 考えてみようと思っています。



「紀路」大和への玄関ロ 紀ノ川の中流五条を悠々と流れる紀ノ川(古野川)



「纪路」大和への玄関ロ 五条 2007.7.31、



風の森峠から 南 金剛山東山麓に広がる夕角の田園地帯 2007.7.31、

縄文のサヌカ仆原産地 四国 坂出「金山」に「サヌカ仆・讃岐石」を訪ねる

2007.8.6. 城出市 金山 By Mutsu Nakanishi





四国 級出 縄えのサヌカイト 鉱山 「金山」 国道 11 号線 金山トンネル出口周辺より 2007.8.6.

「縄文の翡翠の原産地・黒曜石の原産地も訪れたし、『サヌカイトの原産地』にも訪れたい」と「縄文のサヌカイト鉱山」

といわれる主要原産地 四国 坂出の「金山」を訪れました。

黒曜石・翡翠と並ぶ縄文の重要交易品「サヌカイト」。

特に西日本では 縄文時代を支える道具・武器の材料である。硬い石で、叩き割ると鋭く鋭利な黒い貝殻状の破面が 剥ぎ取れるので、石器時代には道具や武器に加工して使われた。また、叩くと「カンカン」と高い金属音がするので、

「カンカン石」とも呼ばれ、最近は石琴などの楽器にも製作されている。

もともと四国讃岐地方で産するガラス質の緻密で黒色の安山岩・讃岐石(非晶質古銅輝石安山岩)に付けられた名

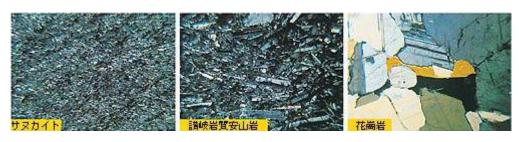


四国讃岐地方のサヌカイト主要原産地帯

前で、讃岐地方のほか、二上山や三河鳳来寺山地域に特徴的に産し、銚子や小笠原父島でも産する。

この岩石は、地球を構成するマントル内で溶けて出来た安山岩質マグマで、一般の安山岩よりもマグネシウムの含有量が多く、斜長石の班晶はほとんど見られないガラス質の火山岩で、「古銅輝石」【Mg, Fe) 2Si 206】と呼ばれる細かい小針状結晶鉱物が特徴的に含まれていることから非晶質古銅輝石安山岩と命名された。

基質はガラス質・非晶質であるが、また、見た目にはあまり変わらない、ごく少量の斜長石の斑晶を伴うサヌカイト質安山 岩も「サヌカイト」の仲間に入れて呼ばれることもある。



香川県立五色台少年自然センター自然科学館 http://www.pref.kagawa.jp/sizeka/index.htmより

近畿には 四国と並ぶ「サヌカイト」の原産地 二上山北麓「屯鶴峰」があり、一度以前に出かけたのですが、どれがサ ヌカイトなのか 判別をすることが出来ず、特徴ある貝殻状破面を出すことができませんでした。 「四国に行ったら、石垣などにも使われていて、直に見られる」と聞いて、直接黒い破面を出したくて、「サヌカイト・讃岐石」の名前の由来の四国へ。

サヌカイトは火山活動で 吹き飛ばされた安山岩質マグマが急冷して固まったものなので、岩質は異なりますが、ガラス質・非晶質が基質のため、鋭く鋭利な黒い貝殻状の破面が剥ぎ取れるので、縄文の鋭利な刃先を持つ道具・武器の主要材料となり、また その産地もごく限られた地域にしか産出せず、縄文の主要交易品のひとつとなりました。

四国のサヌカイト原産地を調べていて、坂出の「金山」にぶち当たる。

「金山」の名前にひかれ、ひょっとして、「金山」は サヌカイトばかりでなく、鉱物資源が出る山ではないか???と。 インターネットで調べてみると、「金山」は、「JR 坂出駅のすぐ東の小さな山で、現在は個人の所有地であるが、山中あちこ

ちでサヌカイトが散在するのが、今見られる」という。

ほかにも 周辺には国分台や城山などの原産地があるが、 二上山同様なかなかサヌカイトを見つけるのは難しいという。 益々「金山」が気になって、名前の由来なども調べ始める。

「金山」の地名は打てば金属音を発する石(カンカン石) が累積しているのでこの名があるという説もある。

また、「金山」周辺には「鉄」と関係の深い炭焼き長者伝説に 通ずる「乙姫様と花婿どん」や「金山」に住む金山長者と向か いの「城山」に住む城山長者との「宝比べ」などの民話が残 っており、サヌカイトの主要原産地である「金山」・「城山」 には長者がいたようです。



インターネットで調べた坂出の「金山」周辺航空写真

財を成したのは やっぱり 鉱物資源か・・・・。

頂上部のサヌカイトが風化した粘土層の中にボーキサイトがあり、戦時中に掘り出して、アルミニュウムに精錬されたといい、また、地図を調べると「金山」の中腹には金山の神を祭る金山権現・金山神社があり、この金山神社の祭神は金属精錬・鍛治と関係深い「金山彦」である。

また、サヌカイトには磁鉄鉱粒が多く含まれている(FeO 換算で約5%程度)し、この神社のある坂出市川津町江尻町の旧地名は「川津村鋳物師屋」である。

ひよっとして この金山で やっぱり、「鉄・砂鉄」が出たのではないかと思ったのですが、詳細はいまだ解らずです。

でも 「サヌカイト」と「金山」の地名 そして 其処にはゴロゴロ「サヌカイト」が転がっていると聞いて、とにかく坂 出に行ってみようと8月6日 広島からの帰りに坂出に出かけました。

半日 「金山」の周辺を「サヌカイト」を探しながらのwalkを楽しんで帰りました。





坂出駅から見た「金山」と金山・坂出 周辺図

○ 参考 リンクアドレスに変更後のリンクアドレスが隠れています

Country Walk 糸魚川・青海に縄文のヒスイ原石の谷を訪ねる 2005. 5. 17. &18.

http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/pdfwalk/4walk06.pdf

Country walk 甲州・信州国境 八ヶ岳山麓に縄文遺跡を訪ねて 2006.10.6.-10.10.

3. 縄文の黒曜石原産地遺跡 黒曜石」を日本各地に配っていた信州 霧ケ峰・中山峠 長和市星屑峠に縄文の黒曜石鉱山を訪ねる

http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/pdfwalk/5walk05.pdf p19

1. 坂出「金山」周辺のサヌカイト・讃岐石 と「金山」にまつわる民話

1.1. サヌカイトの生成とその特徴

坂出市 http://www.city.sakaide.kagawa.jp/kankou/local/sanukaito.html より

サヌカイトは、坂出市東部にある五色台及びその付近の山頂周辺などの香川県北部地域に広く分布する古銅輝石安山岩の一種で、瀬戸内地域に起こった火山活動によってマグマが地表に流出し、冷え固まってできた岩石で、サヌカイトとその類縁岩石は、紀伊半島中部から本県を経て、九州北部までの分布を示し、大阪府の二上山には香川県に分布するものとよく似た岩石が見られます。

特に香川県坂出市に位置する金山は、城山、国分台、連光寺山などとともにサヌカイトの一大産出地として知られ、旧石器時代以降、中四国地方では最も普遍的な石器石材としてナイフ形、石鏃、スクレイパーなど、盛んに製作消費された。 広島県洗谷遺跡、愛媛県江口貝塚、糸大谷遺跡などの分析事例から、縄文時代後期以降になると 1 kgを超す板状の大型石器素材が、瀬戸内海を介して運ばれていたことが知られている。

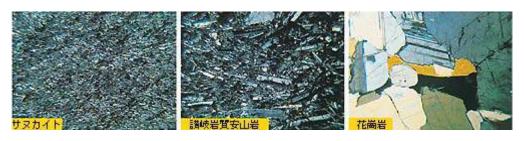


「サヌカイト・讃岐石」の主要分布図

その名が示すごとく四国 坂出の東部 高松の境界をなす五色台やその周辺の山が主産地。

サヌカイトは見かけ上は黒色緻密なガラス質で、斑晶 (肉眼で見分けられる粗粒の結晶) に乏しく、叩けばよく響き、かんかん石として知られてきました。顕微鏡下で見ると極めて細粒緻密で、ガラス、斜方輝石、磁鉄鉱、斜長石などから構成されています。岩石分類上は安山岩またはデイサイト (珪酸分のやや多い火山岩) に属します。

斑晶として稀に、マグネシウムに富むかんらん石、斜方輝石が含まれるのが通常の火山岩に見られない特徴です。これらの 斑晶は初生安山岩質マグマ (深さ 30-50km のマントルで生じた未分化な安山岩マグマ) から結晶したもので、安山岩成因 論の1つである初生安山岩質マグマの存在を裏づける貴重な存在となっています。



香川県立五色台少年自然センター自然科学館 http://www.pref.kagawa.jp/sizeka/index.htmより

		超塩基性岩	塩基性岩	中性岩	酸性岩	
ser d to Am A	火山岩		玄武岩	安山岩	流紋岩	
斑状彩	半深成岩		粗粒玄武岩(ドレライト)	ヒン岩	かこう斑岩	
穿粒状	祖繼 深成岩	かんらん岩	はんれい岩	閃練岩	かこう岩	
SiO ₂ (重量%)		45% ◀ 52% —			66%	
色指数		約70%(黑-	ばい 435%		約15%(白っぽい)	
比重		約3.2 ◆			参 2.7	
造岩鉱物	無色鉱物	-80 (%) -60	Caに富む	斜長石	カリ長石	
	有色鉱物	-40 -20	#石 かんちん石	- Di	Nal二當	
化学制	目成〈重量%〉	-20 -15 -10 -5	AlaOs FeO+FeaOs CaO MgO NaaO			

各山のサヌカイトの種類

蓮光寺山のサヌカイト

かつお節状風化

城山のサヌカイト









金山のサヌカイト

国分台のサヌカイト

朽ち木状風化







坂出市 http://www.city.sakaide.kagawa.jp/kankou/local/sanukaito.html より

1. 2. 四国 坂出「金山・城山」周辺に伝わる民話

http://www.city.sakaide.kagawa.jp/kankou/minwa/index.html より

- a. 城山長者と金山長者の宝くらべ
- b. 乙姫様と花婿どん

城山長者 と 金山長者 の 宝くらべ

むかしむかし、城山長者が娘を車に乗せて車道(くるまみち)を毎日散歩していた頃、向かいの金山に金山長者という、 それは それは 大金持ちの長者が住んでいました。

「今日も城山にたくさんの人が登っとるが、何かあるのか。」

「城山長者の乙姫様を見に行っておるんじゃ。」

「かわいい娘だそうだの。」

乙姫様のうわさ話を聞いた金山長者は、うらやましくなりました。

「わしには娘もいない。なんとかして村人も目をわしの方へ向ける方法はないものか。」

「そうだ。わしには金銀や珍しい宝物が山ほどある。これで宝くらべをしよう。」

城山長者に手紙を出して、宝くらべを申し込みました。

金山長者はさっそく、たくさんのお金をかけて、立派な車を作らせました。そして、金銀に宝石をちりばめた置物や、 南海の底にある大きなサンゴ、美しい綾・錦・、この世にあるといわれる宝物を山と積み上げました。男衆に牽かせて、 城山へ宝くらべに出かけました。 村人も大勢集まりました。

今まで一度も見たこともない宝物に、村人は目を見張りましたが、そこへ車に姫を乗せた城山長者がおりてきました。 そして、城山長者が「わしの宝はこの娘だ。」と言うと、村人達は、「人の持っとる宝物は目の毒だ。」

「美しい乙姫様がいい。やさしい長者さんやお姫様を見てると、わしの気持ちまでようなるわ。」と言って、我も我もと、 乙姫様のそばへ集まってしまいました。金山長者の宝物は、誰も見る者が居なくなりました。

親子の愛情の深さと、姫の美しさの前には、金山長者の宝物は、まったく値打ちがありませんでした。

宝くらべは、金山長者の負けになりました。

「村人の目さえ引きつけないこんな物 ほーってしまえ」

悔しがった金山長者は、金山の海へ宝物を投げ捨ててしまいました。

それから後、金山の海で捕れる鯛は、うろこに金がふき、キラキラと輝き、味も大変よく、人々から喜こばれ、 「金山鯛」として有名になりました。

出典 「川津のむかし話」昭和58年川津町子供会作成

b. 乙姫様 と 花婿どん

城山長者の娘、乙姫様は、足は不自由でしたが、心の優しい長者や、家で働いている人々のお世話で、立派に成長しました。 乙姫様は成長するにつれて、それはそれはまぶしいほど美しいお姫様になりました。長者は、どうにかして乙姫様に三国一の良いお婿さんを選んで、幸せに暮らさせようと思いました。長者は、毎日明神原に行き、「すみやかに わが娘乙姫に三国一の花婿を授けてください」と、八百万(やおよろず)の神に、一心にお願いしました。

ある夜のことです。長者が眠っていると、白く長いひげをはやした老人が、枕元に立って、「長者よ 阿波の国に炭焼きを している若者がおる たいそう働き者で心の優しい感心な男だ 姫の婿にするがよかろう」

「ハ ハイッ」 長者は飛び起き、名前を聞こうと思った時には、老人の姿はスーッと消えていました。

「神様のお告げだ ありがたいことだ」 夜が明けるのが待ち遠しくて仕方ありません。

夜が明けるのを待ちかねて、長者は乙姫の婿さがしに出かけました。 お告げで、『阿波の国』『炭焼きをしている』これだけで捜すのですから大変です。阿波の国は、山また山。山を一つ越すにも一日がかりです。 今日はこの山、あすはあの山、谷を下り、山をよじ登り何日も何日も歩き続けました。

さしもに堅いかねのわらじも、だいぶすり減った頃、深い山間にある一軒の炭焼き小屋を見つけました。

そこで、顔も手足も炭で真っ黒になって、一心に働いている若者を見つけました。その若者の名前を友造といいました。友造は、疲れている長者をいたわり、熱いお茶と梅干しで接待しました。 長者は、一夜の宿を借りて、友造の心の優しさと働き者であることを知りました。長者は、「これこそ神様のお告げの若者だ」「三国一の花婿はこの人だ」と思いました。「どうか姫の婿になってください お願いします」 友造も、長者の熱意にうたれ、「わたしのような者でよかったら」と、

承知しました。 長者は大喜びで城山に帰り、大安吉日を選び乙姫の婿を迎えました。

二人は仲良く暮らしていましたが、ある日乙姫様が病気になりました。

長者は医者を迎えたり、薬を買いに行かせたり、祈とう師を呼んでゴマを炊き、悪病退散を祈ったりしました。友造は、昼も夜も姫のそばに付きっきりで薬を飲ませたり、背中をさすったりして、一生懸命看病しましたが、しかしそのかいもなく、とうとう姫は死んでしまいました。葬式の行列は、子どもの持ったお供えの花かごを先頭に、赤や紫の衣を着た大勢のお坊さん、長者、そして悲しみをこらえた友造が、位牌を胸の所にしっかりと抱いていました。お棺の後には、棺からひかれた白い布につかまって、親戚の人が大勢お供をしていました。よそ行きの着物を着た男や女たちも行列に入り、みんな悲しそうな顔でうつむいていました。

乙姫様の死を惜しんで、長者の家の前にいっぱい集まって来た村人たちも、行列の後ろからぞろぞろと付いていきました。 長い長い行列は、長者や友造と楽しく散歩したくるま道を通って、別れを惜しむかのように、静かに下って行きました。友 造は、長者と相談して、大きな墓を建てて毎日花を供え、線香をあげて供養していました。しかし、この城山の見るもの聞 くものすべてのものが、姫と暮らした楽しかった頃を思い出させ、悲しみのあまり、だんだん体がやせ細っていきました。 「こんなことではいけない 自分の心も身体もだめになってしまう」....と、

友造は長者にお願いして、大阪に出て働くことにしました。

大阪に出た友造は、悲しさを忘れるために、朝早くから夜遅くまで働きました。

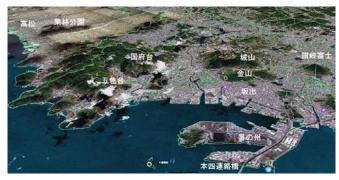
「朝はあさぼし 夜はよぼし 昼はうめぼしいただいて」 力の限り働き続けました。 そして、たくさんのお金を儲け、 人々から長者と呼ばれるようになりました。

お金持ちになると、昔のことや苦しかった頃のことを忘れて、つい贅沢に溺れ、ついに滅びていくことが、世間にはよくあります。

友造は、昔の自分が炭焼きをしていた友造を忘れないようにと、「すみとも」と名乗りせっせと働き続けました。 「すみとも」の長者の子孫は、この教えをよく守り、大変、栄えたということです。

出典 「川津のむかし話」昭和58年川津町子供会作成

2. 坂出駅から金山トンネルを抜けて 城山と金山の鞍部 「奥池」周辺で 「サヌカイト」に出会う





サヌカイト原産地讃岐地方 の鳥瞰図

坂出駅から見た金山

8月6日晴れの昼前 岡山から四国ライナーに 乗って 瀬戸大橋を渡る。番の州の造船所を見 ながら四国に入り、正面の丘陵地の手前で 大 きなループを東にカーブすると坂出の駅である。

坂出の街のすぐ南側には小高い山があり、その東にも山が連なっている。この駅の正面の形の良い小さな山が笠山で、その後から東に台形状に伸びる山が「金山」である。笠山が標高109m 金山が283m 小さな小山である。

駅の案内所に行って、「金山」への登口を聞くのですが、金山全体が個人の持山になっているので、頂上部はわからないという。国土地理院の2万5千分の一の地図には点線の道がついているのですが、どうもはっきりしない。

また、五色台へもバスもなく、タクシーでないと行き着かないし、「サヌカイトといっても 見られるところは 良く解らない」とはっきりしない。「サヌカイト」なら、ここでも売っているという。

香川県埋蔵文化財センターが同じ坂出市の金山・白山の東側の麓 五色台・国府台の山との鞍部にあるのを知って、念のため電話を教えてもらい、電話で金山周辺で サヌカイト が簡単に見られるところの教えを請う。

「金山」は 個人の所有になっていて やっぱり 頂上へ の道ははっきりしない。 サヌカイトを見たいならば、





国道 11 号線 金山トンネル

「金山の南側の国道 11 号線の金山トンネルを東に抜けたところに溜池があり、その水際に水がない時にはサヌカイトが見える。保証はしないが、このあたりで探すのが、一番容易。」と教えてもらう。

地図を拡げ、「これが一番確か」と金山の南側に廻って、其処から金山の頂上への道を探しながら、北へ金山を越えることにする。トンネルの中を歩くのも嫌なので、タクシーに地図を見せて、国道 11 号線金山トンネルを抜けた池の縁で降ろしてもらう。

5分ほど南へ行ったところで坂出の街から丘陵地にかかったところで東西に丘陵地を走る国道 11線にであい、東にトンネルを抜ける。坂出の街がうその様な四方小さな小山が並び立つ山中に飛び出て、国道がこの山間を真直ぐ東に抜ける。道のすぐ横下に溜池が見えるが、人家はまったくなし。ここが地図の池だという。

国道の下に国道に沿って 2 つに区切られた整備された溜池があり、金網が周囲に張り巡らされている。池の東の端に集落が見え、池の向こうには 城山の斜面が池のほうにせまり、その山裾を道が東西にこの山中を抜けている。

一方 西側は山と山の間に狭い空間が抜けていて 池の土手の下から田園が広がり、その向うにぽっかりと富士山の形を した讃岐富士が見える。本当にハイキングの里山歩きのような感覚である。





西に讃岐富士が顔を出す金山 南の麓

国道の北側 金山

国道と池の間に小道があり、東に池に少し突き出た小さな広場へと続いている。池の縁を見たり、国道側を見たりするの

ですが、サヌカイトの岩良く解らず。 前回二上山へ行った時はよう見つけませんでしたが、今回は金鎚を入れてきたので、石を割れ

ば黒い破面が見えるはず。木々に囲まれた小さな広場はよく整備されていて、そこに幾つもの祠が集められ、金山を 背に立っていた。祠の前に「奥池土地改良区」の名が刻ま れた石灯籠が立っている。

国道11号線のパイパス工事とともに奥池・新池が整備され、 周辺にあった祠がここに集められたのだろう。

はっと築くと祠の載せられている台座が黒い割石を積み上げて出来ている。これは おそらく「サヌカイト」または「サヌカイト質安山岩」。

石垣や土手にサヌカイトを積み上げたところがあると聞いていましたが、さすが本場である。

スパッと割った破面が良くそろって 積み上げられている。 「やっぱり この周りにサヌカイトがあるんだ」と俄然 探す元気が出て来て、リックから金鎚を取り出し、広場の 周辺に眼を凝らす。

金網の端に顔を出している石に目をつけて、思い切り金 錠で叩くと「カーン」といい音がして、スパッと割れ、色 黒々のリバーパターン状の平坦な破面が出ている。

自分の手で初めて出したサヌカイトの破面

自分で見つけるのは難しいかも?? と半分思っていましたが、もう 感激でした。





祠の台座に使われたサヌカイト









顔を出している石を金鎚で叩くとスパッと割れ、色黒々のリバーパターン状の平坦な破面が出た

しばらく広場から金山や向かいの城山を眺めながら、金山長者や城山長者がいたという時代を思い巡らせながら、元の池の北西端に戻り、池の土手を廻り、池の縁をめぐりながら、金山へ向かいました。

池の南側で舗装された道路に出ると金山全体の姿が見える。やっぱり、緑の樹木に包まれ、道らしきものなし。僅かに東の 集落から山裾を越えてゆく道が見える。

池の縁を東へ行くと道に沿ってポツリポツリと持ち寄り一段高いところに家がある。 その家に入る枝道にはサヌカイトが 詰まれた小道がついている。 家の周りを覗くと生垣の下にもサヌカイトが積まれたのが見える。いたるところに サヌカ イトがある。

人っ子一人いない里山のハイキング。ぶらぶら歩いて池をめぐって 反対側 池の東端の集落に入る。地図にある北峯の集落。 集落の中でそのまま東へ城山の麓をめぐっていく道と別れ、北へ金山へ登ってゆく道を行くとすぐに国道 11 号線の 陸橋を渡って、金山の山裾に入る。

人がいないので 道を確かめることもできず、足任せ 風来坊である。

陸橋からは国道 11 号線の向うにまた きれいな讃岐富士が顔を出している。



奥池の南西端より 円錐の山を前に奥へ伸びる金山全体が見える 2007.8.6.



民家へ入る小道に積み上げられたサヌカイト



池の南東側からは金山が円錐の形に見える





金山への国道 11 号線の陸橋から西 きれいな讃岐富士が見える 2007.8.6.

注 今回 金山周辺で叩き割ると黒い破面が出る石を「サヌカイト」としたが、同じような石とし班晶のあるサヌカイト 質安山岩がある。私には現地での目視では見分けがつかず、すべてサヌカイトとして記述した。 サヌカイトの方が斑晶がないだけ、フラットな破面 澄んだ金属音になると思われるが、その差は良く良からない。

3. 「金山」を歩く

陸橋を渡って、金山へ登ってゆく。こちら側の山裾にも家並みがある。

少し登ったところで、道が二つに分かれ、舗装道路は東へ山裾を巻く。 出来るだけ頂上部への道を探すため、舗装道路と

別れ、左の山側の道を登ってゆく。



金山を東へ巻く道との分岐

金山周辺の地図 と歩いた道

分岐からきつい坂道を登ると一段高い金山の東斜面の一段上の台地になっていて畑が広がり、畑と山際の間を山道がまっす ぐ北へ延びている。左手の金山は人の手が入っていないのか うっそうとした緑に包まれている。

また この畑が広がる手前の坂道には数軒の家が並んでいて、やっぱりサヌカイトが土台に積まれ、畑のあぜにもサヌカイトの残片が載せられている。



金山南東中腹の高台に広がる畑・果樹園に隣接した集落でみたサヌカイト 2007.8.6.

集落を抜けたところの畑に やっと 仕事をしているばあさんに出会えた。

「金山の頂上の方へ上ってゆく道教えてほしい」と声をかけると「道はないことはないが、そんなかっこうで、また 一人では余計無理だ。」という。 「何で???」と不思議に思って 聞き返す。 要は道は手入れがされていないので、なたで枝木を払いながら行かないと進めないのとちょうど マムシがうじゃうじゃ出てくる季節で 長靴はいて 長袖の服着てゆかないと 危なくて進めないという。トラックで訪ねてきた爺さんも 同じことを言い、一人では駄目だという。

「サヌカイトの黒い石がゴロゴロあるのを見たいんだ」と言うと、真直ぐ北へ畑や果樹園の間を抜けてこの道を行けば、黒い石などいくらでも見られるし、坂出の街まで 金山を通り抜けられるという。

もう サヌカイトも見たし、マムシがぼたぼた出てくると聞いて、怖気もあって、土地の人の言うとおり、山の中腹の巻き道を北に進むことにする。でも まだ半面 道があれば入っていこうと道を探しながら歩くのですが、山はほとんど手が

入っていないのか、倒木や雑木が重なり合っていて、入ってゆけそうでなし。 でも 気持ちのいい里山歩きである。







金山の中腹の台地の上 山腹に沿って北へ伸びる道 山は人の手が入っていないうっそうとした森

畑を通り抜けるとぱっと東北側の平野部が開け、坂出の平野部の向うに五色台の山並みが見える。

なにか金山を見上げながら畑の山道をてくてくと歩いてきたのですが、眼下に広がる平野や遠望される山々を見ていると 山の中にいることが実感される。そして、今見えているこの一帯がかつて 縄文人がサヌカイトを採取したところであり、 この金山の中腹の高台にも数多くの縄文人がサヌカイト採取に登ってきたのだろう。

この一本道のあちこちにも 最近のものでしょうが、サヌカイトの破片が散らばり、道の傍らにもサヌカイトの石が黒い その破面を見せている。山の中にもいくつも大きな石があり、あれも叩き割れば黒い破面を見せるに違いない。



金山の山中から 果樹園の向うに ばっと五色台が遠望できました 2007.8.6.







金山の中腹を北へ抜ける一本道には 所々でサヌカイトがみられました 2007.8.6.

果樹園を抜けると道はうっそうとした森の中の道となって山を巻きながら北へ続いている。

金山の入口から30分ほどで 神社の鳥居の前の広場に出る。雑草がしげっていて ここにも人の気配がしない。 でも 鳥居の周りに咲く山野草がきれいである。鳥居の奥 石段の上に社が見える。

地図からするとここが金山神社。 今は荒れているが、石垣で区切られた平地が山中に形成され、石灯籠や野仏が祭られ、昔は随分にぎわったに違いない。









金山の山中 金山神社 2007.8.6.

この金山神社は金山の地の神で旧川津村の守り神である。そして 良く解らないのですが、祭神が金山彦 そして この

神社のあるところが 旧川津町鋳物師屋の知名だという。 ひょっとすると この山中に昔 製鉄に絡んだ集落があったのかもしれない。誰に聞いても鉄の痕跡はないといわれたのですが・・・・。

金山神社からさらに北へは道 が少し広くなって真直ぐ森の中を 道が続き、ところどころに野仏が道 の脇に祭られている。

多分 こちら側が参道なのだろう。 神社から少し北へ行ったところで、 立派な門があり、大きな石が飾られ ている屋敷の前に出る。「金山けい の里」と石に彫られた門標がある。 ここがインターネットでみたこの 金山を持っておられる前田氏の 「けいの里」のようだ。



金山 けいの里 (本来 非公開ですが、入れていただきました) 2007. 8. 6. 中央奥にサヌカイトとの大きな板がつるされているのがみえる。





金山 けいの里で (本来 非公開ですが、入れていただきました) 2007.8.6.

門を入るとあちこちに大きな石が置かれ、右手奥にスライス した大きなサヌカイトがぶら下げられている。インターネッ トで見たサヌカイト楽器「ケイ」のようだ。すぐ傍に工房が 見えたので 声をかけると前田さんが出てきてくださったの で、南側から金山の山中を縄文人のサヌカイト鉱山見たさに 歩いてきたことなどを告げる。

現在はサヌカイトを守るためこの山全体を公開していない との事であり、突然の訪問にもかかわらず、工房やサヌカイ トで自作されている石琴などを快く見せていただくと共に、 庭にある大きなケイを叩かせてもらった。

まるでお寺の鐘そっくりな澄んだ響きにビックリすると共に 叩く位置によって 音色が変わるのにもビックリ。

静かな緑の森に響き与太るサヌカイトの音を聞けて本当に感激。 デジカメにケイの音色を録音させてもらった。

ぼくの興味だったこの「金山」と「鉄」との関係についても お話しましたが、聞いたことがないとの事でした。

この「金山」に鉄のイメージ重ねているのは 僕だけかもしれません。

でも 四国ではじめての古代の製鉄炉 今治 の高橋小夜ノ谷 II 遺跡のたたら炉も昨年突然 見つかりましたし、この金山でもそんな痕跡 が見つかるかもしれません。

もう 満足一杯で快く見せていただいた前田 さんに感謝しつつ、ケイの里を後にしました。

静かな森の中の一本道真直ぐ北へ歩いて、「金山」の北側へ 山の下 の境での街がちらちら見え出したところに大きな門があり、道はこの門 を通り抜けて、住宅地の坂の上に繋がっていました。

南から歩いたので、前田さんの所有地への立ち入り気にせず、真直ぐ「金山」の東の中腹を歩いてきましたが、この門で金山全体が個人の所有地内であること理解です。



前田氏制作のサヌカイトの楽器「けい」 〇 楽器「けい」を叩いた時の音

まるで お寺の鐘 2007.8.6.

○ 参 考 「カンカン石」と呼ばれるサヌカイト

http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/fkobe/0709jamon00.htm





「けいの里」周辺の森の中 あちこちにサヌカイトがありました



前田さんの私有地 「けいの里」 金山への入口

4. サヌカイトの原産地 坂出の「金山」を歩いて





坂出駅側から見た「金山」 2007.8.6.

四国坂出の街の背後北側にぽっかりある小山「金山」。縄文人達が道具や武器制作の材料として採取した「サヌカイト」の原産地。 緑の森に包まれたサヌカイトを探しながらの約2時間の里山歩き。山の頂上部には立ち入ることが出来ませんでしたが、 Walk のあちこちで こんなに 広くサヌカイトが縄文の昔だけでなく 広くつかわれていたのか・・・とびっくり。手にとって見ることできないのではないか・・・・と心配しつつやってきた「四国 金山」でしたが、沢山のサヌカイトに出会え、自分の手にとって 「叩いて黒い破面を出してみたい」との願いがかなえられて 本当に満足です。また、直に 大きな岩を薄くスライスして制作された楽器「ケイ」を叩いて 静かな森の中に澄んだ音を響かせられたのも感激でした。



「金山」の北側中腹より 讃岐平野・五色台を眺める 2007.8.6.

「金山」の坂の上からは 讃岐平野越しに五色台の山並みが見渡せ、縄文時代には おそらくは「金山・城山」や五色台のふもとまで海が迫り、この金山は海からの格好の目印 この金山を目指して 多くの縄文人がやってきたろう。





金山の神 金山神社から琴平金比

「金山」から坂出の街に下る坂道で 2007.8.6.

羅宮が分かれていったという伝承も本当なのだろう。

また、この山の周辺から「鉄」の痕跡が出てくれば、それもまた もっと大きな広がりがあるだろう。 金山周辺の民話の世界にもまた、興味津々。金山長者と城山長者そして 城山長者の娘と結婚した「炭焼き友造」 これが 鉄の痕跡ではないかと今も思っています。

特に「炭焼き友造」が大阪に出て 繁栄して「スミトモ」を名乗ったなどは 四国の「住友」とのつながりもちらちら。 戦争中に 金山のボーキサイトを採取して 新居浜住友の精錬所でアルミニューム製造に関係した追記かもしれないな あ・・・などと一人一人楽しみながら山を降りて坂出の駅へ。

山を下り始めると同時に真っ黒な雲が現れ、坂出駅に着いたときには、大粒の雨になりました。

リュックサックの中には金山周辺で拾ったサヌカイトの石が数個入っている。 あれやこれや はるかに増えた 縄文のサヌカイトの情報 ルンルンの四国坂出 「サヌカイト」を訪ねての Country Walk でした。

2007. 8. 6. タ サヌカイトの澄んだ響を思い出しながら Mutsu Nakanishi



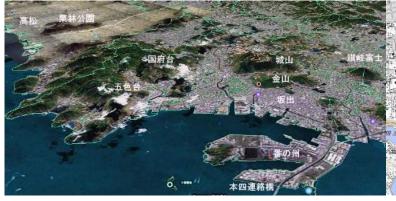














17.

長良川にかかる現存最古の近代吊橋「美濃橋」(重要文化財) 岐阜県美濃市

minobg00.htm 2007.9.10. by Mutsu Nakanishi



長良川の中流 北陸と東海を結ぶ交通の要衝として江戸〜明治時代に隆盛を極めた美濃市 市街地は「うだつ」のあがる美しい町並 国の重要伝統的建築物群保存地区 市街地の西側 長良川 河畔は今も古い灯台が残る美濃「上有知」の湊 その河畔に当時の技術の粋を集めた日本最古の鉄製近代つり橋「美濃橋」(1915 年大正 5 年完工)がかかっている。 主塔は鉄筋コンクリート製。

床板は木製。 橋長: 113.0m 支間: 116.0m 幅員: 3.1m 橋梁形式:単径間補剛吊橋

所在地:岐阜県美濃市上有知~美濃市前野

現存する最古の近代吊橋で、2003年(平成15年)に国の重要文化財に指定されている。

現在は往時の役割を終え、人・自転車専用の吊り橋となっていて、山の緑をバックに長良川にかかる赤い橋と灯台 が素晴らしい景観を作っています。



岐阜から長良川沿いに北東へ約30分ほどのところに「美濃紙」などの物産の集散地として江戸・明治に栄えた古い町がある。 東海・美濃から白山を越えて北陸・福井へ抜ける古い街道筋 美濃平野が北の山岳地帯にかかる入口の位置にあり、この奥に「郡上おどり」で有名な郡上八幡がある。

美濃と北陸を結ぶ東海地方横断鉄道建設が悲願で 東海側 日本海側から越美南線・越美南線が延びているが、どちらからも、白山を越えて結ぶことが出来ず、越美南線が、第三セクター長良川鉄道となって、美濃太田から 「刃物の関」そして「美濃」・「郡上八幡」を通って、美濃白鳥を結んでいる。

今はこの川沿いを東海・北陸道が美濃白鳥から合掌造りの白川郷を抜けて富山へ結んでいる。 何度か高速道路を車では越えた道筋ではあるが、一度は鉄道をつないで越えたい道筋。

予備に一枚残していた今年の「夏の青春 18 きっぷ」の期限が、9月10日で切れる。 さて、何処へ行こうか・・・。

「ちょうど2年ほど不通になっていた高山線も9月6日に開通したところだし、越美南線・北線もつなぎたい。 東海から北陸へ 一日で 越えられないか・・・。」

調べてみましたが、神戸から 鈍行乗り継ぎでのプランでは難しい。

ふっと 頭に浮かんだのは、友人が以前に奨めてくれた「古い家並みが残る美濃の街」。

「刃物の町 関」もいつも 飛ばしている街。ここにも立 ち寄って・・・と 美濃の国の重要伝統建物群

美濃の国の重要伝統建物群保存地区の家並と共に、長良川に架かる現存する日本最古の鉄製近代吊橋「美濃橋」が今も現役で働いているのを知りました。

町並み そっちのけで、鉄の モニュメント「重要文化財 現存する最古の近代吊橋『美 濃橋』」を見てきました。



1. 国の重要文化財 現存する最古の近代吊橋長良川に架かる「美濃橋」

山から美濃平野に出てきた長良川が美濃からゆったりと平野部を流れ下る。

街には川湊が開かれ、北陸と東海の中継地として、水運・陸運を利用して物産が集り、街が栄える。

町の繁栄と富をバックに大正5年 当時の先端技術を集め、湊の傍に吊橋がかけられ、川を渡って、北陸への街道が続く。 今は老朽化が進んで、人・自転車専用の吊橋となり、直ぐ上に新美濃橋がかかり、国道が抜けてゆく。

大動脈としての活動を終え 静かな周りの自然に溶け込んだ素晴らしい景観を作り出している。

橋のルーツを知らないとなんでもない観光橋かと思ってしまうような橋ですが、 川面を眺めながらの橋 橋を渡って眺める景色 この景観になくてはならぬ橋であり、背後の伝統的建物群の町並みがこの橋で一層浮かび上がって、見えてくる。





2. 「うだつの上がる街 美濃」 国指定 重要伝統的建築物群保存地区

美濃の街には「うだつの上がる街 美濃」として 今売り出し中の古い家並みが そっくりそのまま残っていました。 伝統的家並みというと、どこも外見の家並みはあっても 中は観光客相手のみやげ物屋かパビリオンというのが多いのです が、交通の便がよくないためか、まだ 観光客に押し流されず、まだ そつくり生活空間のままで残っていました。 もっとも ほとんど 概観が化粧直しして 家並みとして整備されていましたが・・・・。



「うだつ」のあがる町並み「美濃」重要伝統建築群保存地画 2007.9.10.







「うだつ」のあがる町星み「美濃」重要伝統建築解保存地迅 2007.9.10.

3. 「縄文人も カミソりをつかっていた????」 関市 「フェザー ミュージアム」で

美濃の一つ手前の街「関」。鎌倉時代の末 この地で始まった刀鍛治の伝統が今に続く潟の燕・三条と並ぶ「刃物の街」。 関鍛治伝承館・刃物会館があり、素晴らしい関の刃物文化・刃物群が展示されていましたが、私の興味を引いたのは「フェザーカミソリのミュージアム」

石器時代から 現在まで「髭剃り・剃刀の歴史」そして多種多様な「フェザーカミソリ」が展示されていました。

「縄文人も ひげを剃るというか きっていたのですね」

ひげは手入れしないと 微生物の温床になったり、ひげ掴まれて倒されるなどで 古今東西問わず剃ったり、手入れしてい

たという。そういえば、描かれる「縄文人の顔」には ひげがない。 木片の両側に黒曜石などの刃が埋め込まれたヒゲソリが展示されていました。 鋼に変わっても 今のヒゲソリと同じ構造。

また、現在のあの薄いフェザーのカミソリ。 本体と刃は一体だと思っていましたが、日本刀と同じく 焼き入れもされ、現在の先端技術 蒸着で両刃の刃がついているのには、ビックリしました。

このカミソリの刃も「鉄のモニュメント」です。



緑の山々を背景に古い商家の家並が続く街を悠々と長良川が流れ下る。 川には 鮎の釣り人が点々と続き、真っ赤な吊橋 その傍には 古い川湊の灯台 ゆったりとした静かな時間が経過 もう 夏もおわり。

土手に座って そんなことを感じていました。

2007. 9. 10. 岐阜県美濃市 長良川の土手で Mut su Nakani shi







18.

たたら製鉄の砂鉄採取の地形が残る 兵庫県神埼町 [砥峰高原] 2007.10.4.

中国山地の西播磨の大製鉄地帯 大量の砂鉄採取跡が長年の時を経て 西日本有数のススキの草原原を作り上げた 素晴らしい化石周氷河地形とたたら砂鉄採取の人工的な地形変化が織り成すきわめて珍しい高原地形



価峰高原は、標高800~900mの高さで、ゆるやかに起伏を繰り返している。

これは、氷期には気温が今より、7~8℃低下したと考えられており、そのときの気温低下による岩石の凍結・破砕が激しく起こった。山頂部や突出部の岩石は破砕によって崩落し、山上の凹部は崩落した岩石で埋まった。その結果、起伏のきわめて少ないゆるやかな高原状の地形が形成された。

磁峰高原は、このようにしてでき、このような地形を「化石圏水河斜面」といい、通常水河の周辺に見られる寒冷気候を反映した「圏水河地形」の一つである。

また、延峰高原内には、いくつかのこんもりと盛り上がった小丘が見られ、また、浅く短い谷がいくつも 走っている。秩序がなく不自然なこのような地形は、侵食などの自然の営みでできたとは考えられず、タタ う製鉄のために人工的につくられた地形である。

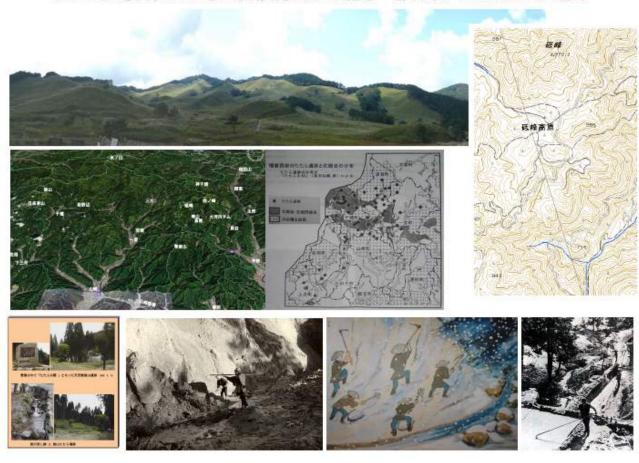
延峰高原の谷筋は、表面の砂を削り取った跡や鉄穴流しの跡。また、砂鉄を探った後の土砂がこの谷を埋めているために、浅くゆるやかな谷となっている。小丘は岩石の風化が進んでいない部分で、そのために岩石が硬くて削り取りから残された部分だと考えられる。



磁峰高原には花崗閃緑岩が分布している。風化が進み、真砂(まさ)になっていることが多い。全体的に灰色を呈し、主に石英・斜長石・カリ長石・黒雲母・ 角閃石から成っている。

この岩体は、「川上花崗閃緑岩体」と呼ばれ、白亜紀~古代三紀にかけて形成された山陰帯の深成岩類に属しており、この中に、砂鉄が含まれている。

たたら砂鉄採取の人工的な地形変化が残る西播磨 砥峰高原 (山の切り崩しと鉄穴流し)









たたら砂鉄採取の人工的な地形変化が残る砥峰高原 [山の切り崩しと鉄穴流し] による人工的不自然な「残丘と平坦な谷筋」 地形 2007.10.4.

ススキの大草原 初秋の砥峰高原の草花 2007. 10. 4.



うめばちそう りんどう せんぶり つりがねにんじん



ススキの大草原 初秋の砥峰 2007. 10. 4.



ススキの大草原 初秋の砥峰高原 鉄穴流しの谷と残丘 2007.10.4.



ススキの大草原 初秋の砥峰高原

鉄穴流しの谷と残丘

2007. 10. 4.



ススキの大草原 初秋の砥峰高原 2007.10.4.



初秋の砥峰高原

鉄穴流しの谷

2007. 10. 4.



初秋の砥峰高原

磁峰の尾根筋より

2007. 10. 4.





初秋 砥峰高原の草花 2007.10.4.

せんぶり

つりがねにんじん

りんどう

うめばちそう



峰山高原の下 大河内集落を彩る真っ赤な曼珠沙華 2007. 10. 4.



峰山高原の下 大河内集落を彩る真っ赤な曼珠沙華 2007.10.4.



峰山高原の下 大河内集落を彩る真っ赤な曼珠沙華 2007.10.4.



砥峰高原への登り口 大川内町 川上集落と長谷ダム 2007.10.4.





鉄穴流しが行われた谷筋 在開着 02077743 作野町提展









たたら砂鉄採取の人工的な地形変化が残る砥峰高原

2007. 10. 4.

大河内町 川上鉱山

兵庫県川上鉱山:約7km2,2km2,岩体内外に黄、マタイト。 銅鉱一硫砒鉄鉱脈 (川上,長谷,朝日など 硫砒鉄鉱はヒ素と鉄の硫化鉱物。ヒ素の代表的な鉱石鉱物である。

硫砒鉄鉱を焼くとヒ素が分離して、猛毒である<u>亜ヒ酸</u>ができる (亜砒焼きとよばれていた)。

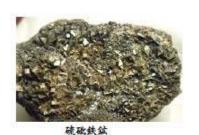
亜砒酸は富崎県高千穂町土呂久の鉱毒事件の原因として有名である。

硫砒鉄鉱そのものには毒性はないが、表面に<u>風化</u>による有害な砒素化合物が付着している可能性がある。

手に持った際にはすぐに手を洗浄し、直接口や食物に触れるべきではない。

砥峰高原の自然監視員の人によると この砥峰周辺の鉱脈には大量に砒素が含まれていて、耕作に適さなかったことが、 川上集落の人たちが茅場として「守ることが出来た理由だろうという。





斑蜂麻辣





うめばちそう

